

高林西原古墳群

群馬県立がんセンター新病院建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

群馬県立がんセンター
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

高林西原古墳群

群馬県立がんセンター新病院建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

群馬県立がんセンター
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

巻頭図版 1



遺跡遠景 利根川上空から赤城山方面を望む 矢印：がんセンター



上空から 中央：がんセンター その左側：発掘区 左上：朝子塚古墳

卷頭図版 2



8号墳出土馬形埴輪・人物埴輪



1号墳出土土円筒埴輪・朝顔形埴輪

序

群馬県は多くの古墳があることで全国に知られ、優秀な造形の埴輪を数多く出土することでも有名です。高林西原古墳群のある太田市高林地域にも多くの群集墳が残されており、県下でも有数の古墳密集地として知られております。

このたび、その高林西原古墳群の中にある県立がんセンターの新病院が建設されることになり、県病院局（旧県保健福祉部）の委託を受け平成12年から当事業団が発掘調査を行いました。この古墳群に本格的な調査が入るのは初めてでありますし、調査対象地に隣接する東毛養護学校の敷地からは、太田市指定重要文化財の「人が乗る裸馬埴輪」が出土しているため、その成果が期待されておりました。調査の結果、期待通り、11基という多数の古墳を調査することができました。残念ながら墳丘は既に破壊されたものがほとんどでしたが、馬形埴輪や人物埴輪をはじめとした多くの埴輪類が出土し、この地域の古墳を研究する上で重要な資料を得ることができました。

最後になりましたが、県病院局、県立がんセンター、県教育委員会文化課、太田市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に到るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本書の発刊に際し、心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成18年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

- 1 本書は、群馬県立がんセンター新病院建設事業に伴って実施された、高林西原古墳群の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 高林西原古墳群は群馬県太田市高林西町に所在する。
- 3 遺跡の発掘調査及び整理事業については、県病院局（旧県保健福祉部、平成12・13年度）、県立がんセンター（平成16・17年度）の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 調査・整理体制及び期間は下記の通りである。

○発掘調査

平成12年度（平成12年8月1日～平成13年3月31日）

理事長 小野宇三郎

調査担当 高井佳弘・大塚俊和・杉田茂俊・小林大悟

事務局 赤山容造・住谷進・能登健・相建史・坂本敏夫・笠原秀樹・須田朋子・片岡徳雄
小山建夫・吉田有光・柳岡良宏・森下弘美・今井もと子・内山佳子・佐藤美佐子
本間久美子・北原かおり・狩野真子

平成13年度（平成13年4月1日～平成13年12月28日）

理事長 小野宇三郎

調査担当 高井佳弘・大塚俊和・齋藤利子

事務局 吉田豊・赤山容造・木田稔・津金澤吉茂・相建史・柳岡良宏・田中賢一

平成16年度（平成16年12月1日～平成17年2月28日）

理事長 小野宇三郎

調査担当 平方篤行・森田真一

事務局 住谷永市・神保佑史・平野進一・真下高幸・中沢 悟・笠原秀樹・柳岡良宏・今泉大作
清水秀紀・中澤恵子・金子三枝子

○整理事業

平成16年度（平成16年1月1日～平成16年3月31日）

理事長 小野宇三郎

整理担当 高井佳弘

整理嘱託員 新井悦子

整理補助員 武永いち・掛川智子・渡部あい子・湯浅美枝子

事務局 住谷永市・神保佑史・矢崎俊夫・右島和夫・丸岡道雄・国定均・相建史・竹内宏
須田朋子・栗原幸代・高橋房雄・吉田有光・佐藤聖行・阿久澤玄洋・今井もと子
内山佳子・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子

平成17年度（平成17年4月1日～平成18年3月31日）

理事長 小野宇三郎・高橋勇夫

整理担当 高井佳弘

整理補助員 武永いち・岩渕節子・掛川智子・吉田明恵・笛木広美・水野さか系

事務局 木村裕紀・津金淳吉茂・矢崎俊夫・西田健彦・中東耕志・宮前結城雄・固定均
相京建史・竹内宏・石井清・須田朋子・今泉大作・栗原幸代・吉田有光・清水秀紀
佐藤聖行・今井もと子・内山佳子・本間久美子・北原かおり・狩野真子

- 5 遺構の写真撮影は各発掘調査担当者、遺物写真撮影は当事業団主幹佐藤元彦が行った。その他、空中写真は株式会社バスコ・株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 6 テフラ分析については株式会社古環境研究所に委託し、その報告書は第4章に掲載した。
- 7 第117～120図、第122～134図、第136図（109を除く）の石器実測は株式会社アルカに委託した。
- 8 本書の編集は高井佳弘が担当し、執筆分担は下記の通りである。なお、埴輪の遺物観察については徳江秀夫（当事業団専門員）・南雲芳昭（県文化課専門員）の援助を受けた。
第1章1 相京建史 第3章8 「人物埴輪」の項 深澤敦仁 「馬形埴輪」の項 佐藤信孝
第3章13 「縄文土器」の項 山口逸弘 「石器」の項 松村和男 第3章14 「旧石器時代の調査」
のうち、石器の事実記載 松村和男 その他 高井佳弘
- 9 本遺跡の記録保存資料および出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。
- 10 発掘調査・整理にあたっては、下記の方々・機関にご協力、ご教示をいただきました。記して感謝致します。（敬称略・順不同）

群馬県教育委員会・太田市教育委員会・宮田 毅・島田孝雄・右島和夫・杉山秀宏・菅原龍彦

凡例

- 本文中に使用した方位はすべて国土座標（2002.4改正前の日本測地系）の第Ⅴ系を使用している。グリッド名称は特に道跡特有のものもあらず、国土座標系の下3桁を用いる。
例 X=28,250 Y=41,900 の場合、250-900
- 調査区名は、調査した順に1区～4区まで付けた。区名には特に意味はない。
- 遺構名称は遺構種類ごとの続き番号を用いている。このため、旧石器のブロック番号は、調査時のものと本書とで異なってしまった。その変更は以下の通り。矢印の左が調査時、右が本書である。
2区1号ブロック→1号ブロック 3区1号ブロック→2号ブロック
4区1号ブロック→3号ブロック
- 本書におけるテフラの略号は以下の通り
As-A 浅間山噴出A軽石（天明3年・1783） As-B 浅間山噴出B軽石（天仁元年・1108）
F A 榛名山二ツ岳噴出火山灰（6世紀初頭）
- 土層断面図中のスクリーントーンは以下の通り。遺物実測図中のスクリーントーンについては、その都度注記した。



- 遺構図面の縮尺はそれぞれの場合に適したものを採用したので、それぞれの図面のスケールを参照していただきたい。遺物図面の縮尺は基本的には以下の通りである。
円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪 1/5 同破片 1/4 土師器・須恵器 1/3
縄文土器 1/4 同破片 1/3 石器 4/5（ただし石斧は1/2、石鎌は1/1）
- 遺物写真はその都度適した縮尺を使用したため、縮尺不同である。
- 埴輪観察表については以下の通りである。
器種 普通円筒は「円筒」、朝顔形埴輪は「朝顔」と記述。
計測値 ①器高 口縁部から底部までの高さ 口縁の高さが一定しない場合は、最も低い位置を計測。
②口径 口縁部の直径 口縁の輪郭が歪んでいる場合は、最長部分の直径を計測。
③底径 底部の直径 底部の輪郭が歪んでいる場合は、最長部分の直径を計測。
調整 外面と内面と分けて記述。調整の順序は→で表現。
刷毛 幅10mmあたりのハケメの本数。
突帯 断面形状を次の3種類に分けて記述。特記すべき特徴はその都度記述。上下の仕上げナデはほぼ全個体で突帯の上下に施されているため、記述していない。
A 断面が台形。
B 断面が台形だが、下の稜が低くなる。
C 断面三角形。
透孔 次の3種類に分けて記述。？は透孔のありそうな場所が欠損しているため、形状が確認できない場合に記入。
正円形 不整円形 半円形

- 線刻 場所と内容を記載。「内」「外」は内面・外面の別、数字は段数を表す。?は線刻が存在しそうな場所が欠損していることを表す。「なし」は線刻がないことが確定している場合に記入。
- 色調 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』1994を使用した。略号が書ききれない場合は備考の欄に記載した。
- 出土位置 古墳により異なる。区分けがされている場合は区名（Ⅰ～Ⅳ区など）、そうでない場合は具体的な場所を記述する。
- 備考 その他特記事項を記入。

目次

口絵・カラー図版

序

例言

凡例

目次

抄録

第1章 調査の経緯・方法・経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡をとりまく環境	6
1 自然環境	6
2 歴史的環境	7
3 高林古墳群について	11
第3章 調査の成果	13
1 1号墳	15
2 2号墳	49
3 3号墳	55
4 4号墳	59
5 5号墳	61
6 6号墳	69
7 7号墳	80
8 8号墳	82
9 9号墳	115
10 10号墳	119
11 11号墳	120
12 溝・土坑・ピット	123
13 縄文時代の遺物	131
14 旧石器時代の調査	134
第4章 自然科学分析	166
第5章 まとめ	171

写真図版

報告書抄録

書名ふりがな	たかばやしにしはらこふんぐん
書名	高林西原古墳群
副書名	群馬県立がんセンター新病院建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	なし
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	371
編著者名	高井佳弘
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20060327
作成法人 I D	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	たかばやしにしはらこふんぐん
遺跡名	高林西原古墳群
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしたかばやしにしまち
遺跡所在地	群馬県太田市高林西町
市町村コード	10205
遺跡番号	0029
北緯 (日本測地系)	361513
東経 (日本測地系)	1392159
北緯 (世界測地系)	361524
東経 (世界測地系)	1392148
調査期間	20010801-20021228 20041201-20050228
調査面積	11.324
調査原因	病院建設工事
主な時代	旧石器/縄文/古墳
遺跡概要	包蔵地-旧石器-石器集中部3-接合資料/包蔵地-縄文 -土器+石器/古墳-古墳-古墳11-円筒埴輪+形象埴輪+土器
特記事項	古墳時代後期の群集墳

第1章 調査の経緯・方法・経過

1 調査に至る経緯

群馬県立がんセンター新病院整備については、本県のがん対策の医療の拠点施設として、常にその時代における最高かつ最新のがん医療の提供を目指して医療活動を展開し、県民一人ひとりが健康で健やかに老いることのできる潤いと活力のある健康長寿県ぐんまの実現に取り組むことを目的とし既存の建物を活用していきながら、全面建て替えの計画が平成7年6月に発表された。群馬県教育委員会文化財保護課は、平成7年6月12日群馬県立がんセンター増床工事に伴う関連地域の埋蔵文化財試掘調査を実施した。この時点では遺構が直接かかる部分はなかったが、平成11年には新病院基本計画策定により、掘削範囲が確定した。これに伴い事業照会を受けた文化財保護課は高林西原古墳群の中心部に位置することを重視し、同年8月2日から5日にかけて建設予定地の一部245㎡の試掘調査を実施した。対象地内に幅1mのトレンチを入れ、埋蔵文化財の有無の確認を行ったところ6世紀前半頃と推定される古墳を3基確認した。

試掘調査で確認された結果をもとに、文化財保護課は、群馬県立がんセンター新病院建設室と具体的な埋蔵文化財発掘調査について事前協議を行なった。敷地内においては、さらに遺構が工事区全面に検出される可能性が高いことを指摘し、工事にあたり、発掘調査が必要であると判断した。

平成12年5月17日文化財保護課・新病院建設室と事業団は三者協議を行ない、病院側からは病院の機能をできる限り生かしたかたちで調査を進める発掘調査計画の立案要望が出された。文化財側からは効率的な発掘調査を行うために、既存施設等の撤去（フェンス・アスファルト・各種埋設管・官舎・立ち木・廃棄物）計画を明示し、発掘調査工程が順調に行えるよう検討してもらうこととした。これをも

とに問題点を互いに整理し、7月19日がんセンターにおいて、再び三者協議を行い、発掘調査についての具体的協議を行った。発掘対象地を3区のプロックに分け、一区画ごとに発掘調査を行うこととし、他の二区画に掘削排出土をできる限り置き、ダンパーなどの病院敷地内の通行を少なくする。外来者の駐車場確保、発掘調査区の安全確保のためのフェンスの設置などを行うことで病院の通常業務を確保する計画をたてた。病院側も調査の迅速化のために既存施設の撤去についての具体的な計画や調査時における緊急対策・対応など連絡体制をとっていただけるとの心強い協力関係を確立し、平成12・13年度2年間にわたる調査計画を立案した。しかし、病院建設は決定しているが、最終判断待ちの状況にあるとのことであり、これらの条件も考慮し、平成12年8月から平成13年12月までの工程で発掘調査に着手することとなった。

平成12・13年度の発掘調査は関係各機関等の協力を得ることにより無事に調査を終了することができたが、平成16年度には養護学校跡地付近に工事が及ぶ事となったため追加調査の必要性が生まれ、群馬県教育委員会文化課（旧文化財保護課）の調整により、平成12・13年度に行った発掘調査の結果を踏まえ、ここを4区として、古墳や旧石器等の追加調査を行うこととなった。調査期間は平成16年12月～17年2月までの3ヶ月間を設定した。

出土資料の整理・報告書の作成はこれらの調査をまとめた形で平成17年1月から平成18年3月までの契約により事業計画が立案された。



第1図 遍跡の位置

国土地理院20万分の1地勢図「宇都宮」使用

2 調査の方法と経過

1 調査の方法

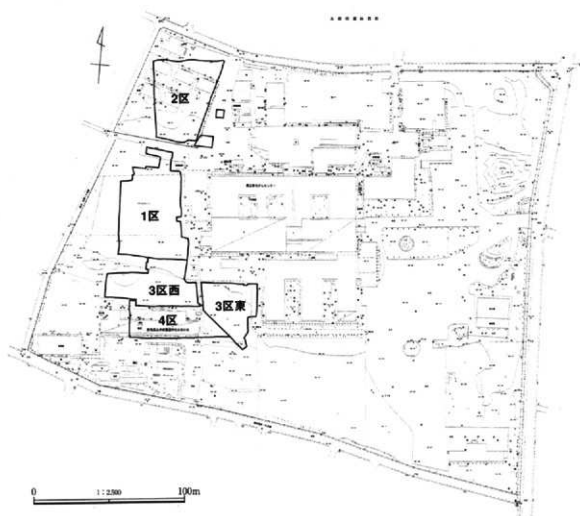
調査対象地は県立がんセンター敷地内の西側であるが、現地における発掘調査は、その病院内という特殊事情から、大きな制約を受けることとなった。特に調査期間中も県立がんセンターは稼働しており、病棟はもちろんのこと、それに供給される電気・ガス・水道、さらに液体酸素や高圧電線などに支障があってはならないので、極めて慎重な調査が必要となり、調査範囲もある程度限定されることになった。

本調査を行なった範囲は第2図の通りであるが、

この一帯はテニスコート、官舎、山林、養護学校敷地など、様々な用途に利用されていたため、調査はそれら施設の撤去を待ちながら、大きく4回に分けて行うことになった。各回の調査区は、便宜上1～4区と名付けた。この区名は調査の単位毎に付けたものであり、それ以上の意味はない。

調査の方法の概略は以下の通りである。

表土除去は基本的にバックホーを用いて行った。ただし8号墳のみは墳丘が現状でも残り、調査前から古墳の概形が判ったので、例外的に人力で表土除去を行った。またこの8号墳のある3区西側については、山林として利用されていたために旧地形があ



第2図 調査区位置図

る程度保存されており、古墳墳丘と思われる高まりが残っていたので、ここについては表土除去前に現況の地形実測を行った。

表土除去の後、遺構確認を行い、発見された遺構について調査を行った。調査した遺構は少数の溝・土坑を除いて古墳が中心であったが、墳丘盛土が残っているものは少ないので、基本的に周堀の調査となった。周堀は基本的に4分割して調査を行い、小さな遺物は8分割に区分けして取り上げたが、調査区に一部しかかかっていない古墳も多いため、適宜変更を加えた。

平面測量は出土遺物が多いため1/20を基準とし、形象植輪が集中した8号墳など、特殊な場合には1/10を併用した。その他、古墳の存在しない部分では、適宜1/40や1/100などとした。調査グリッドは遺跡特有のものを設定することはせず、その地点の特定については、国土地標第Ⅴ系（旧国土地標系）を用い、X・Y座標について、その下3桁を用いて表すことにした（例200-850）。

遺構調査後、旧石器の試掘調査を行った。試掘範囲の設定は、基本的に10m四方について1ヶ所の割合で5×2mの試掘坑を設け、遺物が出土した場合、周囲に拡張した。

遺構写真の撮影は、35mmモノクロ、リバーサルを併用し、適宜6×7版モノクロも撮影した。また、各遺構（古墳）は大きいため、ラジコンヘリによる空中写真撮影も適宜行った。

2 調査の経過

以下、「調査日誌」を抄録する形で調査の経過について記すことにする。

○平成12年度

12年度は8月から開始したが、8月中はプレハブの建設、テニスコートのフェンス撤去、アスファルト舗装の切断などを行い、現地での発掘調査作業は9月より開始した。

9月1日 引っ越し作業。

- 2日 1区表土除去開始（重機）。
テニスコートフェンス撤去終了。
安全柵設置。
表土除去作業は、旧病院の廃材を埋めた
擾乱が多く、難航。
- 21日 作業員を入れての本格作業開始。
- 22日 1～3号墳確認。
- 27日 3号墳調査開始。
- 28日 1号墳調査開始。
- 10月5日 2号墳調査開始。
- 17日 3号墳調査終了。
- 18日 1号墳北半調査終了。
- 20日 1区北半調査開始。
- 23日 表土除去作業終了。重機搬出
- 27日 4号墳確認。調査開始。
- 31日 空撮。4号墳平面測量。
- 11月6日 旧石器試掘調査開始。
- 14日 高所作業車で写真撮影。
- 29日 2号墳周堀、掘り足りないことが
判明。再掘り下げ開始。
- 12月15日 1区埋め戻し開始
- 18日 設計変更に伴い、1区西側を拡張開始。
- 20日 拡張区遺構確認。
- 22日 1区埋め戻し、1号墳部分を残し終了。
- 平成13年
- 1月9日 雪のため、重機の作業延期。
- 10日 2区ガードフェンス設置工事。
- 11日 作業員初日。2区表土除去開始。
- 12日 2区遺構確認作業開始。
- 17日 5号墳を確認、調査開始。
- 24日 表土除去終了。重機搬出。
- 2月5日 11号土坑調査。
- 15日 2区空撮。旧石器試掘調査開始。
- 26日 3区現況測量。
- 3月12日 3区表土除去開始。
- 14日 2区西側で5号墳の形状確認の
トレンチ調査。
- 22日 2区空撮。

- 23日 作業員最終日。
27日 2区埋め戻し開始。
30日 2区埋め戻し・整地終了。防風ネット設置工事。

○平成13年度

- 4月9日 13年度作業員初日。3区東側遺構精査開始。
10日 6号墳・7号墳調査開始。
17日 3区西側8号墳の範囲確認トレンチ設定。調査開始。
19日 3区東側高所作業車で写真撮影。
23日 3区東側、旧石器試掘調査開始。
5月11日 3区東側、旧石器試掘調査終了。全景写真撮影。
6月6日 3区東側拡張区表土除去開始。
8日 6・7号墳調査再開。
13日 2区東側拡張区（北、南の2ヶ所）開始。北から2-2区、2-3区と呼称。3区中央-西部表土除去開始。
18日 2-3区で10号墳を確認。2-2区では旧石器試掘調査開始。
26日 2-2区埋め戻し。
27日 2-3区を西に拡張。3区西側表土除去終了。
7月2日 1号墳南半部調査開始。
3日 2-3区旧石器試掘開始。
10日 2-3区埋め戻し。
12日 7・8号墳高所作業車による全景写真。2-2・3区舗装復旧工事。
13日 8号墳平面測量開始。
18日 8号墳遺物取り上げ開始。
8月1日 11号墳調査開始。
3日 9号墳調査開始。
10日 3区空撮。高所作業車でも撮影。
17日 3区西側旧石器試掘開始。
20日 8号墳西側から旧石器出土。
27日 8号墳墳丘上の土坑の調査開始。

石塚状のものであることが判明。

- 30日 3区東側埋め戻し。
31日 旧石器調査終了。
9月5日 3区東側埋め戻し終了。
14日 8号墳調査終了。3区西側埋め戻し開始。
17日 ガードフェンス撤去。
21日 埋め戻しを少し残したまま引き渡し。
26日 埋め戻し完全終了。

○平成16年度

平成16年の調査は12月から開始した。12月はプレハブの建設、表土除去などの準備作業を行い、本格的な調査は1月から開始した。

- 12月15日 4区調査区設定。表土除去開始。
21日 表土除去終了。

平成17年

- 1月6日 作業員初日。遺構確認開始。捜乱が多く、その整理に時間を取られる。
17日 遺構調査開始。
18日 8・9号墳の延長部を確認。
19日 8・9号墳調査開始。
24日 7号墳の延長部を確認、調査開始。
2月1日 4区空撮。
2日 旧石器試掘開始。
7日 旧石器出土。
15日 古墳部分調査終了。
23日 高所作業車による写真撮影。
24日 旧石器調査終了。埋め戻し開始。
28日 現地作業終了。

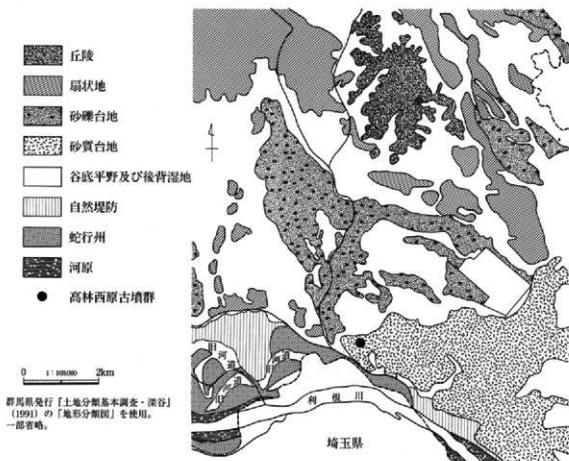
第2章 遺跡をとりまく環境

1 自然環境

太田市は群馬県の南東部に位置し、北から延びる山地の南、広大な関東平野の中にある。市の中央部には金山・八王子丘陵が突出し、さらに、北・西部から流れ下る大河川によって南北が画され、これが埼玉県、栃木県との県境となっている。地形的には、この金山・八王子丘陵を中心として、西側は大間々扇状地、南側は広い台地が広がり、さらに南に利根川が東西に流れている。高林西原古墳群のある太田市南部は、大間々扇状地末端のさらに東側に当たり、低い洪積台地が東西に分布し、その台地と台地の間

は沖積低地となっている。これらの台地は、『太田市史・通史編 自然』によれば北から新井台地、飯塚台地、矢島台地、高林台地と呼ばれており、本古墳群はそのうち高林台地に立地する。

高林台地は、調査地となった県立がんセンターの西側付近から大泉町へと続く広い台地で、南北の幅はこの高林周辺で約1.8kmある。標高はがんセンター内で36m程度であり、全体的には西から東へと緩く傾斜している。この台地と沖積地との境は、北縁（がんセンターのすぐ北側）は比高約1mほどで



第3図 周辺地形分類図

緩やかに移行してははっきりしないが、南縁では古戸町付近で比高3m前後の緩傾斜段丘崖となっている

2 歴史的環境

太田市周辺は多くの遺跡に恵まれ、古くから考古学の調査の盛んだった地域である。特に古墳時代には東国一の規模を誇る天神山古墳を初めとした多くの古墳が存在する。ここでは、本遺跡の周辺に限り、各時代の遺跡を概観したい。

まず、旧石器時代についてはこれまでさほど調査例が多くなかった。しかし、近年国道354号線バイパスの関連調査が当事業団によって行われ、そのうちのいくつかの遺跡で旧石器が出土し、資料が増加している。17福次新田遺跡では黒曜石製の槌器、15細谷合ノ谷遺跡では黒曜石製のナイフ形石器が出土している。また、18高林三人遺跡では数カ所の石器ブロックが検出され、特にB区ではナイフ形石器、石核、剥片が計200点以上出土している。高林西原古墳群でも石器の出土が3ブロック見られ、まとまった資料が得られている。

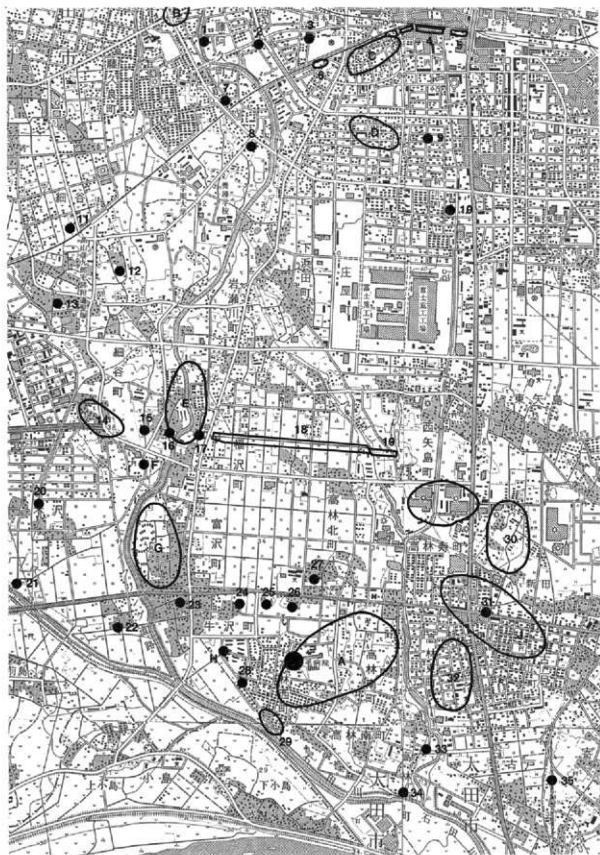
縄文時代の遺跡も多くはない。34梁場遺跡では草創期の爪形文土器が出土している。早期では燃糸文土器が梁場遺跡、古戸遺跡、28牛沢遺跡で発見されている。中期は梁場遺跡で中期後半の埋甕が発見されている。後期は35寄木戸遺跡、15細谷合ノ谷遺跡などがあり、このうち細谷合ノ谷遺跡で後期中葉の竪穴住居、袋状土坑、埋甕などが確認されている。高林西原古墳群ではこの時期の遺構は落とし穴4基のほかはなく、その他少数の土器と石鏝、石斧が見られるのみである。

弥生時代の遺跡は少なく、この地域のひとつの特徴である。この時期の土器片が見つかることはあるが、遺構は確認されていない。

古墳時代は、数多くの遺跡が存在する。前期の遺跡では、上野地域の古墳時代前期を代表する土器である、石田川式土器の標識遺跡である21石田川遺跡がある。昭和27年(1952)の石田川河川改修工事に

伴う土取り工事によって発見され、緊急調査された。その際、東海系の特徴を示す土器の一群が発見され、「石田川式」と命名された。この時期のきわめて重要な遺跡である。同じく前期の遺跡としては、本遺跡の北300mのところに26高林遺跡がある。高林遺跡は昭和34年(1959)に明治大学の大家初重、小林三郎らによって発掘された遺跡であり、学史的にもよく知られた遺跡である。古墳では、当地域で最も最初に出現したと考えられている22頼母子古墳がある。円墳あるいは前方後円墳と考えられているが、既に削平されて現存しない。出土物には銅鏃30点、三角縁神獣鏡などの銅鏡3面などが知られている。この頼母子古墳の後を受ける古墳として、これも本遺跡の近傍に位置する25朝子塚古墳がある。本格的な調査は行われていないが、全長124mの前方後円墳であり、4世紀後半のものと考えられている。G富沢古墳群では前期の方形周溝墓や円形周溝墓が確認されている。中期から後期にかけては、この地域には多くの群集墳が営まれる。本遺跡の東にはJ東矢島古墳群があり、6基の前方後円墳を中心として多くの古墳があったことが分かっている。その他、6世紀代のB藤阿久古墳群、詳細は不明だが、後期のC浜町古墳群、全て円墳からなる6世紀後半から7世紀代のD新井古墳群などが本遺跡の北に離れてあり、西側にはE岩瀬川古墳群、冠稲荷神社付近にはF細谷古墳群、本遺跡と同じ台地上で西端部にはH小谷場古墳群がある。このように、本地域には数多くの群集墳があり、県内でも有数の古墳密集地帯ということができよう。

古墳時代中～後期の集落跡の調査は2舞台A・D遺跡、8川窪遺跡、14細谷南遺跡、33高林梁場遺跡などがある。本遺跡では古墳のみで住居跡は全く存在しなかった。



第4図 周辺の遺跡

国土地理院2万5千分の1地形図「上野境」「足利南部」「深谷」「栗沼」使用

周辺の遺跡

古墳群

古墳群名	概 要	主な文献
A 高林古墳群	古墳時代中期～後期の古墳群。高林西原古墳群はその1支群。(11)	(11)
B 藤阿久古墳群	径16mほどの円墳が多く、横穴式石室のものが主体か。6世紀代。(11)	(11)
C 浜町古墳群	古墳後期 詳細不明。(12)	(12)
D 新井古墳群	6世紀後半から7世紀にかけての古墳群 八幡神社古墳は横穴式石室。(11)	(11)
E 岩瀬川古墳群	後期の古墳群。(12)	(12)
F 細谷古墳群	5世紀代、あるいは前期古墳が存在する可能性も。冠形古神社内に5基が残存。(4)	(4)
G 富沢古墳群	調査により32基の古墳を確認。前期の方から7世紀代まで。(11)	(11)
H 小谷堀古墳群	戦後削平。『総覧』では17基。中～後期の古墳群。(11)	(11)
I 西矢島古墳群	前方後円墳1の他、円墳からなる後期の古墳群。(11)	(11)
J 東久島古墳群	6基の前方後円墳と多数の円墳からなる後期の古墳群。(11)	(11)

その他の遺跡

遺跡名	時 代	概 要	主な文献
1 藤阿久大遺跡	古墳	竪穴住居。	(7)
2 舞台A・D遺跡	古墳後～平安	古墳後期の大型集落。	(11)
3 稲荷山古墳	古墳	径20mの円墳。形象埴輪は太田高校で保管。(11)	(11)
4 浜町遺跡	古墳・平安	古墳～平安の竪穴住居。中世の溝、井戸。(11)・(16)	(11)・(16)
5 宮内遺跡	縄文～中世	古墳～平安の竪穴住居。	年報20、22
6 塚塚遺跡	縄文・古墳・平安	縄文中期土坑。古墳～平安の竪穴住居。	年報21
7 舞台C遺跡	古墳後期	古墳後期の集落。	(11)
8 川窪遺跡	古墳前～平安	古墳前～後期、及び平安の集落跡。(11)	(11)
9 玉(御)庵稲荷古墳	古墳	円墳。(4)	(4)
10 稲荷塚古墳	古墳	全長50m程の前方後円墳か。刀、道具、玉、鈴など。(11)	(11)
11 細谷清川遺跡	古墳	古墳の集落。(12)	(12)
12 細谷東遺跡	古墳・奈良	古墳・奈良の集落。(12)	(12)
13 細谷中遺跡	古墳～平安	古墳～平安の集落。(12)	(12)
14 細谷南遺跡	古墳～平安	古墳・奈良・平安の竪穴住居。	年報21
15 細谷合ノ谷遺跡	旧石器・縄文～平安	旧石器ナイフ形石器。縄文後期竪穴住居、埴輪、土坑。	年報23、24
16 細谷八幡遺跡	奈良・平安	奈良・平安の竪穴住居。	年報21、22
17 福沢新田遺跡	旧石器～中世	旧石器黒曜石製の標槍。平安竪穴住居。中世溝。	年報22、23
18 高林三入遺跡	古墳	前期～中期の集落。(15)	(15)
19 八反田遺跡	古墳～中世	土坑・溝などを調査。(15)	(15)
20 米沢中遺跡	古墳	前期の遺跡。舟形土製品が出土。(11)	(11)
21 石田川遺跡	古墳	前期集落。石田川式土器の様式遺跡として有名。(2)	(2)
22 頼母子古墳	古墳	前期古墳(円墳か)。銅鏡3面、土器3面、刀身1編など。(11)	(11)
23 沢野村27号墳	古墳	41mの帆立貝形古墳。5世紀末～6世紀初め。(11)	(11)
24 藤塚塚古墳	古墳	5世紀前半(沢野村45号墳)の円墳。削平され現存しない。(11)	(11)
25 頼子塚古墳	古墳	4世紀後半の前方後円墳。形象埴輪(家形、扇形)。円筒埴輪。(11)	(11)
26 高林遺跡	古墳	前期竪穴住居。石田川式土器。(1)	(1)
27 沢野村102号墳	古墳	終末末(7世紀前半)の複室構造横穴式石室を持つ円墳か。(11)	(11)
28 牛乳遺跡	縄文	縄文早期鹿系土器。(11)	(11)
29 小谷堀遺跡	古墳～平安	平安の竪穴住居(9世紀)。(11)	(11)
30 新ヶ谷戸遺跡	古墳・奈良	古墳・奈良の集落。(12)	(12)
31 東久島寺	奈良・平安	古瓦出土。寺院跡と推定。(11)	(11)
32 高林向野遺跡	奈良・平安	平安の集落。緑輪陶器。(11)	(11)
33 高林築場遺跡	古墳後期～平安	古墳後期の集落。平安の集落。緑輪陶器。(10)	(10)
34 堂場遺跡	縄文・古墳	縄文草創期汎形土器。中期埴輪。平安竪穴住居。(13)	(13)
35 寄木戸遺跡	縄文	縄文後期竪穴住居。(11)	(11)

○主な文献の番号は次ページの参考文献番号に一致する。

『年報』とは、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の『年報』をさす。

奈良・平安時代では、東矢島古墳群の中に31東矢島廃寺があることが特筆される。この付近には東山道武蔵路が通っていると推定されていて、古代では要衝の地であり、そこに古代寺院が建立されていることはきわめて重要な事実である。大きな古墳群の存在は、そのような有力者の存在があったからだと思われる。しかし、東矢島廃寺は瓦の出土が知られているのみで、遺構は全く不明であり、現在ではその位置すら明確ではなくなってしまっている。

集落跡では32高林向野遺跡、33高林梁場遺跡、16細谷八幡遺跡、14細谷南遺跡などが調査されている。

なお、東山道武蔵路の有力な推定地が19八反田遺跡として調査されたが、そこには道路跡が発見されず、まだ武蔵路の位置は確定していない。

中近世ではこの地域にも多くの館、城の跡が知られているが、本遺跡ではこの時期の遺構、遺物が全く見つかっておらず、ここでは省略したい。

参考文献(番号は遺跡一覧表の「主な文献」に一致)

- (1) 大塚初重・小林三郎「群馬県高林遺跡の調査」『考古学集刊第3巻第4号』東京考古学会 1967
- (2) 尾崎喜左雄・今井新次・松島栄治「石田川」 1968
- (3) 「澤野村102号古墳報告書」太田市教育委員会 1969
- (4) 「群馬県遺跡台帳東毛編」群馬県教育委員会 1971
- (5) 「沢野村第63号墳発掘調査概報」太田市教育委員会 1977
- (6) 「群馬県史資料編3」 1981
- (7) 「群馬県史通史編1」群馬県 1990
- (8) 「太田市文化財地図」太田市教育委員会 1991
- (9) 「西原古墳群」東毛病院宿舎遺跡調査会 1993
- (10) 「市内遺跡X」太田市教育委員会 1994

- (11) 「太田市史通史編・原始古代」太田市 1996
- (12) 「群馬県文化財情報システム」群馬県教育委員会 2001
- (13) 「梁場遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003
- (14) 「年保遺跡・鳥山下遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003
- (15) 「高林三人遺跡・八反田遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005
- (16) 「浜町遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005

3 高林古墳群について

高林古墳群は高林台地の西部、県立がんセンターとその周囲に広がる古墳群であるが、これらはいくつかに細分することが可能で、高林西原古墳群もそのうちの一つである。『太田市史・通史編 原始古代』によれば、それらは次のように分けられている。

①高林不動古墳群 がんセンターの南、高林台地の南縁に分布。第5図では中央下、不動公園の南東側に古墳がある。『上毛古墳総覧』(以下『総覧』と略す)では5基を記載。墳丘は比較的大きく、最大のもは径32メートルに近いとされる。現在も4基が残存。主体部は横穴式石室と推定。6世紀後半から7世紀前半か。

②高林西原・鶴巻古墳群 がんセンターとその東側にかけて分布。西原とはがんセンターとその南側一帯の旧字名であり、鶴巻はその東側一帯の旧字名である。『総覧』では47基を記載し、現在でも畑、住宅の間に多くの古墳を見ることができる。しかし、『市史』も述べているように、古墳とはされていなかった場所から「人が乗る塚馬」の埴輪が出土していること、沢野村第74号北古墳や高林西原公園古墳のように『総覧』漏れの古墳が存在すること(『市史・通史編 原始古代』の資料編参照)などから、これをかなり上回る数の古墳があったものと思われる。実際発掘調査でも、完全に削平されていた古墳を発見している。『総覧』の47基では、36m以上の7基はいずれも帆立貝形であり、5世紀後半からこれら中期の様相をもつ帆立貝形古墳を中核にして古墳群が形成され、その後6世紀中頃に横穴式石室を取り入れ、7世紀後半まで継続的に営まれたとされる。

このほか、近傍には牛沢小谷場古墳群(高林台地の西端。『総覧』17基。)、高林福島古墳群(朝子塚古墳の東から市立南中学校の東方にかけて存在。『総覧』4基。)、東矢高古墳群(高林交差点付近。100m級の前方後円墳を中心とした後期の古墳群)などがある。

高林古墳群付近はこのように濃密な古墳分布を示す地域であるが、戦後の開発によってその多くが失われてしまっている地域でもある。それに伴って、ごく一部ではあるが、発掘調査が行われている。

中原古墳(第5図2)はがんセンターの南東約150mの所にある帆立貝形の古墳である。昭和25年に日本考古学協会によって調査された。全長56mの規模を有し、造り出しを南西に付している。周縁は馬蹄形である。円筒埴輪列が円丘を一周し、作り出し部の「コ」の字形の円筒埴輪列が付加される。墳丘北東裾部では、円筒埴輪列が二重に設けられている。主体部は礎礎である。副葬品として直刀、鉄鏃、短甲、挂甲小札などが出土している。円筒埴輪にはB種ヨコハケをもつものがある。5世紀後半のものと思われ、古墳群中でも古い時期のものであると思われる。

沢野村63号墳(第5図1)はがんセンターの南東約300mの位置にある円墳であり、昭和51年に調査された。調査時にはすでにかなりの部分が破壊されていたが、墳丘径40m、周縁幅20メートルの規模であるということなので、かなり大きな規模をもっている。主体部は礎礎で、割竹形木棺が安置されていたものと思われる。盗掘を受けていたが、直刀や馬具、挂甲小札、鉄鏃などが出土している。その他円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土し、人物埴輪の存在も推定されている。6世紀初頭の年代が推定されている。

また平成5年には、がんセンターの北東200mの地点でがんセンターの職員宿舎の建設に先立って発掘調査が行われ、3基の古墳周縁が調査されている。

これらの他、高林福島古墳群に分類されるが、がんセンターの北約500mの位置の沢野村102号(第5図10)でも昭和43年に調査が行われ、複室構造の横穴式石室が調査されている。

他に埴輪などの資料が『太田市史・通史編 原始古代』の資料編に掲載されている古墳としては、沢野村第74号北古墳、沢野村第96号古墳、高林西原公

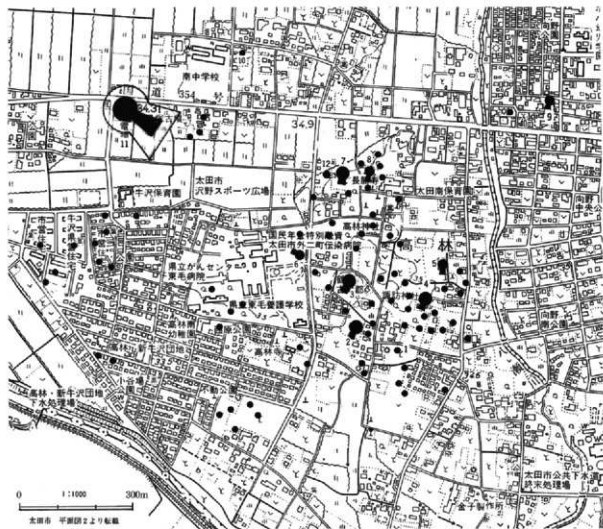
園古墳などがある。

なお、がんセンターの南にある東毛養護学校の敷地からは、太田市の重要文化財に指定されている「人が乗る禪馬」の埴輪が出土している。それは昭和44年、体育館建設の際に駐車場整備を行った時に出土したといわれており、とすれば、今回の調査区のすぐ南西に隣接する所となる。

(参考文献等は10ページ参照)

第5図の古墳

- 1 沢野村63号墳
- 2 中原古墳 (沢野村72号)
- 3 沢野村74号墳
- 4 諏訪山古墳 (沢野村54号)
- 5 沢野村47号墳
- 6 沢野村77号墳
- 7 沢野村86号墳
- 8 愛宕山古墳 (沢野村89号)
- 9 沢野村105号墳
- 10 沢野村102号墳
- 11 朝子塚古墳 (沢野村46号)



第5図 周辺の古墳

東毛病院宿舍遺跡調査会「西原古墳群」1993より転載

第3章 調査の成果

調査した遺構は下記の通りである。

古墳	11基
溝	3本
土坑	14基
ピット	6基
旧石器集中部	3ブロック

今回の調査対象地は昭和30年から病院として利用されていたため（工事着工は29年）、後世の地形改変が著しい。特に調査区北半部（1区及び2区として調査した部分）と南端部（4区として調査した部分）は、病棟、養護学校校舎、職員宿舎、テニスコートなどとして使用されていたため、遺構上面は削平され、調査前には古墳の存在が全く解らなくなっていた。しかも、建物基礎やゴミ穴などといった擾乱が数多く入り、遺構の残存度は極めて悪かった。

それに対して、その中間に位置する部分（3区として調査）は緑地（山林）のまま残っていたため、比較的後世の擾乱が少なく、特に西半分では古墳墳丘の名残と思われる高まりを確認することができた。調査で8号墳と名付けた古墳では、地表面に約70cmほどの高まりが残り、周溝と思われる回みも確認できたほどである。しかし、11号墳のように表面からは全く判らなくなっていたものもあり、この部分も全くの手つかずというわけではない。

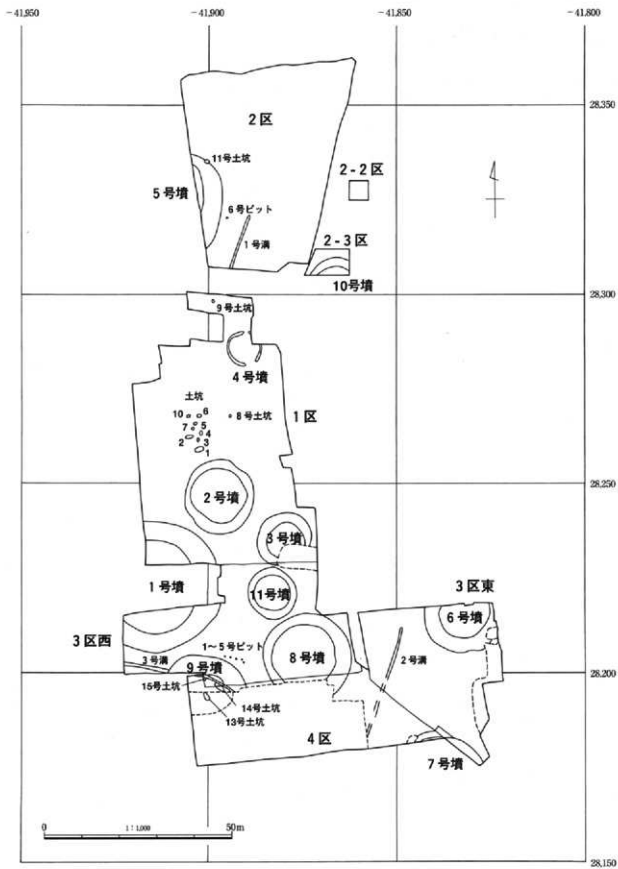
結局、調査前から位置・規模が推定できた古墳は8号墳の1基のみであり、古墳らしい高まりが存在して、それが結果的に古墳であると判ったものが1、6、7、9の4基である。残る6基の古墳は完全に削平されていた。高林西原古墳群の地域は、現在はかなり宅地化が進んでいるが、地表面からは判らない古墳がかなりの数あることを推測させる。

古墳は全城から見つかっているが、南部に多く、北部では少ない。南部では狭い範囲に古墳が集中し、

特に1～3、8、9、11号の6基の古墳は密集しており、周溝がほとんど接しているものもあるほどである。北部ではかなり空閑地が広がる状況であるが、2号墳以北については、4号墳の残存状況の悪さからみて原地形がかなり削平されていることが考えられるため、4号墳のような小規模な古墳であれば完全に消滅していることも考えられる。このような状態は5号墳北東側一帯も同様であり、既に消滅した小古墳が存在する可能性は否定できない。地形的には、今回の調査地の北～北西方向は、あと50メートルほどで低地への斜面となっているので、このあたりが古墳群の北西端となっているものと思われる。

古墳時代の遺構としては、以上11基の古墳が全てであり、同時期の住居は全く確認できていない。表土中からも土器の出土は稀であったので、住居の存在の可能性は低いものと思われる。その他の溝・土坑・ピットについては、縄文時代の落とし穴と思われるもの4基がある他は、時期を特定できるものはない。縄文時代の遺物は土器・石鏝など少数が出土するが、やはり同時期の住居は確認できていない。

調査区の北と南で旧石器時代の遺物が出土している。2区では一カ所のブロック（1号ブロック）と1点ずつ出土したトレンチが3カ所。3区南端では一カ所のブロック（2号ブロック）。4区では一カ所のブロック（3号ブロック）が見つかっている。



第6図 遺構配置図

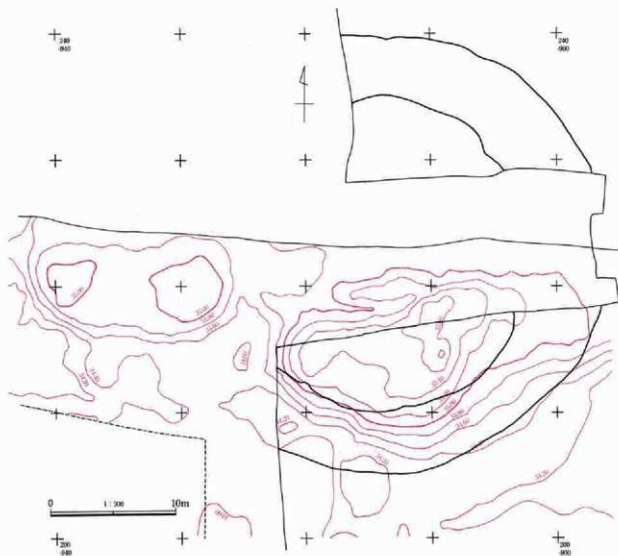
1 1号墳

1 調査前の状況と発掘調査

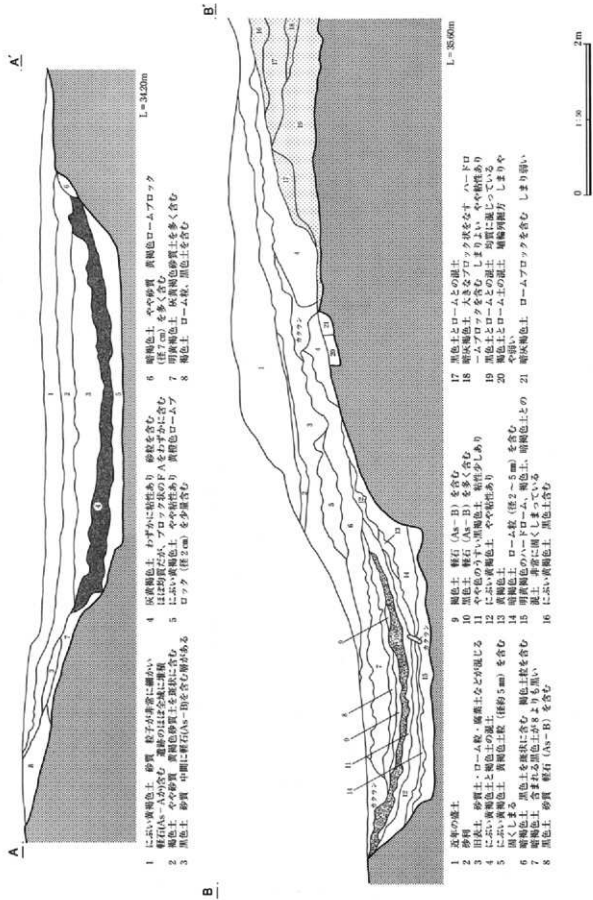
1号墳は調査区南西にある。北半分は当初は病棟として、病棟取り壊し後はテニスコートとして利用されていたため、平坦にされていた。南半分は雑木林であった。発掘調査は北半分を平成12年に1区として、南半分を平成13年度に3区として行った。

調査前には北半分は完全に削平されており、地表面からは古墳の存在が分からなくなっていたが、南半分は雑木林のままであったため、墳丘の名残と思われる高まりが半月形に残っていた（第7図）。そ

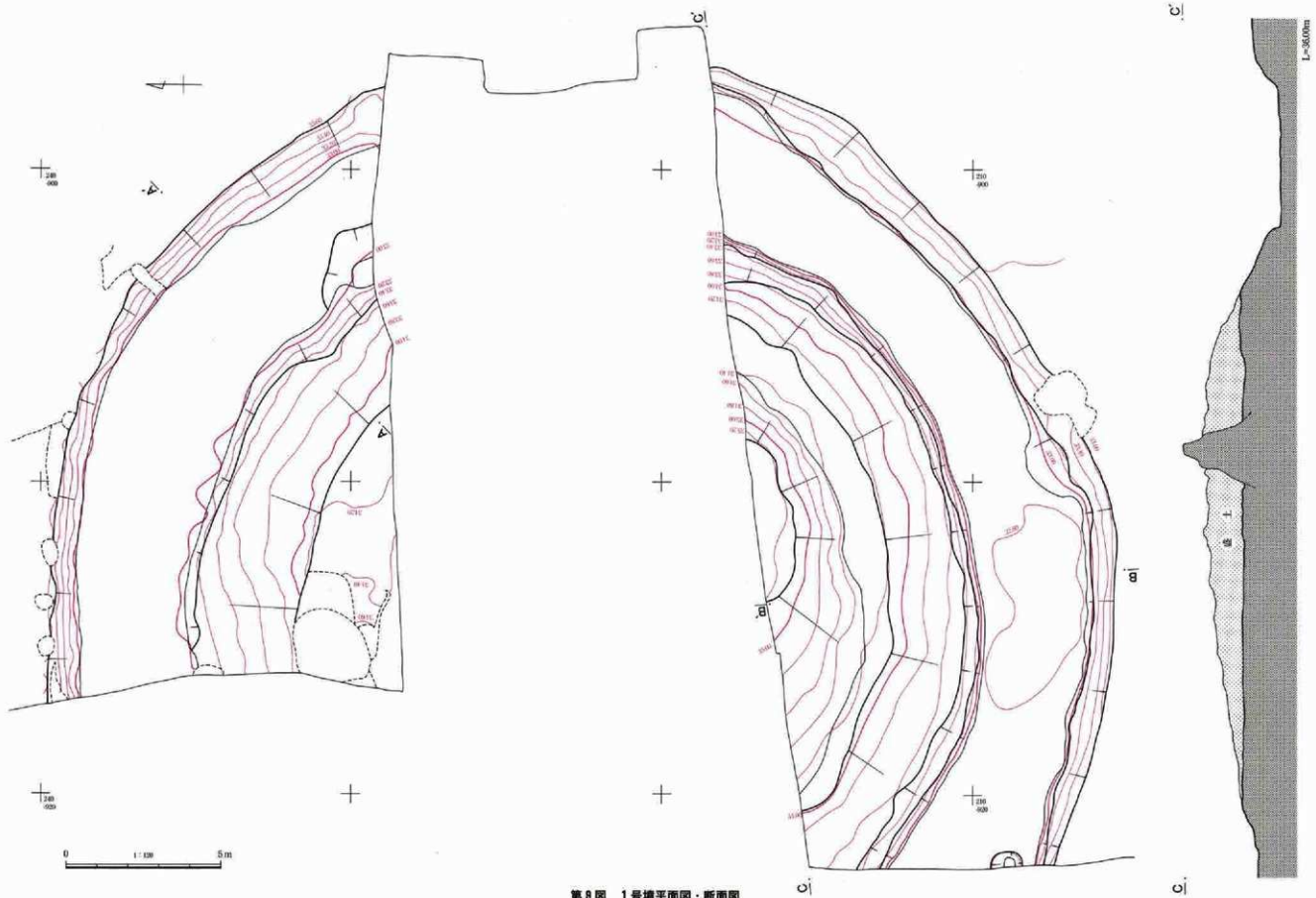
の高さは南側の低いところから測って1.4mもある。しかし発掘調査の結果、この高まりは墳丘そのものではなく、本来の墳丘位置から南に少しずれていることが判明した。おそらく北半の墳丘を削平したときに、その残土を南側に押し出したものであると思われる。墳丘盛土そのものは、その移動した土の下層に、最も厚いところで1.2m残っていた。また墳丘の中心に当たる部分は、病棟が存在していた当時に巨大なゴミ穴が掘られてしまい、地表下約3mまで完全に破壊されていた。そのため、主体部は全く確認できなかった。



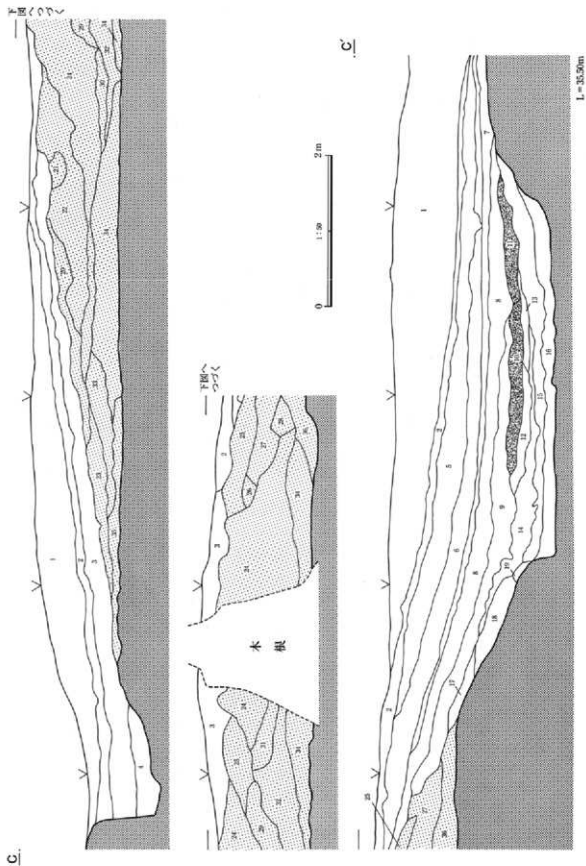
第7図 1号墳調査前現況地形図



第8図 1号墳跡丘～周壕断面図 (1)



第8图 1号墳平面图·断面图



第10図 1号墳墳丘～周墓断面図(2)

第3章 調査の成果

C-C' セクション図 (前ページ) 注記

- 1 近年の盛土
- 2 表土
- 3 旧表土 砂質土
- 4 にぶい暗灰褐色土 ローム殻、わずかな白色軽石殻を含む
しまりやや弱い
- 5 灰黄褐色土 やや砂質 しまり弱い
- 6 灰褐色砂質土 軽石 (As-A) を含む
- 7 黄褐色砂質土 しまりよい
- 8 にぶい暗褐色土 白色軽石殻わずかに含む
- 9 黒褐色土 ローム殻含む しまりやや弱い
- 10 黒色砂質土 軽石 (As-B) を含む しまりややよい
- 11 黒褐色砂質土 軽石 (As-B) を含む しまりややよい
- 12 黒色砂質土 黒褐色土を含む 軽石はやや少ない
しまりややよい
- 13 黒褐色土 よくしまっている
- 14 暗褐色土 ローム殻含む しまりややよい
- 15 にぶい暗灰褐色土 ローム殻含む しまりややよい
- 16 明褐色土とハードロームの混土 しまりややよい
- 17 黒褐色土と灰黄褐色土の混土 しまりやや弱い
- 18 黄褐色ローム土 漸移層の土を含む しまりややよい

調査した部分のさらに西側の雑木林の中には、墳丘状の高まりが続いているのが見られる。これも1号墳の墳丘部の続きである可能性があるが、これについては次節で述べる。

2 墳丘と周堀

(1) 墳丘 (第8～10図)

調査した範囲内では、周堀内径で測って21～22mの円墳と思われる。しかし、西側1/3が調査区範囲外となり、この部分にも地表面の高まりが見られるため、前述のようにこちらの方にまで墳丘がのびている可能性がある。それが正しければ、この古墳は前方後円墳か帆立貝形の古墳になると思われる。この古墳は今回調査したものの中では、5号墳と共に最大級であり、また、周囲には墳長40～70メートルクラスの帆立貝形古墳が7基見られるので、この古墳が円墳ではないことは十分考えられることである。ただし先述したように、1号墳北半分を削平した際に、土を南側に押し出しているらしいので、西側部分の土も北半分から寄せられたものかもしれない。現時点ではどちらとも決められないので、円墳であると思われるものの、その他の墳形である可能性も残しておくのが適当であろう。

中央部から北部にかけて墳丘部分は大きく削平さ

- 19 ハードロームブロック よくしまり強い
- 20 暗灰褐色土 黒色土、ロームを含む ハードロームの大きなブロックを含む
- 21 にぶい黄褐色土と黒色土の混土
- 22 黒色土とロームの混土
- 23 ソフトローム主体 ハードロームブロックを含む
- 24 暗灰褐色土 大きなブロック状をなす ハードロームブロックを含む しまりよい やや粘性あり
- 25 暗灰褐色土 粘質土のブロックを含む しまりよい
- 26 黒色土 (ソフトローム殻含む) のブロック
- 27 暗灰褐色土 ローム殻含む しまりやや弱い
- 28 灰褐色土のブロック しまりよい
- 29 暗灰褐色土 部分的に黒色土のブロックを含む
- 30 黒褐色土とソフトロームの混土 しまりややよい
- 31 暗灰褐色土とソフトロームの混土 しまりややよい
- 32 暗灰褐色土と黒色土、ソフトロームの混土
- 33 黒褐色土 やや均質 ハードロームブロックを含む
- 34 黒色土とロームとの混土 均質に混じっている
- 35 黒褐色土 ソフトロームブロックを含む しまりよい
- 36 黒褐色土 ローム殻含む しまりややよい

れ、盛土などは全く把握できなかったが、南では比較的残りが良かった。南東部では、周堀内側に幅約1.2mの平坦面がテラス状に巡り、その内側に盛土がある。これが全周しているとすれば、盛土直径は19～20メートル程度となる。テラスの外周部には円筒埴輪列が巡らされていた。

中央部分は削平され、さらに巨大なゴミ穴が掘られて完全に破壊されていた。このため、主体部は全く発見できなかった。

盛土は最も厚いところで1.2m残っていた(第10図)。黒色土、暗灰褐色土、ロームなど、地山の土と思われるものからなり、周堀の掘削土を盛り上げたものと思われる。

なお、葺き石は全く認められず、周堀埋土中にも石はほとんど見られなかった。

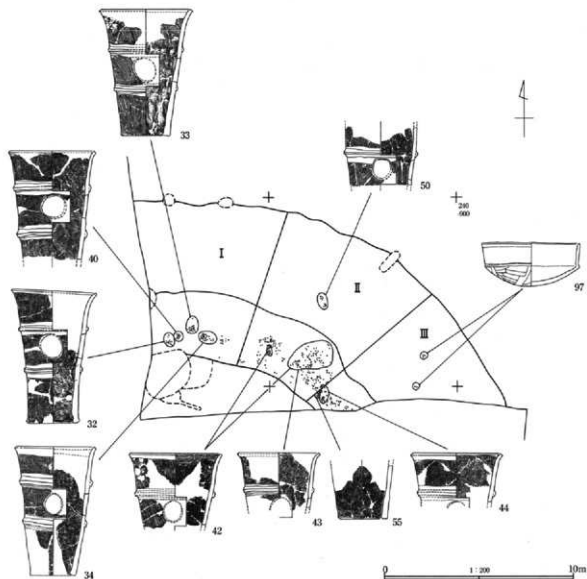
(2) 周堀 (第8～10図)

調査範囲内では全周する。断面形状は逆台形であり、上面幅は北半部で7.0～8.0m、南半部で4.5～5.5m、下面幅は2.6～4.3mである。上面幅が南北で異なるのは、周堀の墳丘側の傾斜が、北半部では緩く、南半部ではきつくなっているためであるが、これは後世の削平によるものであり、本来の形状ではないと思われる。深さは周堀外側から測って0.7～1.0mで、底面はほぼ平坦である。

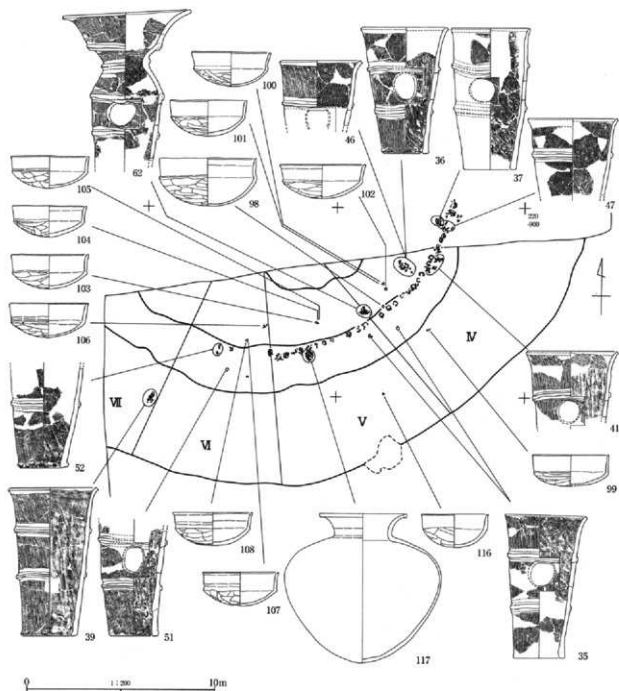
この周堀外径から測った古墳直径は、34.5～35mである。

埋土には底面から10～20cm付近にF Aがブロック状に堆積しているが、周堀全体にあるわけではなく、見られない場所も多い。さらに40cm付近には浅間B軽石が堆積している。このB軽石の上下には黒色土が堆積しており（層厚は厚いところでは約40cm。その中程にB軽石が堆積している。）、多くの埴輪片はこの層、あるいはそれよりも上位の層から出土し、よ

り下層からの出土は非常に少なくなる。このような出土傾向は、今回調査したほとんどの古墳に共通する特徴である。この黒色土は、削平によってなくなってしまっている場合も多いが、その場合は、遺物の出土が極端に少なくなる。遺物の出土の多寡は、この層がどれほど良好に残っているかどうかにかかっているとと言っても過言ではない。



第11図 1号墳北半部出土遺物分布図



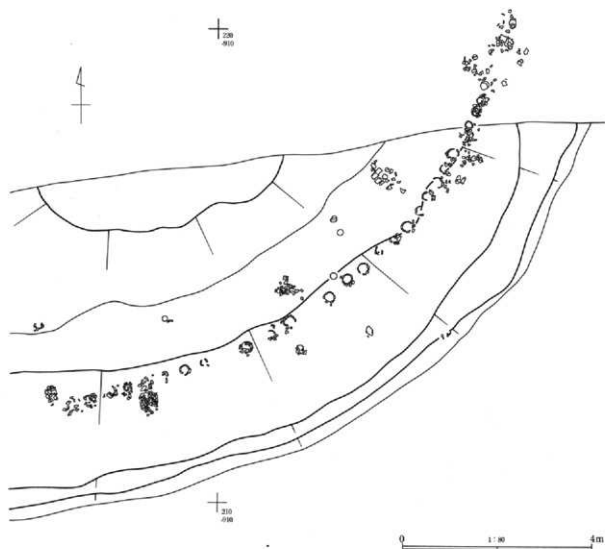
第12図 1号墳南半部出土遺物分布図(円筒埴輪除く)

(3) 遺物出土状況(第11・12図)

北半部は遺構の残存状況が悪いため、埴輪は小片になっており、埴輪斜面に散らばる形で出土した(第11図)。周堀内部からの出土は小破片を中心としており、報告する個体は少ないが、97の土器は周堀Ⅲ区中央の下層から出土している。

これに対して南半分は残りが良く、円筒埴輪列が

31本分残っていた(後述)ほか、その周辺から多くの埴輪、土器が出土した。特に土器の坏は、円筒埴輪列の内側のテラス上から、完形かそれに近いものが10点出土しており、注目される。それらのうち8点は、それぞれ3点、3点、2点ずつが集まっており、しかもそれぞれの集まりは3~4m離れてテラス上に並んでいる。完形、あるいはそれに近い土

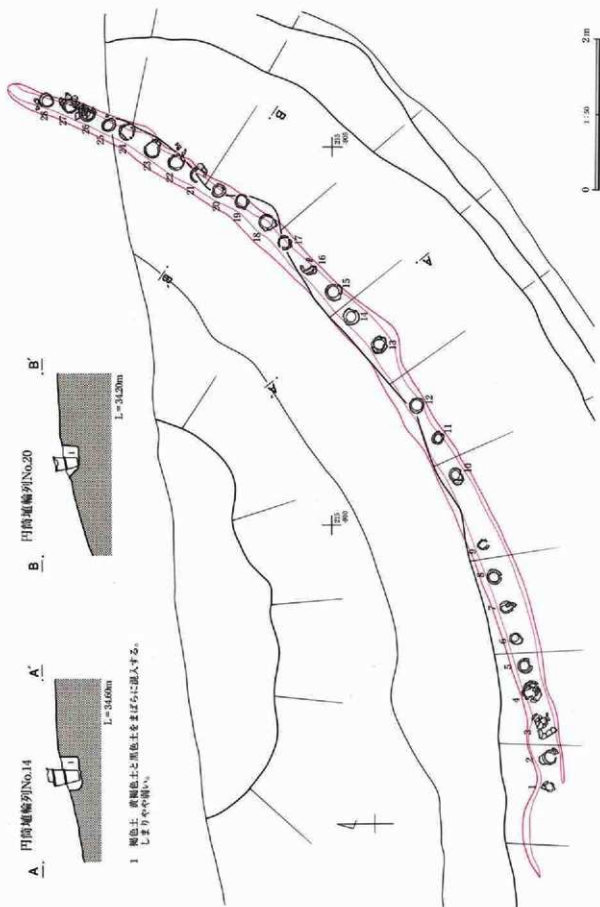


第13図 円筒埴輪列平面図 (上部の遺物取り上げ前)

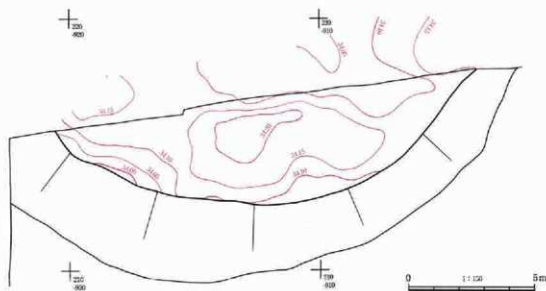
器がどのように何点かずつ、しかもほぼ等間隔で出土していることから見て、これらの出土状態には本来の配置状態が幾分か残されていると考えることができよう。もちろん、最も西側の2点のように、テラスからややはずれているものもあるため、もともとの配置からは若干動いてしまっているようだが、テラス上にはほぼ等間隔に数点ずつの上師器環が並べられていた可能性は高いものと思われ、何らかの祭祀行為に伴うものであると考えられる。環の中には完形のまま上を向いていたものもあるが(98、102、103など)、中には何も残っていなかった。

(4) 円筒埴輪列 (第13・14図)

墳丘南東部には円筒埴輪列が長さ約14m、31本分残っていた。墳丘裾を巡るテラスと周堀との境にあり、本来はこの位置で全周していたものと思われる。埴輪の上部は破壊されていたが、基部はよく残っているものが多い。西から番号を付けて、31番まで付けたが、最後の3本は残りが悪く基部まで破壊されていた。したがって、基部のみを図化した第14図には28番までしか図化されていない。9と10、12と13の間はそれぞれ1本分空いている。本来はここにも円筒埴輪が存在したと思われるが、その部分



第14図 1号埋円筒埋輪列と掘え付け溝



第15図 1号墳旧地表面

精査しても、それが抜き取られたという証拠を得ることはできなかった。元々なかった可能性も否定できない。

埴輪をすべて取り除く前に、その設置方法を知るため周囲の精査を行ったところ、布環状に溝を掘り、その中に埴輪基部を埋め込んで設置していることが判明した。この埴輪設置用の溝は、東西両端とも破壊されてとぎれているため、長さ約13m分しか調査できなかったが、幅40～50cmで深さは20cm近くある。この中に円筒埴輪の第1突帯まで埋め込んで固定していた。第14図上の断面図に見るように、埴輪は多少外側に傾いているが、それが土圧のせいなのか、あるいは本来の傾きなのかは不明である。

なお、この円筒埴輪列のカーブは、古墳周縁のカーブと少し合わないように見える。第13・14図に見るように、円筒埴輪列の東側が墳丘の端に乗っているのに対して、西側に行けば行くほど周縁の斜面に入り込んでいるのはそのためである。設定の際に間違ったのか、あるいは、墳丘裾が崩れて、カーブが異なることになってしまったのかのいずれかであると思われるが、決める根拠には乏しい。

(5) 旧地表面 (第15図)

この古墳には埴丘盛土下にFAを見ることはできなかったが、地山と盛土との境は明瞭であり、盛土を取り除くことで古墳構築前の旧地表面を把握することができた。この旧地表面には、古墳構築前の遺構などは全く見られなかった。標高は34.00～34.20mであり、多少の起伏は認められる。隣接する8号墳でも旧地表の標高は34.10m前後であり、また8号墳と同様に、FAが埴丘盛土下に見られる6号墳、9号墳でも、旧地表面の標高は34.00m前後である。この高さが古墳の作られる前のこの地の標高であると考えられ、その当時の地表面が平坦であったことが分かる。しかし、1号墳から50m北、1区北部の4号墳付近では遺構確認面が34.80mくらいであり、さらに北側の2区5号墳付近では同じく遺構確認面が35.60mとなる。1区北部や2区は後述のようにかなり削平されており、遺構確認面はロームを削り込んでしまった高さになる。とすれば、この付近の旧地表の標高はさらに高かったものと思われる。これらのことから考えれば、古墳構築前の旧地形は、1号墳から6号墳にかけての地域ではほぼ同じ高さ

であるが、それから北は、北に向かってゆるやかに高まっていく地形であったと思われる。おそらくその傾斜は2区北端付近でピークを迎え、それより北では今度は逆に北に向かって低くなる傾斜となり、低地へと続いていったものと思われる。低地の水田まではがんセンターの北端から約50mほどである。

3 出土遺物

出土遺物は今回調査した古墳の中で最も多い。これは、南半部の残りがよく、特に円筒埴輪列が残っていたことが大きな要因である。

多数の円筒埴輪の他、朝顔形埴輪と少量の形象埴輪の破片、土師器杯、須恵器壺などが出土している。

円筒埴輪は数が多く、特に円筒埴輪列のものは残存度が良好なものが多い。これによってこの古墳の円筒埴輪の特徴を大体把握することができる。1号墳以外の古墳の埴輪出土数は多くないので、このように埴輪の特徴を把握することはほとんどできない。そのため、ここでは1号墳出土の埴輪についてやや詳しく述べることにし、その他の古墳ではそれと異なる点を中心として述べることにしたい。

円筒埴輪

円筒埴輪は少なくとも60本以上確認した。

規格 すべて2条3段構成である。

法量 器高は、高さの分かる個体は29本しかないが、32.3cm～39.5cmの範囲にある。36cm代とその前後(35.8cmや37cm)が一番多い。その他、33cm代と38cm代にもピークがある。

口径は19.5cm～25.7cmに収まり、22cm前後が多く、24、25cm代のもはまれである。

底径は11.0cm～14.6cmの範囲にあり、12.5cmから14.5cmまでにほとんどが収まる。

今回調査した古墳の中では、比較的大型の埴輪が多いといえる。

基部の長さを見ると、10、12、21、23のようにやや長いものが存在する。いわゆる「基部の伸長化」

の現れであると思われる。これらの4本のうち、10、21、23は外面の3段目に「＝」の線刻がある。12は線刻部分が欠損している。線刻は後述のように工人を表すと思われるが、12も埴輪の特徴がほぼ一致するので、線刻があるとすれば「＝」である可能性が高い。とすれば、この古墳の埴輪で「基部の伸長化」の傾向が特に目立つのは、一人の工人の製品であることになる。ただし、同じ線刻のもので、18のように伸長化の傾向が強いものもあるし、13のように違う線刻で多少伸長化が認められるものもある。まだこの傾向は固定化していないといえよう。

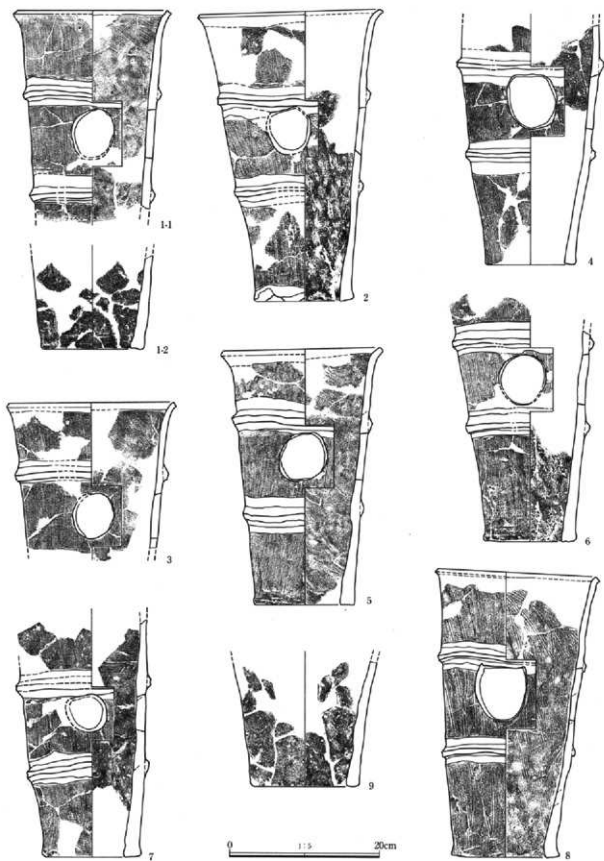
技法の特徴 外面調整は全面をタテハケし、その後口縁部にヨコナデを施しているものがほぼ全てを占める。底部近くをもろくヨコナデする個体のごく少数ある。

内部調整は全面タテナデしたのち、上半あるいは口縁付近のみタテナデあるいはナメのハケを施し、さらに口縁をヨコナデするものが多いが、ほぼ全面にハケを施すものや、それによって最初のナデの痕跡が消えてしまっているものもある。いずれにしろ、調整の種類は少なく、技法差があまり無いのが特徴である。

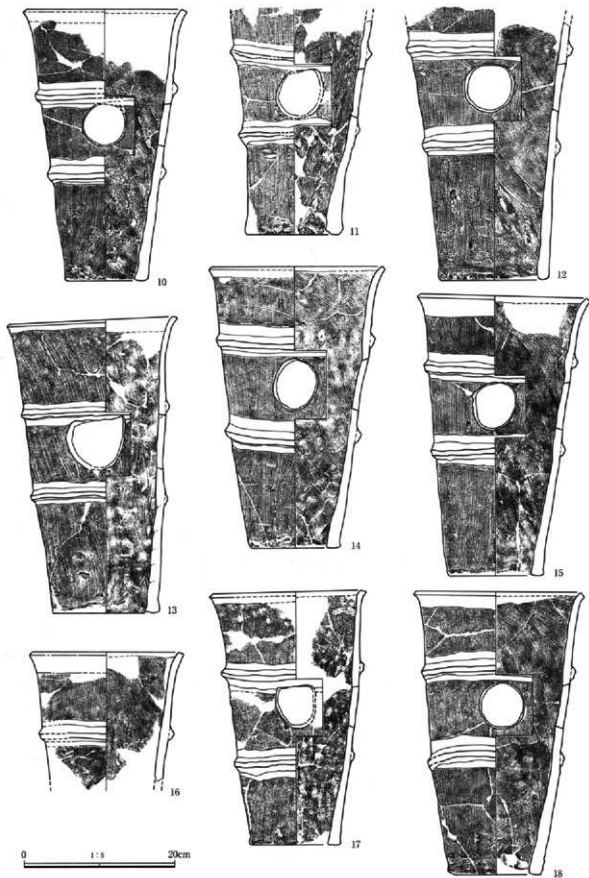
突帯 断面台形のもの(A)と、仕上げナデによって台形の下側の稜が低くなってしまったもの(B)とが多く、三角形のもの(C)は少ない。Cと分類したもので、同じ個体でBになっている部分があるので、基本的にはC以外の2種類でほとんどを占めていると言えよう。突帯の上下に仕上げナデを施すが、下側のナデは一部雑になって粘土の接合線が見える個体が多い。

透孔 正円形、半円形、不整円形と、一定しない。後述するように、この古墳の埴輪は線刻によっていくつかに分けることが可能であるが、その際にこの透孔の形が一つのメルクマルとなる。

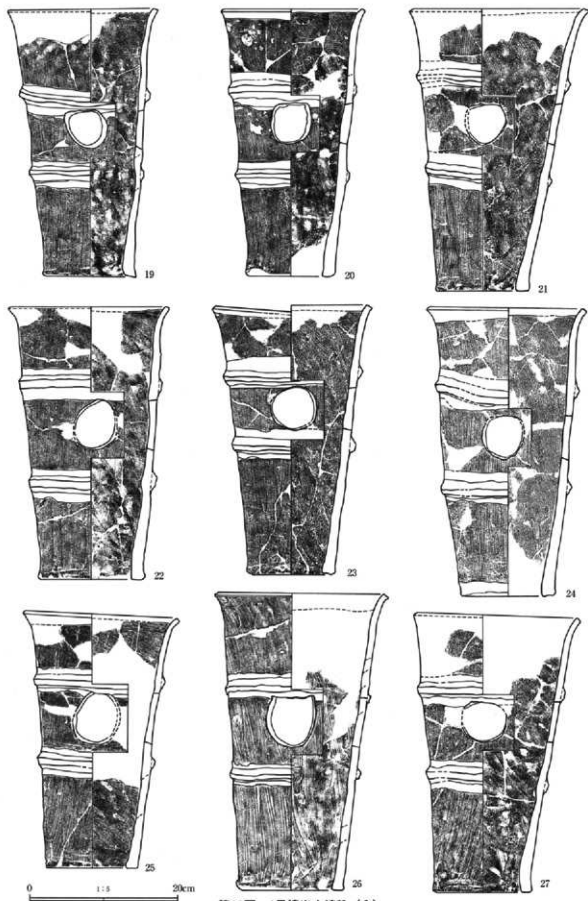
線刻 欠損のため確認できないものも多いが、かなりの数の個体に線刻が見られる。「－」「＝」「U」が多いが、その他「III」や「\」や「w」などが見られる。これらの線刻の種類ごとに埴輪を集めると、



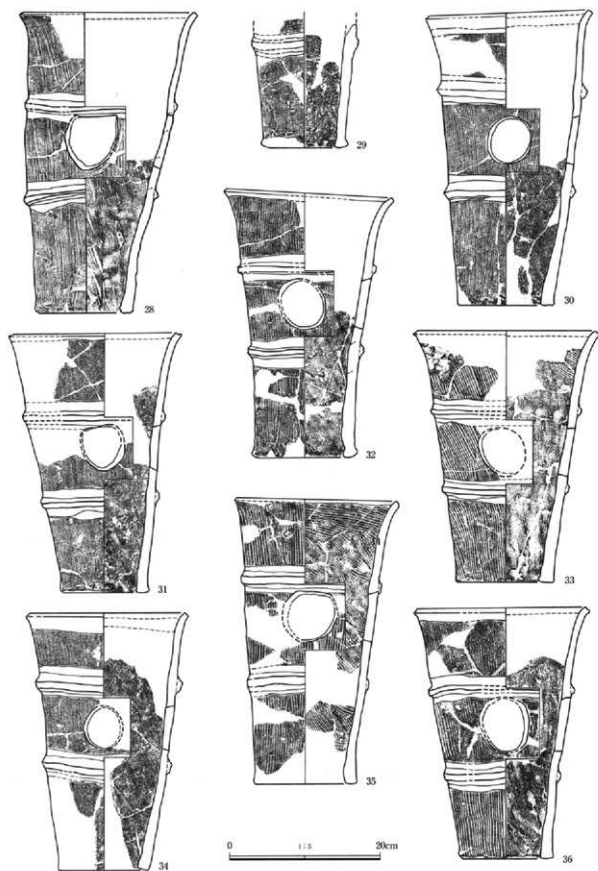
第16圖 1号墳出土埴輪(1)



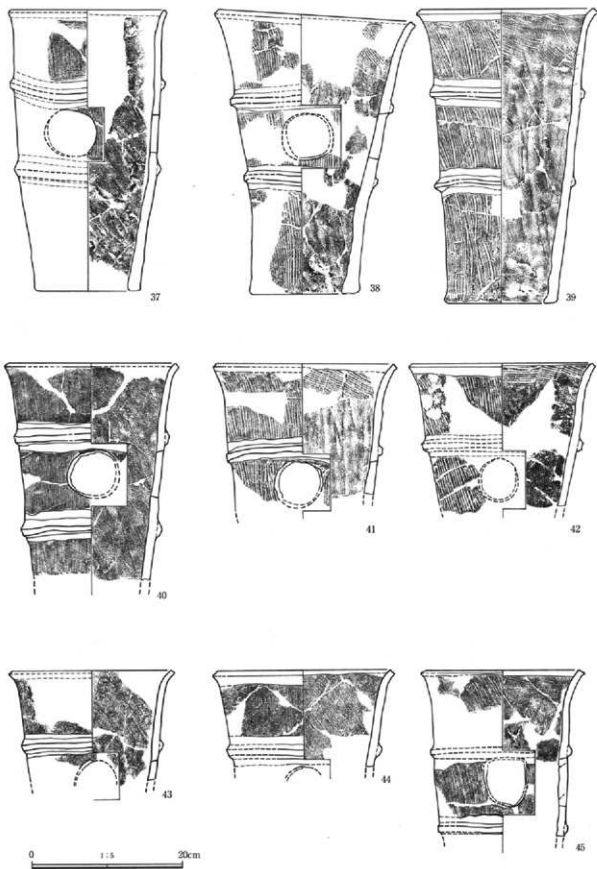
第17図 1号墳出土埴輪(2)



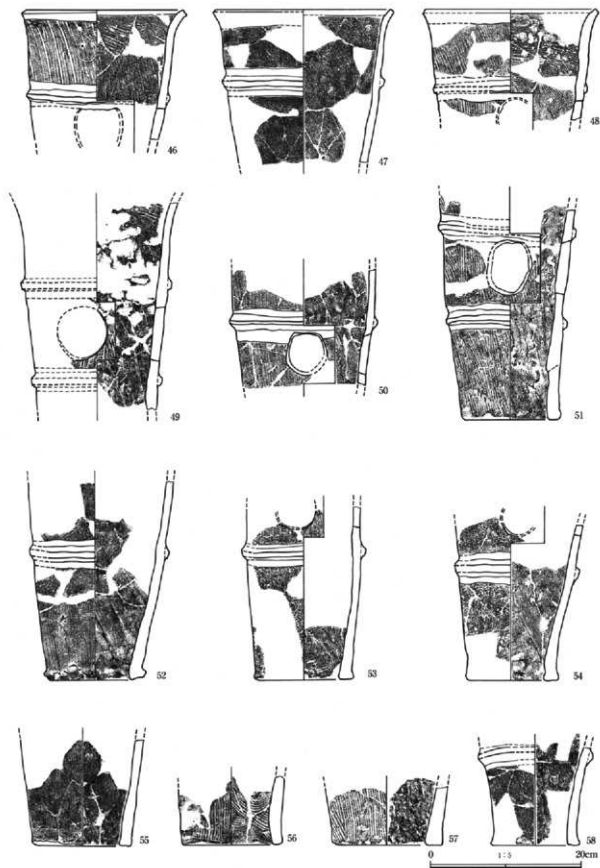
第18図 1号墳出土埴輪(3)



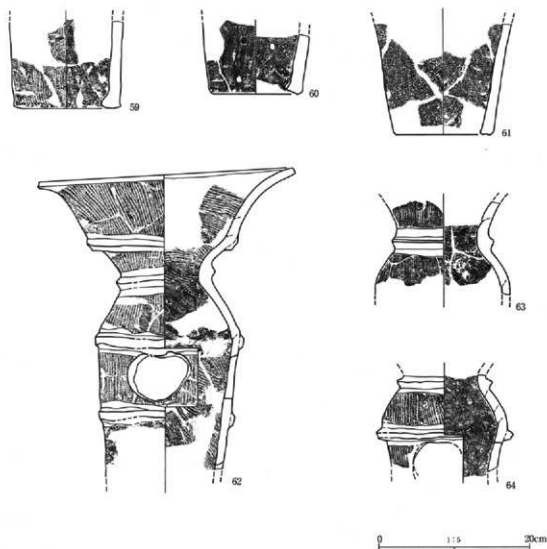
第19図 1号墳出土埴輪(4)



第20図 1号墳出土埴輪(5)



第21図 1号墳出土埴輪(8)



第22図 1号墳出土埴輪(7)

各部の細かい特徴、たとえば透孔や突帯の断面形、ハケメの密度や器形の特徴などが線刻ごとに共通することに気がつく。これはつまり、線刻と埴輪制作のクセが一致するということである。すなわちこの事実、線刻の別は製作者の別であることを示すものと思われ、それが正しければ、線刻は製作者を示す「記号」であると考えて大過ないものと思われる。

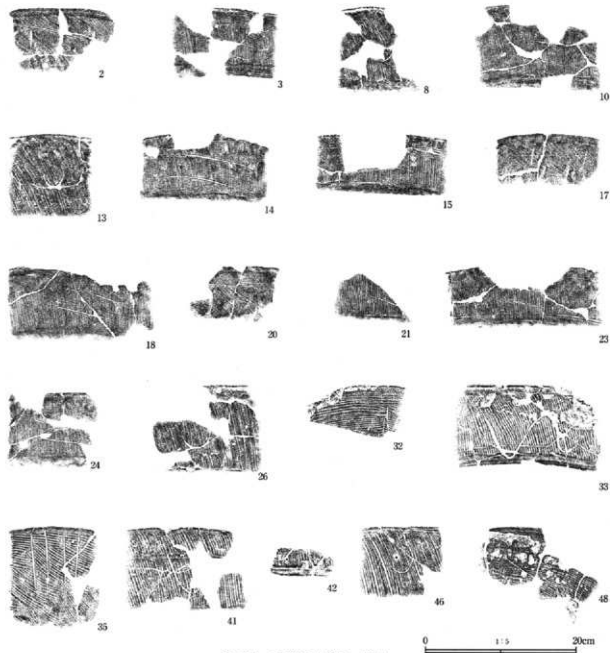
底部調整 全く認められない。先述したように、ごく稀に外面の底部近くを粗くヨコナデするものがある程度である。

色調 橙色系で、赤みが強いものがほとんどである。この色調は1号墳の埴輪に特徴的で、今回調査

した他の古墳の埴輪と比べた時に、最もはじめに目に付く違いである。他の古墳の埴輪は赤みが弱く、同じ橙に分類される色調でも、比べるとかなり白っぽく感じる。同様な赤みが強い色調は、形象埴輪に多く見ることが出来る。

焼成 硬質に焼かれているものがほとんどであるが、次項の胎土にあるように、砂を多く含むものはやや軟質に感じられる。

胎土 含まれる砂粒の多寡によって二種に分けられるが、いうまでもなく、中間のものも多く存在する。砂粒が多いものは表面がかなりざらつき、接合作業が困難になるほどである。



第23図 1号墳出土土輪・線刻

朝顔形埴輪

朝顔形埴輪は3本以上を確認している。

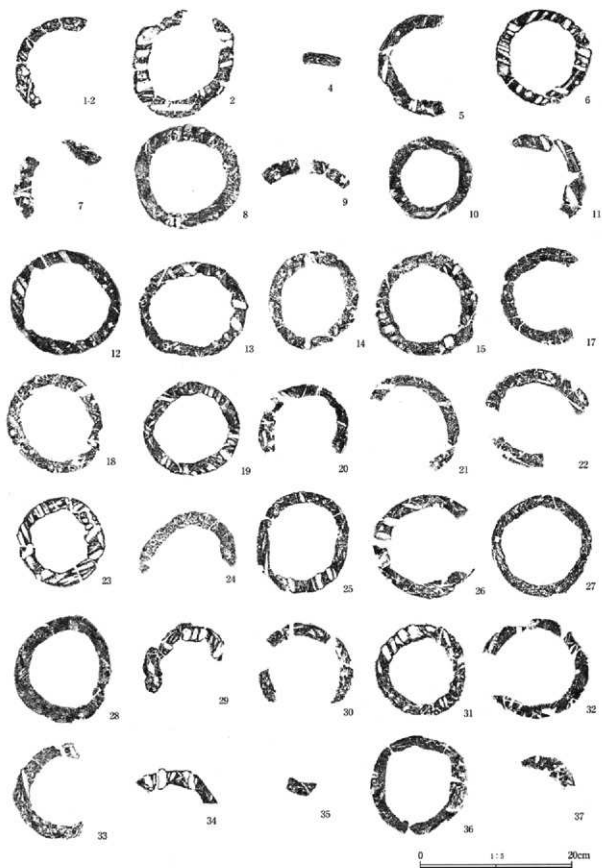
規格 残念ながら全形が分かるほどに復元できるものがなく、全体規格が分かるものはないが、62の個体から見れば、円筒部は2条3段構成、朝顔部は1条の突帯を巡らすものであると思われる。

分量 器高、底径が分かるものはないが、62の個体は口径33.5cmに復元できる。比較的厚手の作りで、口が大きく開くのが特徴である。

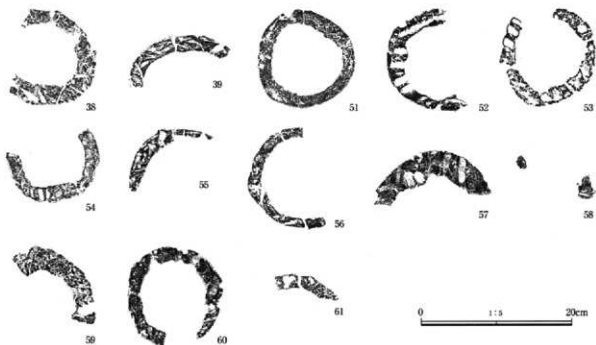
技法の特徴 外面はタテハケを施し、口縁部をヨコナデしている。内面はほぼ全面ナデしていると推定されるものと、頸部などの一部を除いてハケを施すものに分かれる。62と64の二つの個体は、共にきわめて粗いハケメをもつことで共通しており、特徴的である。

突帯 比較的高く、断面ははっきりした台形である。上下に仕上げナデを施す。

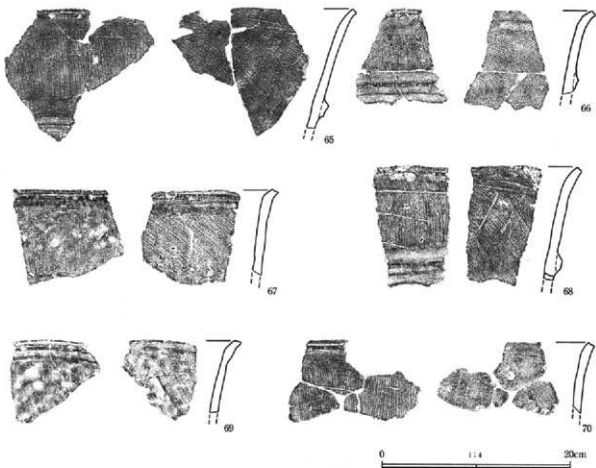
透孔 62、64ともに不整形円形と呼ぶような形で、



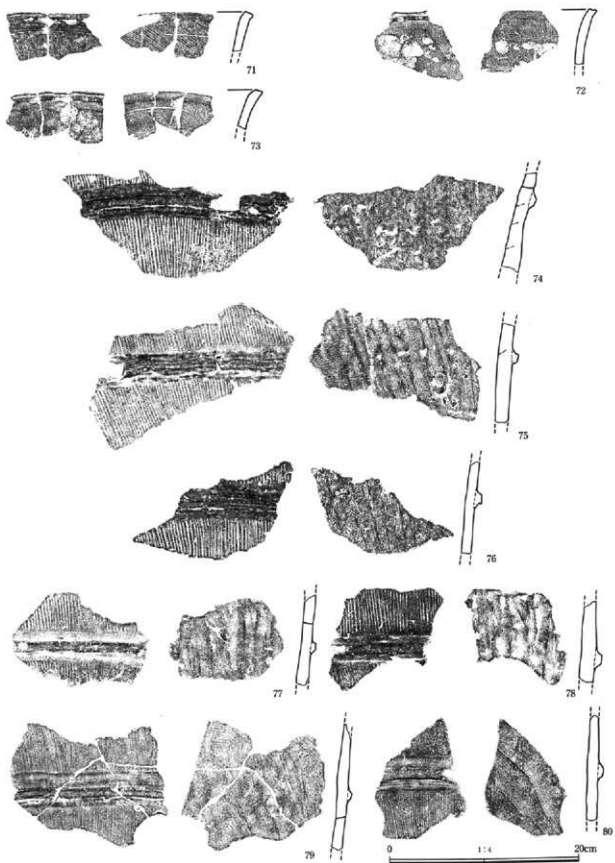
第24圖 1号墳出土土輪軸・底面(1)



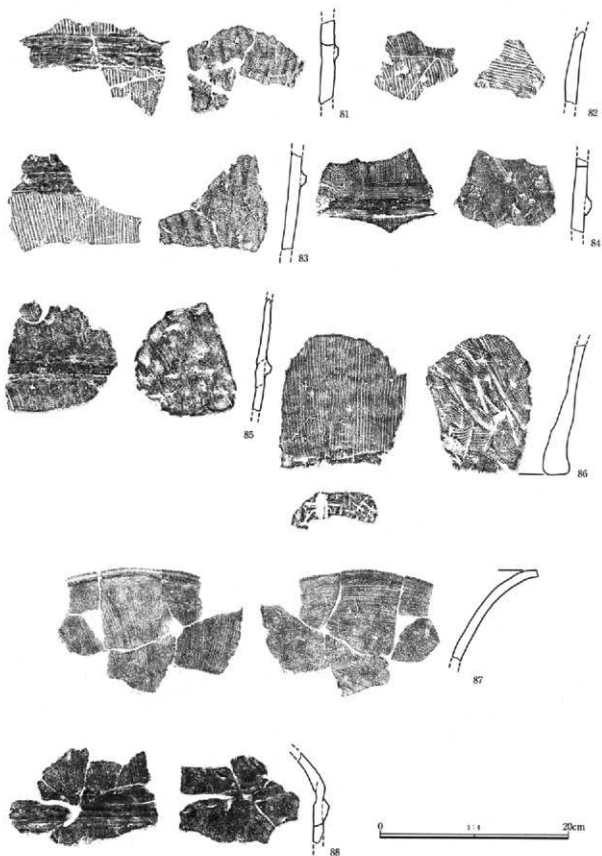
第25図 1号墳出土埴輪・底面(2)



第26図 1号墳出土埴輪(8)



第27図 1号墳出土埴輪(8)



第28図 1号墳出土埴輪 (10)

1号墳出土埴輪観察表 (凡例は巻頭「凡例」参照)

No.	器種	計測値	調整		刷毛	突帯	透孔	縁刺	色調	出土位置	備考	
			外面	内面								
1-1	円筒	①— ②(19.8) ③—	押付 →口縁凹凸	押付 →上半付凹凸 →口縁凹凸	8~9	B	円形 上下にやや 長い	?	明赤陶 5YR5/6	円筒埴輪列1 V区墳丘	1-2と同一 個体か	
1-2	円筒	①— ②— ③(14.0)	押付 上部不明	押付 上部不明	8	?	?	?	明赤陶 5YR5/6	円筒埴輪列1	1-1と同一 個体か	
2	円筒	①37.0 ②(22.5) ③14.5	押付 →口縁凹凸	下半押付 上半凹凸 →口縁付近付凹凸 →口縁凹凸	6~7	A	不整形円形	内3— 1—	7.5YR7 /6	円筒埴輪列2 V区墳丘・周壕		
3	円筒	①— ②(22.0) ③—	押付 →口縁凹凸	押付凹凸(下部欠) →口縁凹凸	7~8	A	円形	外3— 1—	5YR6/6	円筒埴輪列3		
4	円筒	①— ②— ③—	押付 口縁欠	押付 口縁欠	6~7	A	半円形	?	にぶい 橙 5YR6/4	円筒埴輪列4	縦外内3— か	
5	円筒	①33.2 ②21.3 ③12.5	押付 →口縁凹凸	粗い押付 →口縁凹凸	7~8	B	やや半円	なし	橙 5YR6/6	円筒埴輪列5 V区墳丘・周壕		
6	円筒	①— ②— ③12.4	押付 口縁欠	押付 →上半付凹凸 口縁欠	7~8	B	円形	上下にやや 長い	?	橙 5YR6/6	円筒埴輪列6 V区墳丘・周壕	
7	円筒	①— ②— ③(13.0)	押付 口縁欠	上半付凹凸下部押付 →凹凸 →凹凸 →一部押付	6~7	A	円形 やや小さい	?	赤褐色 5YR4/6	円筒埴輪列7 V区墳丘・周壕	粗砂粒多い	
8	円筒	①36.4 ②23.0 ③14.0	押付 →口縁凹凸	押付 →押付凹凸 →口縁凹凸	4	A	半円形	外3 U 1—	橙 2.5YR6 /6	円筒埴輪列8 V区墳丘・周壕		
9	円筒	①— ②— ③(14.4)	摩滅	摩滅	?	?	?	?	にぶい 赤褐 5YR5/4	円筒埴輪列9	全体に摩滅	
10	円筒	①35.5 ②(20.5) ③11.0	押付 →口縁凹凸	押付 →口縁付近付凹凸 →口縁凹凸	7~8	B	円形	外3— 1—	橙 5YR6/6	円筒埴輪列10 V区墳丘・周壕		
11	円筒	①— ②— ③(12.1)	押付 口縁欠	押付 →口縁付近付凹凸 口縁欠	7~8	C 一部 B	不整形円形	?	橙 5YR6/6	円筒埴輪列11	表面の仕上げが粗	
12	円筒	①— ②— ③14.6	押付 口縁欠	押付凹凸 →押付凹凸 口縁欠	7~8	A	円形	?	橙 7.5YR6 /6	円筒埴輪列12	縦外3— =か	
13	円筒	①38.2 ②22.8 ③14.2	押付 →口縁凹凸	押付 →粗い押付凹凸 →口縁凹凸	4	A	半円形	外3 U 1—	橙 2.5YR6 /6	円筒埴輪列13 IV区墳丘		
14	円筒	①36.8 ②23.2 ③13.3	押付 →口縁凹凸	押付 →口縁凹凸	7~8	B	円形	外3— 1—	にぶい 橙 7.5Y R7/4	円筒埴輪列14		
15	円筒	①36.5 ②22.7 ③13.4	押付 →口縁凹凸	押付凹凸 →上半付凹凸 →口縁凹凸	7~8	A	円形	外3— 1—	橙 5YR5/6	円筒埴輪列15		
16	円筒	①— ②(19.4) ③—	押付 →口縁凹凸	下半押付 上半付凹凸 →口縁凹凸	8~9	B	?	?	にぶい 赤陶 5YR5/4	円筒埴輪列16		
17	円筒	①32.3 ②(19.7) ③12.3	押付 →口縁凹凸	押付凹凸 →口縁付近付凹凸 →口縁凹凸	6~7	A	半円形	内3— 1—	7.5YR6 /6	円筒埴輪列17 IV区墳丘		
18	円筒	①36.4 ②22.2 ③13.3	押付 →口縁凹凸	押付 →押付凹凸 →口縁凹凸	8~9	B	円形	外3— 1—	橙 5YR6/6	円筒埴輪列18 IV区墳丘		

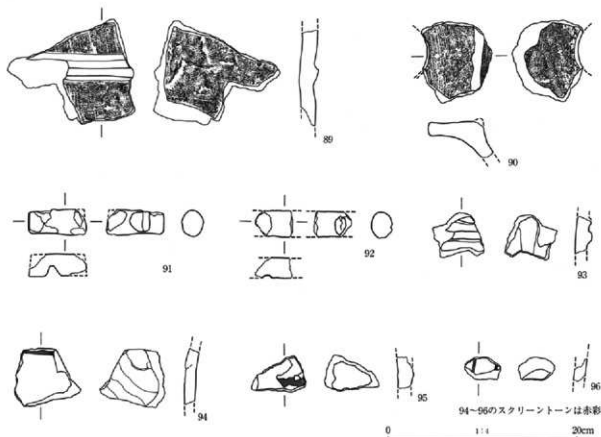
第3章 調査の結果

19	円筒	①35.6 ②(19.6) ③12.6	円筒 →口縁コナテ	円筒 →上部円コナテ →口縁コナテ	6~7	A	平行形	?	明赤焼 2.5YR5/6	円筒埴輪19	縁刻内3- か
20	円筒	①35.8 ②19.5 ③12.0	円筒 →口縁コナテ	下平円コナテ 上平コナテ →口縁付近円コナテ →口縁コナテ	7~8	A	平行形	内3-	明赤焼 2.5YR5/6	円筒埴輪20 IV区墳丘	胎土に小磯 含む
21	円筒	①37.6 ②(22.6) ③13.4	円筒 →口縁コナテ	円筒円コナテ →口縁コナテ	7~8	B	不整円形 やや小さい	外3=	橙 5YR6/6	円筒埴輪21	
22	円筒	①36.1 ②21.6 ③(14.0)	円筒 →口縁コナテ	円筒円コナテ →円コナテ →口縁コナテ	6~7	A	円形 卵形に近い	なし	橙 5YR6/6	円筒埴輪22	
23	円筒	①35.0 ②21.2 ③11.8	円筒 →口縁コナテ	円筒 →上部円コナテ →口縁コナテ	7~8	A	円形	外3=	橙 5YR6/6	円筒埴輪23	
24	円筒	①38.2 ②22.5 ③12.4	円筒 →口縁コナテ	円筒円コナテ →上部円コナテ →口縁コナテ	7~8	B	円形	外3=	橙 5YR6/6	円筒埴輪24	
25	円筒	①33.3 ②20.6 ③13.4	円筒 →口縁コナテ	粗い円コナテ	6~7	B	円形 やや上下に 長い	なし	橙 5YR6/6	円筒埴輪25	
26	円筒	①39.5 ②(22.3) ③(14.1)	円筒 →口縁コナテ	円筒 →粗い円コナテ →口縁コナテ	3~4	A	平行形	外3 U	橙 2.5YR6/6	円筒埴輪26	粘土粒粗上 肌明瞭
27	円筒	①36.8 ②(21.4) ③13.3	円筒 →口縁コナテ	円筒円コナテ(一部円コナテ) →口縁コナテ	6~7	B	円形	?	橙 7.5YR7/6	円筒埴輪27 IV区墳丘・周堀	
28	円筒	①39.0 ②(22.3) ③13.8	円筒 →口縁コナテ	粗い円コナテ →一部粗い円コナテ →口縁コナテ	3~4	B	平行形	?	橙 5YR6/6	円筒埴輪28 IV区墳丘	
29	円筒	①- ②- ③(11.5)	円筒 口縁欠	円筒 口縁欠	7~8	A	?	?	橙 5YR6/6	円筒埴輪29 IV区墳丘	
30	円筒	①38.6 ②(21.0) ③12.3	円筒 →口縁コナテ	円筒円コナテ →口縁コナテ	7~8	C	円形 上下にやや 長い	?	橙 5YR6/6	円筒埴輪30 IV区墳丘・周堀	
31	円筒	①33.6 ②(21.5) ③12.1	円筒 →口縁コナテ	下部円上部コナテ →口縁付近円コナテ →口縁コナテ	6~7	A	平行形	?	橙 5YR6/6	円筒埴輪31 IV区墳丘・周堀	縁刻内3- か
32	円筒	①33.8 ②23.3 ③14.0	円筒 →口縁コナテ	円筒 →口縁付近コナテ →口縁コナテ	3	A	円形	内3 \	橙 5YR6/6	I区	
33	円筒	①33.0 ②(23.5) ③(12.5)	円筒 →口縁コナテ	円筒 →口縁付近円コナテ →口縁コナテ	3~4	A	円形	外3 V	橙 5YR6/6	I区	粗砂粒の多 い胎土
34	円筒	①33.3 ②(20.6) ③(11.8)	円筒 →口縁コナテ	円筒 →上部円コナテ →口縁コナテ	6~7	B	円形	?	橙 5YR6/6	I区	
35	円筒	①36.3 ②(22.2) ③(13.3)	円筒 →口縁コナテ	円筒円コナテ →口縁コナテ	3~4	A	円形	内3 III	にぶい 赤焼 5YR5/4	IV・V区墳丘・ 周堀	
36	円筒	①32.5 ②(22.2) ③13.0	円筒 →口縁コナテ	円筒 →口縁付近円コナテ →口縁コナテ	3~4	A	円形 上下に長い	?	明赤焼 2.5YR5/8	IV区墳丘	砂粒多い
37	円筒	①36.4 ②(20.3) ③(13.8)	円筒 →口縁コナテ	円筒円コナテ →上部円コナテ →口縁コナテ	7~8	B	円形	?	橙 5YR6/6	IV区墳丘	
38	円筒	①35.8 ②25.7 ③(14.5)	円筒 →口縁コナテ	円筒 →口縁付近円コナテ →口縁コナテ	3~4	A	円形か	?	明赤焼 5YR5/6	III区周堀	砂粒多い 縁刻外3 か

39	円筒 ①38.7 ②(22.7) ③(14.5)	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁付近ナマリ' →口縁コナリ'	4~5	A	?	?	明赤地 SYR6/6	V区	
40	円筒 ①— ②(22.1) ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁付近ナマリ'	7~8	B	円形	?	地 SYR6/6	I区	線外3=か
41	円筒 ①— ②24.3 ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' 口縁のみナマリ'	3~4	A	円形	外3V	地 SYR6/6	IV区墳丘・周堀	
42	円筒 ①— ②(23.7) ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁付近コナマリ' →口縁コナリ'	3~4	A	?	?	地 SYR6/6	II区	
43	円筒 ①— ②(21.0) ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁コナリ'	7~8	B	円形か	?	地 7.5YR7/6	II区	
44	円筒 ①— ②(22.9) ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁コナリ'	7~8	B	円形か	?	地 7.5YR7/6	II・III区	
45	円筒 ①— ②21.0 ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁付近ナマリ' →口縁コナリ'	4~5	A	半円形	?	にぶい 黄地 10YR7/4	VII区墳丘・周堀	線外3Uか
46	円筒 ①— ②20.8 ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁付近ナマリ' →口縁コナリ'	4~5	A	半円形か 厚地で C	外3U	地 SYR6/6	IV区墳丘	
47	円筒 ①— ②(23.1) ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁コナリ'	7~8	A	?	?	地 SYR6/6	IV区墳丘	
48	円筒 ①— ②(22.3) ③—	円筒 →口縁コナリ'	円筒' →口縁付近コナマリ' →口縁コナリ'	3~4	A	?	内3一	地 SYR6/6	VII区墳丘・周堀	
49	円筒 ①— ②— ③—	円筒 口縁欠	円筒' →口縁付近ナマリ' 口縁欠	3~4	A	?	?	地 2.5YR6/8	IV・V区	
50	円筒 ①— ②— ③—	円筒 口縁欠	円筒' 口縁欠	7~8	C	半円に近い 円形	?	地 SYR6/6	II区周堀	
51	円筒 ①— ②— ③13.0	円筒 口縁欠	粗いナマリ' →口縁付近ナマリ' 口縁欠	4	A	円形 上下に長い	?	明赤地 2.5YR5/8	VI区墳丘・周堀	胎土に砂粒 多い
52	円筒 ①— ②— ③13.0	円筒 口縁欠	円筒' 上部欠	6~7	A	?	?	にぶい 黄地 10YR7/4	V区墳丘	
53	円筒 ①— ②— ③13.2	円筒 口縁欠	円筒' 上部欠	8~9	A	?	?	にぶい 地 5YR8/4	IV・V区墳丘	
54	円筒 ①— ②— ③12.0	円筒 口縁欠	円筒' 上部欠	7~8	A・B	?	?	地 SYR6/6	IV・V区墳丘	
55	円筒 ①— ②— ③(12.6)	円筒 口縁欠 底部粗いコナリ'	円筒' 上部欠	6~7	?	?	?	地 SYR6/6	III区	
56	円筒 ①— ②— ③13.2	円筒 口縁欠	コナマリ' 上部欠	3	?	?	?	地 7.5YR7/6	VII区墳丘・周堀	
57	円筒 ①— ②— ③(14.3)	円筒 口縁欠	円筒' 上部欠	3~4	?	?	?	地 SYR6/6	VI区周堀・VII区 墳丘	
58	円筒 ①— ②— ③(11.8)	円筒 口縁欠	円筒' 上部欠		A	厚地	?	地 SYR6/6	VI区周堀	

第3章 調査の結果

59		①— ②— ③(14.0)	折→ 口縁欠	折→ 上部欠	3~4	?	?	?	楕 SYR6/6	Ⅵ区周縁	
60		①— ②— ③12.8	折→ 口縁欠	折→ 上部欠	6~7	?	?	?	楕 7.5YR7/ 6	Ⅳ区墳丘	
61		①— ②— ③(12.8)	折→ 口縁欠	粗い折→、折→ 上部欠	8~9	?	?	?	楕 7.5YR7/ 5	Ⅳ区墳丘	
62	朝顔	①— ②(33.5) ③—	折→	内側部折→ 朝顔部折→、折→ 縁ぎ目折→	2~3	A	不整形	?	楕 SYR6/6	Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区墳 丘・周縁	
63	朝顔	①— ②— ③—	折→ 上・下部欠	内側部折→ 朝顔部折→ 上・下部欠	6~7	?	?	?	にぶい 黄褐 1 OYR6/4	Ⅳ区墳丘	
64	朝顔	①— ②— ③—	折→ 上・下部欠	折→折→ 上・下部欠	3	A	円形か	?	楕 2.5YR6/ 8	Ⅳ区墳丘・周縁	
65	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→ →口縁折→	7~8	A	?	?	楕 SYR6/6	表土・地区不明	
66	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→、折→ →口縁折→	6~7	B	低い	?	楕 SYR6/6	Ⅰ区周縁	
67	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→ →口縁折→	6~7	?	?	?	内3— 楕 SYR6/6	Ⅳ区周縁	
68	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→ →口縁折→	6~7	A	円形か	?	外3— 楕 SYR6/6	Ⅰ区	
69	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→ →口縁折→	6~7	?	?	?	内3— 楕 SYR6/6	Ⅳ区墳丘	
70	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→、折→ →口縁折→	6~7	?	?	?	外3— 楕 SYR6/6	Ⅴ区墳丘	
71	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→ →口縁折→	7~8	?	?	?	内3— 楕 SYR6/6	Ⅳ区墳丘	
72	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→、折→ →口縁折→	7~8	?	?	?	内3— 楕 SYR6/6	Ⅲ区	
73	円筒	小破片	折→ →口縁折→	折→ →口縁折→	7~8	?	?	?	内3— 明赤褐 5YR5/6	Ⅳ区墳丘。Ⅴ区 墳丘・周縁	
74		小破片	折→	折→	3~4	A	?	?	楕	Ⅵ区	SYR6/6
75		小破片	折→	折→	3~4	A	?	?	楕	Ⅳ区周縁	7.5YR7/6
76		小破片	折→	折→	3~4	A	?	?	楕	Ⅵ区	SYR6/6
77		小破片	折→	折→	3	A	?	?	楕	Ⅳ区	7.5YR6/6
78		小破片	折→	折→	3	A	?	?	楕	Ⅴ区	7.5YR6/6
79	円筒	小破片	折→	折→ 口縁付近折→	8~9	A	円形	?	楕 7. SYR6/6	Ⅳ区墳丘	
80		小破片	折→	折→	7~8	A	円形か	?	楕	墳丘・地区不明	SYR6/8
81		小破片	折→	折→	3~4	A	?	?	楕 SYR6/6 低い	Ⅴ区周縁	
82		小破片	折→ →一部折→	折→	3	?	?	?	外 楕 SYR6/6	Ⅳ区墳丘	
83		小破片	折→	折→	3~4	A	?	?	横面あり SYR5/6	Ⅳ区周縁	
84		小破片	折→	粗い折→	7~8	A	?	?	楕	Ⅳ区墳丘	7.5YR7/6
85		小破片	折→	粗い折→ 摩滅	6~7	A	?	?	外3か 楕 SYR6/8	Ⅳ区墳丘	
86		小破片	折→	粗い折→、折→	3	?	?	?	楕	Ⅴ区墳丘	7.5YR6/6
87	朝顔	小破片	折→ →口縁折→	折→ →口縁折→	6~7	?	?	?	楕	Ⅳ区墳丘	7.5YR6/6
88	朝顔	小破片	折→	粗い折→折→	6~7	A	円形か	?	楕	Ⅱ区	7.5YR6/6



第29図 1号墳出土形象埴輪

大きい。しかし、この両者はハケメが共通し、同一工人の製作品である可能性があり、この特徴を他の朝顔形埴輪に及ぼせるかどうかは不明である。

線刻 認められないが、朝顔部に広く残っている個体がない（62ですら朝顔部の欠損は大きい。）ので、朝顔形埴輪の全てに線刻がないかどうかは断定できない。

底部調整 底部の破片がないので不明であるが、1号墳から出土した底部の破片に調整のあるものは全くないので、朝顔形埴輪についても、底部調整は行われていないものと思われる。

色調 赤みの強い橙色のもの（62・64）と、にぶい黄橙色のもの（63）がある。前者は円筒埴輪に多い色調と近似する。

胎土 砂粒を含む。

形象埴輪

形象埴輪は小破片のみであるが、8点出土している。

89は平らな形状のもので、直線的な突帯が横方向に付いている。家形埴輪の一部である可能性が高い。調整は表面はタテハケを施し、突帯とその上下をヨコナデする。裏面はヨコナデの後、薄く粘土を貼り付けている。V区周堀から出土している。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）であり、他の埴輪に比べて白っぽく目立つ。90は鈍角に曲がる角の部分で、やはり家形埴輪の一部である可能性がある。丸い透孔の一部が残っている。外面はタテハケで、角の部分はタテナデである。内面は全面タテナデである。Ⅲ区周堀から出土している。色調は円筒埴輪と共通し、赤みの強い橙色（5YR6/6）である。91と92は欠損が激しいが、復元するとほぼ同形同大になると思わ

れる。91の個体は、長さ約6cm、幅約2.5cm、厚さ約2cmの断面楕円形の円筒である。片面に三角形の切れ込みがあり、これによって何かにつけられていたと思われる。そのため、家形埴輪の堅魚木であると判断した。いずれも表土からの出土である。93は小破片であり、何を表すのかは不明である。ほぼ平坦な粘土板にはっきりとした突帯が2本近接して横方向につけられている。外面は突帯を含めてヨコナデ、内面は縦方向に指ナデする。94以下の3個体はいずれも小破片であり、何を表すのかは断定できないが、それぞれ赤彩が施されている。94は外面タテハケの後縦横になでてハケメを消している。特に赤彩された部分はヨコナデで表面を整えているようである。赤彩はごくわずかで、何を描いているかは分からない。裏面は指でナメにナデている。95・96はさらに零細な破片で、何の破片であるかは全く不明である。いずれも外面はナデて、その後赤彩を加える。赤彩も何を表すのか不明だが、96では外面に縦の細線を2本入れている。

土器

1号墳からは多くの土器も出土している。これほど多くの土器が出た古墳は今回の調査の中では唯一であるが、これは円筒埴輪列の内側のテラス上から多数出土したために他ならない。土師器は完形かほぼ完形のものを中心として20点、その他、大型の須恵器甕が1点出土している。

坏は20点のうち、10点までがテラス上から出土した。ほぼ完形品に近い形で出土しており、先述したように、その場所があるいはごく近くに置かれていたものが、あまり攪乱を受けずに埋もれたものと思われる。その近傍の円筒埴輪列のそばからは須恵器甕の破片がまとまって出土している。おそらくこの甕もごく近くに置かれていた可能性が高い。

坏はいずれも丁寧に作られている印象を受けるもので、歪みのひどいようなものは全くない。器形は相互に似ているものが多く、色調・胎土・焼成も一致するものがいくつもある。短期間の内に作られ、

生産地も限られているものと思われる。

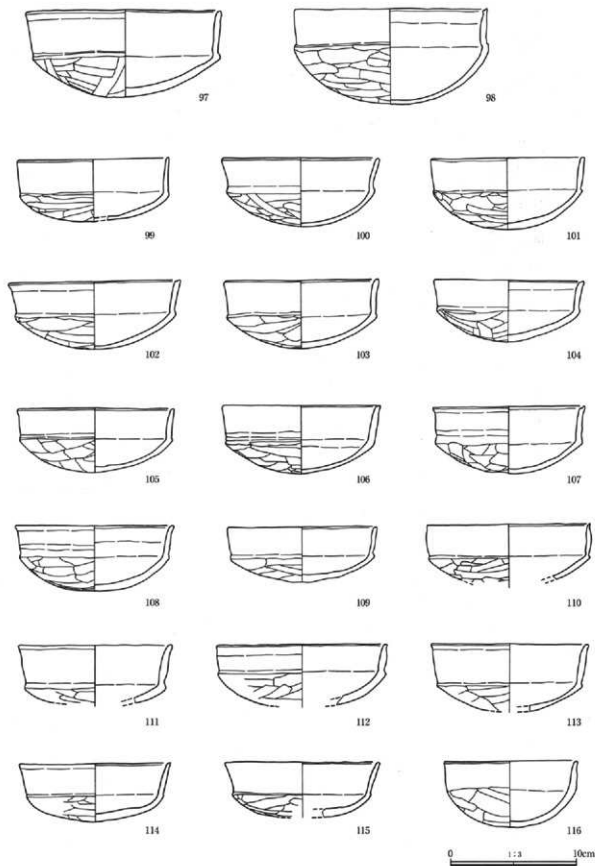
口径によって大きく3種類に分けることが可能である。

97と98は大型品である。口径はそれぞれ15.5cm、15.2cmであり、97の方がやや大きい。深さは6.9cm、7.5cmと逆に98が深い。各部の大きさは多少異なるが、口唇部の断面形や調整の仕方、胎土・焼成はよく似ており、近い関係にある土器であると思われる。97は北半部、Ⅲ区の周堀下部から出土した。このように周堀の底部近くから土器が出土することはままあるが、埴輪はごく小さな破片を除いてそのような場所から出土することはない。98は南半部円筒埴輪列12のすぐ脇から出土した。完形のまますを向いて出土しており（P.L. 8）、人為的に置かれたものと考えられる。内面にナデが入念に施され、きわめて丁寧な作りである。

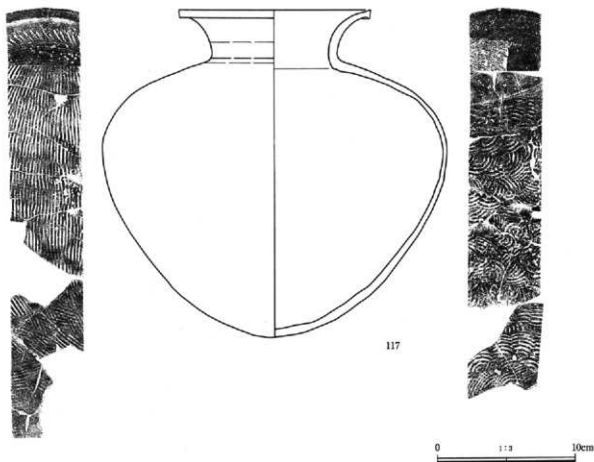
99～115までは中型品である。この中には102や112のように13.6cmになるものもあるが、それ以外のものは11.8～12.9cmと約1cmの差の中に収まる。底部から口縁にかけての形の特徴でいくつかのグループに分けることが可能であるが、胎土・焼成には大差がない。色調には橙に分類できるものと、赤みがより強く、明赤褐あるいはにぶい赤褐に分類できるものがある。

116は小型品で塊と呼ぶべきものである。これは南半部V区の周堀下部から、やはりほぼ完形のまます出土している。やや厚手で、作りも他の坏に比べて少し雑な印象を受ける。

117は高さ39.1cmの須恵器甕である。第12図に見るように、円筒埴輪列5～6の外側からまとまって出土した。先のやや尖った丸底の甕で、外面は平行叩き、内面には当て具痕を残している。器壁は薄く仕上がっている。口縁部の外面には平行してキザミを入れる。この刻みは一単位がヘアピン状で上がつながらっており、それを密に施している。焼成はやや甘く、軟質のところがある。



第30图 1号墳出土土器(1)



第31図 1号墳出土土器（2）

4 小結

1号墳は今回調査したものの中では最大の古墳であり、直径（周堀内径）21～22mの円墳であると思われる。ただし、何度も述べたように西側に前方部が付いている可能性は否定できない。

墳丘は南半部の残りが比較的良好で、盛土が最も厚いところで1.2m残っていた。その下面では旧地表面を把握できたが、墳丘構築前の遺構はまったく見られなかった。また、中心部がゴミ穴で破壊されているため、主体部は見いだせなかった。周囲の精査によっても、主体部に関わるような遺構は見られなかった。

周堀の規模は残りのいい南半部で上面幅4.5～5.5m、下面幅2.6～3.2mであり、北半部ではそれぞれ2

m近く広くなる。したがって周堀外径では34.5～35mの規模となる。南半部では周堀の内側に幅1.2m程度の平坦部があり、それがテラス状に巡っているらしい。このテラスがこのままの幅で全周するとすれば、その内側の墳丘部分の直径は19～20mとなる。

周堀埋土にはわずかではあるがF Aの堆積が認められ、F A降下前の構築であると思われる。

墳丘の外周部、周堀との境には円筒地輪列が巡らされている。これらは布堀状の溝の中に設置されていた。内側のテラス部分には土器（土師器環）がほぼ等間隔に、2～3点ずつまとめて置かれていたらしい。須臾器甕も近くから出土しているので、これも近傍に掘えられていた可能性がある。

地輪は円筒地輪を中心にとまった数が出土した。円筒地輪はすべて2条3段構成である。いわゆる

1号墳出土土器観察表

遺物番号	種別 器種	残存度	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
97	土師器 杯	ほぼ完形	口径 15.5 高さ 6.9	砂粒含む 焼成良好 橙色(2.5YR6/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
98	土師器 杯	完形	口径 15.2 高さ 7.5	砂粒含む 焼成良好 橙色(5YR6/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
99	土師器 杯	底部一部 欠	口径 12.0 高さ 4.9	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
100	土師器 杯	ほぼ完形	口径 12.5 高さ 5.4	砂粒含む 焼成良好 橙色(5YR6/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
101	土師器 杯	口縁一部 欠	口径 12.1 高さ 5.7	粗砂粒多く含む 焼成良好 橙色(5YR6/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
102	土師器 杯	完形	口径 13.6 高さ 5.4	砂粒多く含む 焼成良好 橙色(2.5YR6/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
103	土師器 杯	ほぼ完形	口径 12.3 高さ 5.4	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
104	土師器 杯	口縁一部 欠	口径 11.8 高さ 5.0	砂粒含む 焼成良好 橙色(2.5YR6/6～7.5YR6/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ 底部外面に黒斑
105	土師器 杯	口縁一部 欠	口径 12.4 高さ 5.1	砂粒含む 焼成良好 橙色(5YR6/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
106	土師器 杯	ほぼ完形	口径 12.5 高さ 5.4	砂粒多く含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
107	土師器 杯	口縁1/5 欠	口径 12.0 高さ 5.3	砂粒含む 焼成良好 にぶい赤褐色(5YR5/4)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ 底部外面に黒斑
108	土師器 杯	1/2	口径(12.6) 高さ 5.1	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
109	土師器 杯	2/3	口径(12.0) 高さ 4.3	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ 底部外面に黒斑
110	土師器 杯	1/3	口径(12.9)	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ 底部外面に黒斑
111	土師器 杯	小破片	口径(12.4)	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ 底部外面に黒斑
112	土師器 杯	小破片	口径(13.6)	砂粒含む 焼成良好 にぶい橙褐色(7.5YR6/4)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ 底部外面に黒斑
113	土師器 杯	小破片	口径(12.0) 高さ 4.6	砂粒含む 焼成良好 にぶい赤褐色(5YR5/4)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
114	土師器 杯	小破片	口径(12.3)	砂粒含む 焼成良好 にぶい赤褐色(5YR5/3)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
115	土師器 杯	小破片	口径(12.1)	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
116	土師器 埴	底部・口 縁一部欠	口径 10.6 高さ 5.2	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
117	須恵器 甕	胴部1/ 4欠	口径(22.8) 高さ 39.1	砂粒含む 焼成やや甘い 黄灰色(2.5YR5/1)	体部外面 平行叩き 内面 当て具取 口縁内外面 ヨコナデ

る「基部の伸長化」の傾向が認められるものも存在する。調整はほぼ同一であり、外面は全面タテナヘのち、口縁部をヨコナデし、内面は全面タテナデのち上半部を中心にハケを施し、口縁部をヨコナデする。透孔には多様性があり、正円形、不整形、半円形などがある。いずれが多いとも決めがたい。色調は赤みの強い橙色で、他の古墳の埴輪とは異なり、特徴的である。他の古墳のものは赤みが弱く、全体に白っぽいものが多い。線刻には幾種類かが見られるが、それぞれ線刻ごとに細かい特徴がまとまる傾向が明確に見て取れ、おそらく線刻の別が製作者の別を示すものと思われる。線刻の意味がこれほど明瞭に把握できる資料は珍しいものといえよう。

以上のようにこの1号墳は今回調査したものの中では最大で、しかもFA降下前という、今回調査したものの中では古いもの一つとなる。周囲にFAが見られるものは他に2号墳、11号墳があり、1号墳を中心としたこの3基がまず構築され、その後に南、東へと広がっていったものと思われる。つまり、今回の発掘調査の範囲では、この1号墳を核として群集墳が形成されていったものと考えられる。

本古墳から出土した埴輪はほぼ完形に復元できたものが多く、特徴を詳細に観察できるため、資料的価値が非常に高い。今後、この地域の古墳、埴輪を研究する上で、重要な資料になることは間違いないものと思われる。

2 2号墳

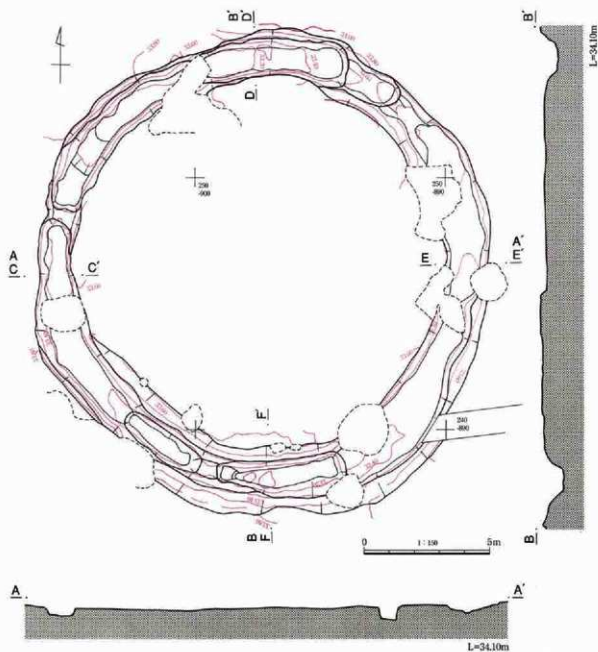
1 調査前の状況と発掘調査

2号墳は1号墳の北東にあり、わずか2mしか離れていない。後述の削平を考えれば、築造当時はほとんど接するような距離であったと思われる。

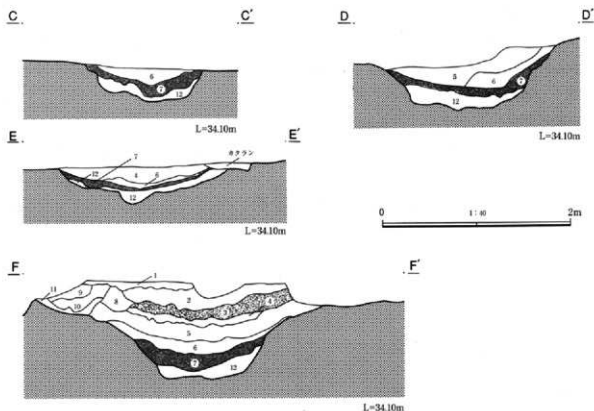
調査前には、テニスコートとそれに隣接した平坦

な草地となっていたが、さらにそれ以前には病棟があった場所である。そのため調査に着手するまで、この古墳の存在は全く判らなかった。

調査は平成12年度に1区として行った。この1区の南側一帯では、数多くの大規模なゴミ穴が掘られていて、地表から1m以上下まで攪乱を受けた状態



第32図 2号墳平面図・断面図



- 1 におい黄褐色土 砂質 As-Aらしい軽石を含む
- 2 黒褐色土 砂質 As-Bを多く含む
- 3 黒色土 As-B混土 黄灰褐色土のブロック (直径2~5cm) を含む
- 4 明黄褐色土 やや粘性がある
- 5 暗黄褐色土 砂質土と粘質土が混在する
- 6 黄褐色土 ロームの崩壊土
- 7 灰白色火山灰 FA 粒子細かい 乾くと固くなるがもろい

- 8 黒褐色土 軽石 (As-B) を少量含む
- 9 におい黄色土と黒褐色土、黒色土との混土 As-Bをやや多く含む
- 10 黒褐色土と黒色土の混土 As-Bを含む
- 11 暗褐色土 砂質土と粘質土が混在する
- 12 黒褐色土と黄褐色土との混土 小ブロック状

第33図 2号墳周堀断面図

であった。そのため、古墳の残存状態は極めて悪く、周堀の底部がかろうじて残るだけであった。

2 墳丘と周堀

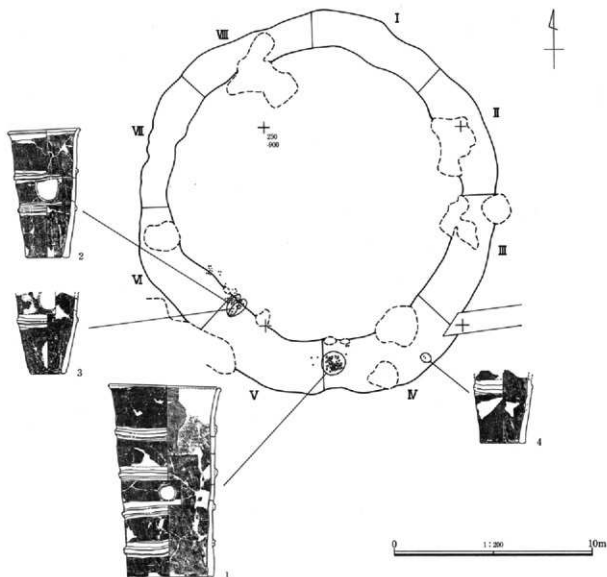
(1) 墳丘 (第32図)

2号墳の付近では、調査前の地表面から1.4~1.7m下まで広範囲に削平されている。遺構確認面には所々にバックホーの爪の跡が見られるので、重機によって掘り込まれてしまったらしい。この削平はローム上面にまで及んでおり、そのため墳丘は全く残っていない。遺構確認面では、周堀内径で測って14~15mの円墳である。

(2) 周堀 (第32・33図)

周堀は全周する。断面形状は基本的に逆台形であるが、残りのいいところでは底面から0.4~0.5mのところでは壁面の傾斜が緩くなっている。周堀の規模は、削平の及んだ深さが一定しないため、場所によって残存度に差があるが、上幅1.4~2.8m、下幅0.8~1.1mである。底面は凹凸が大きく、深さは0.4~0.8mである。周堀の外径で測ると、この古墳の規模は直径18~19mとなる。

埋土には、底面から5~10cmのところにはFAが堆積している。このFA層は層厚20cmに及ぶところもあり、非常に明瞭である。底面から70cmのところにはAs-Bを多く含む黒褐色土が堆積しているが、削平



第34図 2号墳出土遺物分布図

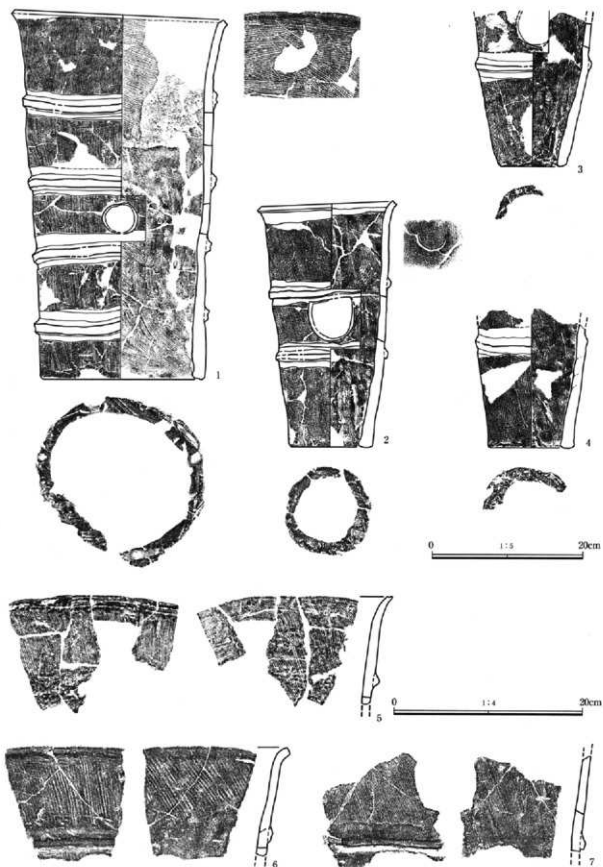
により、この層が残っているところは少ない。

(3) 遺物出土状況 (第34図)

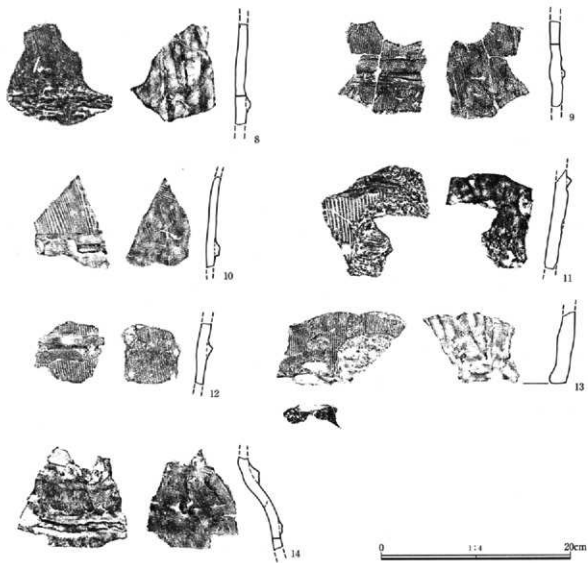
遺物の出土は全体に少ない。今回調査した諸古墳では、埴輪などの遺物は、古墳墳丘の裾部斜面や、周堀に堆積するAs-Bの上下の黒色土から多く出土するが、2号墳ではそれらがほとんど削平されているため、遺物の出土が少ないのだと考えられる。ただし、南側では削平が比較的浅かったため、墳丘部と周堀との境、及び周堀内から埴輪を中心とした遺物が出土している。

3 出土遺物

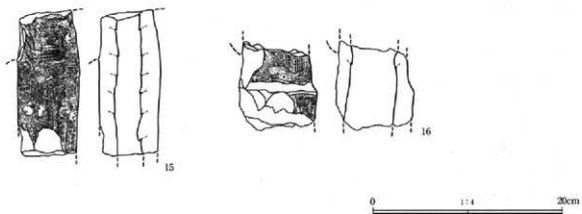
注目される遺物としては、4条5段構成の大型の円筒埴輪がある(第35図1)。高さ47.2cmであり、断面台形のしっかりとした突帯がめぐる。3段目と4段目とにやや小さめの円形の透孔が、90度方向を違えて開けられている。口縁部の内側に線刻がある。南端部の周堀内で、As-Bを含む黒色土からまとまって出土した。このような大型品が2号墳のような小型古墳に使われていたとは考えずらく、どこかか



第35図 2号墳出土埴輪(1)



第36図 2号墳出土埴輪(2)



第37図 2号墳出土形象埴輪

第3章 調査の成果

2号墳出土埴輪観察表 (凡例は巻頭「凡例」参照)

No.	器種	計測値	調整		刷毛	突起	透孔	線刻	色調	出土位置	備考
			外面	内面							
1	円筒	①47.2 ②29.3 ③22.6	??→ →口縁コナテ	??→・コナテ →口縁コナテ	4~5	A	円形 3・4段目 にあり	内5※ にふい 楕7.5Y R6/4	IV・V区	大型品	
2	円筒	①31.5 ②18.3 ③11.6	??→ →口縁コナテ	??→ →口縁コナテ	5~6	A	半円形	外3 U 黄灰~ にふい 黄褐	V区	2.5YR5/1~ 10YR7/4	
3	円筒	①- ②- ③(8.8)	??→ 口縁欠	???? 口縁欠	6~7	B	?	?	楕 7.5YR6 /6	V区	
4	円筒 か	①- ②- ③(10.8)	??→ 口縁欠	???? →上半?? 上部欠	4~5	C	?	?	楕 7.5YR7 /6	IV区	
5	円筒	小破片	??→ →口縁コナテ	??→?? →口縁コナテ	5~6	C	?	?	楕 5YR6/6	不明 表土・攪乱出土	
6	円筒	小破片	??→ →口縁コナテ	??→?? →口縁コナテ	3~4	A	円形 低い	?	楕7.5Y R6/6	不明 表土・攪乱出土	
7	円筒	小破片	??→	??→??	5~7	A	?	?	楕 7.5YR6 /6	不明 表土出土	直縁やや小 さい
8		小破片	??→	???? 上半??	6~7	A	?	?	楕 5YR7/6	不明 表土・攪乱出土	
9		小破片	??→	????	6~7	A	?	?	明褐	不明 表土出土	7.5YR6/6
10		小破片	??→	???? 上半??	3~7	A	?	?	にふい 楕	不明 表土出土	7.5YR7/4
11		小破片	??→	????	3~4	C	?	?	楕 5YR6/6	不明 表土・攪乱出土	
12		小破片	??→	??→	6~7	C	?	?	楕7.5Y R7/6	不明 表土出土	
13		小破片	??→	????	7~8	?	?	?	楕 V区	不明	7.5YR7/6
14	朝顔	小破片	??→	????	5~6	?	半円形か	?	楕 IV区	不明	5YR6/8

ら持ち込まれて廃棄された可能性がある。近傍にこのような大型品を樹立するような有力な古墳が存在したか、あるいは円筒埴輪輪として使われていたと考えられる。2は高さ31.5cmと、やや小型の円筒埴輪である。3・4もほぼ同じ大きさなので、これがこの古墳の埴輪の標準的なサイズかもしれない。2には3段目の外面にU字形の線刻があるが、同様な線刻は1号墳の埴輪にも多くみられ、関連が注目される。朝顔形埴輪も出土している(第36図14)。

形象埴輪と思われるものは2点出土し、いずれも太刀形埴輪の柄の部分と思われる。輪積み成形で直径約6.5cmの円筒を作り出し、外面はタテハケで調整されている。護手部は欠損している。

4 小結

直径(周堀内径)14~15mで、今回調査の中では中規模の円墳である。周堀内にF Aが見られることから、F A降下前の築造である。残念ながら削平のため、墳丘や主体部の状態は全く不明である。

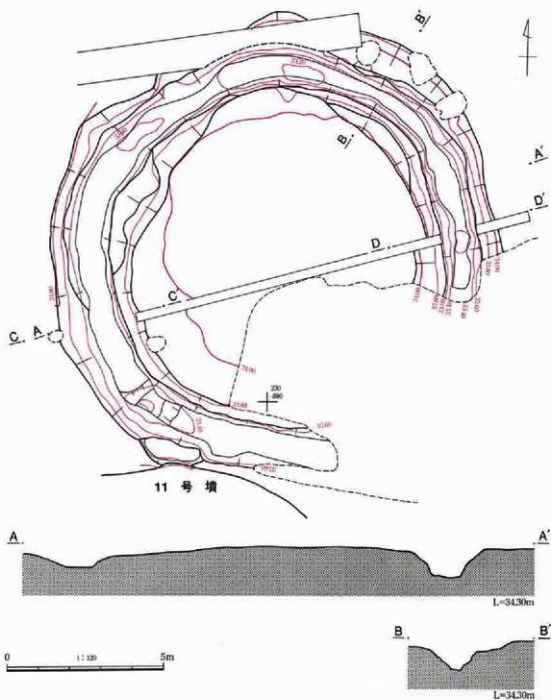
3 3号墳

1 調査前の状況と発掘調査

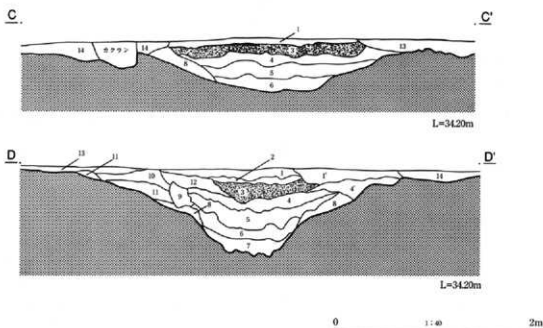
3号墳は調査区の中央やや南、1号墳の北東にある。遺構確認面では2号墳とは約4m離れている。

11号墳とは周堀がほとんど接しているの、構築当時は周堀の上部が切り合っていたものと思われる。

調査前にはテニスコートに隣接する平坦な草地となっており、調査に着手するまで、この古墳の存在



第38図 3号墳平面図・断面図



- | | |
|--|---|
| <p>1 黒褐色土 砂質 14に黒色土が混じった土
 1' 1に似るが黒色土が少ない
 2 褐灰色砂 As-Bの二次堆積 粒子細かく川砂の様である
 3 黒色土 砂質 As-Bを含む
 4 明黄褐色土 ロームの二次堆積 灰黄褐色土を少量含む
 4' 4よりやや砂質
 5 灰黄褐色土 やや砂質 明黄褐色土を少量含む
 6 にぶい黄褐色土 やや砂質 ロームの二次堆積と5の混土
 7 明黄褐色土 ロームの二次堆積
 褐灰色ハードロームブロック (直径5cm) を多く含む</p> | <p>8 にぶい黄褐色土 ロームの二次堆積 わずかに砂質
 9 灰黄褐色土 やや砂質 5に似る
 10 にぶい黄褐色土 やや砂質 均質
 11 にぶい黄褐色土 やや砂質 ロームの二次堆積
 12 黒褐色土 砂質
 13 灰黄褐色土 土壌を平らにした際に14と古墳の盛土とが混じったものと考えられる
 14 にぶい黄褐色土 砂質 粒子が非常に細かい
 A₀-A混じりか 遺構内ほぼ全域にみられる</p> |
|--|---|

第39図 3号墳周堀断面図

は全く判らなかつた。

調査は平成12年度に1区として行った。2号墳と同様、この場所も削平が地表下1m以下にまで及んでおり、遺構の残りは極めて悪かつた。

2 墳丘と周堀

(1) 墳丘 (第38図)

2号墳と同様、墳丘構築面以下まで削平され、ゴミ穴が掘り込まれていたため、墳丘は全く残っていない。特に、南東側には深いゴミ穴が掘られており、周堀を含めて完全に破壊されていた。

遺構確認面では、周堀内径で測って、直径9.5～10mの円墳である。

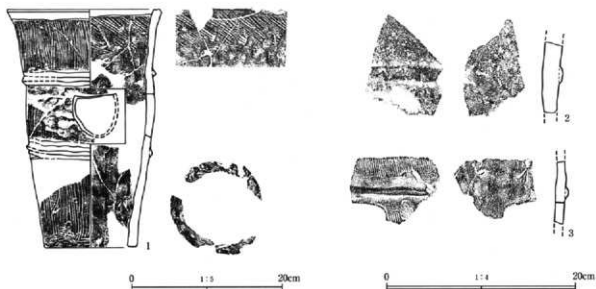
(2) 周堀 (第38・39図)

周堀は、南東部が破壊されて不明ではあるものの、全周すると思われる。断面形状は逆台形で、残りのいいところでは底面から0.4～0.6mのところまで壁面の傾斜が緩くなる。規模は、削平の深さが一定しないため場所によって異なるが、上幅2.4～3.0m、下幅0.3～1.0mである。深さは一定ではなく、浅い部分と深い部分があり、確認面から0.4～1.0mである。

埋土には、底面から40～60cmのところにAs-Bを多く含む黒色土が堆積している。

(3) 遺物出土状況

遺物の量は少ない。特に集中するところもなく、周堀全体からまばらに出土している。



第40図 3号墳出土埴輪

3号墳出土埴輪観察表 (凡例は巻頭「凡例」参照)

No.	器種	計測値	調整		刷毛	突帯	透孔	線刻	色調	出土位置	備考
			外面	内面							
1	円筒	①30.6 ②21.4 ③13.3	タテハ →口縁タテハ*	口縁部タテハ →タテハ* →口縁タテハ*	3	C	半円形	内3×	にぶい 橙7.5Y R7/4	周堀北西部 2号墳出土品と も接合	
2	小破片	摩滅	タテハ*			摩滅 低い	?	?	にぶい 橙	不明	7.5YR7/4
3	小破片	タテハ*	タテハ*		8~6	B	半円形か	?	にぶい 橙	不明	7.5YR7/4

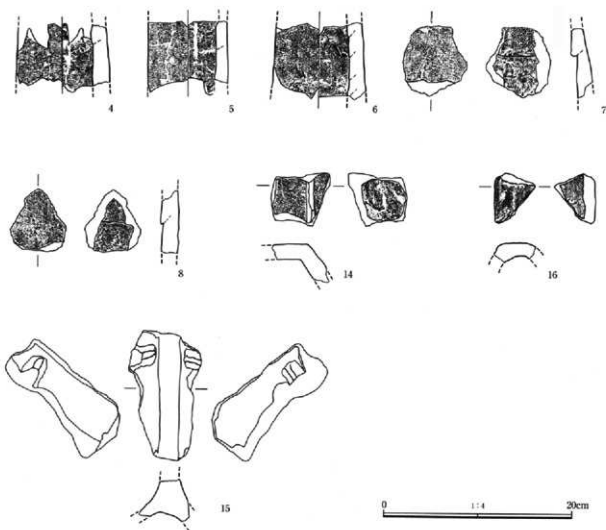
3 出土遺物

円筒埴輪、形象埴輪、土師器環が出土している。円筒埴輪は全形が分かるものが1点ある(第40図1)が、周堀北西部から出土し、その方向に接する2号墳の出土品とも接合するため、二次的に動かされているものと思われる。高さ30.6cm、口径21.4cmでやや太めの形態で、外面は粗いタテナデである。透孔は半円形で、3の破片も半円形である。2は幅が広く低い突帯の埴輪片であるが、表面が摩滅し、詳細不明である。注目されるのは形象埴輪の破片数の多さであるが、いずれも小破片であり、全形を窺えるものはない。4~13はいずれも太刀形埴輪だと思われる。(9~13は小破片なので写真のみ掲載した)輪積み成形で直径約8~10cmの円筒を作り出し、外面はタテハで調整する。14は不明だが家形埴輪な

どの角の部分であろう。15は馬形埴輪のたてがみの部分である。16はさらに小破片であり不明である。

4 小結

直径(周堀内径)9.5~10mの円墳で、今回調査の中では小型である。南に隣接する11号墳とほぼ同規模であるが、11号が周堀にFAを堆積させているのに対して、3号墳には見られない。遺物が少ないので断定は難しいが、FAが周堀に見られないことから、FA降下後の築造と考えられる。とすれば、FA降下前に既に築造されていた1・2・11号墳の間のわずかな空間を選んで、わざわざ築造したということになる。



第41図 3号墳出土形象埴輪



第42図 3号墳出土土器

3号墳出土土器観測表

遺物番号	種別 器種	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
17	土師器 埴輪	1/2	口径 (12.0) 高さ 4.7	砂粒含む 焼成良好 明赤褐色(2.5Y5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ

4 4号墳

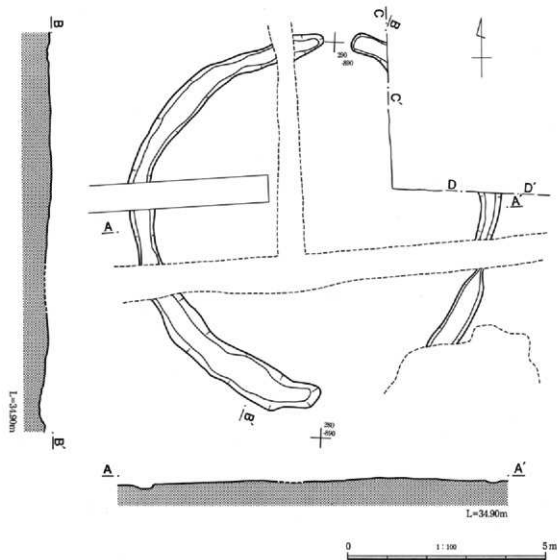
1 調査前の状況と発掘調査

4号墳は2号墳の北約25mのところにある。2号から4号までの間に古墳が見られないことから、この4号墳は単独で存在するようにも見えるが、東側には広く未発掘地があり、北東側には10号墳が見つかったので、こちらの方に未知の古墳がある可能性は否定できない。

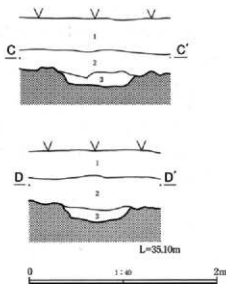
調査前はテニスコートとその北に隣接する平坦な草地であり、また、北東隅には変電施設が作られて

いる。そのため、調査に着手するまで、この古墳の存在は判らなかった。

調査は平成12年に1区として行った。この周辺もゴミ穴が数多く掘り込まれており、遺構の残りは悪い。遺構確認面は現地地表下0.4~0.5mと浅いが、遺構の残りの悪さから考えて、この部分もかなり削平を受けていることが考えられる。とすれば、古墳構築時における地表面は、1~3号墳周辺よりも高かったのではないだろうか。病院造成時に大きく削平されてしまった可能性が高いものと思われる。



第43図 4号墳平面図・断面図



- 1 現表土 アスファルトと盛土
 2 アスファルト敷地以前の表土
 3 にぶい黄褐色土 やや粘質 ロームに黒褐色土が混入

第44図 4号墳周堀断面図

2 墳丘と周堀

(1) 墳丘 (第43図)

削平により、墳丘は全く残っていない。遺構確認面では、周堀内径で測って、直径8.1~8.2mの円墳であり、今回調査したものの中では最も小型である。

(2) 周堀 (第43・44図)

周堀は、古墳の周堀としては細く、極めて浅いので、大部分が削平されているものと思われる。残されているのは、底部のごく一部だと推定される。

断面形状は浅い皿状であり、規模は、上幅0.5~1.0m、下幅0.2~0.8mである。深さは深いところで15cmとごく浅い。

ほぼ全周しているが、途切れているところが南北に1ヶ所ずつある。その間隔は北側で0.7m、南側ではゴミ穴のために正確には判らないが、少なくとも2mはある。これが土橋状になっていた可能性は否定できないが、この古墳が大きく削平されている

ことと、2、3号墳のように、周堀の底面に凹凸があるものも存在することを考えれば、土橋と断定することは困難であろう。

埋土はロームの崩れた土や黒褐色土からなり、他の古墳の周堀埋土最下層と変わるところはない。

(3) 遺物出土状況

土器のごく小さな破片が1点出土したのみである。

3 小結

直径(周堀内径)約8mの小規模な円墳である。遺物が出土せず、周堀埋土のFAの有無も不明なので、時期などは全く分からない。前述のようにこの付近はかなり大きく削平されているらしく、同じような小規模の古墳がこの付近から2区にかけて存在していた可能性は否定できない。そのような、現在は消滅してしまった可能性の高い小古墳の存在は、高林古墳群のかつての姿を考える上では注意すべき点であると思われる。

5 5号墳

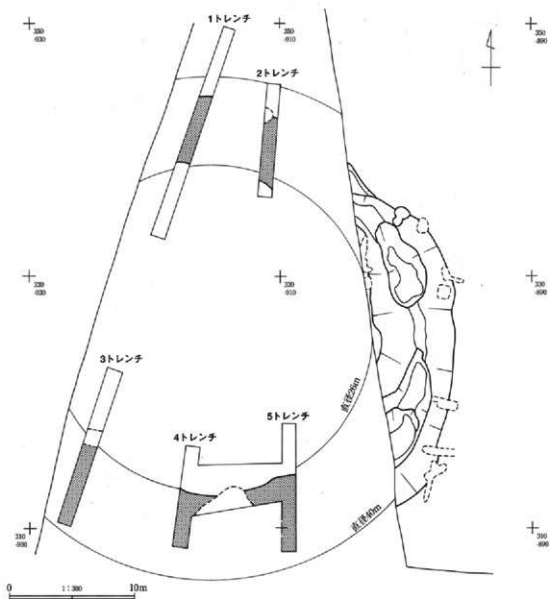
1 調査前の状況と発掘調査

調査区北側に位置し、今回調査した古墳の中では最も北になる。

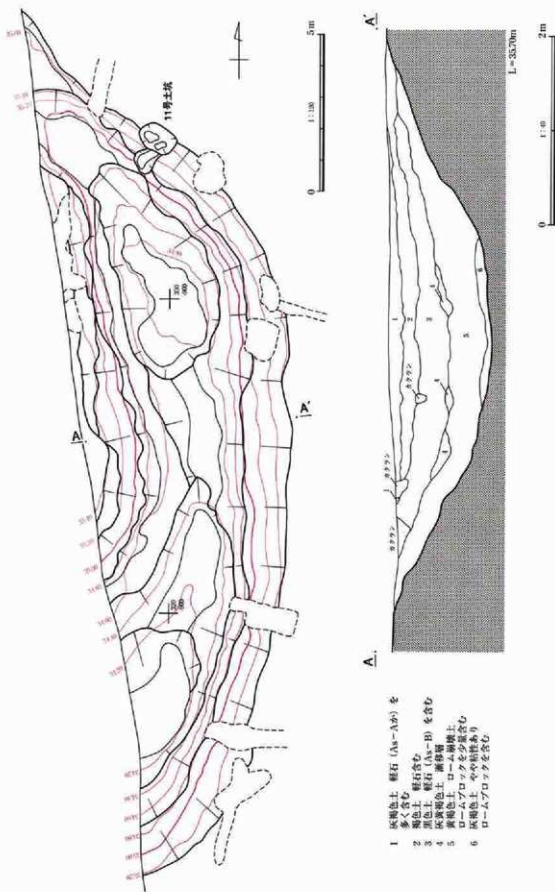
調査前には病院職員宿舎と、それに隣接した空き地となっていた。この空き地にはわずかな起伏が認められたが、古墳の存在を確信させるほどのものではなかった。しかし、この5号墳の西側には、地面

に地彫れ状の盛り上がりが見られるので、これが墳丘の名残である可能性は考えられる。

調査は職員宿舎の撤去を待って、平成12年度に2区として行った。2区は、5号墳付近では削平が少ないものの、北から北東部一帯は宿舎が建設されていたため、広く削平され、ゴミ穴も数多く認められた。現状ではこの北～北東部には古墳が見つからず、広い空閑地となっているように見えるが、その削平



第45図 5号墳復元想定図



第46図 5号墳平面図・周壁断面図

を考えれば、4号墳のような小古墳がこの付近に存在した可能性は十分考えられる。

2 墳丘と周堀

(1) 墳丘 (第45・46図)

調査区内にはごく一部がかかっているのみであり、墳形はよく分からない。周堀の形が不整形であり、カーブが円形を描いていないこと、幅も北側が急に狭くなっていることなど、円墳ではないことを示す特徴が多い。特に、周堀内側が直線的であり、前方後円墳や方墳といった墳形を想像させる。

そのため、西側に確認トレンチを5本入れ、墳形を確認しようとした。その結果、南側はかなりきれいな円形を描くものの、北側はやはり幅が細く、しかもカーブがかなり不整であることが判明した。しかし、この確認トレンチの中では、円墳以外の形を示すような証拠を見出すこともできなかった。現時点では、かなり不整形になる可能性はあるが、全体としては円墳と考えるほうが妥当なのではないかと考えられる。第45図では、周堀の推定線として、外径40m、内径26mの円を描いてみた。内径の線がトレンチで見つかった周堀の線とほぼ合致するので、この推定の蓋然性は高いものと考えている。とすればこの古墳は、周堀内径で測って、直径26mの円墳であると考えられる。ただし、周堀の幅が北で狭く、南で広がっている要因などは不明であり、他の墳形である可能性は否定できないのは言うまでもない。今後究明の機会が来ることを望みたい。

墳丘盛土は、調査区内、西側確認トレンチ内を含めて確認できなかった。完全に削平されているものと考えられ、地彫れ状の高まりも後世の盛土であることが判明した。ただし、病院敷地外の空き地には地彫れ状の高まりを現在でも確認することができ、これが本古墳と関連する可能性はあるものと考えられる。

(2) 周堀 (第46図)

上述のように形は不整形であり、幅・深さが南北でかなり違う。

断面形状は基本的には逆台形であるが、斜面はかなり緩くなっている。その規模は、北側の一部を除くと、上幅は約6m、下幅1~3mである。深さは1.1~1.4mで、土坑状に深くなっている部分が多い。

北側では急激に細くなり、上幅約2.5m、下幅約1.0m、深さ約0.4mとなってしまう。このように北側で細くなる傾向は確認トレンチでも同様であり、これがこの古墳の特徴なのだと思う。

埋土には、底面から50cmのところからAs-Bが堆積している。FAの堆積は見られない。

(3) 遺物出土状況

遺物の出土は全体的に少なく、また、みな小破片となっていた。そのほとんどは埴輪片である。他の古墳と同様、As-Bを含む黒色土とその上層から大部分の遺物が出土している。

3 出土遺物

円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、土器が出土している。円筒埴輪はいずれも小破片であり、全形が分かるものはないが、他の古墳から出土しているものと大きく特徴の変わるものはない。

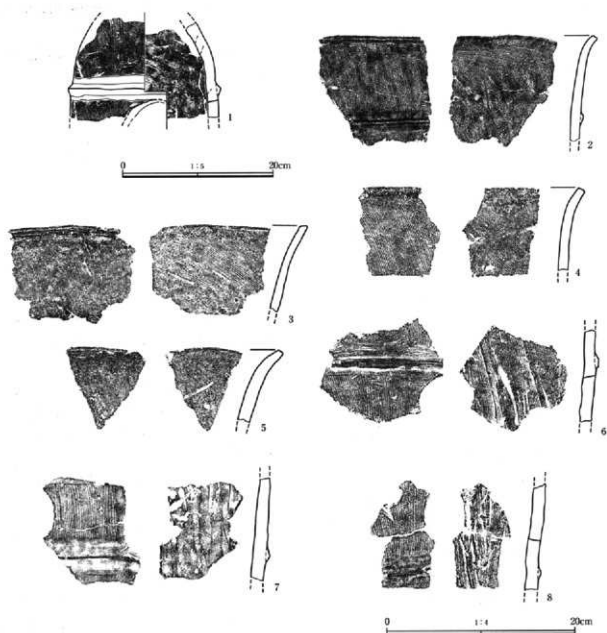
注目されるのは形象埴輪の破片数の多さである。いずれも小破片であり、全形を知ることができるものはないが、種類も豊富であり、比較的規模の大きい5号墳にふさわしいと言える。

21は鞆の矢の部分である。周堀中央北寄りから出土した。高さ11cm、幅9.5cm、厚さ1.8cmの板状の粘土の表面をタテハケで調整し、そこに7本の矢を上向きに線刻している。色調は橙色(7.5YR7/6)で、断面は灰色(5Y5/1)である。砂を多く含む胎土である。22、24も鞆の一部であろう。鞆本体の裏側につく円筒部の一部が残っている。いずれも表面はきれいにナデ調整し、裏側は指ナデの跡がはっきりと残る。22には上部に矢の線刻の残欠が見える。色

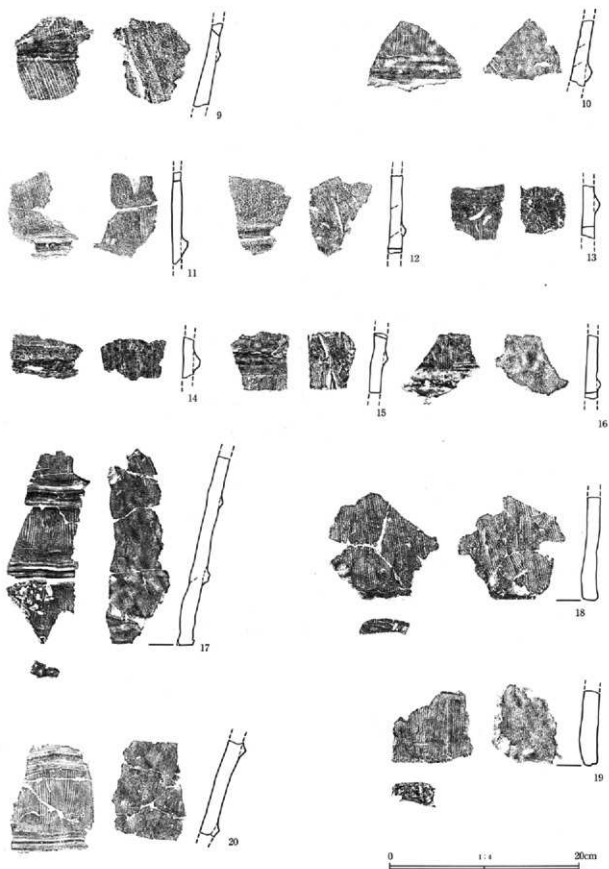
第3章 調査の成果

調・胎土は21と共通する。23・25は円筒部のみなのではっきりしないが、これも鞆の一部である可能性がある。色調・胎土とも21と共通する。26はさらに小破片であるが、やはり色調・胎土が21に共通し、鞆の一部である可能性がある。27も小破片である。片面に何かを刺突したような菱形の文様が2列に並んで付けられている。色調が鞆とは異なり橙(5YR6/6)と赤みが強い。小破片なので断定はでき

ないが、盾形埴輪の一部である可能性がある。28は太刀の柄頭と思われ、それが正しければ、武装した人物埴輪が存在したらしい。表面はナデ調整され、裏面は何かから剥離した跡がある。色調は橙(5YR6/6)であるが、表面は黒色に変化してしまっている。胎土には砂を含む。29は全く不明であるが、円筒埴輪などとは形態が明らかに異なり、何らかの形象埴輪であると思われる。口縁あるいは底部の一



第47図 5号墳出土埴輪(1)

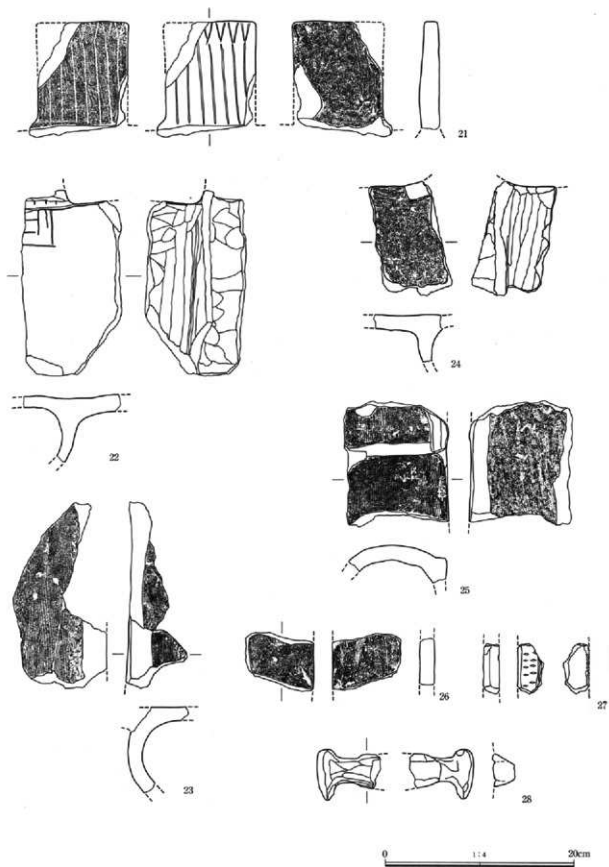


第48圖 5号墳出土埴輪(2)

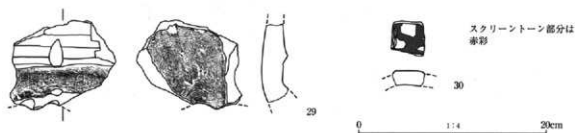
第3章 調査の成果

5号墳出土埴輪観察表 (凡例は巻頭「凡例」参照)

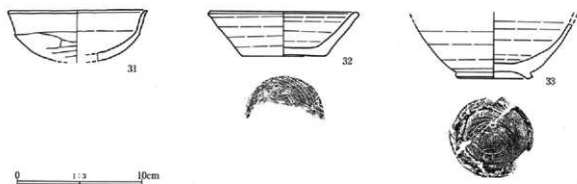
No.	器種	計測値	調整		刷毛	突帯	透孔	線刻	色調	出土位置	備考
			外面	内面							
1	朝顔	①- ②- ③-	フナ 上・下部欠	フナフナ 上・下部欠	6~7	C	円形か	?	にぶい橙 7.5YR6/4	I区墳丘	
2	円筒	小破片	フナフナ →口縁コナフナ	フナフナ →口縁コナフナ	7~8	A	円形か	外3=	にぶい橙 5YR7/4	III区	
3	円筒	小破片	フナフナ →口縁コナフナ	フナフナ →口縁コナフナ	7~9	?	?	?	灰黄褐 10YR6/2	II区	
4	円筒	小破片	フナフナ →口縁コナフナ	フナフナ →口縁コナフナ	7~9	?	?	?	橙 5YR6/6	I区	
5	円筒	小破片	フナフナ →口縁コナフナ	フナフナ →口縁コナフナ	7~8	?	?	?	にぶい黄褐 5YR6/6	II区	10YR7/4
6		小破片	フナフナ	フナフナ →粗いフナフナ	5~7	A	円形か	?	橙 7.5YR6/6	IV区	
7		小破片	フナフナ	フナフナ	4~8	C	円形か	?	にぶい橙 7.5YR6/4	II区	
8		小破片	フナフナ	フナフナ	5~6	C	?	?	にぶい黄褐 5YR6/6	III区	10YR7/4
9		小破片	フナフナ	フナフナフナ	4~8	C	?	?	にぶい黄褐 5YR6/6	西側3号トレン チ	10YR7/4
10		小破片	フナフナ	フナフナ	6~7	C	?	?	にぶい黄褐 5YR6/6	III区	10YR7/4
11		小破片	フナフナ	フナフナ	5~6	B	?	?	浅黄褐 10YR8/3	II区	
12		小破片	摩滅	フナフナ	摩滅	B	?	?	にぶい黄褐 5YR6/6	IV区	10YR7/4
13		小破片	フナフナ	フナフナ	7~8	C	?	?	にぶい橙 7.5YR6/4	IV区	
14		小破片	フナフナ	フナフナ	7~9	A	?	?	橙 7.5YR6/6	西側5号トレン チ	
15		小破片	フナフナ →粗いフナフナ	フナフナ →粗いフナフナ	5~6	C	?	?	にぶい橙 7.5YR6/4	IV区	
16		小破片	フナフナ	フナフナ	6~7	C	円形か	?	橙 5YR6/6	西側5号トレン チ	
17		小破片	フナフナ	フナフナ →粗いフナフナ	6~7	A・C	?	?	橙 5YR6/6	IV区	底部がフナ
18		小破片	フナフナ	フナフナ	5~6	?	?	?	にぶい黄褐 5YR6/6	I区	10YR7/4
19		小破片	フナフナ	フナフナ	6~7	?	?	?	橙 5YR6/6	IV区	
20	朝顔 か	小破片	フナフナ	フナフナ	4~7	C	?	?	橙 5YR6/6	IV区	



第49圖 5号墳出土形象埴輪(1)



第50図 5号墳出土形象埴輪(2)



第51図 5号墳出土土器

5号墳出土土器概観表

遺物番号	種別	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
31	土師器 杯	小破片	口径 (11.0) 高さ	砂粒含む 焼成良好 褐色(7.5YR7/6)	底部外面に黒焼
32	かわらけ	1/3	口径 (12.0) 底径 (6.6) 高さ 3.5	砂粒・赤色粒子含む 焼成良好 にぶい褐色(7.5YR6/3)	底部外面回転糸切痕 口縁部に炭素吸着
33	須恵系 高台付 碗	底部のみ	口径 底径 (6.1) 高さ	細砂含む 焼成やや甘い 灰白～黄褐色(2.5YR7/1～5/1)	底部外面中央に回転糸切痕 高台貼付

部で、底から3cmのところ到低い三角の突帯が付けられる。外面は薄れているが、タテハケである。色調は橙(5YR6/6)であり、胎土には砂を含む。30は小破片であり、何の部品か全く分からないが、表面に格子状に赤彩が施されている。色調は橙(7.5YR7/6)とやや薄く、胎土は砂粒を多く含み砂っぽい。

土器は掲載できるものが3点しかないが、このうち古墳に伴う可能性があるのは31の1点であり、32・33はいずれも混入であると思われる。

4 小結

直径(周堀内径)26mの比較的大型の円墳と思われるが、周堀の形が不整形であり、他の墳形の可能性は否定できない。周堀埋土にFAが見られないことから、FA降下後の築造と考えられる。この古墳の北側は緩やかな北斜面となり、数10mで台地端となる。恐らくこの付近が高林西原古墳群の北端となるものと思われる。

種類の豊富な形象埴輪(武装した人物、鞍など)、円筒埴輪、朝顔形埴輪をもち、この古墳群の中でも比較的有力な古墳であったと思われる。

6 6号墳

1 調査前の状況と発掘調査

調査区南東にある。この付近は大部分が林であったが、東側には外来病棟が、北側には入院病棟のビルが建ち、その建物に沿ってL字型に未舗装の道路が通っていた。林部分は道路よりも約1m低くなっており、後世にかなりの削平を受けているか、あるいは逆に道路部分に盛土が施されているものと考えられた。山林の中は緩やかな起伏がいくつか見られ、複数の古墳が存在するとの印象を受けたが、その場所を特定できるほどではなく、この古墳の存在は認識できなかった。

調査は平成13年度に3区東として行った。最初に山林部分を発掘したところ、その北東隅にこの古墳が見つかり、それが東、北側に伸びていることが判明した。そのため、東側の道路部分については、山林部分の調査が終了したのち、仮設道路を古墳の南側に設けてから、可能な範囲内で調査を行うこととした。ただし、病棟近接地という制約上、作業は慎重に進めざるを得なかった。もちろん、古墳は北側にも伸びているが、そこは現入院病棟に対する消防活動用空地や地下防火水槽となっており、発掘することはできなかった。防火水槽の部分は地下深くまで掘られていることが予想されるので、この部分の古墳はおそらく破壊されているものと思われる。

山林部分と東側道路部分には、大きなゴミ穴が多数掘られ、遺構の残りはきわめて悪かった。山林部分は3区西側などでは旧地形がある程度保存されていたが、この東部分については、道路に近かったためかゴミ穴と思われる擾乱穴が多く掘られ、コンクリート塊を中心とした建設廃材が多く埋まっていたため、表土除去は難航した。それに対し、入院病棟に近い北端付近では擾乱が深くまでは及んでおらず、上部に盛り土がなされていたため、墳丘の一部が残るなど、比較的残りがよかった。

2 墳丘と周堀

(1) 墳丘 (第52・53図)

今回の調査区内では、大部分の範囲で墳丘は削平され、盛土は残っていなかったが、北側の病棟に近い部分には旧表土、盛土がわずかに残っていた。これを調査区北壁で見ると(第53図)、盛土は最も厚いところで40cm残り、それと旧表土との間にはごくうすいFAが堆積していた。このFA層はとぎれている部分もあったが、残りの良いところでは白く帯状になっており、降下後にさほど擾乱を受けていないものと判断された。このことから、本古墳はFA降下後、あまり時間をおかずに構築されたものと考えられる。

古墳の規模は、周堀内径で測って、直径13mの円墳と考えられる。もちろん、北側は未発掘なので、厳密には墳形を確定することはできない。

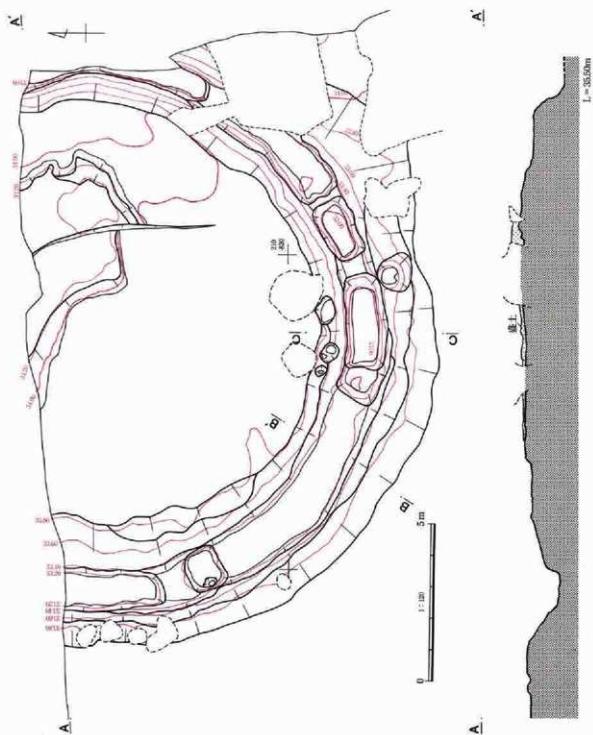
墳丘部分は2/3程度の範囲を調査できたが、主体部、あるいはそれに関わると思われる遺構は全く見つかっていない。

(2) 周堀 (第52～54図)

調査区内では周堀は全周している。断面形状は逆台形であり、底面は平坦になっている。底面には方形の土坑状に深く掘られている部分が多くある。一部では底に土坑が連結したような形状になっている(第54図の部分など)。この土坑の部分も底面は平坦である。

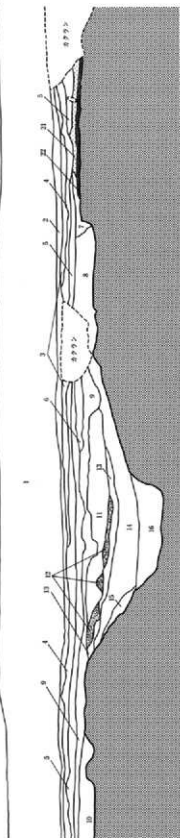
規模は上幅3.5～4.0m、下幅0.7～1.2mであり、深さは0.6～0.8mであるが、深く土坑状に掘られている部分では0.8～1.0mであり、この部分の断面を見ると、途中で傾斜が急になる形態となっている。

埋土のかなり上部、底面から0.4～0.8mのところにはAs-Bが堆積しているが、顕著な一次堆積は見られず、黒色土・黒褐色土に含まれた形で存在する。

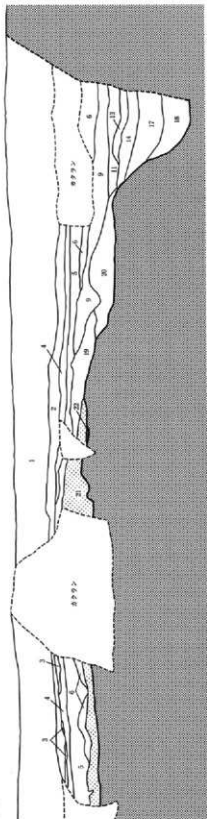


第52図 6号墳平面図・断面図

下 図 へ



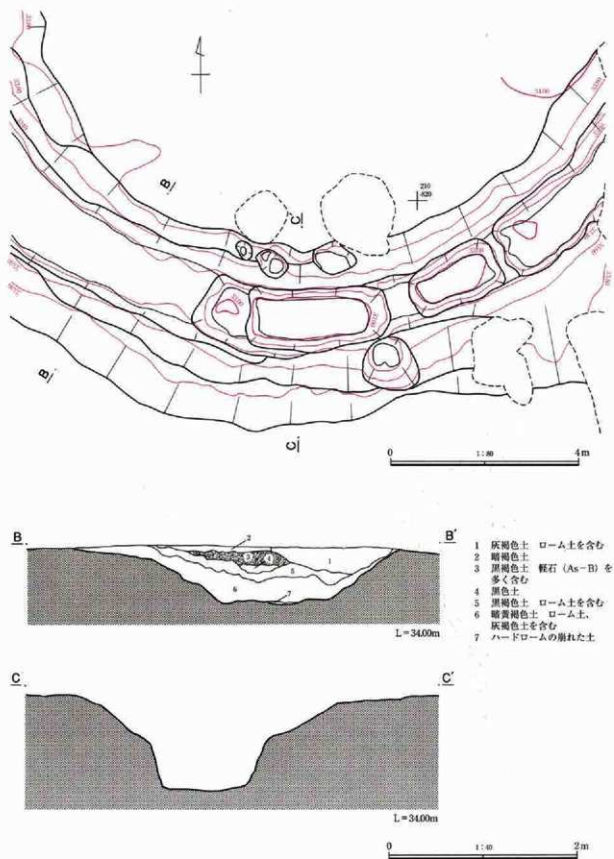
A



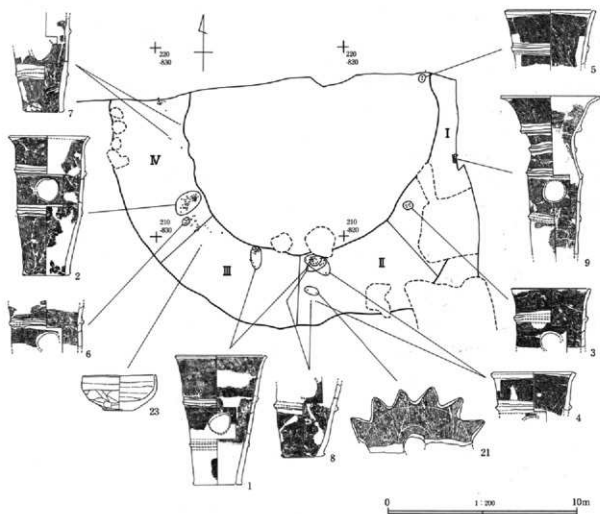
L=35.50m

- 1 灰土 瓦礫・ブタなどを多量に混入する
 2 暗褐色土と黄褐色土との混土 固くしまっている
 3 暗褐色土 軽石(Aa-A)が多量に含む しまりあり
 4 暗褐色土 軽石(Aa-A)がやや多く含む しまりあり
 5 褐色土 黄褐色土の小アロツクをまばらに含む
 6 褐色土 黄褐色土の軽石がやや多い
 7 暗褐色土 径1-2ミリのローム粒を含む やや粘性あり
 8 褐色土 黄褐色土アロツクを含む 黄褐色土アロツクを含む
 9 暗褐色土と黄褐色土との混土
 10 暗褐色土と黄褐色土との混土
 11 暗褐色土 砂質分多い
 12 灰土 軽石(Aa-A)が多量に含む
 13 暗褐色土 土色味が強い やや粘性あり
 14 褐色土 黄褐色土をまばらに含む ローム粒を含む
 15 黄褐色土と褐色土との混土 周縁面が崩れた土
 16 黄褐色土とハーロームアロツクとの混土
 17 暗褐色土 褐色土をまばらに含む ローム粒をまばらに含む
 18 暗褐色土 褐色土をやや多く含む ローム粒は少ない
 19 土質が黄褐色土 ローム粒を少量含む
 20 暗褐色土 褐色土を少量含む
 21 傾正基土 ローム粒を少量含む
 22 灰白色土 FA 黄褐色土アロツクを含む

第53図 6号墳横丘～周縁断面図



第54図 8号墳南端部平面図・断面図



第55図 6号墳出土遺物分布図

(3) 遺物出土状況(第55図)

遺物の出土は比較的多い。墳丘が削平されているため、一部の破片を除いて周堀内の埋土から出土している。そのうちの大部分はAs-Bを多く含んだ黒色土・黒褐色土とその上層から出土し、それより下層からはほとんど出土しないのは、他の古墳と同様の出土傾向である。

周堀の墳丘側に出土し、1個体の破片はある程度狭い範囲にまとまる場合が多いので、墳丘上から落ちてきたものと思われる。

第55図に見るように、周堀の全域からほぼ均等に出土しており、一カ所に集中することはない。ある程度まとまって出土しているのは、南端部と南東部

であり、この付近では埴輪が小破片となって散らばっていた。

第57図9の朝顔形埴輪は、ほぼ形を保ったまま東端(I区)の周堀埋土上部から出土した。その他の遺物はいずれも小破片となっていた。注目されるものとして驚えるのは双脚輪状文埴輪の一種といわれているものの破片があるが、これは南端部から出土している。

3 出土遺物

出土遺物には円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、土器がある。

円筒埴輪は比較的多く出土したが、全形が分かる

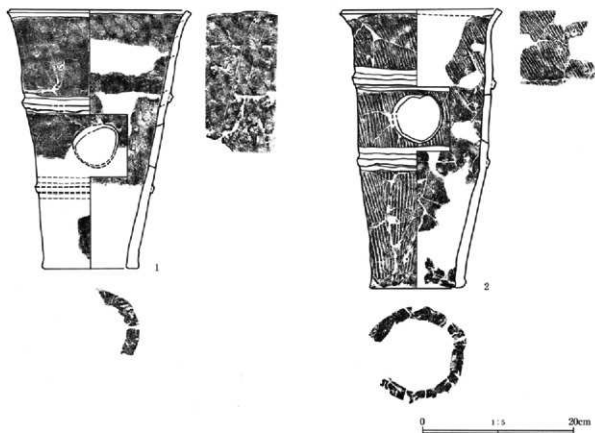
ものは少ない。

1・2は全形の分かるものである。2条3段構成であることなど、他の古墳のものと同様であるが、この両者は形態に大きな差が認められる。特に、高さが1は33.6cm、2は36.3cmと1期近く違い、1段目の長さが1は10.5cm、2が17cmと大きく違う。調整も1は外面タテ板ナデ、内面粗いタテナデであるのに対して、2はきわめて粗いタテハケを、外面は全体、内面は上半部だけに施す。器形の特徴も1が口縁に向けて緩やかに開くのに対して、2は1段目と口縁部以外はほとんど開かずほぼ垂直に立ち上がる。出土埴輪のうち、1の特徴に近いものは3・4・6・8があり、4は縦刻も共通する。2の特徴に近いものには7（ただし、これは1段目が短い）・5があり、これである程度の大きさに復元できた埴輪を網羅してしまうので、この両者が6号墳

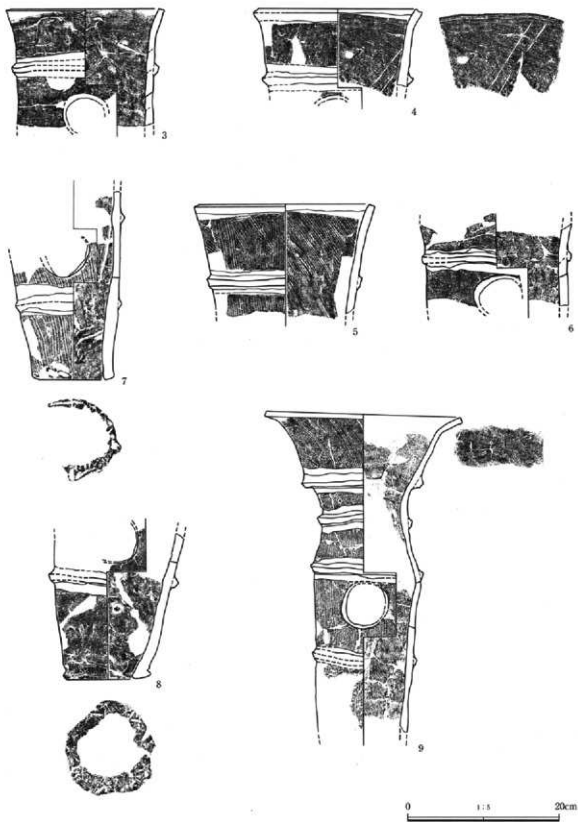
の円筒埴輪のほとんどをしめるものと思われる。ただし、小破片には違う特徴のものもあるので、すべてその両者の特徴に収まるわけではない。

9は朝顔形埴輪である。先述のようにほぼ形を保ったまま出土したが、底部のごく一部が失われている。胴部が細く、朝顔部の開きがあまりない、特徴のある形である。

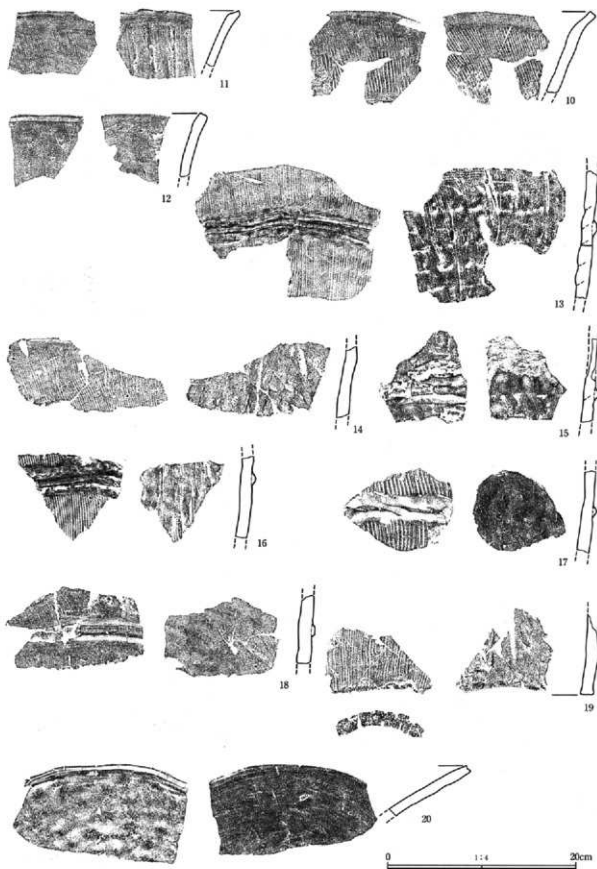
形象埴輪と思われる破片は2点出土した。21は鬘、あるいは双脚輪状文埴輪の一種と考えられているものの破片である。本体部分のほぼ上半分くらいの破片であると思われ、6本の三角形の突起が残り、下部には円孔が見られる。両面ともハケメで丁寧に調整されているが、片面には全面に線刻で模様が施されて表裏を表している。22は鬘の破片である。21と異なり突起がなく、外形が丸い。これが本来の鬘形の埴輪である。両面ともハケメで調整し、片面には



第56図 6号墳出土埴輪(1)



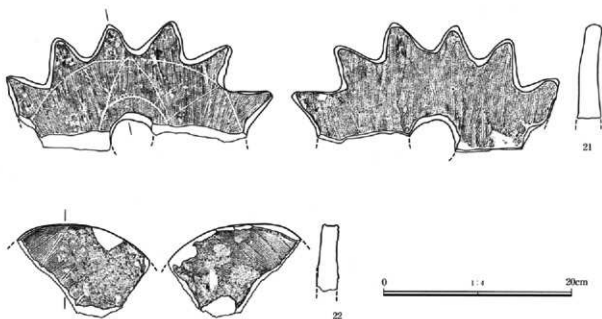
第57圖 6号墳出土埴輪(2)



第58図 6号墳出土埴輪(3)

6号墳出土土師輪範表 (凡例は各圖「凡例」参照)

No.	器種	計測値	調整		刷毛	突帯	透孔	縁刻	色調	出土位置	備考
			外面	内面							
1	内筒	①33.6 ②23.3 ③(12.6)	弁板付 →口縁3コ付	粗いフチ付 →口縁3コ付	—	B 剥離多	不整形円形	内3//	にぶい 橙7.5Y R7/4	Ⅱ・Ⅲ区	
2	内筒	①36.3 ②22.6 ③13.1	フチ付 →口縁粗い3コ付	上半フチ付下半フチ付 →口縁3コ付	3	B	円形	内3//	浅黄褐 7.5YR /4	Ⅳ区	
3	内筒	①— ②(19.6) ③—	弁板付 →口縁粗い3コ付	フチ付 →口縁付近粗い3コ付	—	A・B	円形か	?	にぶい 黄橙	I区 一部Ⅱ区	10YR7/4
4	内筒	①— ②(21.0) ③—	弁板付 →口縁3コ付	フチ付 →口縁付近3コ付 →口縁粗い3コ付	—	C	円形か	内3//	にぶい 黄橙	Ⅱ区 一部Ⅲ区	10YR7/4
5	内筒	①— ②23.5 ③—	フチ付 口縁付 近一部フチ付 →口縁3コ付	フチ付 下部欠 →口縁3コ付	3	A	?	?	橙 7.5YR /6	I区	
6		①— ②— ③—	弁板付 上・下部欠	フチ付 上・下部欠	—	A 不整形 剥離	不整形円形	?	にぶい 橙7.5Y R7/4	Ⅳ区	
7		①— ②— ③11.5	フチ付 口縁欠	フチ付 底部付近コ フチ付 上部欠	3	C	円形か	?	橙 7.5YR /6	Ⅳ区	
8		①— ②— ③12.3	弁板付 上部欠	フチ付 上部欠	—	C	円形か	?	にぶい 黄橙	Ⅱ区	赤みがひどく 雑な作り 10YR7/4
9	朝顔	①— ②26.1 ③—	フチ付 朝顔部 フチ付 →口縁3コ付	円筒部 フチ付付 朝顔部 フチ付コ付 →フチ付	7~8	B	円形	内朝顔部一	橙 5YR7/6	I区	
10	内筒	小破片	フチ付コ付 →口縁3コ付	フチ付コ付 →口縁3コ付	3	?	?	?	にぶい 橙	Ⅲ・Ⅳ区	7.5YR7/4
11	内筒	小破片	フチ付 →口縁3コ付	フチ付 →口縁3コ付	5~6	?	?	?	にぶい 橙	Ⅲ区	7.5YR6/4
12	内筒	小破片	コ付	コ付	—	?	?	?	にぶい 橙	I区	7.5YR7/4
13	小破片	フチ付	フチ付	口縁付近コ付 →フチ付	7~8	A	円形	外3一 か	にぶい 地	Ⅳ区	7.5YR6/3
14	小破片	フチ付	フチ付	フチ付	5~6	?	?	?	にぶい 黄橙	Ⅳ区	10YR7/4
15	小破片	摩滅	フチ付	フチ付	摩滅	A	?	?	にぶい 橙	Ⅳ区	7.5YR6/4
16	小破片	フチ付	フチ付 →フチ付	フチ付	4	A	?	?	橙 5YR7/6	I区	
17	小破片	フチ付	フチ付	フチ付	2~3	C	?	?	にぶい 橙	Ⅱ区	7.5YR6/4
18	小破片	フチ付	フチ付	フチ付 →フチ付	5~6	A	?	?	にぶい 地	Ⅳ区	7.5YR6/3
19	小破片	フチ付	フチ付	フチ付	2~4	?	?	?	橙 5YR6/6	I区 一部Ⅱ区	
20	朝顔	小破片	粗いコ付	コ付	—	?	?	?	にぶい 橙	Ⅳ区	7.5YR6/4



第59図 6号墳出土形象埴輪

線刻を施す。胎土・焼成・色調から厚さ・調整まで21に似ている。色調はにぶい橙(5YR6/4)であり、円筒埴輪とかなり異なって赤みが強い。胎土には砂を含むほか、赤色のやや大きな粒子(径1mm程度)を含む。甍と思われる破片はこれら以外に、8号墳から小破片が出土しているが、これも色調・胎土・焼成が共通する。甍形の埴輪だけ、生産が異なっているらしい。これら、甍形の埴輪の下の部分と思われる破片は全く出土していない。おそらく樹立していた際、上になっていた部分が最もはじめに折られて周堀の中に落ち込み、残った部分は削平を受けて失われてしまったものと思われる。

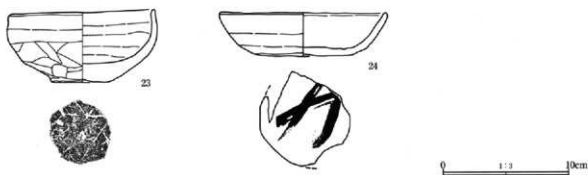
土器は2点掲載できた。このうち23の土師器碗は周堀南西部(Ⅲ区)の周堀埋土下部から出土しており(PL. 31)、この古墳に伴う可能性のあるものであるが、24は明らかに混入である。Ⅰ区の表土から出土している。底部外面には墨書があり、「力」と読める。

4 小結

直径(周堀内径)13mの円墳と思われ、2号墳とほぼ同規模である。周堀が深く、比較的残りがよかった。墳丘盛土下の旧表土の上面にF Aが面的に残っているため、F A降下直後の構築と思われる、それが正しければ6世紀前半の比較的早い時期のものと思われる。

周堀に土坑を連結させたような深い部分があるなど、構築方法にやや特徴がある。周堀底に段差があるのは、同じく盛土下にF Aが見られる9号墳にも共通するが、9号墳では土坑が連結したような形態ではなく、少なからぬ差異がある。

埴輪の出土は多くないが、大きく二種に分けられるなど、特徴が比較的明確である。



第60図 6号墳出土土器

6号墳出土土器観形表

遺物番号	種別 器種	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
23	土師器 碗	完形	口径 11.6 底径 4.9 高さ 5.5	砂粒・白色粒子含む 焼成良好 橙色(2.5YR6/8)	口縁外面～内面 ヨコナデ 体部外面 ヘラケズリ 底部外面木葉痕 体部外面に黒痕
24	土師器 杯	1/3	口径 (13.2) 底径 8.0 高さ 3.3	砂粒多く含む 焼成良好 橙色(5YR6/6)	体部外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ 底部外面 墨書「力」

7 7号墳

1 調査前の状況と発掘調査

7号墳の付近は、北側は6号墳に続く山林に、南側は養護学校に向かう東西方向の未舗装の道路になっていた。今回の調査区の南側には、その道路を挟んで直径5mほどの小山（高さ約0.6m）があったので、この付近に古墳があることは事前に予想していた。しかし、その小山があまりに低く小さいことから、どのような方向に墳丘が延びるかは断定できず、古墳の位置や形までは分からなかった。

調査は平成13年度に3区東として、さらに平成16年度に4区として行った。平成13年度では、当初3区東とした調査区の南東隅に周堀がわずかにかかっただけであった。そのため、その時点ではこれが本当に古墳の周堀なのかどうかは判然としなかった。その後、養護学校への通路を付け替えて南東側を拡張したところ、この堀が円形のカーブをえがいていることが判明し、古墳であることがほぼ確実となったものである。周堀の位置から、事前の予想通り南

側の小山が墳丘の名残であると思われる。さらに平成16年度には4区として古墳の西側を調査したが、残念ながらその地区でも調査区は古墳周堀の外側にかかるのみであり、古墳としてはごく一部の調査にとどまらざるをえなかった。

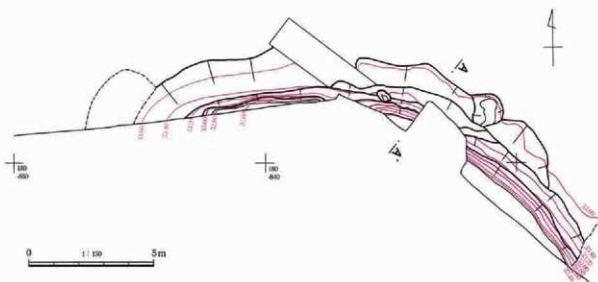
2 墳丘と周堀

(1) 墳丘 (第61回)

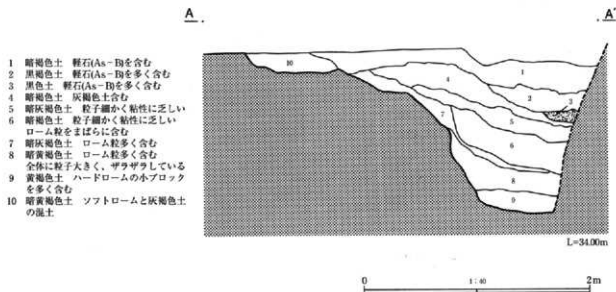
調査区外となっており、今回は全く調査できていない。先述のように、養護学校への通路をはさんだ南側には墳丘の名残と思われる小山が残っている。ただし、この小山は位置的にやや離れているので、墳丘の南端部分になるか、あるいは、墳丘の土が二次的に移動してしまったものかもしれない。

(2) 周堀 (第61・62回)

調査区には周堀の外側のみがかかるので、断面形状、幅などは不明である。外側の斜面は傾斜がかなりきつい。今回調査した古墳の中で、これほど急角



第61図 7号墳平面図



第62図 7号墳周堀断面図

度でかつ深い周堀はこのみであり、特徴的である。ただし、この傾斜は底面から1mほどで急に弱まり、そのまま緩やかに広がる。周堀外径は、かなり強引に計算すると、直径23~24mになると思われるが、もちろん円墳である証拠はない。

埋土には、底面から0.8~0.9mのところAs-Bを含む黒色土が堆積している。FAは見られない。

(3) 遺物出土状況

遺物の出土はきわめて少ない。周堀埋土の中からわずかな埴輪片と須恵器片が出土しているにすぎない。これは、本来遺物の出土が多い墳丘側を調査していないためだと思われ、そのため埴輪の出土が少ないことをもって、この古墳が埴輪を持っていないと断定することは危険であると思われる。

3 小結

一部しか調査できなかったが、円墳であるとすれば、周堀外径で測って直径23~24mであると思われる。これは8号墳とほぼ同じ規模であり、それを参考にすれば、周堀内径で18m位になると思われる。今回調査した古墳の中では中程度の規模をもつこと

になる。遺物は少なく、時期を特定することはできないが、周堀にFAが見られないので、FA降下後の築造であると思われる。

8 8号墳

1 調査前の状況と発掘調査

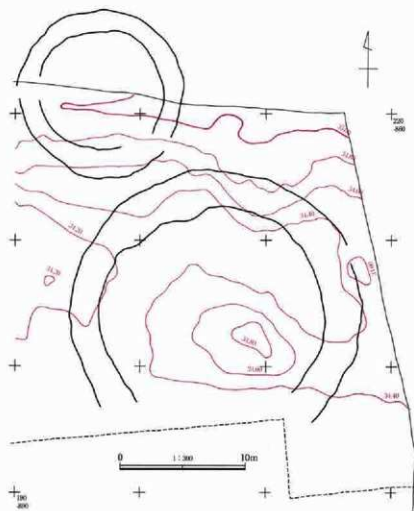
調査区南側にある。調査前には山林となっていたが、樹木を伐採し、下草を刈り取ったところ、墳丘と思われる地膨れ状の高まりと、その周りに周堀と思われる窪地が巡っているのが認められた（第63図）。そのため、この3区西地区については、発掘前の現況地形を測量し、古墳の残存状態を記録することにした。高まりと窪地とは、その最も低いところと高いところとの比高は65cmほどであり、これによって大体の古墳の規模を推定することができた。今回調査した古墳の中で最も残りがいいものである

といえる。ただし、南端部は養護学校敷地となっており、地表面は全く平坦にされ、更に校舎の建設によって一部が地下深くまで破壊されていた。

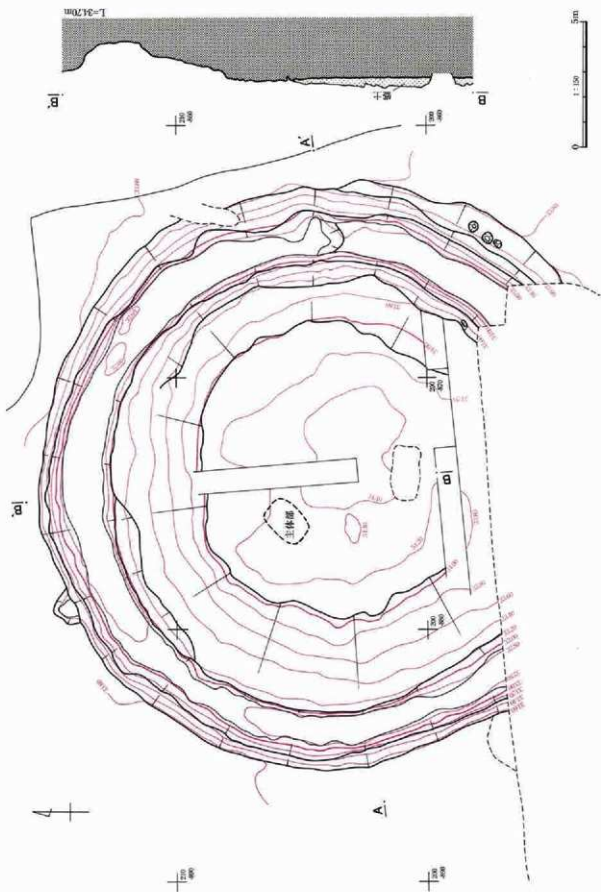
調査は平成13年度に3区西として行い、その後南側を平成16年度に4区として行った。しかし4区の調査では大部分が校舎の破壊部分に当たってしまい、実際に調査できたのは第68図に示したようなごく狭い範囲である。3区の調査では、調査前に古墳の大体の位置・形状が判明したため、中心と思われるところから東西南北に十字のベルトを設定して調査を行った。表土除去は、墳丘部は主体部や円筒埴輪

列などの施設が残存している可能性があったため、人力で慎重に行い、周堀部分など、墳丘から遠いところは表土と擾乱土が厚かったため、バックホーによって行うこととした。このように表土から人力で調査できたことが、後述のような形象埴輪の詳細な調査ができた要因になった。

この古墳では今回調査の中では唯一主体部が残っていた。調査では構築過程を把握するために一工程ごとに記録を取りながら、石櫓を解体した。内部の土は全て取り上げ、調査後に洗浄した。



第63図 8号墳調査前現況地形図



第64図 8号墳平面図・断面図



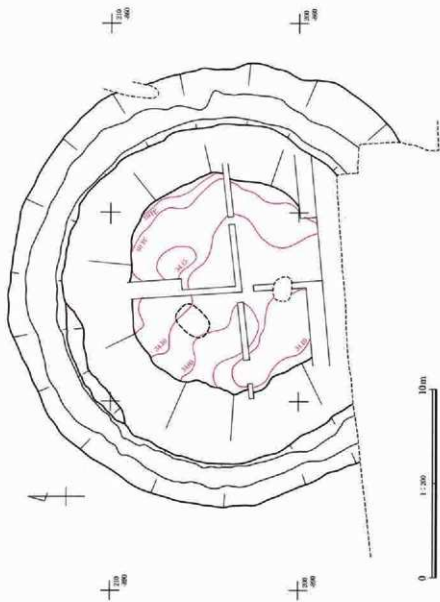
第65図 8号墳断面図



2 墳丘と周堀

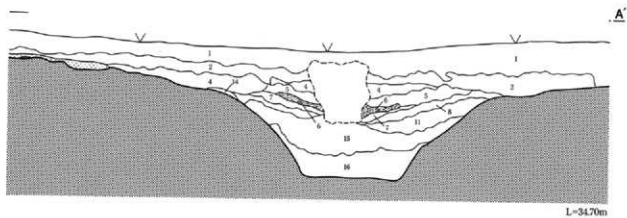
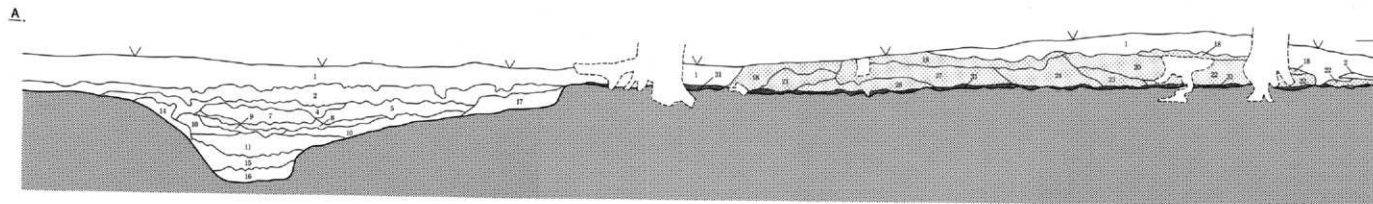
(1) 墳丘 (第63~67図)

墳丘は全体に削平され、皿を伏せたような形状となっていた。規模は周堀内側で測って、直径約18mの円墳である。盛土は中心部に直径11m分が残っており、それより外側は周溝に向けて緩やかに下るような傾斜となっていた。もちろん、この傾斜は本来のものではなく、後世の削平によるものである。そのため1号墳に見られるような、墳丘外周の基壇状のテラスは不明瞭である。墳丘盛土はこの中心部の



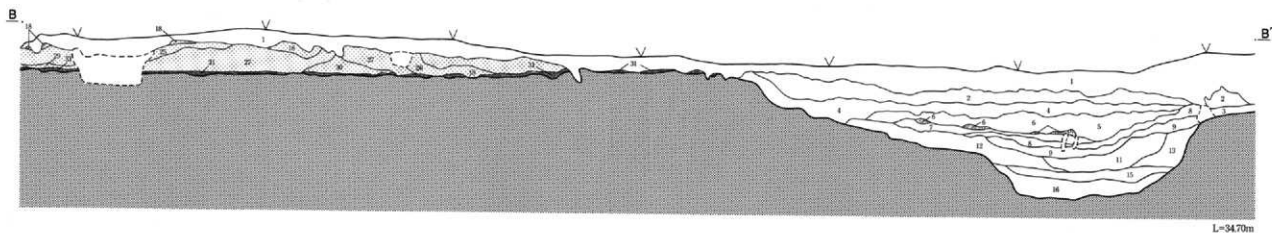
第66図 8号墳旧地表面





L=34.70m

- | | |
|--------------------------|---|
| 1 表土 砂利・碎石・ゴミなどを含む | 17 褐色土 粒子細かい |
| 2 砂質の褐色土と粘質の黄褐色土の混土 | 18 黄褐色土 薄いブロック状の部分あり (墳丘盛土上部) |
| 3 2層より黄褐色土の割合が多い | 19 黒褐色土と灰土の混土 |
| 4 黒褐色土 粘性に乏しい | 20 暗黄褐色土 漸修礫土の崩れた土とハードロームブロックとの混土 しまりやや弱い |
| 5 7より色がややよい | 21 27とソフトロームとの混土 わずかにF Aを含む 細くしまっている |
| 6 黒色土 軽石 (As-B) を多く含む | 22 ソフトロームの崩壊土とハードロームブロックとの混土 |
| 7 黒色土 | 23 20に似るがハードロームブロックが少ない しまりややよい |
| 8 黒色土 粘性あり | 24 20上にソフトロームが30%程度まじる混土 しまりよい |
| 9 黒褐色土の中に黄色ロームを半分くらい含む | 25 暗黄褐色ローム質土 しまりよい |
| 10 黒褐色土の中に黄色ロームを少量含む | 26 黒褐色土 ロームブロック・F Aを含む |
| 11 暗褐色土 | 27 暗褐色土 わずかにF Aを含む しまりややよい |
| 12 暗褐色土中に中粒の黄褐色土を含む | 28 黒褐色土 F Aがブロック状に分布する |
| 13 15のロームブロックよりも大粒のものが多し | 29 暗黄褐色ローム質土と黒褐色土との混土 F Aを含む しまりよい |
| 14 黄褐色ロームがくずれた土 | 30 暗黄褐色土 F Aを含む しまりややよい |
| 15 暗黄褐色土とハードロームブロックの混土 | 31 F A (墳丘構築時の地面と考えられる) |
| 16 暗褐色土とロームブロックの混土 | |



L=34.70m

0 1:50 2m

第67図 8号墳丘～周堀断面図

ところに、最も厚いところで40～50cmほど残っている。ローム質の黄褐色土が多く、ロームブロックも多く含んでいるので、周堀掘削土をそのまま盛り上げたものと思われる。盛土の下にはF Aが層厚5cmで堆積している。今回調査した古墳の中ではもっともF A層の残りがよい。層が厚く、またほとんど途切れることなく広く堆積しているので、あまり攪乱を受けていないものと考えられる。この古墳の築造時期がF A降下後あまり時期をおかなかったことを窺わせる事実である。

後述する主体部は墳丘の北東部にあるが、かなり偏った位置にあるので、他に主体部があった可能性がある。しかしながら、その他の場所には主体部、あるいはそれに関連するような遺構は見つかっていない。

なお、石などの出土はほとんど無く、葺石は施されていないものと思われる。

(2) 周堀 (第64～67図)

調査範囲内では全周する。南側は養護学校の校舎によって破壊されていたが、破壊部分は全体から見れば少ないので、そのまま全周し、円墳になるものと思われる。堀の断面形状は逆台形であるが、周堀の内側では削平のため傾斜がなだらかになってしまっている。上幅は2.1～3.0m、下幅は0.5～1.7mであり、古墳の規模の割には比較的小規模な周堀である。底面は緩やかな凹凸があるものの全体的には平坦であり、深さは周堀外側の確認面から測って1.0～1.3mである。

埋土には底面から0.8m付近にAs-Bを含む黒色土・黒褐色土が堆積している。

(3) 旧地表面 (第66図)

先述のように墳丘盛土の下にはF Aが比較的厚く堆積しており、盛土と地山との区別はきわめて容易であった。そのため、盛土を取り除くことによって墳丘構築前の旧地表面を簡単に調査することができた。

遺構面には古墳構築以前の遺構は何ら見られなかった。その標高は34.00mから34.15mであり、15cm

ほどの緩やかな凹凸がある。この高さは1号墳で調査した旧地表面とほぼ同じであり、この高さがこの地域の古墳構築前の標高であったことが分かる。また、6号墳のF A下面の標高は34.05m前後、9号墳のF A下面の標高も34.05～34.10mであり、ほとんど変わらない。古墳構築以前のこの地域は広い範囲でほぼ平坦な地形であったことが分かる。

(4) 遺物出土状況 (第68・69図)

遺物は東側では少なく、北側から西側にかけて多く出土した。他の古墳の出土傾向と同じく、As-B前後の黒色土・黒褐色土から多く出土する。それ以下の層からの出土はきわめて少ない。

第68図に見るように、円筒埴輪が墳丘の周堀際をめぐるように出土している。これらは小破片になっていたものも多かったが、あまり広範囲に散らばることはないで、原位置に近いところから出土しているものと思われる。この出土傾向から見ると、おそらく1号墳と同じく、この位置に円筒埴輪がめぐっていたものと思われる。

北東部(IV区)では墳丘が削平された緩やかな斜面に多くの埴輪片が散っていた(第69図)。その中には人物埴輪や馬形埴輪が含まれている。この位置の出土分布を見ても、周堀際には円筒埴輪が、その内側には形象埴輪がある。おそらくこの位置においても、円筒埴輪が周堀際をめぐり、より内側に形象埴輪が配置されていたものと思われる。

形象埴輪はかなり小破片になっていたが、それぞれの破片の分布は比較的狭い範囲にまとまっており、ひどい攪乱を受けたわけではないと思われる。いずれも上部の破片しかないので、設置されていた場所からまず上部が破損してこの場所に落ち込み、下部はその後の削平によって全く失われてしまったものと思われる。後述するように人物埴輪が3体、馬形埴輪が1体復元できた。そのほか、人物埴輪の手(第84図45)が馬形埴輪のすぐ北側から出土している。今のところ馬を引く馬子の埴輪が見つからないので、あるいはこの手が馬子のもものかもしれない。それに関連して第84図46のような鎌を腰に下

第3章 調査の成果

げた裾部の破片もⅢ区から出土している。同じく馬子の破片である可能性が考えられよう。それ以外の形象埴輪は、主としてⅣ区から出土している。

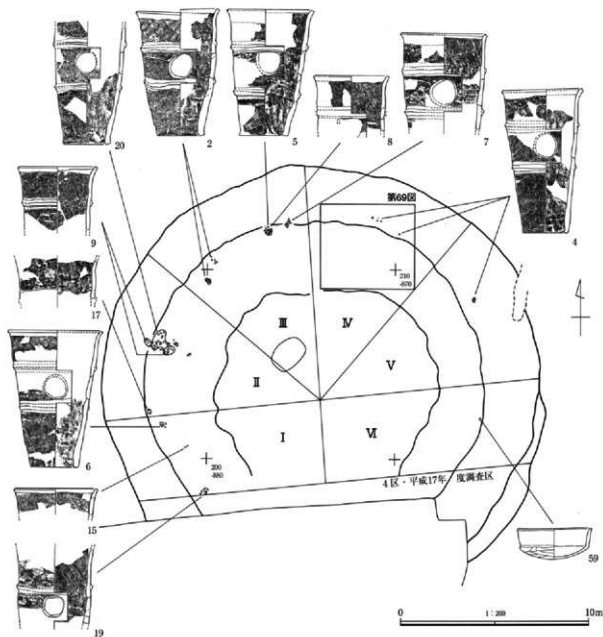
このように、形象埴輪はⅣ区という、きわめて狭い範囲に集中しており、この近くに樹立されていた可能性が高い。

土器は東側から出土した。第89図59の土師器環はⅥ区の周堀際から、同図60～62はⅤ区から出土している。

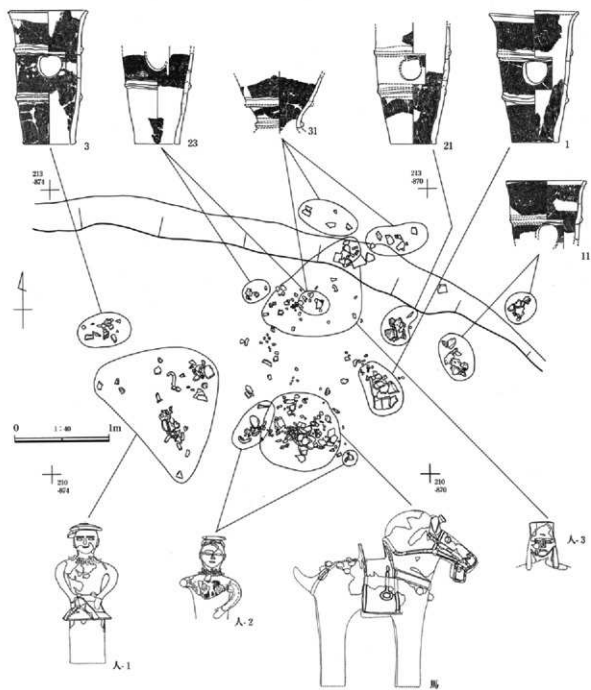
先述のように墳丘盛土も残っていたが、その周辺

からの遺物の出土はきわめて少ない。

なお、主体部の中からは第137図にあげたような、ナイフ形石器が出土している。黒曜石製であり、この古墳の西側から見つかった、2号ブロックとの関連が考えられる。



第68図 8号墳出土遺物分布図



第69图 8号墳出土遺物分布图·部分

3 主体部

(1) 概要

主体部は墳丘の北西部から見つかった。いわゆる竪穴式小石塚である。

確認時は長さ1.9m、幅1.3mの長方形の土坑と思われた。当初その位置から主体部だとは思わず、調査を開始したが、埋土を取り除いたところ粘土がドーム状になっていることが判明し、主体部であることが確定となったものである。しかも残存状態は完全であり、全く破壊されていなかった。

主体部に入る土坑は長さ1.9m、幅1.3mの長方形で深さ0.55mである。調査では多少掘りすぎてしまったため、写真では少し大きくなってしまったが、本来の大きさは第70図に示したとおりであると考えられる。

石塚の周囲の粘土の被覆は長いドーム状で、長さ1.6m、幅0.9～0.7m、高さ0.4m。土坑の中にはぼ一杯に構築されている。その中に細長い丸石によって小石塚が作られている。それは外側で測って長さ1.5m、幅0.75～0.6m、内法は長さ1.1m、幅0.3～0.2m、高さ0.25mであり、きわめて狭い石室である。人間が入るとすれば、よほど小さな子供でなければ無理であろう。全体として北東側が広く、南西側が狭くなっている。このような形は粘土の被覆にも反映している。

長軸の方向はほぼ真北から45°ずれ、北東—南西の方向である。

石塚本体は細長い石を3段に組んで作られ、両端部にはやや大きく四角い平石を立てて箱状にしている。底面には平石を敷き並べている。きわめて丁寧な作りであるといえよう。

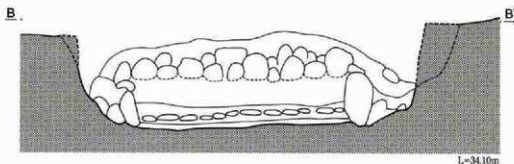
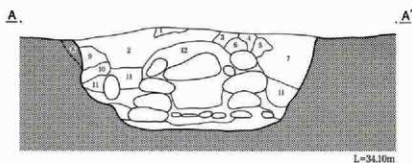
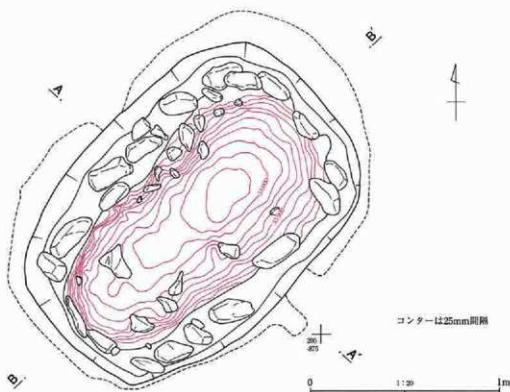
石塚の広い方の端部の外側には小さな石が2つ並ぶように置かれていた。その位置から何らかの意味があるようにも思えるが、その役割等は不明である。

石は合計192個を数えた。その石材は、安山岩135個、花崗閃緑岩17個、デイサイト14個、流紋岩7個、チャート5個、頁岩4個、安山岩質溶岩4個、チャ

ート4個、凝灰岩1個、ホルンフェルス1個である。

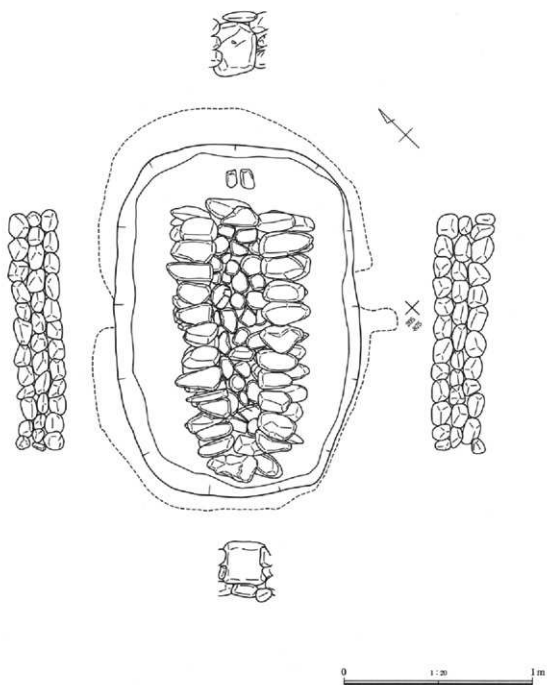
石塚内部には、肉眼では遺物や人骨を見出すことはできなかった。そのため、内部の土は全て取り上げて水洗いをするにしようとしたが、それでも遺物や人骨などを見出すことはできなかった。おそらく、よほど腐りやすいものが入っていたか、あるいはもともと何も入っていなかったのではなからうか。このため、この主体部がどのような役割を果たしているのか、それを考える明確な資料を得ることはできなかった。

この古墳から発見された主体部はこれのみである。しかし、これがこの古墳の唯一の主体部であるとする、その位置があまりに偏りすぎ、また、規模が小さく、人骨、副葬品が出土しないなど、不自然な点が多い。そのため、おそらく本来の主体部は他に存在すると思われるが、そのような痕跡を見出すことはできなかった。墳丘には中心部に盛土が残っていて旧地表面が保存されていたが、それなのに主体部が破壊されていたとすれば、墳丘の浅い位置に構築されていたと考えるしかないことになる。今回調査した古墳の中で、旧地表面が広く残っていた古墳はこの8号墳のみなので、他に考える資料に乏しく断定することはできないが、そのような主体部を考えるのが自然であろう。高林古墳群中の古墳には、礎石を採用する古墳がいくつか見られるので、そのような主体部が墳丘の浅い位置に存在していたとも考えられよう。



- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色土とローム粒との混土 FAのブロックを含む | 8 掘りすぎ |
| 2 におい褐色土 径5mmのローム粒とFAをわずかに含む | 9 暗褐色土 ローム粒含む FAわずかに含む |
| 3 黒ボク土とソフトロームの混土 FAを含む | 10 黒ボク土のブロック FAほとんどなし |
| 4 暗褐色土 ローム粒含む | 11 におい暗褐色土 細かい粘土粒を含む |
| 5 におい暗褐色土 FA含まない | 12 褐色粘土 |
| 6 黄褐色ロームと径3~5mmの粘土ブロックの混土 | |
| 7 におい褐色土 ソフトロームを含む | |
| 下部に粘土ブロックが入る | |

第70図 8号墳主体部平面図



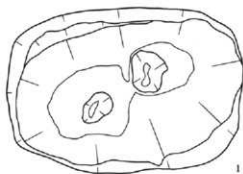
第71図 8号墳竪穴状小石梯平面図・展開図

(2) 構築過程

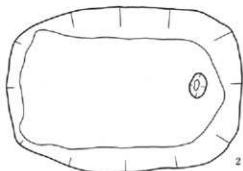
調査の過程で把握できた構築過程を次に述べる。

第1段階 土坑を掘る

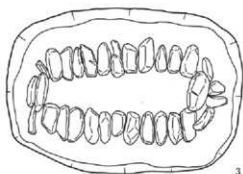
まず、長さ1.9m、幅1.3m、深さ0.8～0.9mの土坑を掘る。底面には凹凸があり、一部深さ1mに達するところもある。

**第2段階 埋め戻して底面を平坦にする**

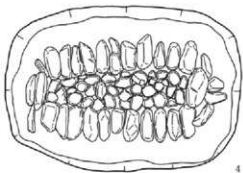
土を30～40cmほど埋め戻して、底面をほぼ平坦に整える。右図2には右側に小穴があるが、これは石椁の石の痕跡であって当初のものではないと思われる。

**第3段階 1段目の石を並べる**

両端部には四角い平石を立て、側面には細長い石を並べる。細長い石は、長さ20～30cm、直径10cm程度のもので、広い方の先端を内側に向け、内側を揃えて並べている。両端部に置く平石は一边20～25cmのもので、後ろにも石を置いて補強している。これによって作られる内法は長さ1.1m、幅20～30cmである。側面は直線ではなく、やや胴張りをもち、北東側を広く、南西側を狭くする。

**第4段階 内側に平石を敷き並べる**

内側の底に薄く土を入れ平たい石を敷き並べる。これらの石は径10cm前後の石で、上面がほぼ平坦になるように全面に敷いている。石の並べ方を見ると、隙間があかないように方向を考えて置いている様子が見て取れ、丁寧な施工である。



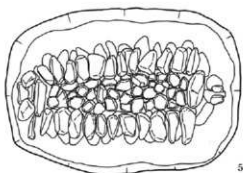
0 1:30 1m

第72図 主体部構築過程(1)

第3章 調査の成果

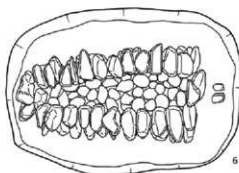
第5段階 2段目の石を積む

1段目と同様に、細長い石を広い方の小口を内側に向けて並べる。一部方向を違えて、石が良く組み合うようにしている場所がある。多くの石は1段目よりも大きさがやや小さく、1段目の石と内側をほぼ合わせて壁が垂直になるようにして乗せている。上面はほぼ水平になっており、3段目が置きやすくなる配慮がなされている。このあと、石櫛の外側に土を入れて補強する。内面にもこの時点で薄く土を入れている可能性がある。



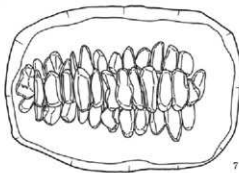
第6段階 3段目の石を積む

同様に細長い石のより広い方の小口面を内側に向けて積む。石の大きさは2段目よりもやや大きいものが多い。上面のレベルは2段目よりもルーズで、若干の凹凸が認められる。これで石室部分ができあがったので、ここに何かを取めるとすれば、この時点で収めたはずである。



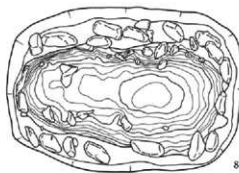
第7段階 蓋石を並べる

これまでよりも一回り大きな石を天井部に並べて蓋をする。石は長さ30~35cm、幅10cm前後の細長い石で、密接して並べている。並べるのは1列ではなく、さらにその上にも石を乗せているところがある。



第8段階 粘土で被覆する

粘土を厚さ5~10cm程度被せて全体を被覆する。その外形は石櫛の形を反映し、北東がより大きくなっている。その後土坑を埋め戻すが、その際、細長い石をその周辺に入れており、意識して入れているものと思われる。



第73図 主体部構築過程(2)

4 出土遺物

遺物は1号墳に次いで多く出土したが、その数量の差は大きく、実数はさほど多くない。遺物のほとんどは埴輪片であり、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、形に分かる形象埴輪が今回の調査で唯一出土した。その他土器も出土している。

(1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪

出土した破片数は多いが、小破片になってしまったものが多く、全形が分かるものは少ない。底部から口縁まで残り、高さが分かる個体は図示した6個体しかない。

円筒埴輪は接合により28本以上あることが確認できた。1号墳のものに比べて作りが雑なものが多く、器形の歪みが大きい傾向がある。また、比較的小さなものが多く、高さが分かる6点では、最も高いもので37.4cm、平均では34.1cmとなる。形態的には2、3のようにずんぐりとしたもの、4のようにやや細いものなど、バラエティに富む。外面調整はタテハケが大部分であるが、1号墳には見られなかった板ナデのものが少数ある。内面は上半部を中心にタテあるいはナナメ方向のハケを施すものが多い。突帯は低く、三角形になるものが多く見られ、仕上げナデなども雑になっている。透孔は正円形と半円に近いものがある。色調は「土色帳」では橙やにぶい黄橙と表現される色が中心であるが、1号墳のものに比べて赤みが薄く、白っぽい印象がある。線刻は13個体で見られた。一や×、＝、\ などであるが、数が少ないため、これらが何を表すのかまでは分析できていない。

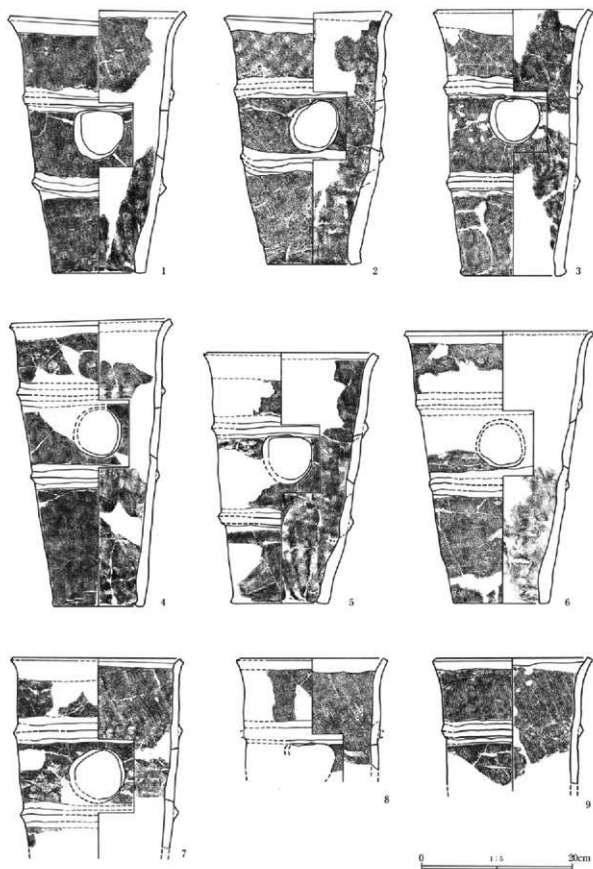
29以下の3個体は朝顔形埴輪である。いずれも円筒部から朝顔部に移る部分の破片である。3点ともよく似ており、これがこの古墳の朝顔形埴輪の特徴であると思われるが、朝顔部の開きが浅く、あまり外に開かない。その点で1号墳の62(第22図)とは大きく異なると言える。しかし、同じく埴丘盛土の下にF Aのある6号墳の9(第57図)とはよく似ており、この点から1号墳との時期差を感じさせる。

(2) 形象埴輪

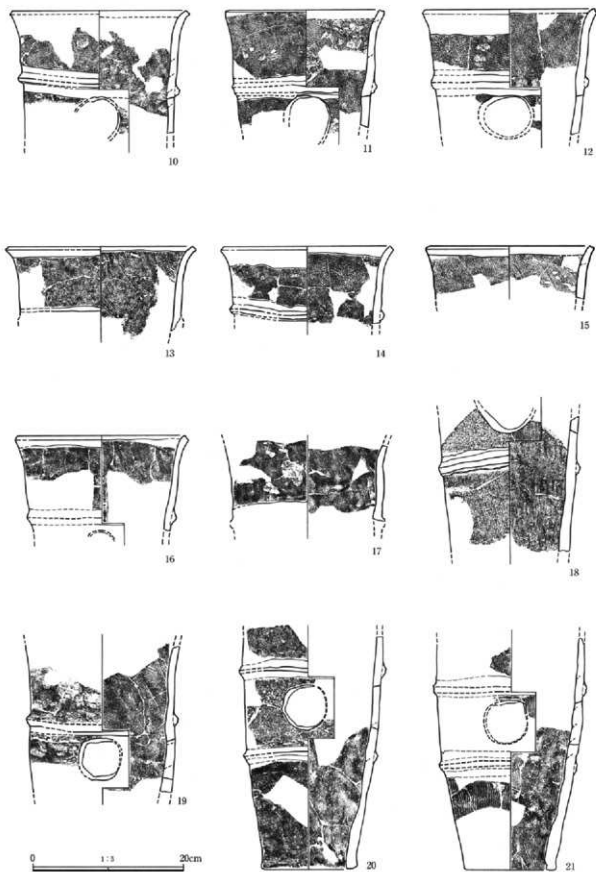
形象埴輪は今回調査した古墳の中で最も多く、特に3個体の人物埴輪、1個体の馬はある程度の破片がそろい、復元することができた。

いずれも造形的に優れたものであり、この時期の形象埴輪の典型例というべきものである。

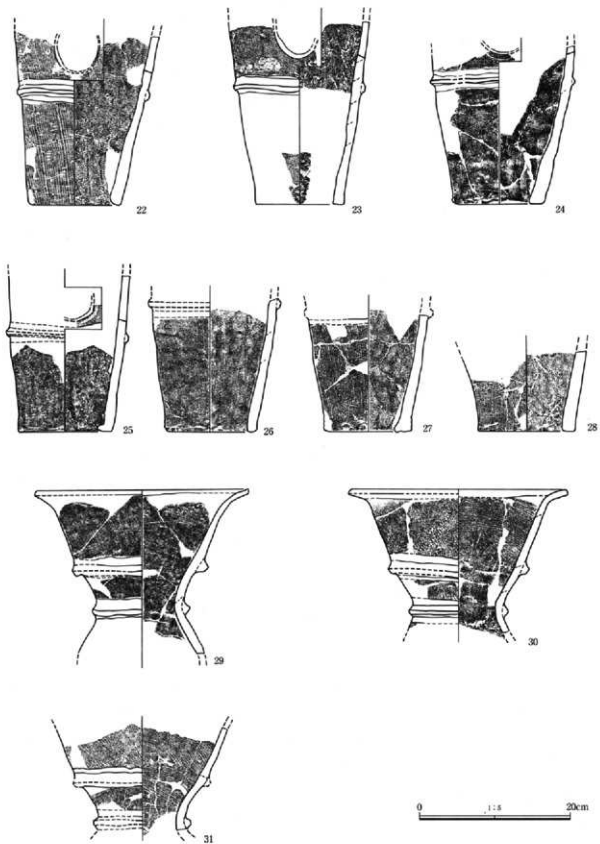
出土した形象埴輪は、ある程度の形に復元できた人物3、馬1のほか、小破片として、人物が少なくともあと1～2人、鬘形埴輪、盾か鞆、家形埴輪などの存在が推定できる。少数が北西部(Ⅲ区)から出土している他は、大部分が北東部(Ⅳ区)から出土しているが、先述したように樹立していたところから一部が破損して落ちたような出土状態であり、だとすれば、本来の位置からかなり移動していることも考えられ、古墳の北東部に配列されていたと断定するのは危険であることになる。



第74図 8号墳出土埴輪(1)



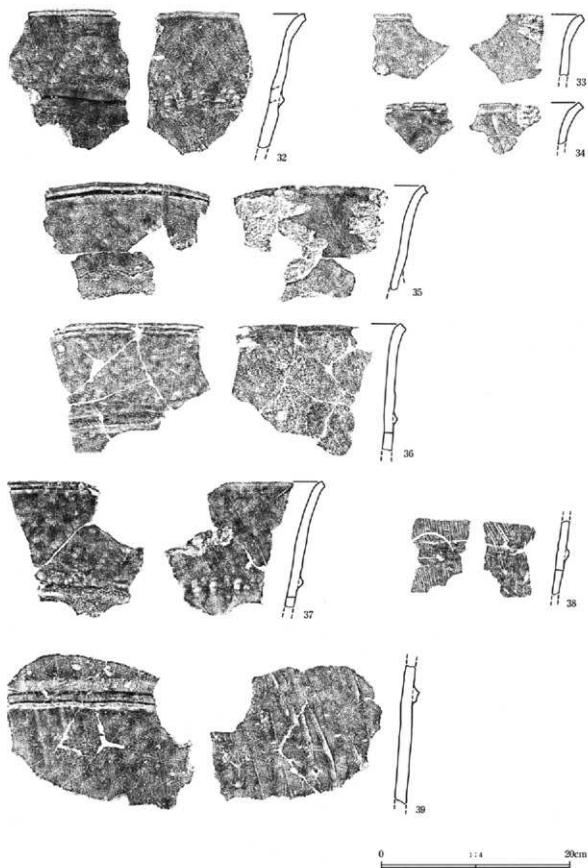
第75圖 8号墳出土埴輪(2)



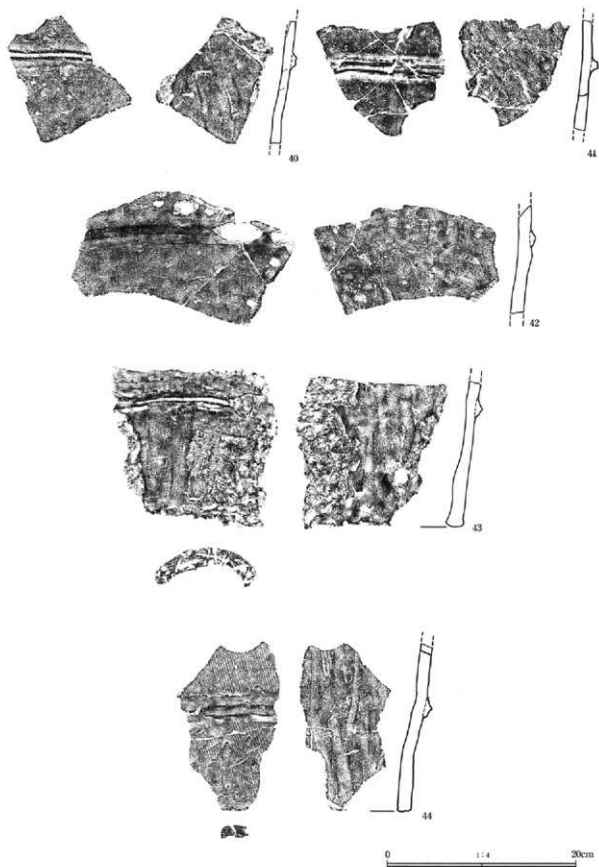
第76図 8号墳出土埴輪(3)



第77図 8号墳出土埴輪 線刻・底面



第78図 8号墳出土埴輪(4)



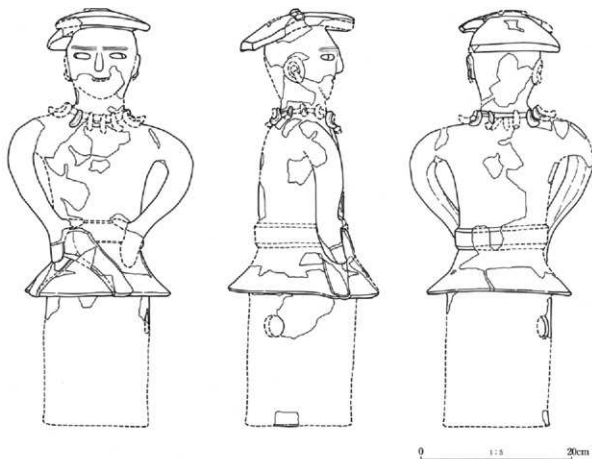
第79圖 8号墳出土土曜輪(5)

第3章 調査の成果

8号墳出土埴輪観察表 (凡例は巻頭「凡例」参照)

No.	器種	計測値	調整		刷毛	突起	透孔	麻削	色調	出土位置	備考
			外面	内面							
1	円筒	①33.3 ②23.9 ③12.4	折→ →口縁コナテ	上半折・折込 下半折折 →口縁コナテ	7~8	B・C	半円形	外3-	橙 浅黄橙	IV区	7.5YR7/6 10YR8/3
2	円筒	①32.0 ②21.5 ③14.0	折→ →口縁コナテ	上半折折 下半粗い折折 →口縁コナテ	6~7	C	不整形	?	浅黄橙 10YR8/ 3		
3	円筒	①34.5 ②23.0 ③14.2	折→ →口縁コナテ	上半折折 下半折折 →口縁コナテ	6~7	B	不整形	外3-	浅黄橙 7.5YR8/ 4		
4	円筒	①37.4 ②21.0 ③12.5	折→ →口縁コナテ	上半折・折込 下半折折 →口縁コナテ	6~6	C	円形	内3× か	橙 7.5YR7/ 6		
5	円筒	①32.5 ②(21.9) ③13.1	折→ →口縁コナテ	上半折・折込 下半折折 →口縁コナテ	6~6	B・C	半円形	?	にぶい 橙7.5Y R7/4		
6	円筒	①35.4 ②(24.6) ③12.6	折→ →口縁コナテ	上半折・折込 下半折折 →口縁コナテ	6~6	C	円形	内3×	にぶい 黄橙		10YR6/4
7	円筒	①— ②22.8 ③—	折→ →口縁コナテ	上半折折 下半折折 →口縁コナテ	6~7	C	円形	なし	にぶい 黄橙		10YR7/3
8	円筒	①— ②(18.9) ③—	折→ →口縁コナテ	折折 →突帯裏コナテ →粗い折折 →口縁コナテ	6~6	?	半円形	外3-	にぶい 黄橙 10YR7/ 4		
9	円筒	①— ②(20.0) ③—	折→ →口縁コナテ	折折 →突帯裏コナテ →口縁コナテ	6~6	B	?	?	にぶい 黄橙		10YR7/3
10	円筒	①— ②(23.0) ③—	折→ →口縁コナテ	折折 →口縁コナテ	3~4	A	円形	?	にぶい 黄橙		10YR7/3
11	円筒	①— ②20.6 ③—	折→ →口縁コナテ	折折 →突帯裏コナテ →口縁コナテ	6~7	B	円形	外3-	橙 7.5YR7/ 6		
12	円筒	①— ②(22.4) ③—	折→ →口縁コナテ	折折 →口縁コナテ	6~6	C	円形か	?	にぶい 黄橙	III区	10YR7/4
13	円筒	①— ②(24.3) ③—	折→ →口縁コナテ	折折 →口縁コナテ	7~8	?	?	内3- か	にぶい 橙	II区	7.5YR7/4
14	円筒	①— ②(22.2) ③—	折板折 →口縁幅広い 折	折折 →口縁コナテ	—	B	?	?	にぶい 黄橙	I・II・III区	10YR6/4
15	円筒	①— ②(21.2) ③—	折→ →口縁コナテ	折折 →口縁コナテ	6~7	?	?	?	にぶい 黄橙		10YR7/4
16	円筒	①— ②(22.1) ③—	折→ →口縁コナテ	折・折折 →口縁コナテ	5~6	C	?	?	にぶい 橙	III区	7.5YR7/4
17	①— ②— ③—	折→ →口縁コナテ	折折 上・下部欠		8~9	?	?	内3=	にぶい 黄橙		10YR7/4
18	①— ②— ③—	折→ 上・下部欠	折折 上・下部欠		6~7	B	?	?	にぶい 橙	II・III区	7.5YR7/4
19	①— ②— ③—	折板折 上・下部欠	折折 上・下部欠		—	C	円形 やや半円 に近い	内3=	にぶい 黄橙		10YR6/4

20		①— ②— ③13.0	舂板打’ 口縁欠	上半打打’ 下半打打’ 口縁欠	—	A 上面が 凹む	円形	?	にぶい 椀		7.5YR7/4
21		①— ②— ③12.4	舂打 口縁欠	上半打打’ 下半打打’ 口縁欠	4~5	A	半円形	?	浅黄褐色 10YR8/ 3		
22		①— ②— ③(11.5)	舂打 上部欠	舂打’ 上部欠	3~4	A	?	?	にぶい 椀7.5Y R7/4		
23		①— ②— ③(11.7)	舂打 上部欠	舂打’ 上部欠	7~8	A	?	?	椀 7.5YR7 /6		
24		①— ②— ③12.5	舂板打’ 上部欠	舂打’ 上部欠	—	C 縁が丸 い	?	?	浅黄褐色 10YR8/ 3	Ⅵ区	
25		①— ②— ③12.6	舂打 上部欠	舂打’ 上部欠	6~7	A	?	?	椀 7.5YR7 /6	Ⅲ・Ⅳ区	
26		①— ②— ③12.3	舂板打’ 上部欠	舂打’ 上部欠	—	A	?	?	椀 7.5YR7 /6	Ⅵ区	
27		①— ②— ③(11.0)	舂打 上部欠	舂打’ 上部欠	5~6	?	?	?	にぶい 椀7.5Y R7/4	I・Ⅲ区	
28		①— ②— ③(12.9)	舂打 上部欠	舂打’ 上部欠	6~7	?	?	?	にぶい 椀7.5Y R7/4	Ⅱ・Ⅲ区	
29	朝顔	①— ②(28.0) ③—	舂打 →口縁破打’	打打・打打’ →口縁破打’	5~6	A	?	内朝顔 —	にぶい 椀7.5Y R6/4	I・Ⅲ・Ⅳ区	
30	朝顔	①— ②(28.3) ③—	舂打 →口縁破打’	破打 →口縁破打’	4~5	A	?	内朝顔 —	にぶい 椀7.5Y R7/4	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区	
31	朝顔	①— ②— ③—	舂打打 上・下部欠	破・打打打 上・下部欠	3~4	A	?	内朝顔 —か	にぶい 椀7.5Y R7/4		
32	円筒	小破片	舂打 →口縁破打’	打打打 →尖帯裏指押さえ →口縁破打’	7~8	C	?	内3×	明黄褐色 10YR7/ 6	I区	
33	円筒	小破片	舂打 →口縁破打’	打打打 →口縁破打’	8~9	?	?	内3×	にぶい 椀	Ⅲ区	7.5YR7/4
34	円筒	小破片	舂打 →口縁破打’	打打打 →口縁破打’	6~7	?	?	内3—	にぶい 黄褐色	I区	10YR6/4
35	円筒	小破片	舂打 →口縁破打’	打打打 →口縁破打’	6~7	?	?	?	椀		7.5YR6/6
36	円筒	小破片	舂打 →口縁破打’	打打打 →口縁破打’	6~7	C	円形か	?	にぶい 椀		7.5YR7/4
37	円筒	小破片	舂打 →口縁破打’	打打打 →口縁破打’	5~6	C	円形か	?	にぶい 椀	Ⅲ区	7.5YR6/4
38		小破片	舂打	打打 →上部打・打打打	4~5	A	円形 低い	外3	にぶい 椀	Ⅲ区	7.5YR7/4
39		小破片	舂打	舂打	5~6	A	?	?	にぶい 椀		7.5YR7/4
40		小破片	舂打	舂打	6~7	A	?	内3\	椀	I区	7.5YR7/6
41		小破片 破打’	舂打	打打打’	—	A	円形か	?	にぶい 椀	Ⅵ区	7.5YR7/4
42		小破片	舂打	破打’ →打打打’	5~6	C	?	?	にぶい 黄褐色		10YR7/4
43		小破片	舂打	舂打’	5~6	A	?	?	にぶい 黄褐色		10YR7/3
44		小破片	舂打	舂打’	5~6	B	?	?	にぶい 黄褐色		10YR7/4



第80図 8号墳出土人物埴輪(1) 人-1

A 人物埴輪

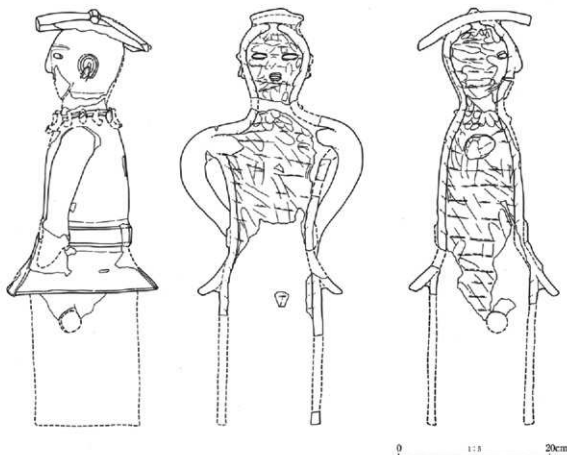
人-1 (巫女)

器高 推定高は55.0cm。但し、残存部は半身部のみであり、残存高は43.0cmである。なお、基部の直径14.0cmについては、裾部内面で観察できた基部の剥離痕跡が根拠となる。

形態の特徴 全体的に小作りの人物埴輪である。顔も縦長が約12.0cm(半身部全体の1/3以下)と、小顔である。髪形は平面・バナ形の高田髷であり、正面・背面では端部がやや垂れ下っており、写実的な表現となっている。結び緒の表現は粘土塊でなされている。頭髮や顔部の雕刻しの表現は認められない。目は比較的大きく表現されている。眉は粘土帯をわずかに隆起させ、表現している。鼻は、鼻筋の通ったスリムな鼻とはいえ、団子鼻的である。

口は横長水平に表現されている。顎はシャープに表現されている。耳は粘土紐で環状に表現され、そこから垂下する耳飾りの痕跡が認められる。なお、顔面への赤彩は認められない。首には長さ約3.0cmの勾玉が10個以上ついた1連の首飾りがつく。肩幅は広く、胸板も厚い。右・左腕とも腰に当てている。体部には乳房状突起が認められず、その剥離痕も認められないことから、もともと表現されていなかったと考えられる。腰部はくびれ、幅3.0cmの帯が巡る。この帯は前面では帯端が垂下した表現がなされている。裾部は大きく外に開くが、装飾品などの貼り付けは認められない。

技法の特徴 頭部・体部・腕部をそれぞれに作り、結合させる技法を用いている。頭部は幅0.7~1.5cmの粘土紐を積み上げることにより卵形の頭部



第81図 8号墳出土人物埴輪(2) 人-1

を形作っている。輪積み後は、外面は丁寧なナデで整形されているが、内面は荒いナデ整形のみであり、輪積み痕が残存している。頭頂部には直径約1.0cmの不整形の孔がある。島田髷は、この孔を塞ぐように上から貼りつけられている。顔面は卵形の頭部に粘土塊を貼りつけ、丁寧に撫でつけることによって、違和感のないフェイスラインを作り出している。目・口は外面からの穿孔によってつくられている。体部は、幅1.5～2.0cmの粘土紐を積み上げることによりつくられている。輪積み後、外面はナデと部分的にハケで丁寧に整形されているが、内面はナデで整形されるのみで輪積み痕はほとんど残存している。腕部は棒状粘土塊を体部に差し込むことによって形作られている。

器面全体について、外面は丁寧なナデを施して輪

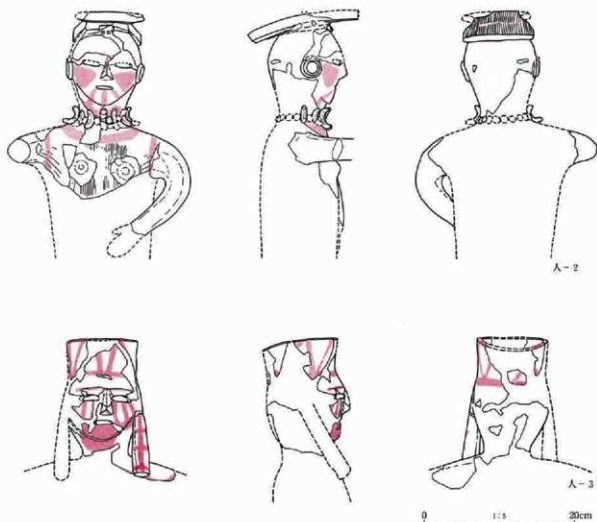
積み痕を消しているが、内面は荒いナデ調整のみのため、輪積み痕が残存している箇所が多い。

色調・焼成 色調は浅黄褐色。焼成はやや硬質。

人-2 (巫女)

器高 頭頂部から胸部までの残存であり、その残存高は29.5cmである。

形態の特徴 顔は比較的丸顔で約12.0cmと小顔である。髪形は平面・バチ形の島田髷であり、線刻による頭髪の表現、結び緒(剥離痕のみあり)や頸部からの櫛刺しの表現は粘土塊によってなされている。目はやや上がり目で、横長に表現されている。眉は粘土帯をわずかに隆起させ、表現している。鼻は鼻筋の通ったスリムなかたちである。口は横長水平に表現されている。顎はシャープに表現されてい

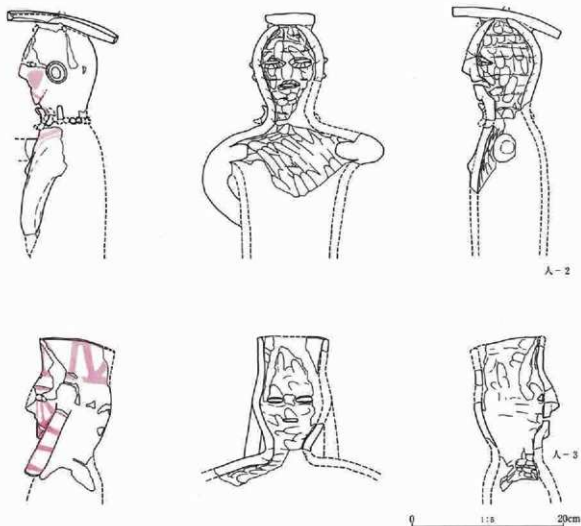


第82図 8号墳出土人物埴輪(3) 人-2・3

る。耳は粘土紐で環状に表現されている。なお、顔面への赤彩は眉・鼻筋・頬・顎、さらには首に至るまで丁寧に施されている。首には長さ約3.0cmの垂勾玉が7個と丸玉が10個以上ついた首飾りがつく。肩幅は広く、胸板も厚い。右腕は肩部付近のみしか残存していないものの、前面に差し出されており、杯を捧げる表現が推測される。左腕は腰部に向かっており、手の甲の位置から考えると、左手は腰に当てていたと考えられる。体部には乳房の表現がなされている。なお、胸部への赤彩は首飾りの直下と、肩から脇にかけての位置で丁寧に施されている。

技法の特徴 頭部・体部・腕部をそれぞれに作り、結合させる技法を用いている。頭部は幅0.8～

1.3cmの粘土紐を積み上げることにより埴形の頭部を形作っている。輪積み後は、外面は丁寧にナデで整形されているが、内面はわずかなナデ整形のみである。頭頂部には直径約2.0cmの孔がある。島田盤は、この孔を塞ぐように上から貼りつけられている。顔面は埴形の頭部に粘土塊を貼りつけ、丁寧に撫でつけることによって、違和感のないフェイスラインを作り出している。目・口・耳は外面からの穿孔によってつくられている。体部は、幅約1.5cmの粘土紐を積み上げることによりつくられている。輪積み後、外面はナデとハケで丁寧に整形されているが、内面はナデであらひ整形がされるのみである。乳房は粘土塊の貼りつけで形作られている。腕部は棒状



第83図 8号墳出土人物埴輪(4) 人-2・3

粘土塊を体部に差し込むことによって形作られている。

なお、頭部と体部に別作りと思われる明確な痕跡は確認できなかった。

器面全体について、外面は丁寧なナデによる整形が主であり、ハケ(7~9本/2cm)での整形が胸部附近に認められる。内面はナデのみのため、輪積み痕が残存している箇所も認められる。

色調・焼成 色調は橙色。焼成はやや硬質。

人-3 (冠をかぶる男子)

器高 頭頂部から肩部までの残存であり、その残存高は18.8cmである。

形態の特徴 冠を含めた顔の表現は縦長が約13.0cmであり、比較的小顔である。冠は頭部と一体に表現されており、頭頂部の表現は省略されている。目は大きく、目尻がわずかに下がるように表現されている。眉は粘土帯をわずかに隆起させ、表現している。鼻は上半が欠損しているものの、鼻筋の通ったスリムなたちである。口は横長水平に表現されている。顎はシャープに表現されている。美豆良は長さ10cm以上に表現されており、下端は肩部に接している。耳の表現はない。なお、冠および顔面への赤彩は、冠部には鋸歯状に、冠部と頭部の境界部には帯状に、頭部には、眉から鼻筋、頬から顎・首筋に至るまで施されている。また、美豆良に

も、縦横位に赤彩が施されている。肩の表現は特になが、胸部に至る附近に赤彩の痕跡が認められる。

技法の特徴 頭部は幅約1.5cmの粘土紐を積み上げることにより筒形に形作っている。輪積み後は、外面は丁寧なナデで整形されているが、内面はナデとわずかにハケを用いて整形している。頭頂部は、冠を表現しているため、解放になっている。顔面は頭部に粘土塊を貼りつけ、丁寧に撫でつけることによって、違和感のないフェイスラインを作り出している。目・口は外面からの穿孔によってつくられている。美豆良は、筒状の粘土塊の貼りつけによって形作られており、ナデで丁寧に整形されている。

なお、頭部と体部に別作りと思われる明確な痕跡は確認できなかった。

器面全体について、外面は丁寧なナデを施して輪積み痕を消しているが、内面はやや荒いナデのみのため、輪積み痕がわずかに残存している。

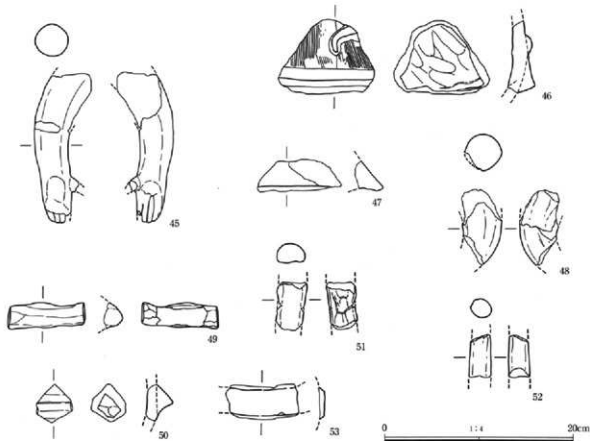
色調・焼成 色調は浅黄橙色。焼成はやや硬質。

人物破片

45 右腕の破片。形状からは拳手の所作が推測される。棒状粘土塊によって作られている。指は五指とも貼りつけ。外面の整形は丁寧なナデ。色調は橙色。焼成はやや硬質。馬形埴輪の破片集中部の北側から出土した。

46 裾部の破片。粘土塊の貼付による縁の表現があり、馬曳の裾片と推定。外面の整形はハケ（7～9本/2cm）が主で、裾端部のみ横ナデ。内面の整形はナデのみ。色調は橙色。焼成はやや硬質。出土位置は45のごく近くであり、馬曳との推定を補強する。

47 裾部の破片。外面の整形はハケと思われるが、器面の摩滅のため不明。色調は浅黄橙色。焼成はやや硬質。この破片はやや離れて、Ⅲ区のB混じりの黒色土から出土している。



第84図 8号墳出土人物埴輪(5)

48 左腕の破片。形状からは腰に手を当てる所作が推測される。棒状粘土塊によって作られている。外面の整形は丁寧なナデ。色調は橙色。焼成はやや硬質。人-2と人-3の中間地点から出土している。

49 不明。頭頂部の結び緒の可能性ある。長側面の一方には剥離痕が認められることから、何かに貼付していたものである。筒状の粘土塊による成形。外面の整形は丁寧なナデ。色調は浅黄橙色。焼成はやや硬質。この破片もやや離れてⅢ区表土から出土している。

50 裾部の破片。色調は橙色。焼成はやや硬質。Ⅳ区周堀B混じり黒色土の下層から出土している。

51 左手の破片。剥離面には貼付された五指の粘土塊も認められる。外面の整形はナデ。色調は橙色。焼成はやや硬質。Ⅳ区周堀B混じりの黒色土から出土している。

52 美豆良の破片。筒状の粘土塊による成形。外面の整形は丁寧なナデ。色調は橙色。焼成はやや硬質。Ⅳ区表土から出土している。

53 腰帯の片。外面の整形は丁寧なナデ。色調は浅黄橙色。焼成はやや硬質。Ⅳ区のB混じり黒色土の上層から出土した。(深澤敦仁)

B 馬形埴輪

残存状況 頭から胴体にかけて4割程度しか残存していないが、馬装の主要な部分が残存している。頭部に向かって左側面が頭部から胸部にかけて残存状況が良好である。背部から尻部にかけては上半部が残存している。下半部は腹部と右前足の付根を残すのみで脚のほとんどは失われている。またハケを表面に施していたと思われるがほとんどが摩滅してしまっている。

形態・表現の特徴 たてがみは板状で緑部は粘土紐で左右に僅かながら突出させており、断面はT字状を呈している。前髪は先端部に小さな円盤状のものを乗せ筒状に束ねた状況を表現した角状たてがみが付く。たてがみ側面にはハケによる毛並みの表現は見られない。耳は頭部を削り貫いた後、一枚の粘

土板を筒状に巻きつけて表現している。目はほぼ正円に削り貫かれている。顔から鼻にかけては左側面のみ残存し、鼻孔は小円に削り貫き表現している。口の形態は欠失しているため不明である。頭部はやや右に傾き、頭部は僅かに前傾しているがほぼ直立している。胴部はやや丸みを持ちながら腹部へとつながる。尻部は丸型に膨らみ、尾は滅失しているが、尻部の接合痕から粘土塊をはめ込んで表現されていたと考えられる。

技法の特徴 頭部は輪轆みで成形しており、内面には粗いナデが残っている。頭部、胴部とも輪轆みで成形しており、頭部内面には斜め方向にナデが施されていることから尻部→背部→頭部→胴部と順につくられたと推測できる。障泥の貼り付けは接合面に粘土紐を前足の付けと腹部のカーブに沿うようにして隙間を埋めている。

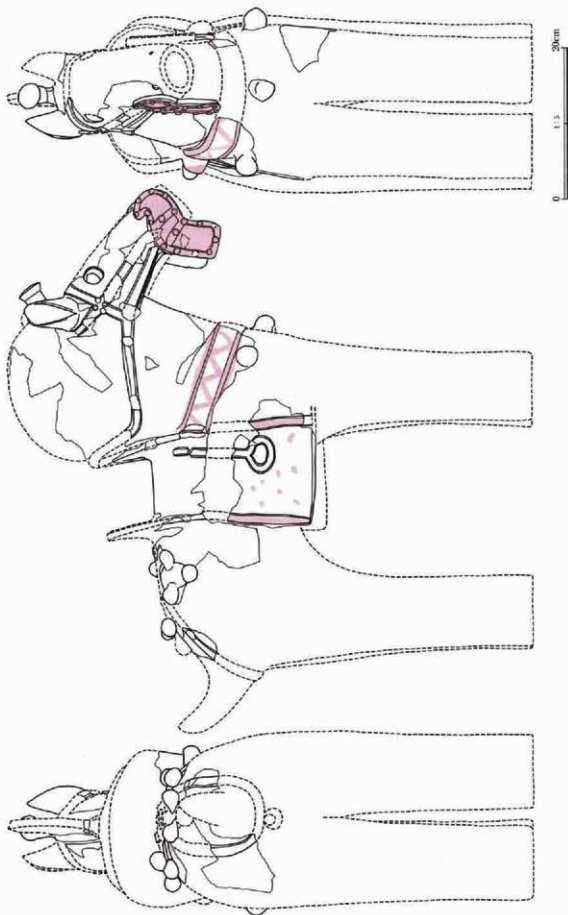
馬具の表現 馬具は面繫、胸繫、鞍、尻繫といった馬装の主要な部分が残存している。どれも扁平な粘土紐(板)の貼り付けにより表現されている。

面繫は粘土紐と鏡板のみ粘土板で表現されている。口には縁と中央に2条の縁金と銜を模したf字形鏡板をつけ、面繫と手綱が鏡板から伸びている。手綱を連結していた引手の表現は見られない。面繫には鼻革がなく、前髪の真下に額革をまわし、辻金具に取り付く。辻金具から下方に伸びる頰革は手綱によって下部の表現を省略している。

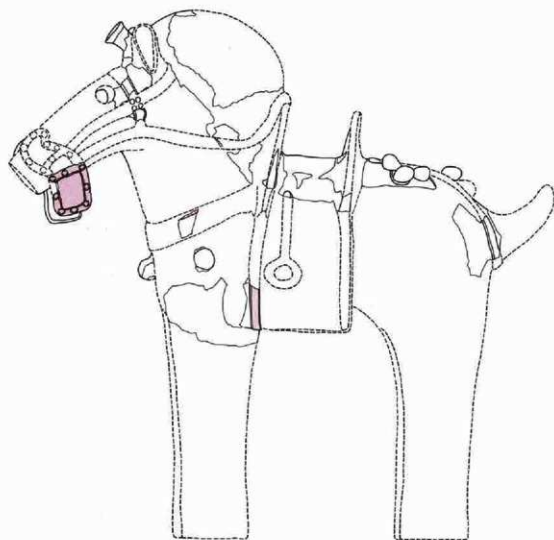
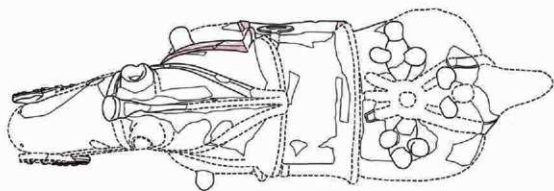
胸繫は粘土帯によって表現され、前輪に取り付く部分には突起を持つ。1条の帯に3個鈴をつけている。胸繫の帯には三角形を赤彩で描いている。

背部には鞍が乗せられている。前輪と後輪、障泥で構成され、いずれも粘土板を貼り付けて表現されている。赤彩は前輪と後輪の縁、障泥の左右の縁と表面には斑状な円を配している。障泥の形状は左右に赤彩を施した緑部をもち、それぞれ前輪と後輪の付け根に取り付く。輪蓋は粘土紐で表現され、前輪から障泥に垂れ下げるように表現している。

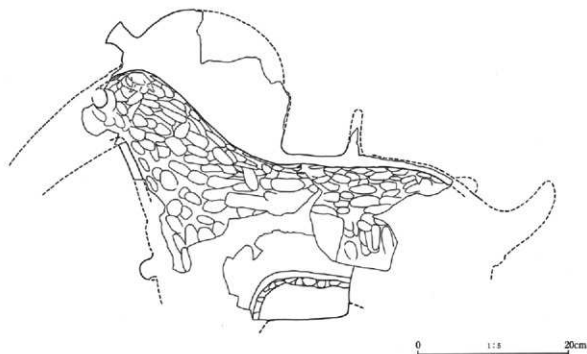
尻繫は粘土紐で表現している。現在は滅失しているが中央は雲珠で束ねられ尾の付け根を巡っていた



第85図 8号埴出土馬形埴輪(1)



第86圖 8号墳出土馬形埴輪(2)



第87図 8号墳出土馬形埴輪(3)

と推測できる。杏葉は角丸の菱形の粘土板に鈴が3個付いた鈴杏葉を3枚表し、尻部の三方に取りつく。

色調・胎土・焼成 色調は橙(5YR7/6)。胎土は砂粒を含み、表面がざらつくが、赤色を施すところでは丁寧になでて砂粒のざらつきを消している。焼成は良好である。
(佐藤信孝)

(3) その他形象埴輪

その他の形象埴輪は以下の通り5片出土しているが、いずれも小破片であり、名称は推定である。

54は鬃と思われる。円孔の部分の小破片であり、裏面も欠損している。表面はタテハケが施され、円孔に沿ったものと、ナメ放射状の線刻が施される。色調は橙(5YR6/6)であり、他の埴輪と違い、赤みが強い。同様な色調は6号墳の鬃にも見られ、同埴輪の特徴である。

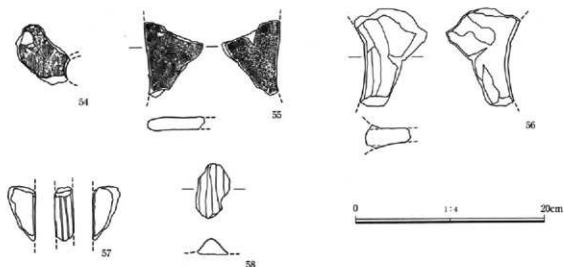
55は盾か鞆の破片と思われる。Ⅲ区の表土から出土している。両端に張り出した粘土板の一部と思わ

れるが、表面はナデられており、線刻などの装飾は全くない。表面の色調はにぶい橙(7.5YR7/4)であるが、断面は灰色(7.5Y4/4)である。砂粒を多く含み、全体に砂っぽい胎土である。焼成は良好。

56は不明である。Ⅰ区周堀から出土している。図の外側のカーブが何かに接着し、その表裏面に接着用の粘土を付けている。表面はナデられているが、やや粗い。色調はにぶい黄褐色(10YR7/4)である。胎土には砂粒を含み、全体にざらつく。焼成は良好である。

57はわずかな破片であるが、これも55と同様、盾か鞆の周縁部の破片である可能性がある。Ⅲ区表土から出土している。表面は縦方向にナデられ、側面に縦方向の直線を2本線刻する。色調・胎土・焼成も55によく似ているため、同一個体の可能性も考えられる。

58もわずかな破片であるが、家形埴輪などの柱などの貼り付けの表現かもしれない。Ⅲ区表土から出



第86図 8号墳出土形象埴輪

土している。表面は縦方向にナデている。裏面は何から剥離した状態のままである。色調・胎土・焼成は55によく似ている。色調はにぶい橙(7.5YR7/4)。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

土器

土器は4点掲載する。

59は第68図の通り、Ⅶ区の墳丘裾と周堀との間から出土した。60以下は相互に似た埴輪である。60と62はⅤ区の視乱を中心に出土している。61もⅤ区のAs-Bを含む黒色土から出土したので、もともと墳丘東側に置かれていた可能性が高い。底部が厚く、緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部が軽く外反する。やや粗い作りであり、表面にはひび割れも多い。3点とも、胎土・焼成がよく似ているので、同時期に作られたものであろう。

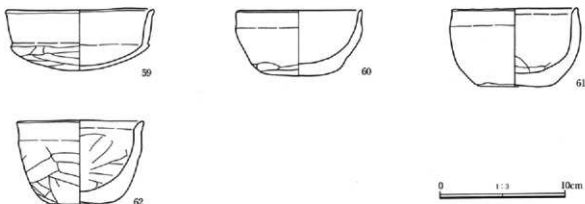
3 小結

南端部の一部が破壊されていたが、それ以外は全城を調査することができた。直径(周堀内径)18mの円墳であると思われる。この規模は2号墳に近く、今回調査のものでは中規模な古墳である。調査した古墳の中では最も残りがよく、発掘前から概形が分

かり、ほぼすべてを人力で掘ることができた。盛土も40~50cm残り、その下に旧地表面を保存していた。旧地表面には広くFAが残っていたため、FA降下後、あまり時間をおかないうちに築造されたものと思われる。とすれば、6世紀前半の早い時期の築造ということになる。

出土遺物は比較的豊富で、北側に多く、北東側から西側にかけて、墳丘裾と周堀との境から出土した。そのほとんどは円筒埴輪であるが、北東部(Ⅳ区)からは形象埴輪がまとまって出土している。形象埴輪には、ほぼ全形が分かるものとして人物3、馬1がある。これが原位置とどれほど近いのか、考える資料に乏しいが、第69図にみるように、円筒埴輪が外側、形象埴輪が内側から出土しており、この出土状態が元々の埴輪配置を幾分かは反映している可能性がある。とすれば、墳丘裾部には円筒埴輪列が通り、その内側に形象埴輪が並べられていたものと思われる。

形象埴輪にはその他に人物が2人かそれ以上、盾か羽、家、鷲があった可能性があり、多種類の埴輪群像が古墳を飾っていた可能性がある。これらの埴輪はいずれも造形がすばらしく、形象埴輪として資料的価値が高いと思われるが、残念ながらいずれも残りが悪かった。



第89図 8号墳出土土器

8号墳出土土器観察表

遺物番号	種別 器種	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
59	土師器 坏	完形	口径 11.7 高さ 4.8	砂粒含む 焼成良好 橙色(2.5YR6/8)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ
60	土師器 埴	1/2	口径 (10.0) 底径 6.2 高さ 5.2	砂粒含む 焼成やや甘い 橙色(5YR6/6)	口縁内外面 ヨコナデ 内面 ケズリ 体部外面 粗いナデ 底部外面 ヘラケズリ
61	土師器 埴	1/2	口径 (9.9) 底径 6.3 高さ 6.2	砂粒含む 焼成やや甘い にぶい橙色(7.5YR7/4)	口縁内外面 ヨコナデ 内面 ケズリ 体部外面 粗いナデ 底部外面 ヘラケズリ
62	土師器 埴	1/2	口径 (10.0) 底径 4.9 高さ 6.6	砂粒含む 焼成やや甘い 橙色(5YR6/6)	口縁内外面 ヨコナデ 内面 ケズリ 体部外面 粗いナデ・ヘラケズリ 底部外面 ヘラケズリ

主体部は北西部に竪穴式小石塚が見つかっている。未盗掘であったが、遺物や人骨などは全く見つからなかった。中心位置からはずれているため、別に主体部が存在する可能性もあるが、調査ではそのような痕跡は全く見いだせなかった。

9 9号墳

1 調査前の状況と発掘調査

調査区南西にある。調査前には、8号墳同様、北側は山林、南側は養護学校校舎となっていた。山林部分の南端には小さな高まりが残り、その北側にはわずかな凹みが巡っているのが認められたので（第90図）、古墳の存在が推定されたが、1号墳とは至近距離にあり、どのような形状になるかは判然としなかった。

調査は平成13年度に3区として行い、南側を平成16年度に4区として行った。4区では校舎基礎で完全に破壊されており、残っていたのは3区から続く墳丘部分と周堀部分のわずかな面積だけであった。

2 墳丘と周堀

(1) 墳丘（第91図）

周堀の1/4程度が調査区にかかるだけなので、形状などは不明であるが、円墳としてやや強引に計算すると、周堀内側で測って直径約18mとなる。

墳丘盛土は最も厚いところでも15cmであるが、残存しており、その下にはFAが認められた。FAはブロック状となっており、黒褐色土に含まれているので、多少の擾乱を受けている可能性がある。とすれば、FA降下後、植物根や小動物などによる擾乱を多少受ける期間を、9号墳が構築されたとも考えられるが、FAを確認できた断面は、第91図の断面図左端

に見るようにわずか1.5mの長さにすぎず、これだけで判断するのはやや危険であろう。ここでは、FA降下と、9号墳墳丘構築との間に多少の時間差があった可能性を指摘しておくにとどめる。

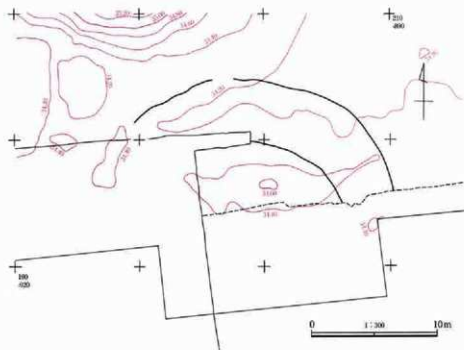
墳丘上に掘られた3号溝は周堀埋土を切っており、明らかに新しいものである。14号土坑は縄文時代の落とし穴だと思われ、15号土坑は時期不明である。

(2) 周堀（第91図）

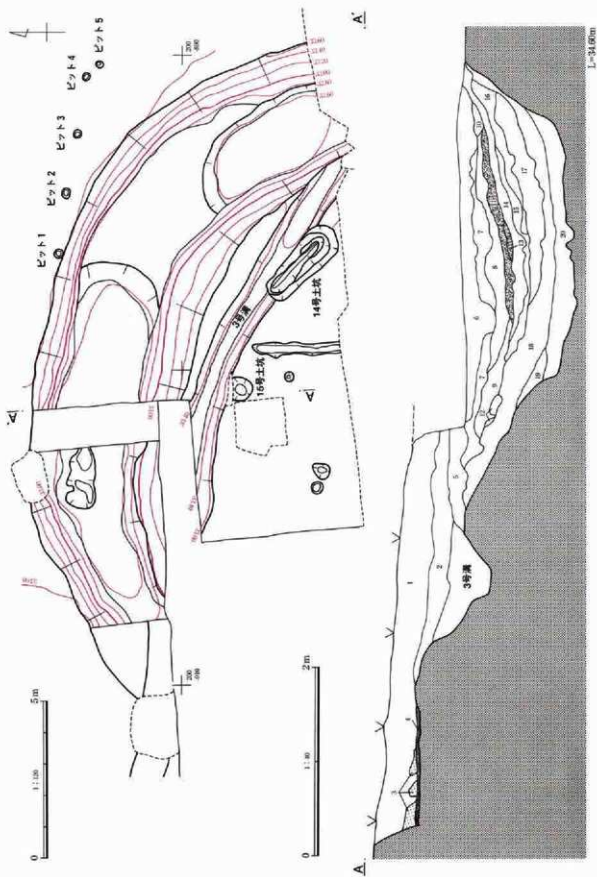
調査区内では全周するが、わずかに1/4なので全体は不明である。断面は逆台形形で、内側の傾斜がやや緩くなっている。底面はほぼ平坦だが、やや浅くなる部分がある。

規模は上幅4.7～5.0m、下幅1.0～2.8m、深さは0.9～1.3mである。この調査区内だけを見ると、東側が広く、西側が急に狭くなっているようである。これが5号墳のような形状になるかどうかは、調査範囲が狭いので、断定できない。

埋土にはAs-Bの純層が、底面から0.6～0.8mの



第90図 9号墳調査前現況地形図

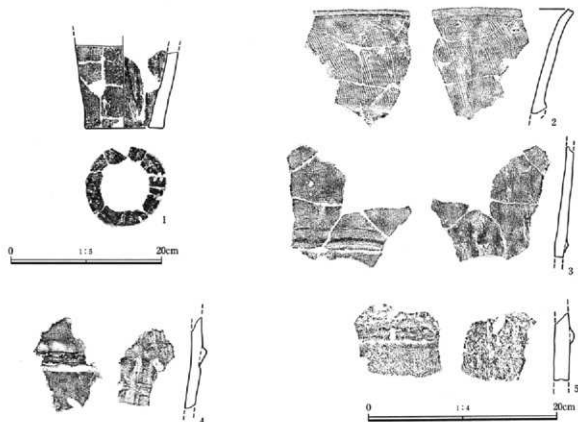


第91図 9号埴平面図・断面図

L=34.00m

墳丘～周堀土層注記 (前ページ)

- 1 表土
 2 黄褐色ローム質土 やや砂質
 3 (古墳盛土) 褐色土 ローム粒含む
 4 黒褐色土 FAをブロック状に含む
 5 2に近いが、ソフトロームをブロック状に含む
 6 (以下、周堀層土) 暗褐色土 ローム粒を5～10%含む
 7 暗褐色土 6よりも暗い ローム粒含む
 8 黒褐色土 やや砂質 軽石 (As-B) 含む
 9 暗褐色土 やや砂質 軽石 (As-B) がブロック状に入る
 10 7と黒褐色土との混土
 11 As-B 灰紫色のアッシュをブロック状に含む
 12 褐色土 ソフトロームブロックを30%程含む
 13 黒灰褐色土 As-Bを多量に含む しまり強い
 14 黒色土 やや砂質 しまりよい
 15 黒褐色土 14より黒味うすい ローム粒をわずかに含む
 16 褐色土 ハードローム粒を部分的に含む
 17 暗褐色土 ハードローム粒を1～2%含む
 18 黄褐色土 漸移層土とソフトロームの混土
 19 褐色土 ハードロームの小ブロックを含む
 20 暗褐色土とハードロームブロックとの混土



第92図 9号墳出土輪軸

9号墳出土輪軸観察表 (凡例は巻頭「凡例」参照)

No.	器種	計測値	調整		刷毛	突帯	透孔	線刻	色調	出土位置	備考
			外面	内面							
1		①一 ②一 ③10.6	上部欠	下部欠	5	?	?	?	橙 7.5YR6/6	周堀西側	
2	円筒	小破片 →口縁コナリ	粗いコナリ →口縁コナリ		5	?	?	?	橙7.5Y R7/6	周堀	
3	小破片	コナリ	コナリ		6~7	C	?	?	橙 5YR7/6	周堀東側	
4	小破片	コナリ	コナリ →コナリ		—	C	?	?	橙 5YR6/6	周堀西側	
5	小破片	厚紙 コナリ	コナリ		厚紙	A	?	?	橙	墳丘北東部	7.5YR6/6



第93図 9号墳出土形象埴輪



第94図 9号墳出土土器

9号墳出土土器観察表

遺物番号	種別 器種	残存状態	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成・整形の特徴
7	須恵器 坏	体部一部 欠	口径 13.5 底径 6.7 高さ 3.9	砂粒(白色)含む 焼成良好 灰色(N5/S)	底部回転車切り 周面ヘラケズリ

ところに堆積している。厚さは5～10cmで、灰紫色のアッシュを含み、残りが非常によい。

(3) 遺物出土状況

出土した遺物は少ない。その大部分は、他の古墳の場合同様、As-Bの上下の黒色土・黒褐色土から出土した。

3 出土遺物

出土したのは円筒埴輪、形象埴輪、土器である。円筒埴輪は底部が全周する1以外はごく小さな破片ばかりである。朝顔形埴輪が存在するかは判然としない。

6の形象埴輪はごく小さな破片であるが、四角い穴の一部分のような形状であり、家形埴輪の窓の部分なのではないかと思われる。

7はほぼ完形の須恵器坏であるが、混入品である。

4 小結

ごく一部の調査であるが、円墳とすれば直径(周堀内径)約18mとなり、今回調査した古墳の中では、8号墳と近く、中程度の規模である。

墳丘埋土直下にFAが堆積していることから、FA降下後のものであるが、6号墳や8号墳に比べてFAの残りが比較的良好ことから、FA降下後多少の時間幅があった可能性がある。

10 10号墳

1 調査前の状況と発掘調査

調査区北側、2区の南東にある。この付近は病院北門・西門から病棟への通路にあたり、広くアスファルト舗装されている。この通路は各種車両の出入りなど、病院運営上必須の通路となっており、しかも、高圧電線や水道管などが埋設されているため、全面発掘するのは不可能であった。そのため、平成13年度に5m四方の試掘坑を2ヶ所設けて調査することとした。その結果、南側の試掘坑で古墳の周堀が発見され、可能な限り範囲を拡張して調査した。

2 墳丘と周堀

(1) 墳丘 (第95図)

完全に削平されており、全く残っていない。周堀

内径で直径15~16mの円墳と推定できるが、1/4程度の調査なので不明確である。

(2) 周堀 (第95図)

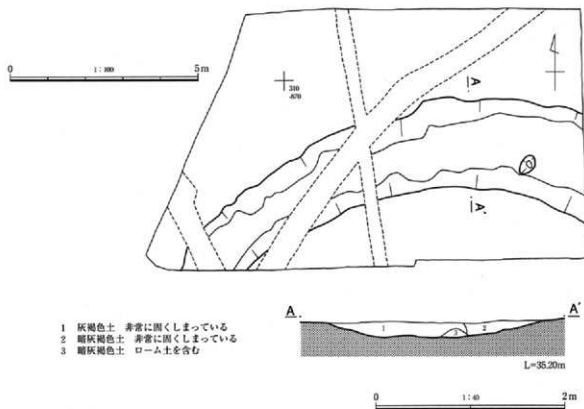
調査できたのは全体の1/4程度で、しかも深さわずか15cmしか残っていなかった。断面形状は浅い皿状であり、規模は上幅1.5~2.5m、下幅0.6~1.7mであり、周堀外径は約21mと推定される。埋土は固く締まっていたが、これはアスファルト舗装の際の圧縮によるものと思われる。

(3) 遺物出土状況

遺物は全く出土していない。

3 小結

周堀内径15~16m、同外径約21mの円墳だと思われるが、一部の調査にとどまったので、確定できない。遺物も出土せず、時期未詳である。



第95図 10号墳平面図・断面図

11 11号墳

1 調査前の状況と発掘調査

調査区南部中央にある。3号墳と8号墳の間の狭い面積の中に見つかったものである。3号墳周堀とはほぼ接し、8号墳とも1m前後しか離れていない。

調査前には南半は山林、北半は平坦な草地となっていたが、第96図に見るとおり、完全に削平されていて、この古墳の存在は認識できなかった。

調査は平成13年度に3区として行ったが、古墳に囲まれた狭い面積の場所であったため、当初古墳の存在は全く念頭になかった。そのため、この場所は3区に入る入り口部分として利用してしまい、結果としてこの部分の表土除去は調査期間の最終段階になってしまったほどである。

病棟の裏手に当たる場所であったためか、ゴミ穴が数多く掘られているほか、全体に深くまで削平されていて、残りはきわめて悪かった。

2 墳丘と周堀

(1) 墳丘 (第97図)

完全に削平されており、全く残っていない。周堀内径9.5~9.8mの円墳である。主体部の痕跡も全く残されていない。

(2) 周堀 (第97図)

周堀は全周するが、削平されているため、深さでは全体の半分程度しか残っていないものと考えられる。断面は概ね逆台形であり、底面は平坦である。残りのいい部分(第97図 F-F')では底面から0.2~0.4mのところ傾斜が緩くなる。深さは、一部で深いところ(0.6~0.7m)もあるが、大部分では0.4~0.5mである。上幅1.3~2.4m、下幅0.6~1.0mであり、周堀外径は13.0~13.5mである。

埋土には底面から0.1~0.2mのところF Aが堆積しているのが認められる。このF Aは層をなしているわけではなく、途切れ途切れにブロック状にな

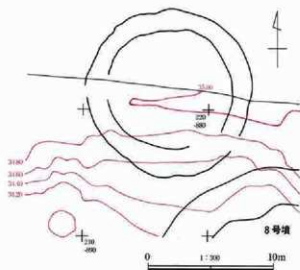
っていて、一部ではなくなってしまっているところもある。おそらく堆積後、ある程度の擾乱を受けた可能性が高いのではないと思われる。As-Bの堆積はほとんど見られないが、これは削平を受けたためであると思われる。

(3) 遺物出土状況

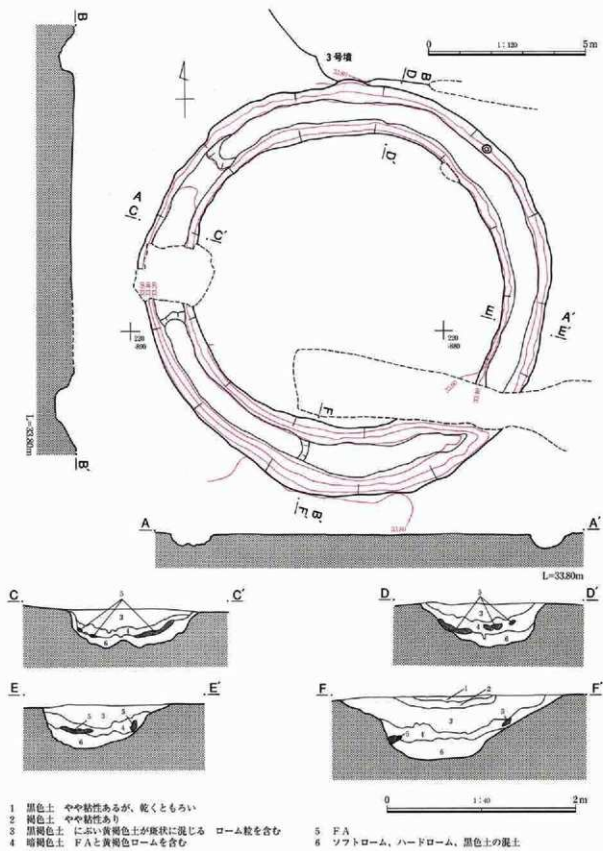
遺物の出土は少ない。これは、通例遺物を大量に含むAs-B前後の黒色土が、ごく一部を除いて削平されているからだと思われる。埴輪片、土師器片、須恵器片が出土している。

3 出土遺物

出土遺物は2の土師器埴輪(ほぼ完形)を除いて小破片ばかりである。埴輪も少なく、図示できるものは1の1点のみであり、この古墳の特徴を把握することはできないし、またいうまでもなく、これをもって本古墳が埴輪を持っていないと断定することもできない。2の埴輪は周堀南西部からほぼ完形のまま出土した。3の土師器坏は小破片であり、周堀北西から出土している。



第96図 11号墳調査前現況地形図



第97図 11号墳平面図・断面図

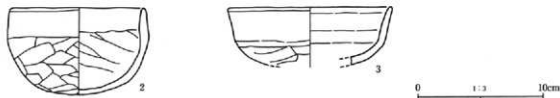
第3章 調査の成果



第98図 11号墳出土土輪

11号墳出土土輪観察表 (凡例は巻頭「凡例」参照)

No.	器種	計測値	調整		刷毛	突起	透孔	線刻	色調	出土位置	備考
			外面	内面							
1	小破片	37.77	37.77	37.77	-	C	?	?	にぶい 橙	周堀北西部	7.5YR7/4



第99図 11号墳出土土器

11号墳出土土器観察表

遺物番号	種別 器種	残存状態	計測値(cm)	胎土・施成・色調	器形・成・整形の特徴
2	土師器 碗	ほぼ完形	口径 10.4 高さ 6.9	砂粒・赤色粒子含む 施成良好 浅黄色(2.5YR7/3)	口縁内外面 ヨコナデ 内面 ナデ 底部・底面外面 ヘラケズリ
3	土師器 坏	小破片	口径 12.8 高さ -	砂粒含む 施成良好 明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁外面～内面 ヨコナデ 底部外面 ヘラケズリ

4 小結

直径(周堀内径)9.5~9.8mの小型の円墳であり、隣接する3号墳にごく近い規模である。遺物の出土は少ないが、周堀にF Aを含んでおり、構築時期はF A降下前に遡るものと見られる。同様な理由でF A降下前と推定されるのは、西に隣接する1号墳、2号墳であり、つまりこれら3基は近接した位置に相次いで構築されたものと考えられる。その後3号墳、8号墳がさらに近い位置に作られたため、11号墳が狭い場所に入り込んだような形になってしまったのである。

12 溝・土坑・ピット

1 溝

溝は遺跡全域から合計3条見つかっている。いずれも遺物が出土しないので時期を特定することは困難であるが、3号溝は古墳の周堀を切っており、明らかに古墳より新しい。1号、2号も、埋土にAs-A、ないしAs-Bと思われる軽石を含んでおり、少なくとも平安時代後期を遡ることはないものと思われる。

1号溝

2区の5号墳の東、約6mにある。幅は50~70cm、深さ10cm程度の細く浅い溝である。断面形は不整形で、底に凹凸がある。調査区の南端から直線的に伸び、約15mで途切れる。方向はN-18°-Eである。埋土の中にAs-Aと思われる軽石が混じっていることから、近世以後のものと思われる。水が流れた形跡はなく、何らかの区画溝であろう。

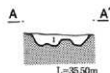
2号溝

3区東にある。調査区南端部から直線的に伸び、約30mで途切れる。北端部はわずかに西に曲がり、北方向に近くなるが、曲がる前の方向はN-22°-Eであり、1号溝に近い。幅40~80cm、深さは15~20cmで、断面形状は逆台形である。埋土は古墳周堀の埋土上層に見られる、As-B混じりの黒色・黒褐色土によく似ており、同時期のものである可能性が考えられる。この溝も水が流れたような痕跡は全くなく、何らかの区画溝であると思われる。

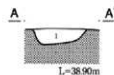
3号溝

3区西にあり、9号墳とは切り合い関係にある。9号墳の周堀埋土を掘り込んでおり、明らかに3号溝が新しい。9号墳の墳丘上では緩くカーブを描くが、西側では直線状となり、その方向はN-80°-Wである。幅80~100cm、深さ40~50cm、断面形状

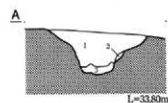
は逆台形のしっかりとした溝である。出土遺物はなく、時期、性格共に不明である。やはり水が流れたような痕跡はない。



1 明褐色土 軽石 (As-Aか) を多く含む一部固くしまっている



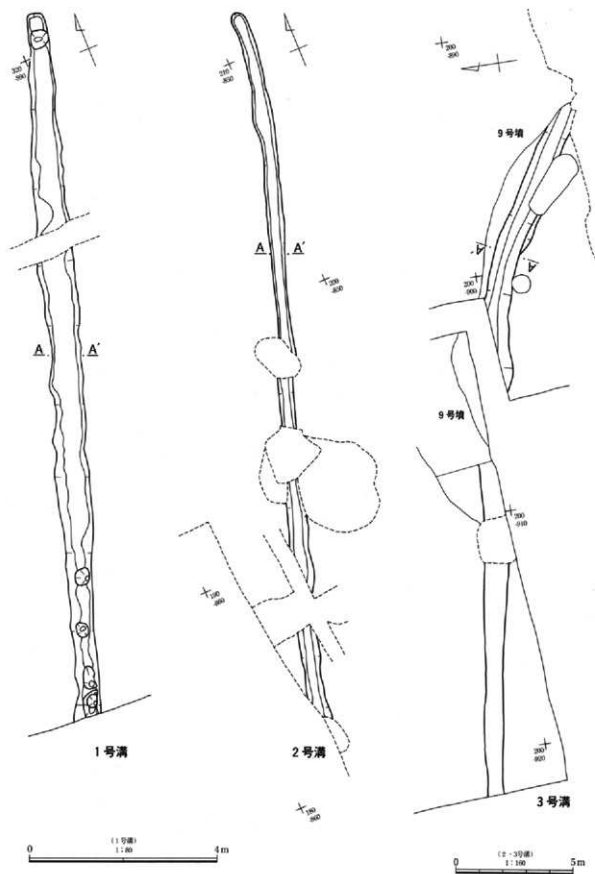
1 暗褐色土 黒褐色土・軽石 (As-Bか) を含む古墳周堀のAs-B混じりの黒褐色土と似ている



1 暗褐色土と褐色土の混土
径2~3mmの黄褐色粒と細粒の軽石を含む しまりあり
2 1とハードロームブロックとの混合
3 1と黄褐色ソフトロームとの混合

0 1:40 2m

第100図 1~3号溝断面図



第101図 1～3号溝平面図

2 土坑

土坑は全域で計14基調査した(12号土坑は欠番である)。これらのうち、1号、2号、13号、14号の4基はその形状から縄文時代の落とし穴であると思われるが、その他の10基は出土遺物もなく、時期、性格共に不明である。

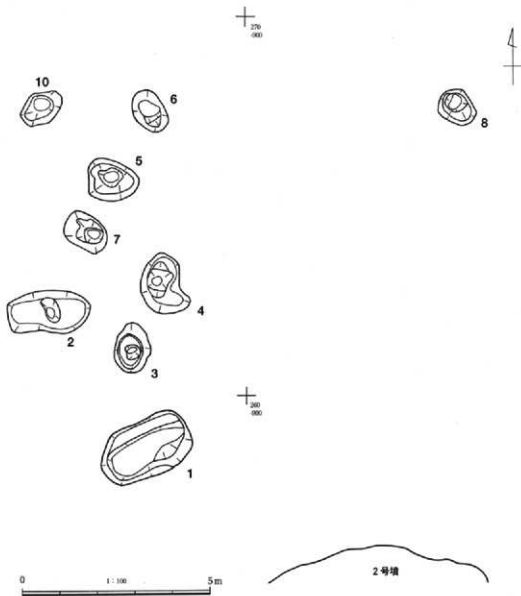
1号土坑

1区2号墳の北西にある。長さ2.5m、幅1.4m、深さ0.6mで、形状から落とし穴であると考えられ

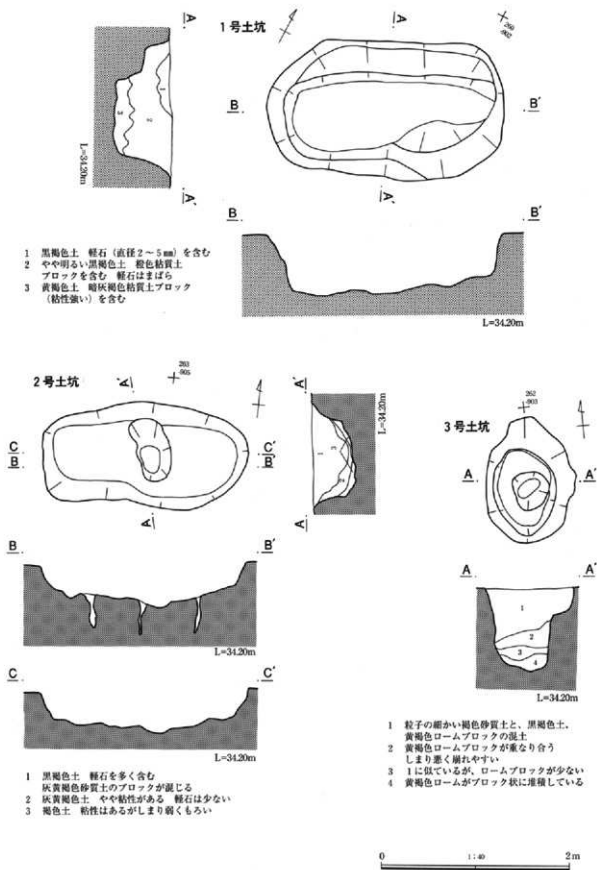
る。北西側がやや広いのは、壁が崩れてしまったためと考えられ、本来は1m程度の幅であったと思われる。埋土を完掘したのち、スライス調査を行ったが、杭などの痕跡は発見できなかった。

2号土坑

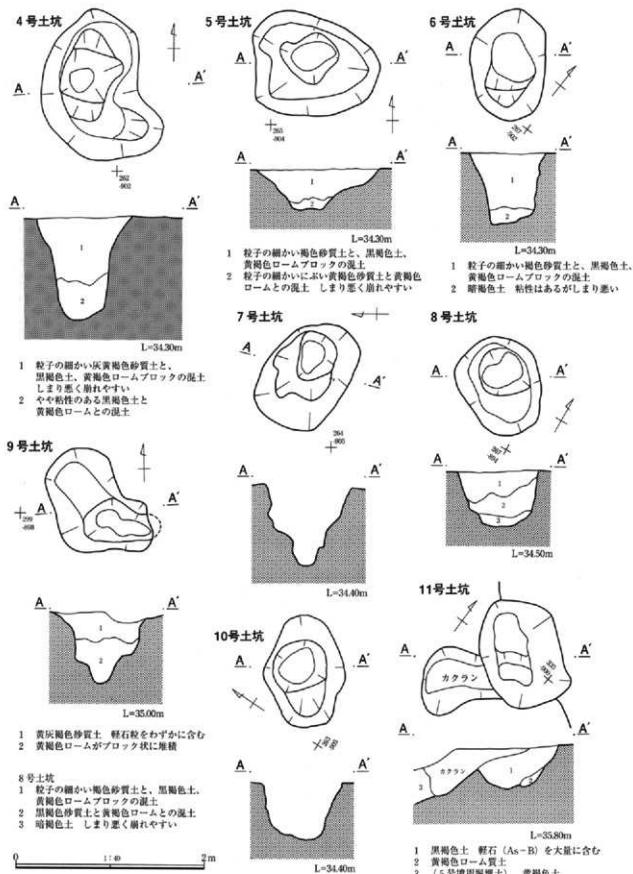
1号土坑の約3m北西にある。長さ2.2m、幅1.1m、深さ0.4mで、ほぼ東西方向を向いている。形から縄文時代の落とし穴と考えられる。スライス調査の結果、杭の跡と思われる細いピットが底面に3本並んでいるのを確認した(B-B'セクション)。



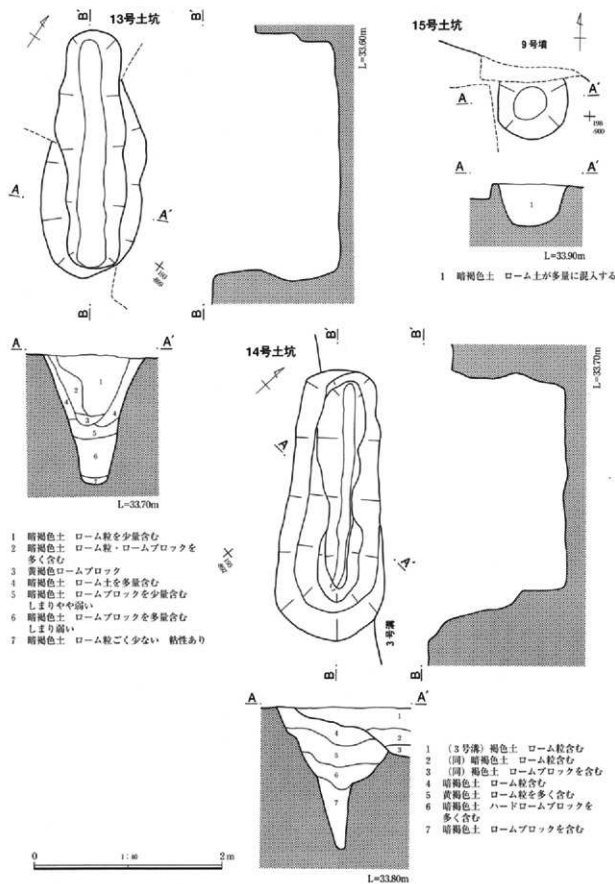
第102図 1～8・10号土坑の位置



第103図 1～3号土坑平面図・断面図



第104図 4～11号土坑平面図・断面図



第105図 13~15号土坑平面図・断面図

土坑一覧表

	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
1号土坑	1区	250-900	2.5	1.4	0.6	縄文時代の落とし穴
2号土坑	1区	260-900	2.2	1.1	0.4	縄文時代の落とし穴
3号土坑	1区	260-900	1.35	0.95	0.85	
4号土坑	1区	260-900	1.6	1.04	1.1	
5号土坑	1区	260-900	1.38	1.07	0.34	
6号土坑	1区	260-900	1.2	0.8	0.76	
7号土坑	1区	260-900	1.2	0.88	0.83	
8号土坑	1区	260-890	1.1	0.85	0.6	
9号土坑	1区	290-890	1.3	0.8	0.7	
10号土坑	1区	260-900	1.2	0.9	0.6	
11号土坑	2区	330-900	1.2	0.85	0.4	
12号土坑	欠番					
13号土坑	4区	190-890	2.6	1.0	1.4	縄文時代の落とし穴
14号土坑	4区	190-890	2.9	1.1	1.5	縄文時代の落とし穴
15号土坑	4区	190-900	0.75	0.75	0.45	

グリッドは10m単位で、直近の南東のグリッド。

3号～7号・10号土坑

1、2号土坑の北側に6基が集中して分布する。その大きさは一覧表の通りであるが、5号土坑を除いて深くしっかりとした土坑である。遺物などは全く出土せず、時期・性格共に不明であるが、調査区の中で土坑が集中するのはこのみであり、ここに何らかの役割があったものと思われる。

8号土坑

上述の土坑集中部から東に約7m離れた位置にある。長さ1.1m、幅0.85m、深さ0.6m。出土遺物はなく、時期・性格共に不明である。

9号土坑

1区北端部にある（位置については第6図参照）。長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.7m。A-A'断面では段掘りになっており、人為的なものにみえるが、東側に入り込む形になっており、自然のものである可能性も否定できない。

11号土坑

5号墳の北東部、周堀の外周部にあり、周堀と重

複している。残念ながら攪乱が入っているため、周堀との新旧関係は確認できなかった。長さ1.2m、幅0.85m、深さ0.4m。

13号土坑

9号墳の墳丘部にある。長さ2.6m、幅1.0m、深さ1.4m。形状から縄文時代の落とし穴と考えられる。土層を見ると、埋没してから掘り直した痕跡が認められるが、その意味は不明である。

14号土坑

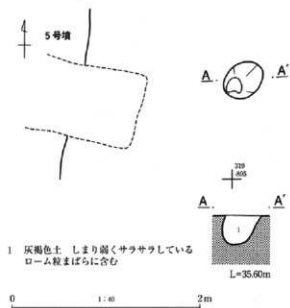
9号墳の墳丘部にあり、3号溝と重複する。3号溝の方が新しい。長さ2.9m、幅1.1m、深さ1.5mで、深さ0.8mのところ幅が一段と狭くなる形状である。

15号土坑

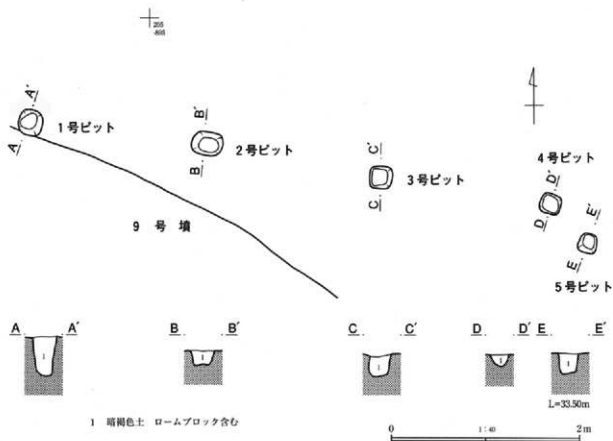
9号墳の墳丘部にある。9号墳と重複するが、その間には攪乱が入ってしまっている。径0.75mのほぼ円形で、深さは0.45mである。時期・性格共に不明である。

3 ビット

ビットは計6基調査した。そのうち、1～5号ビットは9号墳の北東側に5本並んで存在する。特に1～4号の4本は、ほぼ180～190cm間隔で並んでいる。上部が削平されているために浅いが、いずれも一辺20～30cmの方形であり、規則的に並んでいることから、何らかの柵列であると思われる。時期は不明である。6号ビットは5号墳の1.5m東にある。不整形であり、時期・性格共に不明である。



第107図 6号ビット平面図・断面図



第106図 1～5号ビット平面図・断面図

13 縄文時代の遺物

調査では縄文時代の遺物も出土した。いずれも表土や古墳周堀の埋土などから出土しており、遺構に伴うものはない。調査区内では竪穴住居などは見つからないので、これらの遺物は周辺の遺跡から搬入されたものと考えられる。当該期の遺構は4基の落とし穴があるが、それらは「12 溝・土坑・ピット」で取り上げた。

縄文土器

8号墳封土・表土より、少量ながら同一個体の破片が出土しているため、図と特徴を掲載する。出土状態は、墳丘の南西部から北西部にかけて散在した状態で破片が出土した。遺構の存在が推定できる出土状態と出土量ではないため、平面分布等の記録化は控えたが、おそらく周辺の該期集落の縁辺部からの流入と考えられた。

個体図示した1は口縁部破片2点と体部破片1点からなる。その他に図に掲載していないが、体部屈曲部の無文の小破片が1点ある。また、1に類似する体部破片2点(2・3)を拓影図として併せた。

1は口縁部橋状把手を付すキャリバー状深鉢である。3点の破片は接合していないが、文様・胎土・色調から同一個体と判断した。体部破片はあるいは個体の側面・裏面の可能性があるが、図表現の都合上、復元図として正面図にまとめた。口縁部は、橋状把手を頂部とする波状口縁を呈す。体部上半は強く内湾し膨らみを持たせ、体部中位の屈曲部で最小径をなす。体部下半もおそらく内湾気味の形態で、キャリバー状の器形と捉えられよう。口縁部の橋状把手は断面楕円状の単純な形状で、1対が設けられる例か、あるいは4単位構成の可能性がある。口縁部は幅狭の無文部を設け、下位を横位沈線で画す。横位沈線より沈線による分岐懸垂文が垂下するが、体部破片では、弧状あるいはU字状に区画されることから、体部上半の文様意匠としては、U字状あるいは半渦巻き状の懸架状区画文と考えた。2種類以

上の区画文が配されるものと把握できよう。体部中位の屈曲部に2条の沈線文上端が見られることから、体部下半は分岐懸垂文が施されるのであろう。縄文施文部である、橋状把手及び体部上半の区画意匠内は単節RLが充填施文される。縦位・斜位施文が主だが、一部口縁部横位沈線下に横位施文され、横位羽状効果を見せている。縄文施文部と磨消無文部は交互配列と考えるが、体部下半の縄文施文の有無は不明である。磨消部は削り調整後研磨を加える。内面調整は、口縁部に強い横位削り調整が観察される。色調はにぶい褐色を呈し、胎土に小礫・石英・白色粒を含む。

2は体部上半の破片か。やや厚手の器厚で、強く内湾する形態を示す。2条の横位細沈線で画され、横位RLが充填施文される。あるいは渦巻き状意匠文の下端か。色調は橙色で、胎土に石英・白色粒を含む。

3は体部下半か。細沈線が垂下する懸垂文構成。縄文は縦位RL充填施文。色調にぶい褐色を呈し、白色粒・雲母末を含む。

土器の帰属し得る時期は、遺構出土ではなく、共存資料も付随していないことから、詳細は差し控えたいが、1の文様構成からは、加曾利EⅣ式と判断できよう。しかしながら、口縁部内面調整要素等は後期称名寺式に多く見られる様相で、あるいは時期的には下る可能性も想定しておきたい。(山口逸弘)

石器

遺構外から打製石斧2点、石鎌5点が出土した。打製石斧は1号墳周堀からやや厚手のつくりで両側縁をよく敲打した楕形のもの1点出土した。頭部の一部が欠損しているのみで、完形に近い。使用痕は顕著で、全体によく磨滅している。長さ12.3cm、幅6.3cm、厚さ2.7cm、重量252.6g、砂岩。8号墳盛土から楕形の打製石斧が1点出土した。頭部の約

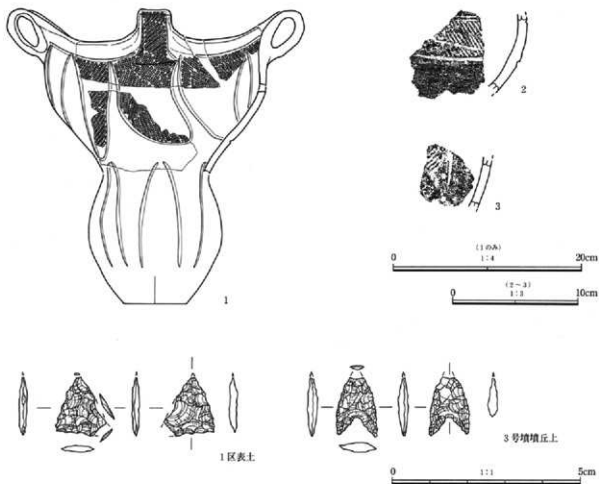
第3章 調査の成果

1/2と刃部の一部が剥落している。刃部に自然面を残す。裏面は比較的平坦で、刃先は急角度で若干磨減しているものの、縁辺は鋭さが残る。長さ11.4cm、幅6.1cm、厚さ2.1cm、重量115.1g、頁岩。

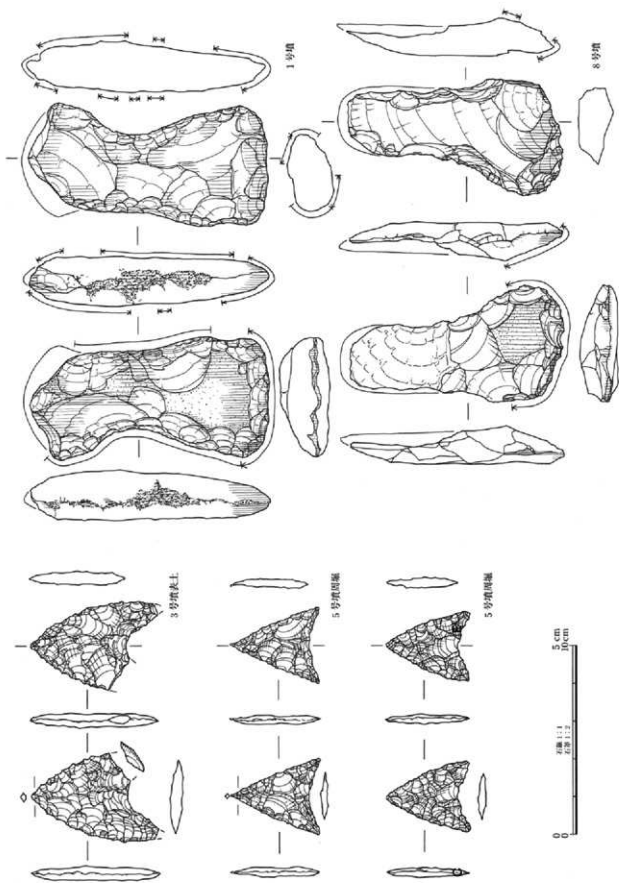
石鏃は3号墳から2点、5号墳から2点、1区表土から1点の計5点が出土した。3号墳墳丘上出土のものは、小形の有脚鏃で先端欠損。長さ1.6cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重量0.4g、チャート。3号墳表土出土のものは、やや大形薄手の有脚鏃で、片脚欠損、先端は錐状に細く作り出されている。長さ3.4cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm、重量2.3g、黒曜石。5号墳周堀から2点出土したが、2点とも完形品、

薄手で丁寧な作り。1点は、長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm、重量0.9g、チャート。もう1点は長さ2.2cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重量0.7g、黒曜石。先の1点に比べ、先端はやや鋭さを欠く。1区表土からの1点は片脚と先端を欠損している。長さ1.1cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重量0.3g、黒曜石。

(松村和男)



第108図 縄文時代の遺物 (1)



第109図 縄文時代の遺物 (2)

14 旧石器時代の調査

各地区では古墳の調査が終わった後に旧石器時代の試掘調査を行った。試掘調査の密度は、基本的に2m×5mのトレンチを10m四方に一つの割合で設けた。その配置はゴミ穴などの視乱が多いため、かなり不規則であり、場所により臨機応変に設定せざるを得なかった。石器が出土した場合は、適宜その周囲に発掘区を広げ、出土範囲の把握等に努めた。

旧石器の基本土層は以下の通りである。

- I層 黒褐色～暗褐色土 古墳周溝はこれを切っている。本来この上面が遺構確認面だが、大部分の場所では後世の削平のため、この層は消滅している。
- II層 ロームへの漸移層 暗褐色～褐色土。
- III層 黄褐色ローム ソフトローム。
- IV層 黄色ローム ハードローム。BPを含む。非常に固く締まっている。場所によっては薄くなってしまう。
- V層 暗褐色土 固く締まっている。BPを含む。
- VI層 褐色土 層厚が薄く、はっきりしないところも多い。特に北に行くほど層厚が薄くなる傾向があり、2区では全く存在しない場所も多い。
- VII層 黒褐色土 暗色帯 北に行くほど色が薄くはつきりしなくなる。II区の北部では、上下の層との区別が難しくなるほど色が薄い。
- VIII層 VII層との漸移層 南に行くほどはつきりと現れてくる。
- IX層 黄色ローム
- X層 黄褐色ローム 非常に固く締まっている。黄色ロームと斑状になる。次のXI層との境界は漸移的に変化し、不明瞭である。
- XI層 黄色ローム 固く締まっている。黄白色のシルト質の土を含む。分層は困難な場合が多い。下層では灰色砂を含むようになる。

これ以下は灰色砂層になる。非常に固く締まっているスコップでも掘れない。

1 1区

1区では22カ所のトレンチを設けて調査した。その結果旧石器の出土はなかった。ただし、1号墳の周堀Ⅲ区からは第137図に掲載した黒曜石製の横長剥片が出土している。

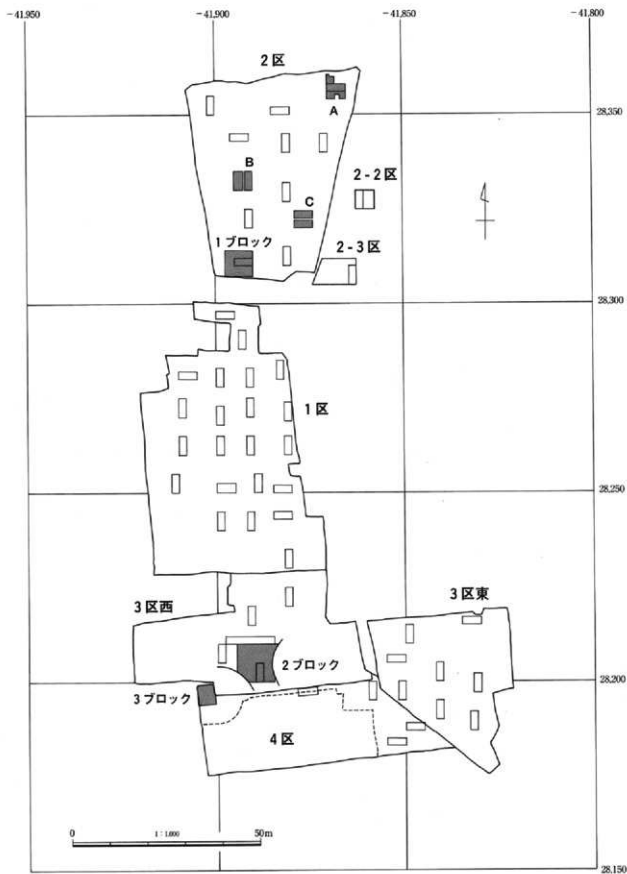
2 2区

2区では14カ所のトレンチを設けて行った。この付近では上面の削平が激しく、ひどいところではⅣ層まで削られている。4カ所で旧石器の出土があり、それぞれ石器に近い方を2m×5mの範囲で拡張して調査し、さらに適宜掘り広げた。その結果3カ所は石器1点のみの出土であり、1カ所では多数の石器が出土した。ここでは、1点のみの箇所は北からA・B・Cトレンチと呼び、多数出土したところは1号ブロックと名付けて報告する(第110図)。以下、石器の事実記載は松村和男(当事業団専門員)により、出土状態について高井が補足した。

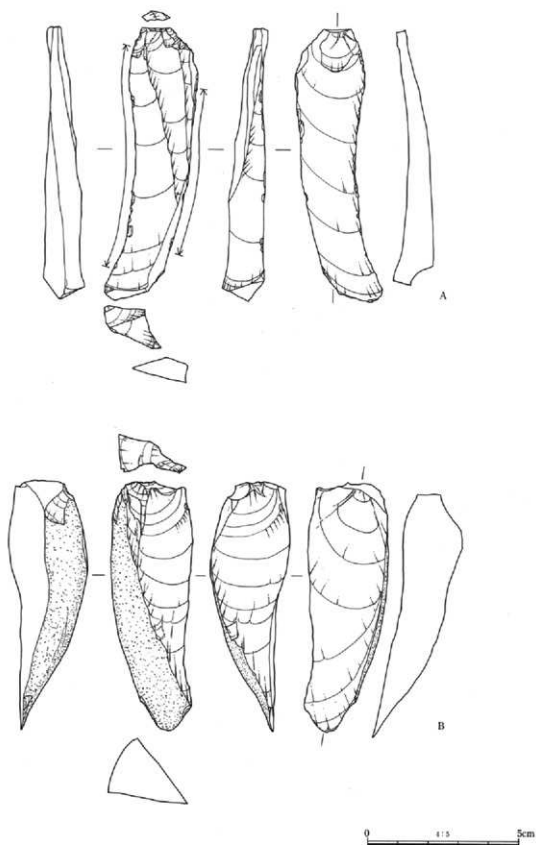
Aトレンチ VII層から出土した。縦長の石刃であり、両側縁に使用痕と考えられる微細な剥離と光沢痕を持つ。打面は剥離面であり、打面側は薄く、先端は厚い。上部と下部縁辺に一部新しい傷痕を有する。長さ9.0cm、幅2.3cm、厚さ1.4cm、重量21.0g、黒色頁岩。

Bトレンチ V層最下部から出土した。縦長剥片であり、左側面に帯状に自然面を残す。打面は剥離面であり、自然面側は分厚く、断面は厚い三角形を呈する。長さ8.2cm、幅2.7cm、厚さ2.6cm、重量47.4g、黒色頁岩。

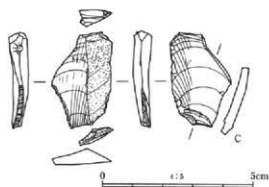
Cトレンチ V層から出土した。縦長剥片を素材としたナイフ形石器であり、下部の打痕は除去されている。基部両側縁は丁寧に調整加工されている。



第110図 旧石器時代試掘トレンチ配置図 (スクリーントーン部分が遺物出土箇所)



第111図 A・Bトレンチ出土石器

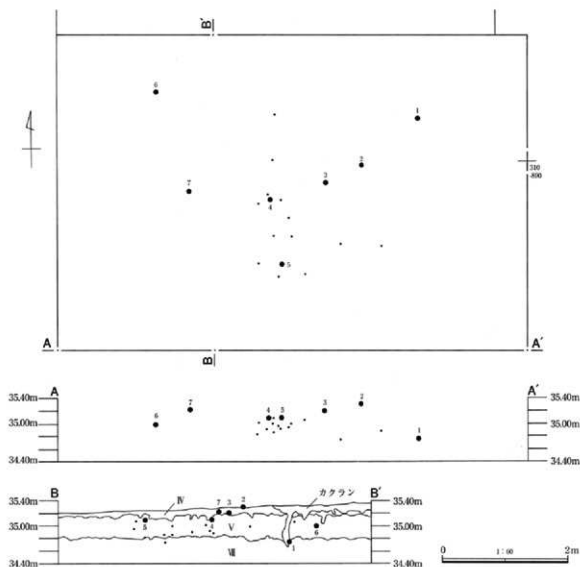


第112図 Cトレンチ出土石器

表面右半に細長く自然面を残す。右縁には新しい傷痕がある。先端部は厚い。長さ3.2cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重量3.1g、黒曜石。

2区1号ブロック

硬質頁岩や黒曜石など様々な石材を用いるブロックであり、他の場所から持ち込まれたと考えられる単品が多い。IV層下部からV層にかけて出土している。4m×3m程度の範囲に散漫に散っており、相互に接合しない。合計20点出土したが、チップがほとんどであり、報告するのは次の8点である。



第113図 2区1号ブロック石器分布図



第114図 1号ブロック出土石器(1)



第116図 1号ブロック出土石器(2)

1は縦長剥片を素材とした彫刻刀形石器であり、先端部左側縁に右斜め上からのグレイパーファシットが2条入る。右側縁には使用痕によると思われる微細な剥離痕がある。表面右側に新しい傷痕あり。打面は剥離面。V層下部から出土している。長さ5.3cm、幅2.8cm、厚さ0.9cm、重量12.9g、黒色頁岩。

2は横長剥片であり、使用痕は認められない。下縁に新しい傷痕があり、打面は調整された剥離面であ

り、表面側に細長く自然面を残す。IV層から出土した。長さ4.7cm、幅6.3cm、厚さ1.3cm、重量33.3g、黒色頁岩。

3は横長剥片であり、下端は一部欠損しているものの、あまり長くは伸びないものと思われる。打面は剥離面。表面側の稜線はほぼ平行する。左側縁に細長く栞理面を残す。多少打痕は厚くなるものの、さほど部厚くはない。IV層から出土した。長さ2.4

cm、幅3.2cm、厚さ0.9cm、重量5.6g、硬質頁岩。

4は使用痕のある縦長剥片であり、下半部は欠損している。打面は剥離面。両側縁に使用痕と考えられる微細な剥離痕が認められる。表面左側に一部自然面を残す。V層から出土した。長さ3.6cm、幅3.3cm、厚さ3.0cm、重量4.5g、硬質頁岩。

5は縦長剥片であり、表面の種と裏面の主要剥離面はほぼ直角であり、90度の打面転位が行われたことが分かる打面再生剥片である。打面は剥離面で、丁寧な打面調整が行われている。打痕はやや高く盛り上がる。下縁の一部に微細な剥離痕があり、使用痕と思われる。左右両側縁の一部欠損。IV層から出土した。長さ4.6cm、幅3.1cm、厚さ1.3cm、重量10.2g、珪質頁岩。

6は縦長剥片であり、打面側と右側縁下部は欠損している。両側縁と稜線は平行する。縁辺は鋭い。V層から出土した。長さ2.4cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重量2.0g、珪質頁岩。

7は横長剥片であり、表面に自然面を多く残す。打面は剥離面。中央部分は厚いが、下縁は薄く鋭い。その部分に使用痕と考えられる小剥離痕が認められる。IV層下部ないしV層から出土した。長さ3.4cm、幅3.7cm、厚さ1.1cm、重量10.9g、硬質頁岩。

8は5と同様に表面の種と主要剥離面が直角になり、90度の打面転位が行われたことが分かる打面再生剥片である。打面は剥離面で、打面調整が行われている。左側縁には不規則な微細な剥離痕があるが、使用痕とは断定できなかった。打痕は高く盛り上がっている。1号ブロック調査中に取り上げてしまった個体であり、層位・出土位置共に不明である。長さ4.4cm、幅3.2cm、厚さ0.8cm、重量10.3g、硬質頁岩。

3 3区

3区ではまず東地区で8カ所の試掘を行ったが、旧石器は全く出土しなかった。西地区では古墳が多いので、その間を縫うようにして4カ所の試掘坑を設けたが、そのうち、もっとも南側のトレンチで旧石器が出土したので、ここを拡張して調査した。その結果、下記の多数の資料が出土したため、ここを2号ブロックと名づけて次に報告する。この2号ブロックは、調査時には「3区1ブロック」と呼称していたが、2区1号ブロックと紛らわしいので、報告書では名称を変更することにしたものである。

3区2号ブロック

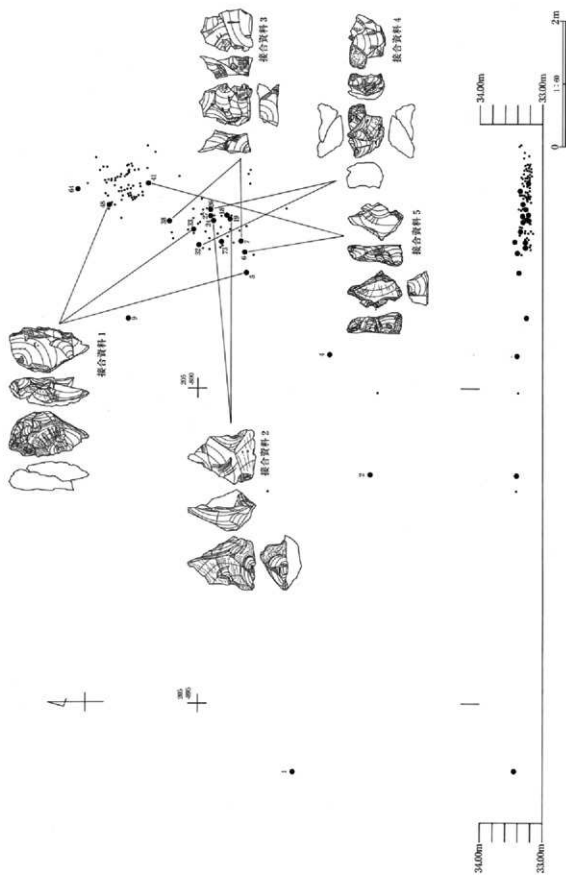
2号ブロックは黒曜石を主体とするブロックで、石材に多少のバラつきはあるものの、ほぼ同一母岩と考えて良いものと思われる。石器は8号墳と9号墳とのごく狭い地域から、122点が出土した。そのほとんどはごく小さなチップであり、その他、取り上げた土を洗浄したところ、きわめて多数のチップを回収した。出土層位はごく一部を除いてV層の上部である。これらはタテ3m、ヨコ1mのごく狭い範囲から出土しており、接合資料は全てこの範囲内で接合する。その他、1、2、4、9の4点の石器(全て接合しない。第120図)がやや離れて出土する。

接合資料1 (5+33+48)

接合資料1は、3点接合。横長剥片同士の間以小形横長剥片の48が接合する。右側縁からの打撃により分割されている。左側縁側→右側縁側という具合に180度打面が転位する。裏面側には別の横長剥片が接合するものと考えられる。質の良い黒曜石であるが、不純物が多く含まれ、その部分からは良質の大形剥片は取れていない。長さ5.3cm、幅3.1cm、厚さ1.9cm、重量は計26.8g、黒曜石。

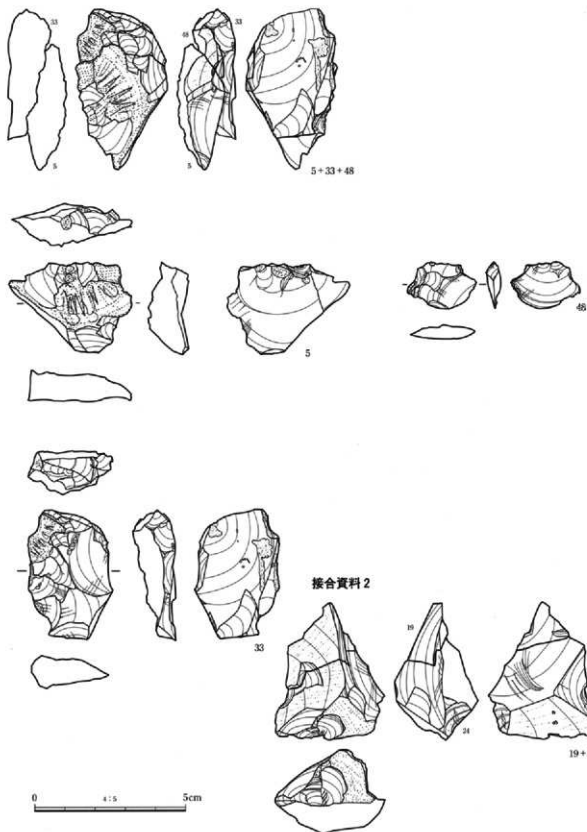
5は横長剥片。表面に自然面を残す。打面は剥離面。長さ2.9cm、幅4.0cm、厚さ1.3cm、重量12.1g。

33は横長剥片。表面上部に部分的に自然面を残す。



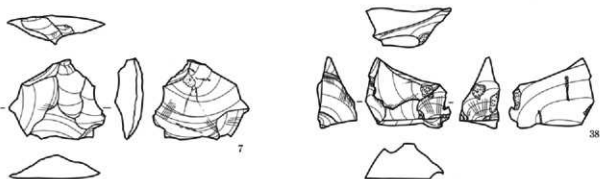
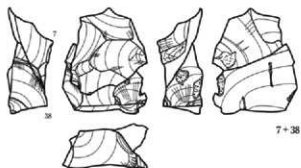
第116図 3区2号ブロック石器分布図

接合資料 1

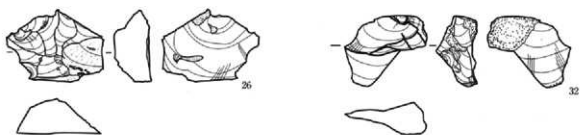
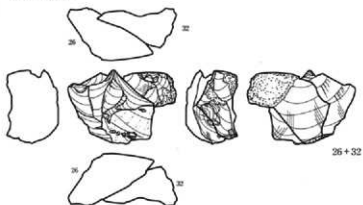


第117図 2号ブロック 接合資料1・2

接合資料3



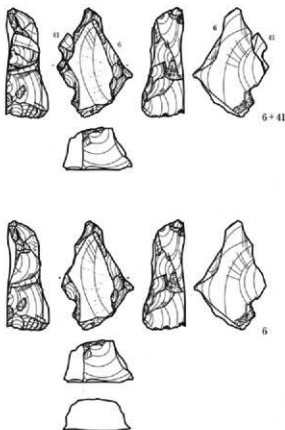
接合資料4



0 4.5 5cm

第118図 2号ブロック 接合資料3・4

接合資料 5



第119図 2号ブロック 接合資料 5

長さ4.2cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm、重量13.5g。

48は小形横長剥片。長さ1.6cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm、重量1.2g。

接合資料 2 (19+24)

接合資料 2 は、2 点の接合。表面側に自然面を多く残す。小形横長剥片を取った痕跡あり。表面左側縁からの打撃により二分割されている。長さ4.5cm、幅3.7cm、厚さ2.8cm、重量は計23.1g、黒曜石。

接合資料 3 (7+38)

接合資料 3 は、横長剥片同士の 2 点接合。右側縁からの打撃により 7 は剥離されている。38とは90度の打撃方向の違いが認められる。長さ3.5cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm、重量10.5g、黒曜石。質の良い部分はあるものの不純物が多い。

7は横長剥片。打点は剥離面。長さ2.6cm、幅3.2



cm、厚さ1.0cm、重量4.6g。

38は横長剥片。打点は下側で、打面は剥離面。長さ2.3cm、幅2.8cm、厚さ1.2cm、重量6.0g。

接合資料 4 (26+32)

接合資料 4 は、2 点の接合、打点は上部。質の良い部分のあるものの、不純物が多い。横長剥片同士の接合資料。打点と打撃方向はほぼ同じ。長さ2.4cm、幅3.6cm、厚さ1.7cm、重量10.4g、黒曜石。26は横長剥片。下縁に細長く自然面を残す。長さ2.4cm、幅3.2cm、厚さ1.2cm、重量7.0g。

32は横長剥片、上部に大きい不純物が認められる。長さ2.3cm、幅2.75cm、厚さ1.1cm、重量3.4g。

接合資料 5 (8+41)

接合資料 5 は、2 点の接合。三角形の厚手横長剥片素材の角錐状石器未製品に調整剥片が接合したも

の。左側縁には41の下側にも同様な剥離痕が認められる。長さ3.6cm、幅2.5cm、厚さ1.4cm、重量9.5g、黒曜石。質の良い部分はあるものの不純物を多く含む。

6は厚手の横長剥片を素材とし、調整は急角度で左側縁は裏面側から、右側縁は表面側から施されている。打面は、表面は右側縁中央から、裏面は向かいの左側縁中央からで、180度転位されている。長さ3.6cm、幅2.4cm、厚さ1.4cm、重量9.2g、黒曜石。

以下は単品である。

41は調整剥片の一つであり、左側縁に接合している。長さ1.0cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量0.3g。

4は角錐状石器を製作する途中の未製品と考えられる。6よりも剥離工程の進んだもので、より完成形に近い形態となっている。断面は二等辺三角形を呈する。両側縁とも裏面側から急角度の調整剥離を施す。厚手の剥片素材で、下半部の調整は稜部右側からの剥離を施す。長さ3.6cm、幅1.5cm、厚さ1.1cm、重量5.1g、黒曜石。一部不純物を含むが、比較的良好部分を使用している。

9は横長剥片であり、打面は剥離面で、打面調整が施されている。縁辺部には3カ所細かい調整剥離が認められる。長さ1.9cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重量2.3g、黒曜石。

18は横長剥片であり、打面は剥離面で、打面調整が施されている。二次加工や使用痕は認められない。長さ1.9cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm、重量2.2g、黒曜石。

64はやや縦長の剥片で、90度の打面転位が認められる。表面に一部自然面を残す。長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重量1.9g、黒曜石。

2はやや横長の剥片で、裏面側に一部自然面を残す。打点は表裏とも近い位置からの打撃により剥離されている。長さ2.9cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm、重量5.1g、黒曜石。

27は不定形の縦長剥片で、表面に自然面を多く残す。打面は剥離面である。長さ3.9cm、幅3.0cm、厚さ1.0cm、重量10.6g、黒曜石。

73は不定形の横長剥片で、打面は剥離面。表面に

自然面を多く残す。長さ2.5cm、幅3.1cm、厚さ0.6cm、重量4.0g、黒曜石。

1は横長剥片で、打面は剥離面。剥片剥離時に右側縁部は縦に割けたものと考えられる。断面は平行四辺形。長さ2.3cm、幅3.3cm、厚さ0.7cm、重量4.2g、黒色安山岩。

4 4区

4区は養護学校校舎建設のためにかなり深い面積が掘削されてしまい、ごく狭い地域にルームが残っていたに過ぎないため、試掘坑は4カ所しか設けられなかった。そのうち、西端の、9号墳墳丘上に設けたトレンチから旧石器が出土した。そのため可能な範囲で拡張し、調査した。これも調査時には「4区1号ブロック」と呼んでいたが、本書では「3号ブロック」と改称して報告する。

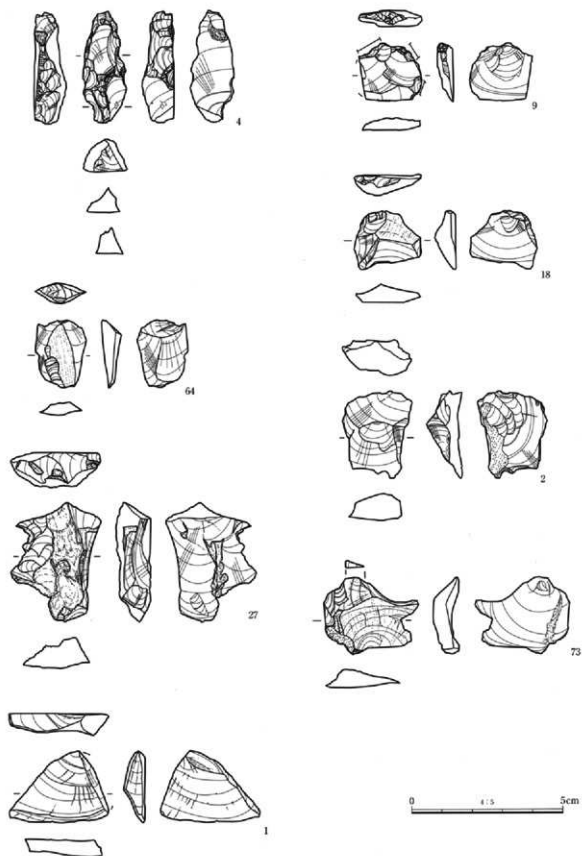
4区3号ブロック

3号ブロックはチャートを主体とするブロックで、いくつかの接合資料に分かれ、直接接合しないものもあるが、チャートは全て同一母岩と考えられる。ほぼ4m×3mくらいの範囲に集中して出土する。東側は調査を行ったので、この方向に広がる可能性はないが、西側は調査区外となってしまうため、こちらに広がる可能性もある。全て合わせて156点出土した。それぞれの接合資料はかなり散った状態で出土している。

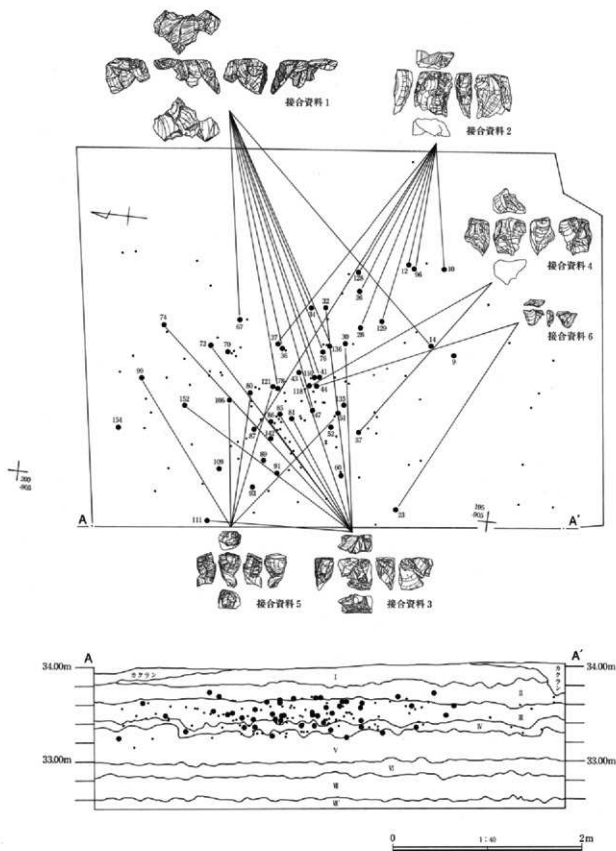
出土層位はⅢ層とⅣ層とに集中している。その前後の出土は二次的な移動によるものであろう。

接合資料1(14+34+36+41+47+67+76+78+116+136)

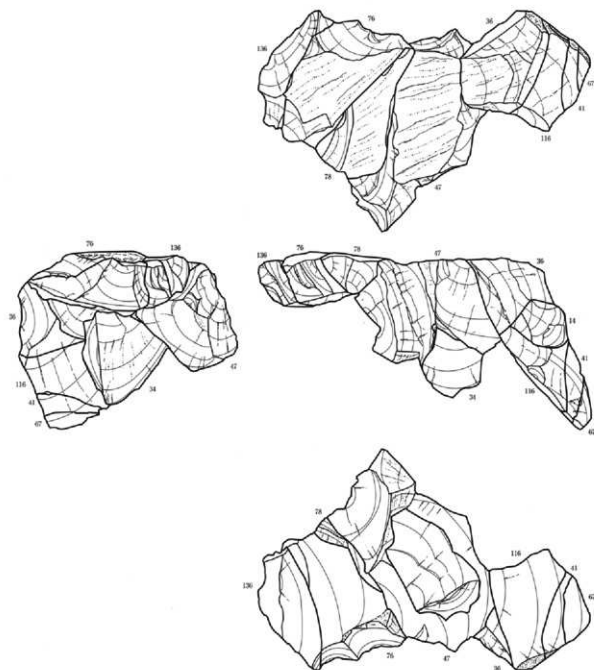
接合資料1は、10点が接合。上面に棋理面、裏面に左側に自然面を帯状に残す。下面中央に調整剥離を施すやや不定形の横長剥片が接合する。角錐状石器の未製品か。長さ4.6cm、幅8.6cm、厚さ5.0cm、重量181.6g、チャート。



第120図 2号ブロック出土石器



第121図 4区3号ブロック石器分布図



第122図 3号ブロック 接合資料1 (1)

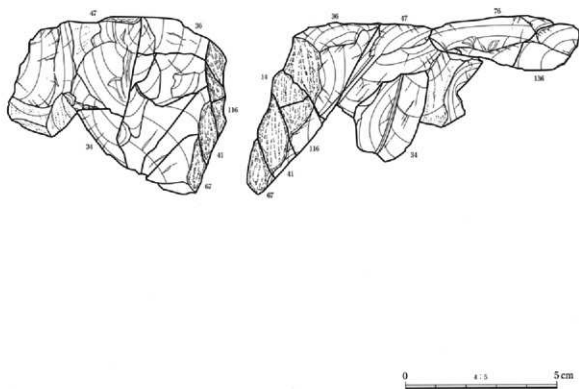
接合資料1のうち5点接合資料(14+36+41+67+116)は、縦長剥片を素材とした残核で、横長剥片を剥離しているが、あまり大きな素材は取れていないようである。右側縁に細長く自然面を残す。良く打面は調整されている。長さ6.0cm、幅3.6cm、厚さ2.3cm、重量56.0g。

67は逆三角形の横長剥片であり、左側面に自然面を残す。長さ1.8cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、重量1.9g。

41も67と相似形の横長剥片であり、やはり左側縁に自然面を残す。長さ2.6cm、幅2.8cm、厚さ0.9cm、重量5.3g。

36は5点接合資料を分割し、打面を下面に再生したものと考えられる。長さ3.8cm、幅3.5cm、厚さ2.5cm、重量25.6g。

接合資料1のうち2点接合資料(14+116)は36と接合するもので、両者はよく類似する。長さ3.5



第123図 3号ブロック 接合資料1(2)

cm、幅3.6cm、厚さ2.2cm、重量23.2g。

116は14の横長剥片を剥離したもの。長さ3.3cm、幅3.6cm、厚さ1.6cm、重量16.9g。

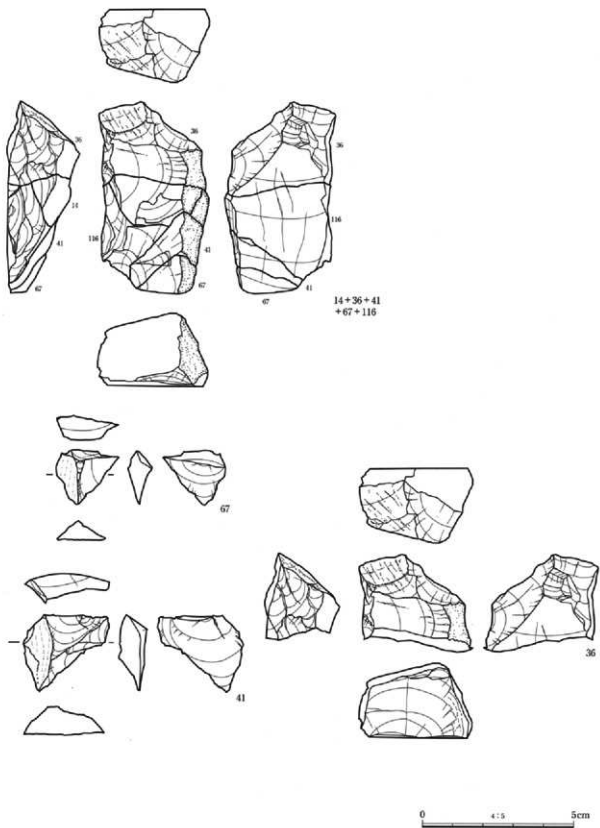
14は横長剥片で、116の表面上部に接合する。長さ1.7cm、幅3.1cm、厚さ1.5cm、重量6.2g。

接合資料1のうち2点接合資料(34+47)は右側縁から裏面側にかけて楔理面を残す。長さ6.9cm、幅4.7cm、厚さ3.3cm、重量81.7g。

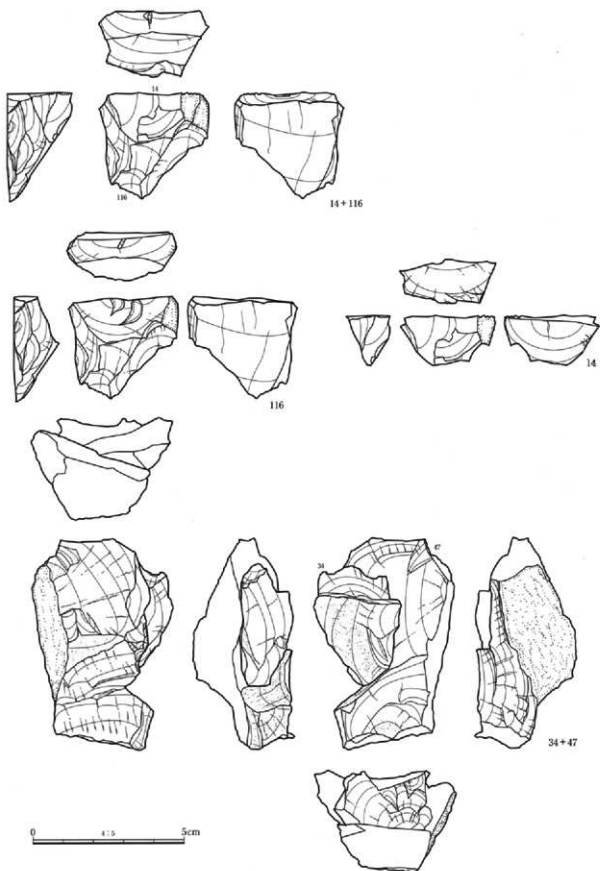
47は楔理のための段を多く有するもので、横長剥片を剥離した痕跡を多く残す。長さ6.9cm、幅3.9cm、厚さ3.2cm、重量69.2g。

34は裏面上部に楔理の段を有する。表面上部に裏面側から急角度の剥離が二つ入る角錐状石器の未製品の可能性がある。長さ4.0cm、幅2.9cm、厚さ1.6cm、重量12.6g。

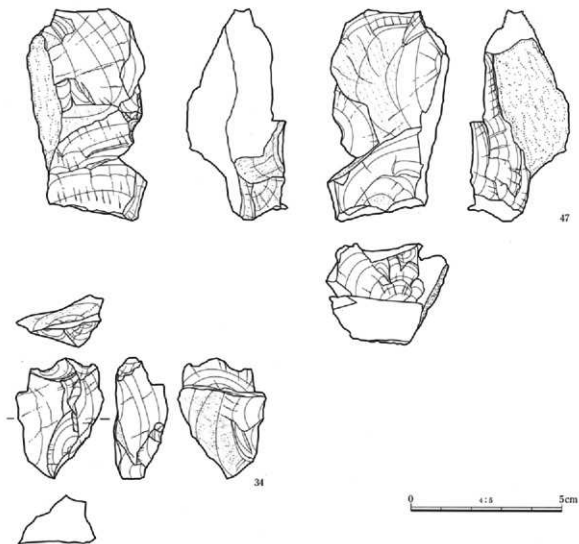
接合資料1のうち3点接合資料(76+78+136)



第124図 3号ブロック 接合資料1(3)



第125図 3号ブロック 接合資料1(4)



第126図 3号ブロック 接合資料1 (5)

は、方形に近い横長剥片で、表面に摂理面を大きく残す。周辺からの剥離は比較的急角度で横長の小形剥片を剥がしていることが分かる。長さ5.1cm、幅4.9cm、厚さ1.8cm、重量43.8g。

2点接合資料(76+78)は上記3点接合資料から136の横長剥片を剥がしたものである。長さ4.2cm、幅4.9cm、厚さ1.8cm、重量(76は24.0g+78は9.9g)33.9g。

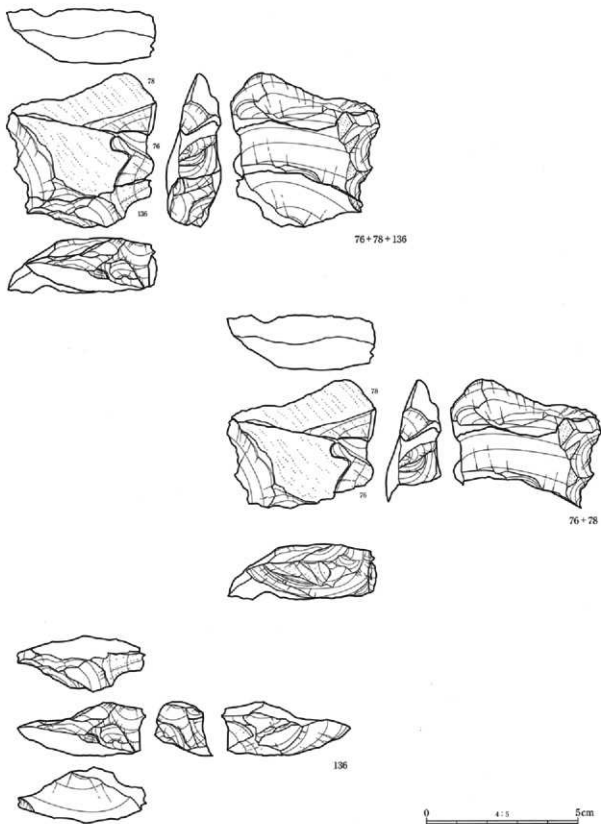
136は厚みのある横長剥片で、76の下部に接合する。長さ1.8cm、幅4.2cm、厚さ1.8cm、重量9.9g。

接合資料2(10+12+26+28+37+87+96+128+129)

接合資料2は9点が接合しており、全体としてはほぼ方形を呈する。上面に摂理面を残す。石材はチャートを用いており、直接接合はできなかったが、接合資料1と同一母岩と考えられる。上部が厚く、下端は薄くなっている。横長の剥片素材と考えられる。両面とも横から剥離が認められる。長さ5.9cm、幅4.9cm、厚さ2.3cm、重量67.2g、チャート。

接合資料2のうち5点接合資料(10+12+28+128+129)は、三角錐形石器未製品か。10や129などの調整剥片が接合している。長さ5.8cm、幅2.1cm、厚さ2.0cm、重量20.5g。

10は横長の調整剥片で、長さ0.9cm、幅1.7cm、厚



第127図 3号ブロック 接合資料1(6)

第3章 調査の成果

さ0.3cm、重量0.2g。

129は横長の調整剥片で、剥離の際、途中から二つに折れたものと考えられる。長さ0.9cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量0.5g。割れた状態で10と大きさは類似する。

接合資料2のうち3点接合資料(12+28+128)は、10と129の調整剥片を外した後の状態のもので、基部両側縁から急角度の調整加工が入っているのが分かる。長さ5.8cm、幅2.1cm、厚さ2.0cm、重量19.8g。

接合資料2のうち2点接合資料(28+128)は、前記3点の接合資料の先端部分を外したもので、下面には上下から細かい剥離が入っているのが、よく分かる。長さ1.8cm、幅3.1cm、厚さ0.8cm、重量(28は1.69g+128は1.2g)2.9g。

12は前記2点の接合資料を先端から外した最後のものである。長さ4.5cm、幅2.2cm、厚さ2.0cm、重量16.9g。

接合資料2のうち2点接合資料(37+87)は、断面三角形の細長い剥片であり、87には剥離後細かい調整剥離が施されている。長さ4.7cm、幅1.8cm、厚さ1.4cm、重量(37は9.4g+87は0.5g)9.9g。

接合資料2のうち2点接合資料(26+96)は、やや不正形の長方形を呈する横長剥片であり、上面に砥面を残す。長さ5.8cm、幅3.5cm、厚さ1.6cm、重量(26は30.2g+96は6.6g)36.8g。

接合資料3(30+32+43+72+74+81+85+86+111+142+152)

接合資料3は11点が接合しており、全体としてはほぼ正方形を呈する。表面右斜め上の角からの打撃により剥離された横長剥片を素材としている。その部分から分割されている。長さ4.3cm、幅4.5cm、厚さ2.5cm、重量82.9g。

152は小形縦長剥片であり、上部は欠損している。左側縁に自然面を残す。長さ1.2cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重量0.6g。

111は石刃。剥離の際の打撃により縦に割れたものと考えられる。断面三角形。表面に自然面を残す。

打面は剥離面。長さ3.2cm、幅1.1cm、厚さ0.9cm、重量2.2g。

32は断面三角形の小形石刃。長さ2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量1.1g。

接合資料3のうち2点接合資料(72+74)は、平面形が三角形を呈する横長剥片で、剥片剥離の際に二つに割れたものと考えられる。長さ3.3cm、幅4.0cm、厚さ0.7cm、重量(72は3.0g+74は7.0g)9.9g。

接合資料3のうち2点接合資料(85+142)は、平面形が三角形を呈する横長剥片。表面は自然面、打面は剥離面。142は調整剥離の際の小形横長剥片。対峙する位置にも同様な剥離が認められる。長さ3.6cm、幅3.9cm、厚さ1.0cm、重量(85は14.2g+142は0.8g)15.1g。

30は石刃。表面上部に一部自然面を残す。打面は剥離面。長さ3.0cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重量7.5g。

81は縦長剥片。左側縁に細長く自然面を残す。打面は剥離面。長さ3.7cm、幅3.3cm、厚さ1.4cm、重量14.9g。

43は石刃。断面三角形。上部は欠損している。長さ2.5cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重量3.5g。

86は三角形の残核。長さ3.7cm、幅4.3cm、厚さ3.2cm、重量28.2g。

接合資料4(57+118)

接合資料4は、2点が接合している。間に空白部分があり、失われた部分がある。長さ5.0cm、幅4.3cm、厚さ3.3cm、重量57.0g。

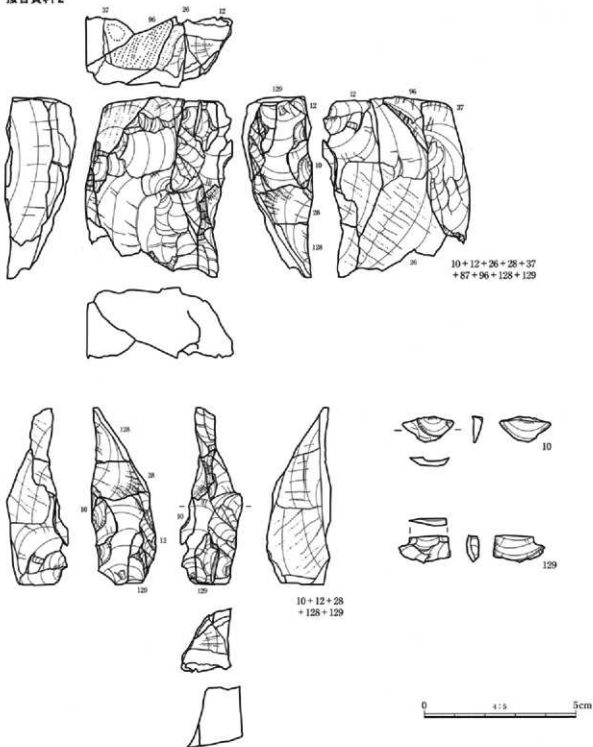
118は横長剥片。厚手。57と分割後横長剥片を剥離しているが、あまり良好なものを取れていないようである。長さ4.9cm、幅3.2cm、厚さ2.8cm、重量36.0g。

57は横長剥片。打面は砥面。長さ3.7cm、幅3.6cm、厚さ1.5cm、重量21.0g。

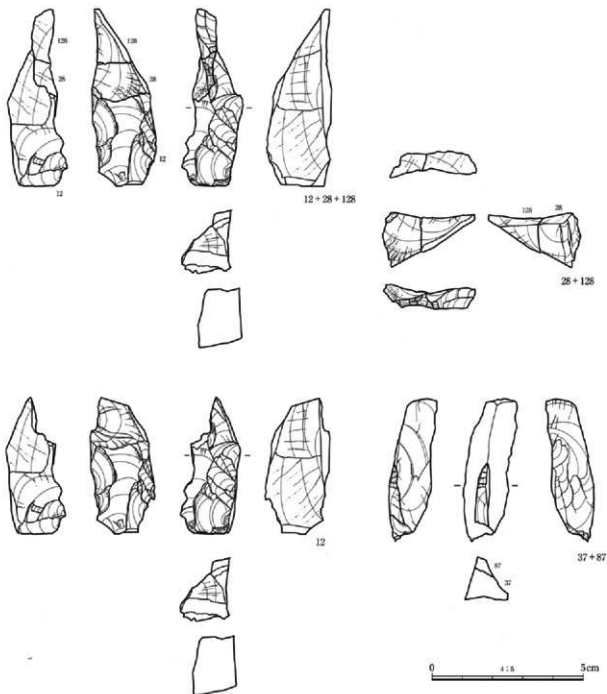
接合資料5(51+80+99+106+121)

接合資料5は、5点が接合している。106の横長剥片を剥離した後に縦長剥片や石刃が剥離されている状態が観察できる。長さ4.6cm、幅2.9cm、厚さ2.5cm、重量33.8g、チャート。

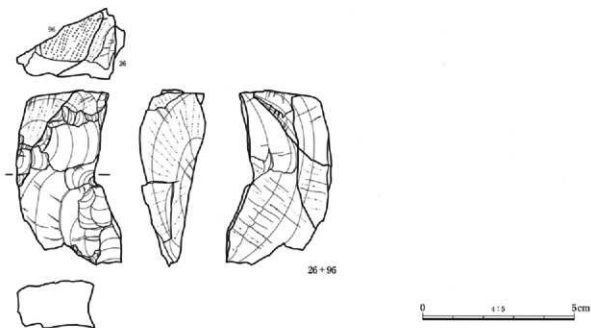
接合資料 2



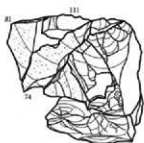
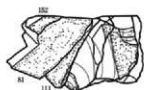
第128図 3号ブロック 接合資料 2 (1)



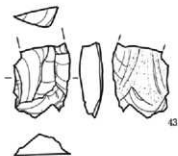
第129図 3号ブロック 検合資料2 (2)



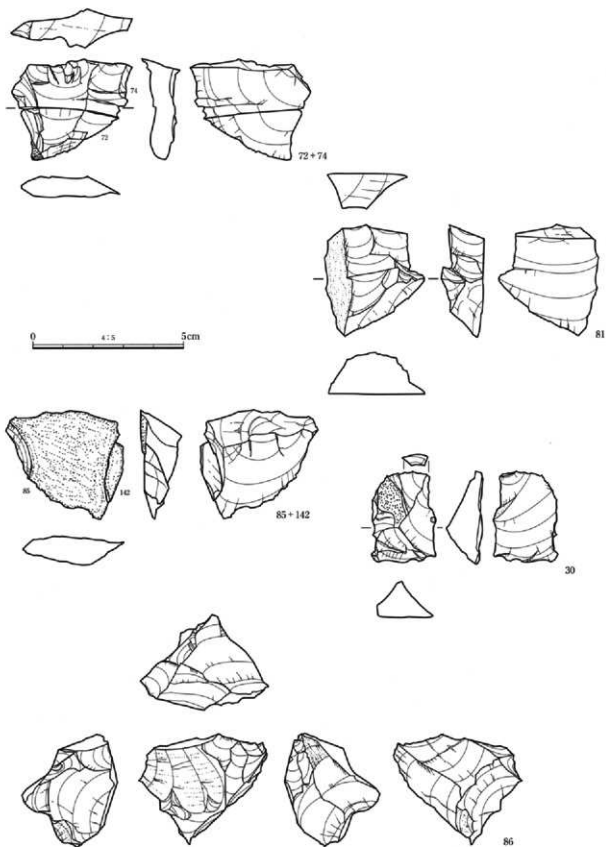
接合資料 3



30 + 32 + 43 + 72 + 74 + 81
+ 85 + 86 + 111 + 142 + 152

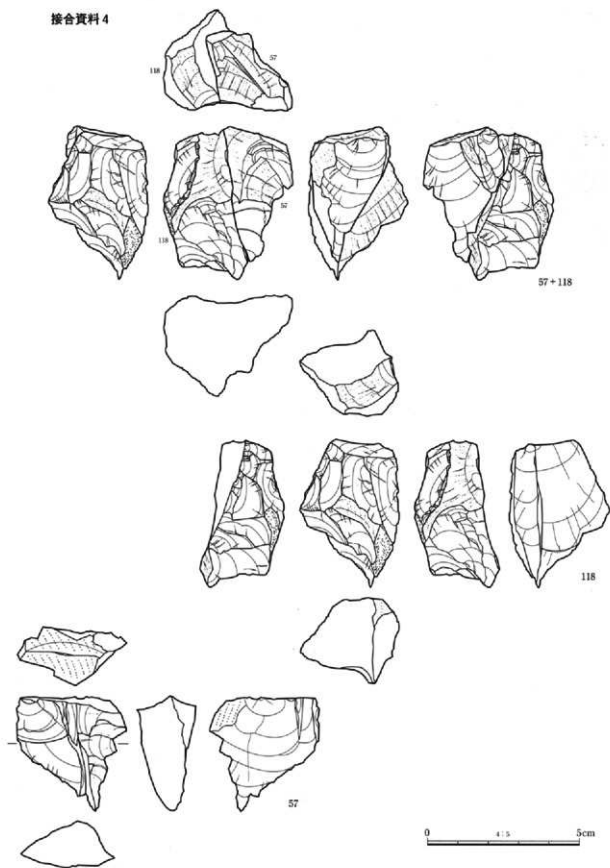


第130図 3号ブロック 接合資料2(3)・3(1)



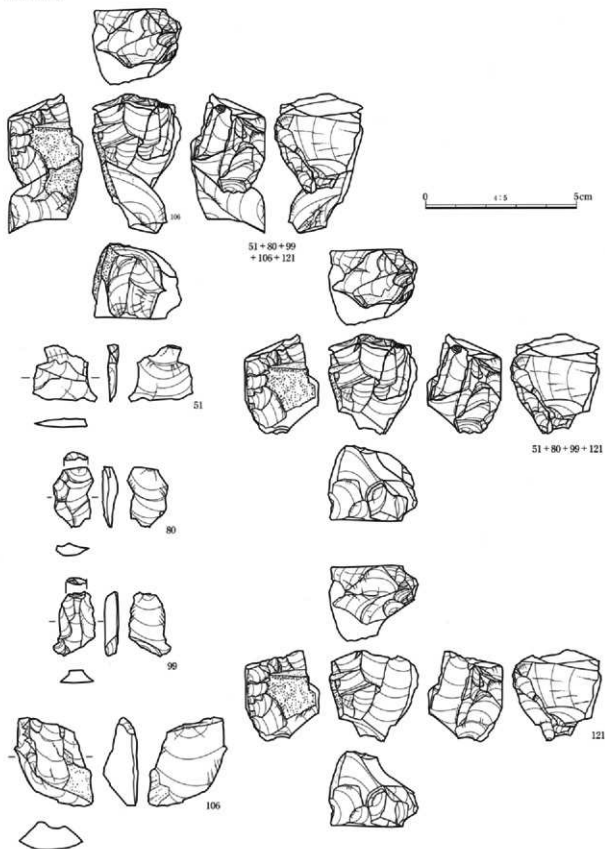
第131図 3号ブロック 接合資料3(2)

接合資料 4



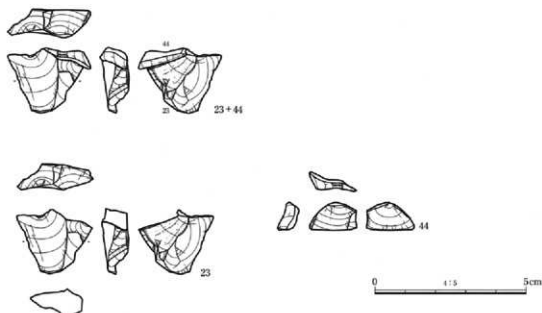
第132図 3号ブロック 接合資料 4

接合資料 5



第133図 3号ブロック 接合資料 5

接合資料 6



第134図 3号ブロック 接合資料 6

接合資料5のうち4点接合資料(51+80+99+121)は、石核に石刃が接合した状態のもの。左側面には小剥離が並ぶが、使用可能な大きさのものには取れていない。180度、90度の打面転位が認められる。長さ3.3cm、幅2.9cm、厚さ2.5cm、重量26.6g。

51は横長剥片、打面は剥離面。長さ1.8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重量1.4g。

80はやや不定形な小形石刃。打面は剥離面。長さ2.0cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重量1.1g。

99は小形石刃。打面に一部自然面を残す。下端は剥片剥離時に欠損したものと考えられる。長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量1.3g。

106は原石より石刃石核を製作する際にできた第一次剥片、左側面に自然面を残す。打面は剥離面。長さ2.9cm、幅2.6cm、厚さ1.1cm、重量7.2g。

121は小形石刃を剥離した後の残核。長さ3.0cm、幅2.9cm、厚さ2.5cm、重量22.8g。

接合資料 6 (23+44)

横長剥片を素材とし、打面側に間が山形になるように調整剥離を施したもの。長さ2.2cm、幅2.7cm、厚さ1.0cm、重量4.1g、チャート。

23は打面のある上部に調整加工を施した剥片素材。長さ2.1cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm、重量3.4g。

44は調整剥離の際の小形横長剥片、打面は剥離面。長さ1.0cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重量0.7g。

以下は接合資料ではなく、単品での出土である。

154は先端がほぼ平行する小形のナイフ形石器で、基部は尖る。裏面側右側縁に調整加工が入る。それに対峙する表面左側縁中央にもいくつかの不規則な剥離が入る。基部の尖った部分は素材のままを利用している。長さ3.7cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm、重量2.0g。

89は小形ナイフ形石器。打面は剥離面で、打瘤の除去はなされていない。断面三角形で分厚い。左側縁は上下の両方向から、右側縁は表面側から調整剥離が入る。風化顕著。長さ3.1cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量2.0g、黒色頁岩。

91は小形ナイフ形石器で基部両側縁に調整加工を施す。先端は尖る。打面は剥離面で調整されている。基部が薄く、上部先端の方が厚くなっている。長さ2.9cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重量1.5g、チャート。

135は小形の縦長剥片で、上部は欠損している。右側縁は鋭い。長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量0.7g、チャート。

70はほぼ台形を呈する縦長の剥片で、右側縁はやや鋭くなっている。長さ2.9cm、幅3.8cm、厚さ1.3cm、重量16.1g、チャート。

109は縦長剥片であり、縁辺に僅か不規則な微細剥離が認められるが、意識的なものとは考えられない。下端は欠損している。打面は剥離面。左側縁上部に細長く自然面を残す。全体に薄手。長さ3.0cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重量1.6g、黒曜石。

52は石核であり、横長剥片を取った後の残核と考えられる。右側縁上部に摺理面を残す。表面右下縁から調整剥離が入る。長さ4.6cm、幅3.3cm、厚さ2.0cm、重量19.4g、チャート。

93は縦長剥片であり、表面左側縁に細長く摺理面を残す。打瘤は高く盛り上がる。打面は剥離面で調整されている。長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量2.1g、チャート。

60は横長剥片で、右側は剥離の際に縦に割けたものと考えられる。下縁は薄く鋭くなっている。小形台形石器の素材にもなる形態である。長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量1.1g、チャート。

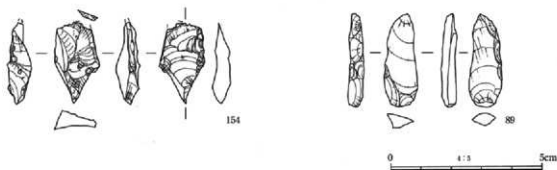
9は打面から見ると「く」の字状の横長剥片で、一部摺理面を残す。長さ2.3cm、幅3.3cm、厚さ0.7cm、重量4.3g、チャート。

その他の場所からもごく少数であるが、旧石器と思われるものが出土しているので、最後にまとめて報告する。

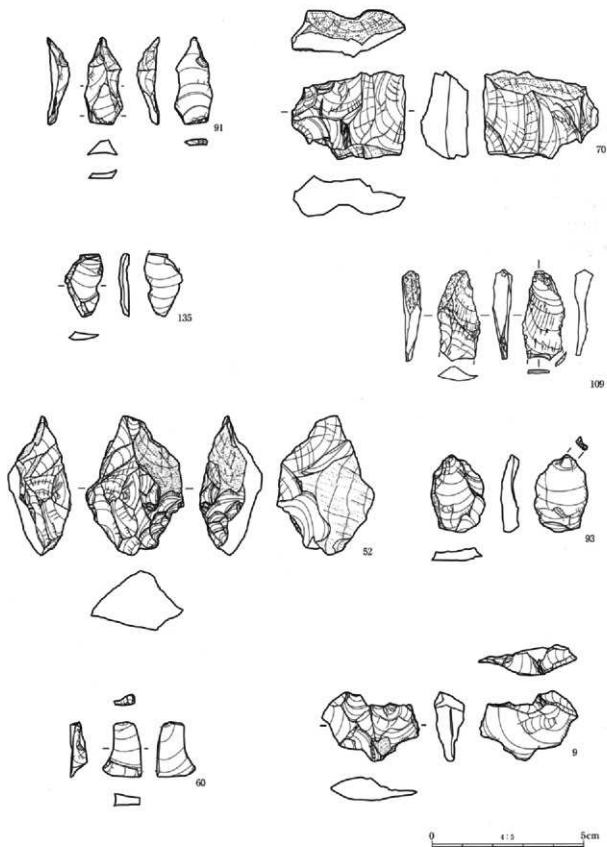
2-3区 ナイフ形石器

2-3区でも1カ所のトレンチを設けて調査を行った。トレンチ内からは石器は出土しなかったが、古墳精査時に次のナイフ形石器が出土した。

縦長剥片を素材とした側縁加工の小形ナイフ形石器で、表面基部右側下縁に調整加工と考えられる小剥離が平行する。薄手でかなり縁辺は鋭くなっている。先端部は一部欠損している。打点が残っている。



第135図 3号ブロック出土石器(1)



第136図 3号ブロック出土石器(2)

る。長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量0.7g、黒曜石。

次の3点は古墳からの出土である。周堀掘削時にロームに埋もれていたものが持ち上がってしまったものであろう。

1号墳周堀Ⅲ区 横長剥片

表面右上に小剥離が認められるが、意識的な調整痕ではない。右下は一部欠損している。表面左下に自然面を残す。縁辺は薄く鋭い。打面は剥離面と考えられる。長さ3.0cm、幅3.9cm、厚さ0.8cm、重量5.4g、黒曜石。

5号墳周堀 剥片

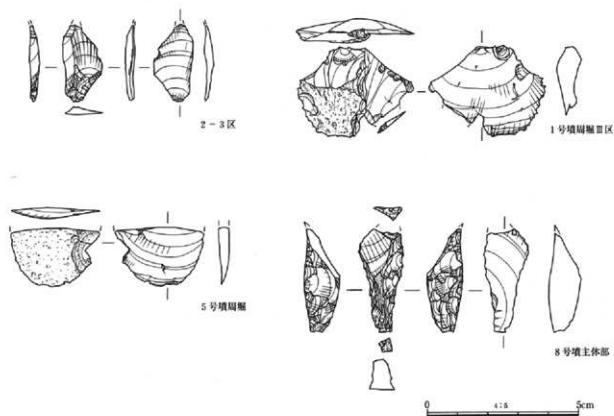
剥離の際に途中で欠損した横長剥片と考えられる。表面に自然面を残す。先端は薄くなっている。長さ1.9cm、幅3.0cm、厚さ0.4cm、重量1.7g、黒曜石。

8号墳主体部 ナイフ形石器

切り出し形を呈するナイフ形石器であり、先端部は欠損している。横長剥片を素材とし、打痕は除去されている。基部は幅状で分厚く、両側縁は急角度の調整加工が施され、表面中央に細長く自然面を残す。一応ここではナイフ形石器に分類したが、角錐状石器に分類することもある。長さ3.4cm、幅1.5cm、厚さ1.2cm、重量4.0g、黒曜石。

まとめ

2区A・B・C各トレンチ出土の遺物は単品で、ナイフ形石器、使用痕のある石刃、縦長剥片、それぞれ単独の石器として成立するものであった。今回報告の一群の中では古い段階に属するものと考えられる。特にAトレンチ出土のものは、古い段階と思われる。



第137図 その他 出土石器

2区1号ブロック出土の遺物群も単品が多く、地元の黒色頁岩製のものもあるが、明らかに新潟県や東北等の産出と考えられる硬質頁岩製のものも含まれていた。使用痕を有するものも多く認められ、そのほとんどが搬入品と考えられる。硬質頁岩のチップ類も出土したものの、接合できた資料は皆無であった。チップ類の出土から、この場所で剥片剥離を行った可能性も否定できないが、ほぼ完成品を持ち込んで、この場所で僅かの調整加工を施した可能性の方が高いのではないかとと思われる。

3区2号ブロックは黒曜石を主体とするブロックであり、数多くのチップ類が出土した。その中で、2カ所のまとまりが認められたが、それぞれのまとまり同士だけの接合ではなく、まとまり間の接合も普通に認められた。自然面の外皮を残した遺物も多く、遺跡で剥片剥離が行われたことを窺わせる。また、接合できなかった1、2、4、9は、1の黒色安山岩を除き3点は黒曜石であり、搬入品の可能性は否定できないものの、接合してもおかしくない石材であり、同一母岩の可能性は十分考えられる。ここでは、よくゴロゴロなどと呼ばれる角錐状石器の製作を目指した調整加工が行われていたようである。6は横長剥片を素材としているが、4は縦長剥片を素材としている点では違いが認められる。4・6は共に加工途中のものであり、4はより完成品に近い形態のものである。角錐状石器の特徴としては、厚手の剥片を素材とし、裏面側から入る両側縁の調整加工は急角度であり、一部稜線側からの加工も認められる。要するに厚みが厚いので、下からだけでなく上からも剥離を施すのが、この石器の特性である。

4区3号ブロックはチャートを主体とするブロックであり、1～6接合資料に分かれるが、各接合資料間で接合はできなかったものの、非常に類似するチャート素材であり、同一母岩の可能性は極めて高いと考えられる。ここでも前述の黒曜石製の角錐状石器とは若干違いのあるものの、12を主体とする接合資料2を見るとやはり角錐状石器を目指した石器

製作が行われていたと考えて良いものと思われる。それに加えもう一つ特徴的なのは、121に見られるように小形の石刃を取ることを目的とした石核が製作されていたことである。さらに接合資料6に見られるように剥離と剥離の間が山形になるように調整された瀬戸内技法風の横長剥片も認められた。

8号墳主体部からは切出形を呈するナイフ形石器が出土した。横長剥片を素材とし、打磨除去し、基部側が厚く急角度で調整加工されており、他の角錐状石器と同様な特徴が認められた。角錐状石器に含める考え方もあり、時期的にも同様なものとして扱って良いと考えられる。

群馬県では、一般的に始良一丹沢パミス(A/T)降下以前のもの(群馬Ⅰ期)が多いが、南関東の立川ローム層Ⅳ～Ⅴ層に相当するこの時期の遺跡は極端に少なく、また両面加工の槍先形尖頭器の時期(群馬Ⅲ期)になり遺跡数が多くなり、武井遺跡のように莫大な数の槍先形尖頭器が発見される巨大遺跡も出現する。A/Tよりも上位の遺跡は赤城東南麓以東ではいくつかの遺跡で複数の文化層として確認されることが多い。太田市内では東長岡戸井口遺跡のように本遺跡と同様にチャートを素材とし、多くのナイフ形石器を製作する製作遺跡も見つかっている。この遺跡も時期的には群馬Ⅱ期に属するものの、本遺跡の方が古い段階に属するものと考えられる。群馬県では、南関東で遺跡数が多くなるこの時期に少なくなる。

ここまで明瞭な角錐状石器は、県内では出土例はまだまだ少なく、今回報告できた資料も少量ではあるものの、県内の研究に於いて参考になるものと考えられる。(紙面の都合上、参考資料は割愛させていただきます。)

〔「14 旧石器時代の調査」は、調査経過や出土状態などを除いて松村和男執筆〕

第4章 自然科学分析

群馬県高林西原古墳群の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

太田市域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになってきている。そこで、年代が不明な古墳や土層が検出された高林西原古墳群においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、古墳や土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、8号墳墳丘部、6号墳墳丘部、6号墳周堀部の3地点である。

2. 土層層序

(1) 8号墳墳丘部

8号墳墳丘部では、下位より灰褐色土（層厚5cm）、暗灰色土（層厚8cm）、成層したテフラ層（層厚1.7cm）、黄褐色土ブロック混じり灰褐色表土（層厚17cm）が認められる（図1）。表土中に含まれる黄褐色土ブロックについては、墳丘構成層に由来すると考えられている。また成層したテフラ層は、下位より、灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、白色軽石混じり灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm、軽石の最大径10mm）、黄色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色粗粒火山灰

層（層厚0.3cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）から構成されている。

(2) 6号墳墳丘部

6号墳墳丘部では、下位より褐色土（層厚11cm）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚11cm）、白色軽石混じり黄灰色細粒火山灰層（層厚1cm、軽石の最大径8mm）、灰色土（層厚1cm、部分的）、黄色土ブロック混じり灰褐色土（層厚6cm）、砂混じり黄褐色土（層厚11cm）、白色細粒軽石に富み若干色調が暗い灰色土（層厚7cm、軽石の最大径2mm）、盛土（層厚5cm以上）が認められる（図2）。これらのうち、黄色土ブロック混じり灰褐色土については、墳丘の構成層と考えられている。

(3) 6号墳周堀部

6号墳周堀部では、周堀の覆土をよく観察することができた。周堀覆土は、下位より褐色土ブロック層（層厚21cm）、褐色土（層厚21cm）、若干黄色がかった褐色土（層厚9cm）、暗褐色土（層厚7cm）、黒灰褐色土（層厚8cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）、黒灰色砂質土（層厚9cm）、砂混じり暗褐色土（層厚12cm）、砂混じりで若干色調が暗い褐色土（層厚8cm）、褐色砂質土（層厚15cm）、白色細粒軽石に富む褐色砂質土（層厚2cm）、暗灰色土（層厚7cm）、盛土（層厚5cm以上）からなる（図3）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層序を把握するために、3地点において採取された試料のうち、17点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。8号墳丘部の試料1には、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径3.1mm)が比較的多く含まれている。その斑品には、斜方輝石や角閃石が認められる。

6号墳丘部では、試料7や試料4にスポンジ状によく発泡し、斑品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石(最大径1.3mm)が少量ずつ含まれている。試料5から試料3にかけては、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径2.1mm)が含まれている。とくに試料5には、この軽石が比較的多く含まれている。その斑品には、斜方輝石や角閃石が認められる。試料3および試料2には、比較的良く発泡した淡褐色軽石(最大径1mm)が含まれている。この軽石の斑品としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。さらに試料2や試料1には、光沢をもちわずかに灰色がかった白色軽石(最大径2.8mm)が、多く含まれている。軽石の斑品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

6号墳周縁部では、いずれの試料にも、比較的良く発泡した淡褐色軽石(最大径3.7mm)が含まれている。とくに粗粒火山灰層として認められる試料12や、その上位の試料に多く含まれている。この軽石の斑品としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また試料13や試料9には、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径2.1mm)が少量ずつ含まれている。その斑品には、斜方輝石や角閃石が認められる。さらに試料3より上位の試料には、光沢をもちわずかに

灰色がかった白色軽石(最大径3.1mm)が含まれている。とくに試料2に多く含まれている。軽石の斑品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

6号墳丘部の試料5、試料4、試料2の3点について屈折率測定を行い、含まれるテフラ粒子の起源を明らかにすることを試みた。屈折率測定方法は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。6号墳丘部の試料5に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.502±である。重鉱物としては、斜方輝石のほか、角閃石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)と角閃石(n_2)の屈折率は、各々1.707-1.711と1.672-1.677である。試料4に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.514-1.519±である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.706-1.711である。試料2に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.508-1.512である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.707-1.711である。

5. 考察

屈折率測定の対象となった試料のうち、6号墳丘部の試料5のテフラ層は、層相、含まれる重鉱物の組み合わせ、さらに火山ガラス、斜方輝石、角閃石の屈折率などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳沢川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に同定される。したがって、同じ軽石を含む8号墳丘部の試料1の成層したテフラ層についても、Hr-FAに同定される。

6号墳丘部の試料4には、Hr-FAのほかに、軽

石の岩相や火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、4世紀中葉*1に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979)が混入していると考えられる。このことは、この土層が、墳丘の盛土と推定されていることと矛盾しない。

試料2には、光沢をもち若干灰色がかかった白色軽石が認められることや、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968)が多く含まれていると考えられる。

なお、6号墳墳丘部において、試料7付近に降灰層準があると思われる灰白色軽石は、その特徴からAs-Cと考えられる。また試料3および試料2に含まれる淡褐色軽石については、その岩相から、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。

6号墳周原部において認められた黄灰色粗粒火山灰層(試料12)については、含まれるテフラ粒子の特徴から、As-Bに同定される。また試料2にとくに多く含まれている軽石は、As-Aと考えられる。以上のことから、6号墳の層位は、Hr-FAより上位でAs-Bより下位にあると考えられる。なお8号墳についても、Hr-FAより上位にあると考えられる。

6. まとめ

高林西原古墳群において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉*1)、榛名ニツ岳澁川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間A軽石(As-A, 1783年)のテフラ層やテフラ粒子を認めることができた。6号墳および8号墳については、Hr-FAより上位にあると考えられる。

*1 現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである(たとえば、若狭, 2000)。しかし、具体的な年代観が示された研究報告

例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2—研究対象別分析法」, p.138-149.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質, 地研専報, no.45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
- 坂口 一(1986)榛名ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき, かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
8号墳填丘部	1	++	白	3.1
6号墳填丘部	1	+++	白	2.1
	2	+++	白, 淡褐	2.8, 2.3
	3	++	淡褐>白	1.0, 2.1
	4	+	白, 灰白	1.4, 1.3
	5	++	白	2.2
	7	+	灰白	0.8
	9	-	-	-
6号墳周堀部	1	+++	白>淡褐	2.3, 2.4
	2	+++	白	3.1
	3	++	淡褐>白	2.1, 2.3
	5	++	淡褐	3.7
	7	+++	淡褐	2.8
	9	+++	淡褐>白	2.6, 2.1
	11	+++	淡褐	2.6
	12	+++	淡褐	3.1
	13	+	白, 淡褐	1.8, 2.2

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は, mm.

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)	角閃石 (m)
6号墳填丘部	2	1.508-1.512	opx>cpx	1.707-1.711	-
6号墳填丘部	4	1.514-1.519	opx>cpx, (ho)	1.706-1.711	-
6号墳填丘部	5	1.502±	opx>ho, cpx	1.707-1.711	1.672-1.677

屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による. opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石. ()は量が少ないことを示す.

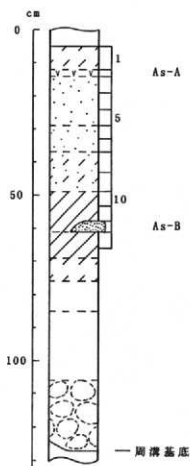
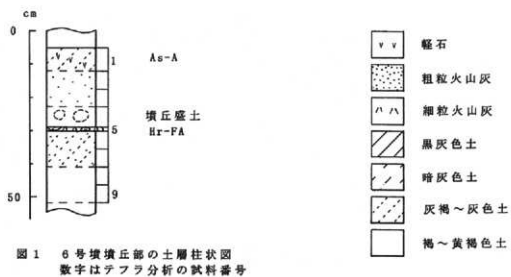


図2 6号填周溝部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

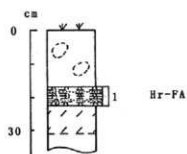


図3 8号填丘部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第5章 まとめ

高林西原古墳群を含めた高林古墳群内では、古くから発掘調査が数回行われてきたが、広い面積を調査するのは今回が初めてであり、多くの成果を得ることが出来た。

今回の調査区は高林古墳群の中では北西隅に当たると思われる。この地域はがんセンターの建設や住宅が建て込んでいることなど、開発が進んでいることもあるが、この古墳群中では古墳の密度が東半分比べて高くないと考えられていたようである（第5図）。

今回調査した古墳は総計11基である。そのうち、調査前に存在が推定されていたのは第5図にみるように1基だけであり、そのほかの古墳は知られていなかった。しかも、地表面に痕跡をどめない古墳がほとんどである。高林古墳群は、「上毛古墳総覧」や、現存する墳丘などからかなりの数の古墳があったことが分かっているが、地下にはそれ以上の古墳が埋もれていることが確認できた。古墳群全体の実数は、現在知られている数の数倍にもなるのではないだろうか。

調査した11基は全て円墳であり、規模は直径（周堀内径）26m（5号墳）から8m（4号墳）であり、中小規模の古墳であるといえよう。

これらの古墳はF Aの堆積状態によって次の4種類に分類することが出来る。

- A、F Aが周堀内に堆積
1号墳、2号墳、11号墳
- B、F Aが墳丘下の旧地表面に堆積
6号墳、8号墳 9号墳
- C、周堀内にF Aの堆積が見られない。また、墳丘部は調査区外、あるいは削平されて不明
3号墳、5号墳、7号墳
- D、削平のため周堀が浅く、F Aの存否が確

認できない

4号墳、10号墳

AはF A降下前に古墳が構築されていたことになり、今回調査した古墳の中では最も古い一群となる。これに対してBはF A降下後、それがさほど攪乱を受けないうちに構築されたものと思われる。Cは、周堀にF Aが見られないことから、F A降下後の構築と判断できるが、墳丘下にF Aがあるかどうかの確認が出来ない。Dは周堀がごく浅くなってしまふほどの削平を受けてしまっており、F Aがどこに存在するのか、全く不明であり、なおかつ遺物の出土もほとんどないので、時期を確定することは出来ない。

以上のように、2基を除いた9基については、F Aが降下した時期の前後に作られていた可能性が高い。これらの古墳は、F A降下を6世紀初頭とすれば、5世紀の最末から6世紀前半に造られたものと思われる。

このようにF Aを挟んで2時期に分けられることは、出土遺物、特に埴輪の研究にも大きな資料を提供することになるだろう。

主体部については、これも削平が激しく、ほぼすべての古墳で破壊されていた。その中で8号墳のみは、竪穴式小石塚が残っていた。古墳の中心部にはないので、これがこの古墳の唯一の主体部ではないと思われるが、今回調査できた主体部はこれのみである。石と粘土とで丁寧に構築されていたが、綿密に調査しても内部には何も入っておらず、どのような性格を持つものなのか、これだけでは考える資料を提供することは出来なかった。

埴輪は円筒埴輪を中心として数多く出土した。残念ながら削平・攪乱が激しかったため、まとまった数が出土した古墳は1号墳、6号墳、8号墳くらいであり、その他はだいたいの傾向を窺える程度の数しか出土しなかったが、6世紀初頭から前半の埴輪

を考える上では、きわめて良好な資料であると考えられる。

1号墳では円筒埴輪列が一部残っていたため、埴輪が配列されたまま出土した。それを含めていただいたの外形がわかるものが40本近く出土している。これらは一時期のもので、その特徴はかなり似ているが、細かく見ればかなりのバラエティーが認められ、特に近年盛んな「同工品論」などの研究の資料としてかなり有益な資料になるのではないかとと思われる。時間的制約から、詳細に分析することは出来なかったが、特に注目される点の一つだけ述べておくと、埴輪に施される線刻は工人の印である可能性がある。

1号墳の円筒埴輪には数種類の線刻が認められたが、それぞれ線刻の種類別に資料を見ていくと、それぞれの特徴に差を認めることが出来る。もちろん、それらの差は大きなものではないが、個人のクセや道具の違いなどによって生じるものである可能性が強く、それぞれ別の個人が造っているように思われる。たとえば、突帯や口縁の断面形、突帯を貼り付けた後の仕上げなどの粗密、透孔の形（正円か半円か、あるいはその大きさ）、全体のプロポーション、内面の調整の差、そして、「同工品論」では注意される、ハケメの差など、多くの点でいろいろな差異が認められるが、それらの差異は、同じ線刻のものではほぼ共通するのである。もちろん、線刻の認められないものも少数ながら有り、また、破損のために線刻の有無が不明になっている個体も数多くあるため、以上の推定を軽々に全体に及ぼすことは出来ず、さらなる検討が必要であるが、この点だけを見ても、この埴輪群の資料的価値の高さを認めることが出来るであろう。今後の研究が期待される。

また、がんセンター内の古墳は、太田市の重要文化財になっている「人が乗る裸馬」が出土したことも有名である。この埴輪は今回の調査区の南にある東毛養護学校の体育館建設時に出土したといわれており、今回の調査でも形象埴輪が出土するものと期待されていた。残念ながらこれも古墳の残りが悪

いたために、出土数が少なかったが、8号墳ではある程度の形に復元できた形象埴輪が出土した。馬1、人3の形象埴輪は、その造形もすばらしく、当地域の形象埴輪としては代表的なものになりうるものであるが、残念なことに破片数がかなり少なく、かろうじて全形が窺えるという状態である。馬形埴輪はF字状鏡板や障泥の表現などがリアルであり、当時の馬装を窺うことが出来るが、その他の部分は欠損が激しい。人物についても欠損が激しく、細かな点が分からないのは残念なことである。

以上のように、古墳の遺構としても、埴輪を中心とした遺物にしても、数多くの論点を提供できる資料であると思われる、当該期の古墳、埴輪を研究する上で誠に重要であるということが出来る。

なお、旧石器時代の成果のまとめについては、第3章14「旧石器時代の調査」の文末（164・165ページ）に掲載したので、ここでは省略する。

写 真 图 版



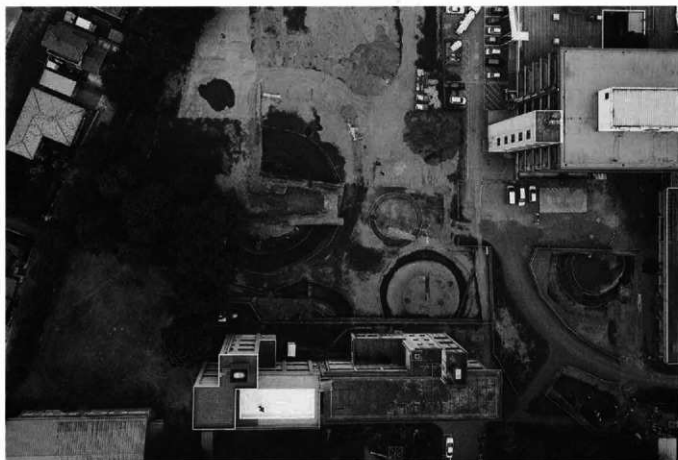
南東から 手前中央がセンター、その左側が発掘区。中央奥に朝子塚古墳。



西から 手前が発掘区。奥に見える木立の多くは古墳の墳丘。



1区全景 (右 = 北)



3区全景 (上 = 北)



南半部調査前の状態（南東から）



南半部調査前の状態（西から）



北半部（1区）全景（北から）



北半部（1区）全景（東から）



全景（右＝北）



全景（南東から）



周堀断面 (A-A'・東から)



墳丘部断面 (C-C'・南東から)



周堀断面 (B-B' 南半・東から)



墳丘部断面 (B-B' 北半・東から)



遺物出土状態Ⅰ区（北から）



遺物出土状態Ⅱ区（北から）



遺物出土状態Ⅱ区（西から）



遺物出土状態Ⅲ区（北から）



円筒埴輪列（北東から）



円筒埴輪列（南から）



円筒埴輪列西端付近（南東から）



円筒埴輪列東半部（西から）



円筒埴輪列（左から1～4・南から）



円筒埴輪列（左から4～7・南から）



円筒埴輪列 (左から7~9・南から)



円筒埴輪列 (左から10~13・南から)



円筒埴輪列 (左から13~17・南から)



円筒埴輪列 (左から16~20・南から)



円筒埴輪列 (左から19~22・南から)



円筒埴輪列 (左から22~24・南から)



円筒埴輪列 (左から25~28・南東から)



円筒埴輪列 (左から25~31付近・東から)



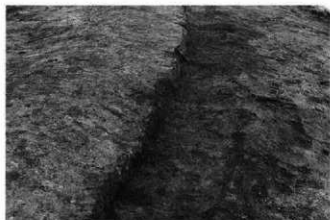
円筒埴輪列据付状態 (14・南から)



円筒埴輪列据付状態 (20・南から)



円筒埴輪列据付溝東半部 (南から)



円筒埴輪列据付溝中央部 (南西から)



朝顔形埴輪62出土状態 (東から)



円筒埴輪36・46出土状態 (北東から)



土師器坏98出土状態 (東から)



土師器坏99出土状態 (南から)



土師器環100・101・102出土状態（東から）



土師器環103・104・105出土状態（南東から）



土師器環106出土状態（南から）



土師器環107出土状態（南から）



土師器環108出土状態（東から）



土師器環116出土状態（南から）

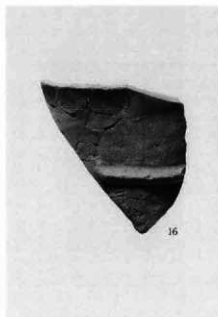


須恵器甕117出土状態（東から）



墳丘盛土下旧地表（南から）

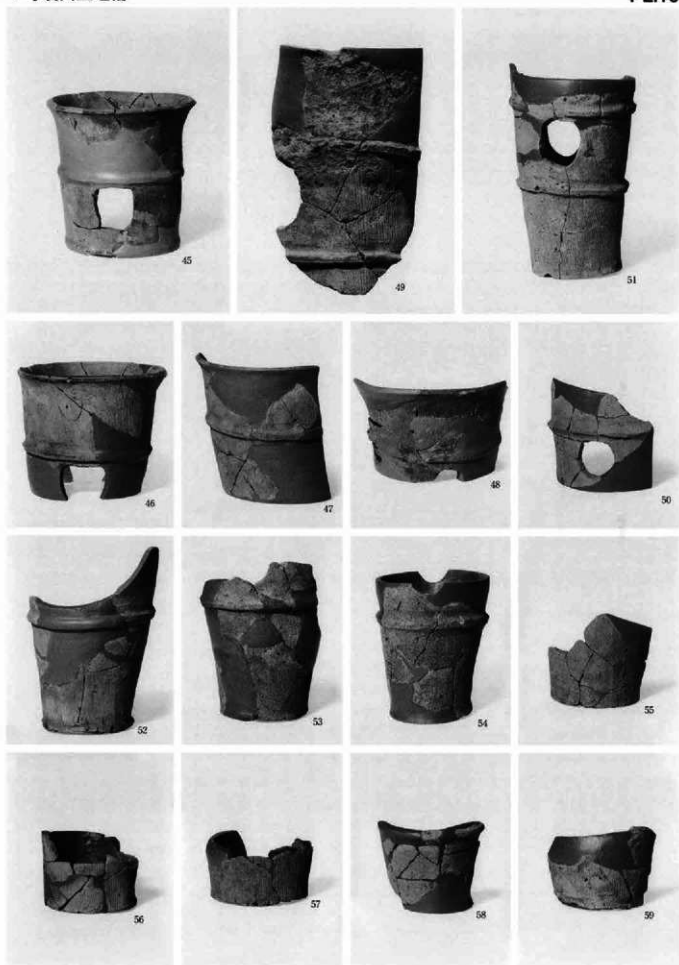














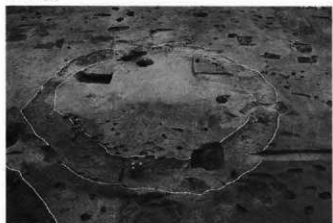




1区南部全景 (左から1・2・3号墳、上=北)



全景 (東から)



FA上面全景 (南から)



北側周堀 (西から)



西側周堀 (南東から)



南側周堀 (東から)



墳丘断面 (F-F' 上半、東から)



墳丘断面 (F-F' 下半、東から)



墳輪1出土状態 (東から)



墳輪2・3出土状態 (東から)





全景（南西から）



北東部周堀（東から）



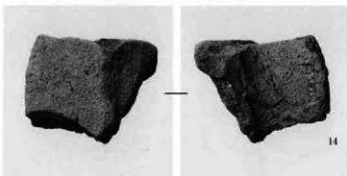
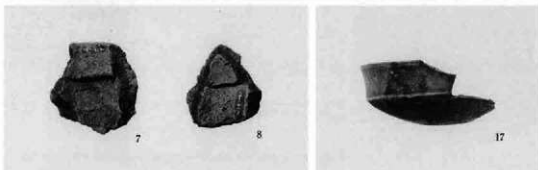
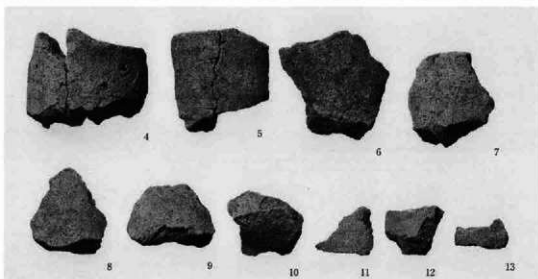
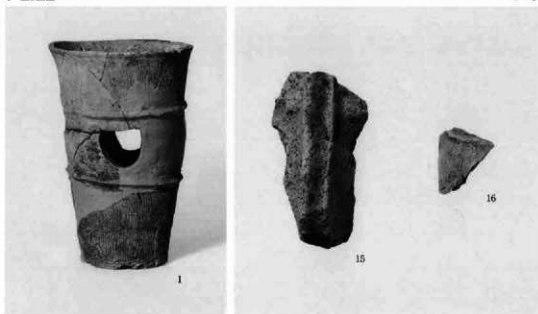
周堀断面（C-C'、南から）



周堀断面（D-D'、南から）



埴輪1出土状態（南東から）





全景（右＝北）



全景（南から）



全景（西から）



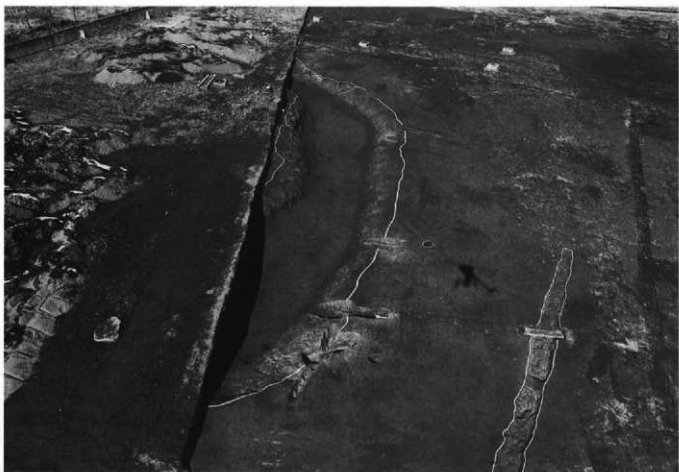
周堀断面（C-C'、西から）



周堀断面（D-D'、南から）



2区全景 (右=北)



全景 (南から)



全景（北から）



全景（西側確認トレンチ調査後、右=北）



周堀 (南から)



周堀 (北から)



周堀と墳丘 (東から)



周堀と墳丘 (北から)



周堀と墳丘 (南東から)



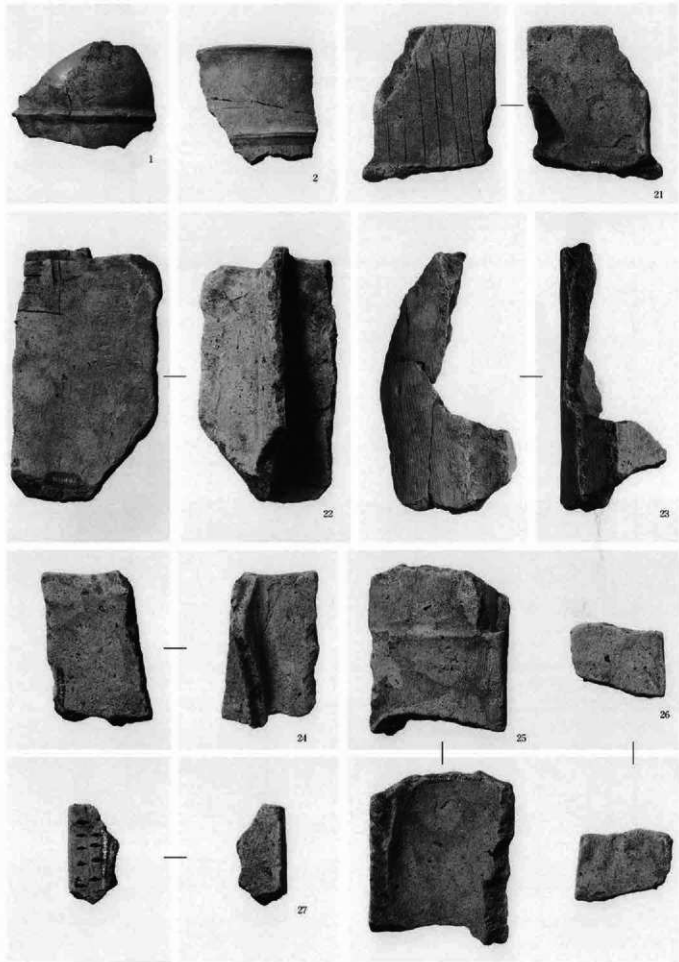
周堀断面 (A-A'、南から)

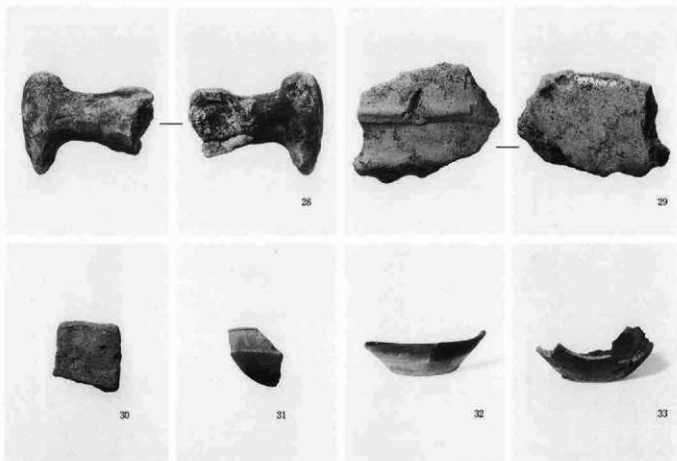


周堀南端部断面 (東から)



墳丘1出土状態 (北から)





3区東全景（右＝北）



全景（上＝北）



全景（南西から）



周堀～墳丘断面 (A-A' 西側、南から)



墳丘断面 (A-A' 中央、南から)



周堀～墳丘断面 (A-A' 東端、南から)



F.A.堆積状態 (A-A' 中央、南から)



周堀断面 (B-B' 南東から)



周堀南端部 (西から)



周堀南西部 (南から)



周堀東端部 (東から)



周堀南端部遺物出土状態（南から）



埴輪1出土状態（南から）



埴輪2出土状態（南から）



埴輪2・6、坏23出土状態（南から）



埴輪7出土状態（南西から）



埴輪9出土状態（東から）



埴輪21出土状態（南から）



坏23出土状態（南西から）

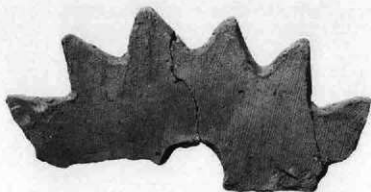




21



22



23



24





全景（左上＝北）



全景（北から）



全景（北西から）



全景（4区、東から）



周堀断面（A-A' 北西から）



発掘調査前の状態（東から）



発掘調査前の状態（北から）



調査風景



調査風景（南から）



全景（上＝北）



全景（北から）



全景（東から）



全景（4区、上=北）



全景（4区、東から）



周堀断面（A-A' 東側、北から）



周堀断面（A-A' 西側、北から）



周堀断面（B-B'、東から）



盛土下FA堆積状態（A-A'、北から）



盛土下FA堆積状態（B-B'、東から）



旧地表面全景（南から）



主体部の位置（南から）



主体部の位置（北西から）



養護学校生徒の見学



調査開始時の状態（南東から）



土層断面（南西から）



粘土被覆の状況（南東から）



粘土被覆の状況（南西から）



粘土被覆除去後（南東から）



粘土被覆除去後（南西から）



石塚全景（北西から）



石柩全景 (南東から)



石柩全景 (南西から)



蓋石除去後 (南東から)



蓋石除去後 (南西から)



石柩内部全景 (南西から)



石塚内部全景（南東から）



石塚全景（北西から）



石塚内部北東側（南西から）



石塚内部南西側（北東から）



最上段の石除去後（南東から）



最上段の石除去後（南西から）



中段の石除去後（南東から）



中段の石除去後（北西から）



中段の石除去後（南西から）



中段の石除去後（北東から）



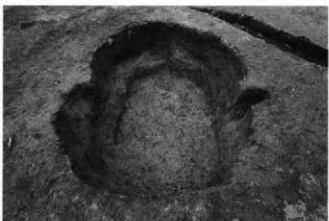
内部敷石除去後（南東から）



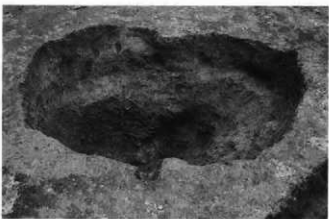
内部敷石除去後（南西から）



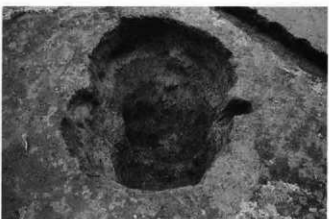
石除去後の状態（南東から）



石除去後の状態（南西から）



堀方（南東から）



堀方（南西から）



埴輪 1 出土状態 (南から)



埴輪 2 出土状態 (南から)



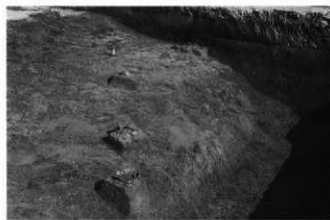
埴輪 3 出土状態 (南から)



埴輪 5・8 出土状態 (南から)



埴輪 7 出土状態 (南から)



手前から埴輪 17・6・15・19 (北西から)



埴輪 9・20 出土状態 (北西から)



埴輪 59 出土状態 (南から)



人物埴輪人-1出土状態 (南西から)



人物埴輪人-1出土状態 (北東から)



人物埴輪人-2・馬形埴輪出土状態 (南から)



人物埴輪人-2出土状態 (南から)



人物埴輪人-2出土状態 (南から)



馬形埴輪・人物埴輪出土状態 (北から)



馬形埴輪・障泥出土状態 (南から)



人物埴輪破片45出土状態 (北から)









人-1



烏田髷の状態



耳と耳飾り



首飾りの接合



腕と帯



人-2



鳥田髷の状態



鳥田髷とその接合状態



耳の状態



人-3

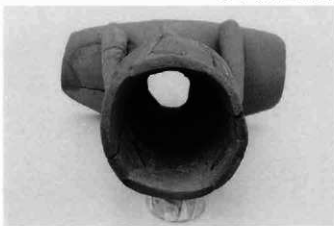


首飾りの接合





顔の拡大



内部の状態



45



46



47



48



49



50



51



52



53





馬面の馬装



十字状鏡板の状態



胸繫の帯と鈴



隙泥と輪範の状態



54



55



57



58



56



60



61



59



62



全景（北東から）



全景（東から）



4区部分全景 (上=北)



周堀～墳丘断面 (東から)



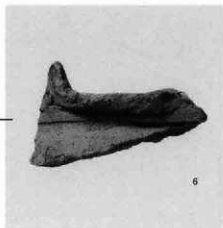
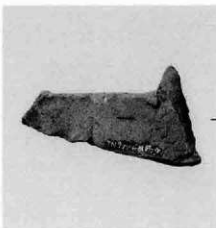
周堀断面拡大 (東から)



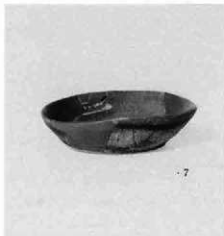
墳丘断面 (白い部分がF A、東から)



1



6



7



全景（西から）



全景（北から）



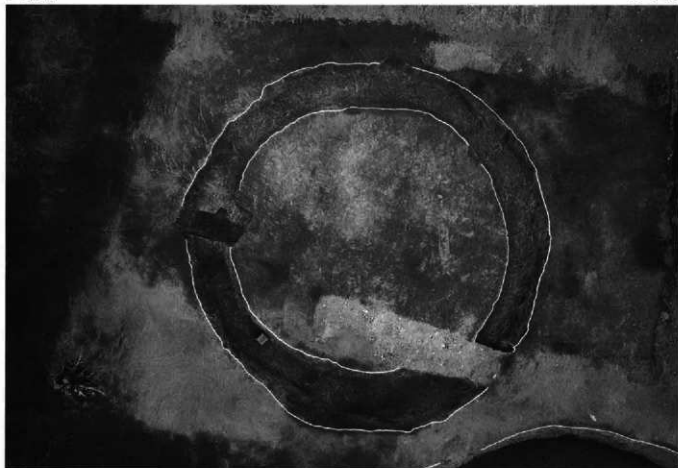
全景（南から）



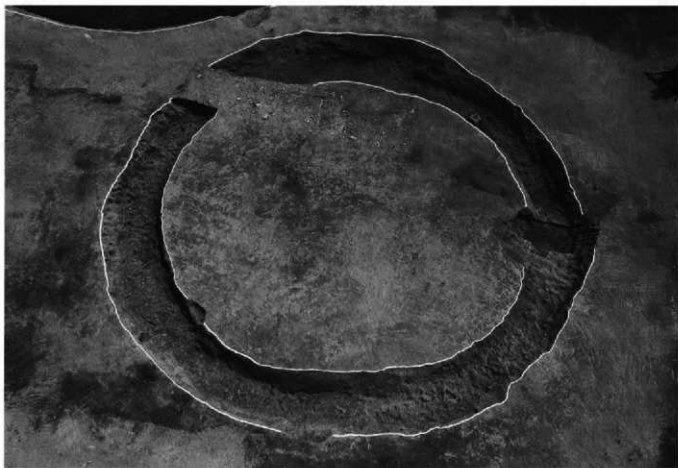
全景（東から）



周髴断面（西から）



全景（右上＝北）



全景（北西から）



全景 (南東から)



土師器壙出土状態 (北から)



周堀断面 (C-C'、南から)



周堀断面 (D-D'、西から)



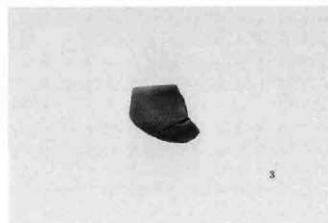
周堀断面 (E-E'、南から)



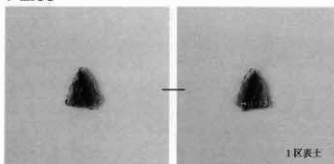
周堀断面 (F-F'、西から)



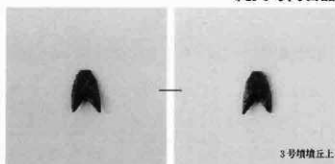
2



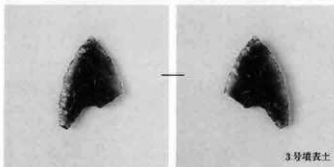
3



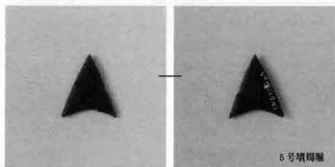
1区表土



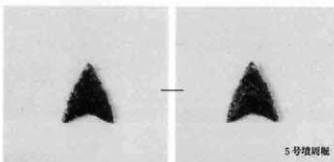
3号墳墳丘上



3号墳表土



5号墳副堀



5号墳副堀



1号墳



8号墳



Aトレンチ全景 (南西から)



Aトレンチ遺物出土状態 (南から)



Bトレンチ全景 (南から)



Bトレンチ遺物出土状態 (南から)



Cトレンチ全景 (東から)



Cトレンチ遺物出土状態 (南西から)



1号ブロック (西から)



1号ブロック (中央5、南から)



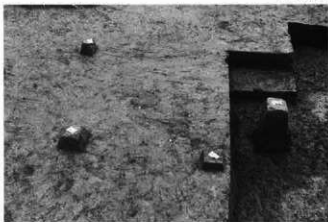
1号ブロック全景（南から）



2号ブロック全景（南西から）



2号ブロック (南から)



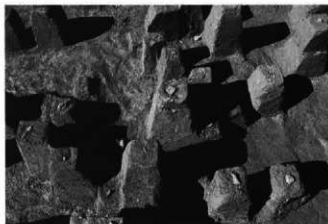
2号ブロック西部 (南から)



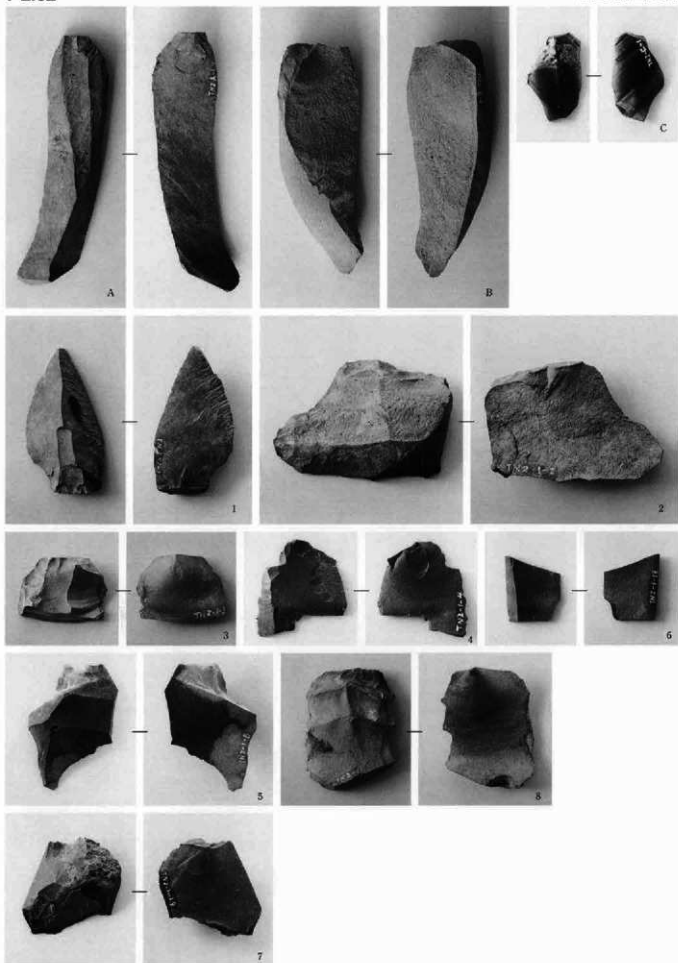
3号ブロック全景 (東から)



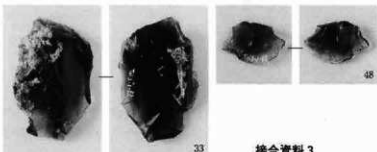
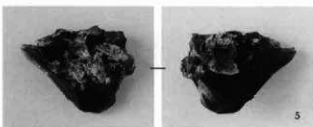
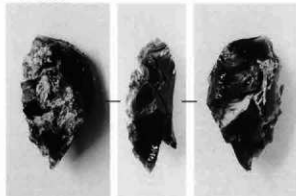
3号ブロック (南から)



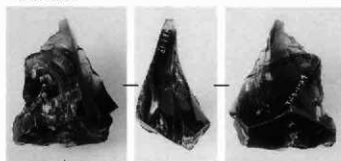
3号ブロック近接 (東から)



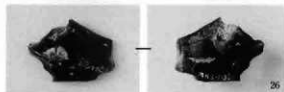
接合資料 1



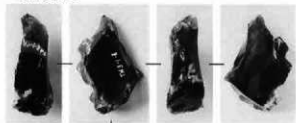
接合資料 2



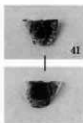
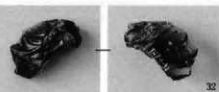
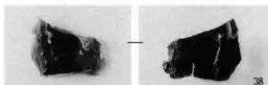
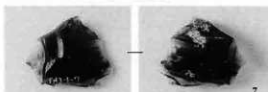
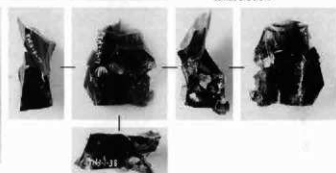
接合資料 4



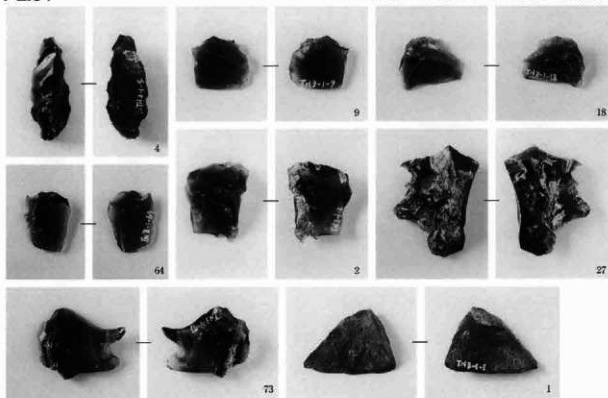
接合資料 5



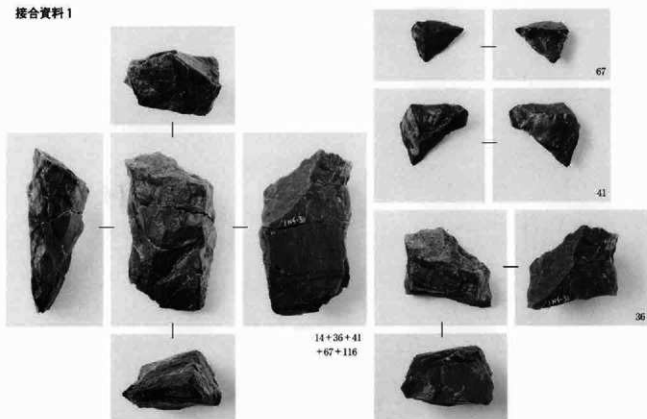
接合資料 3

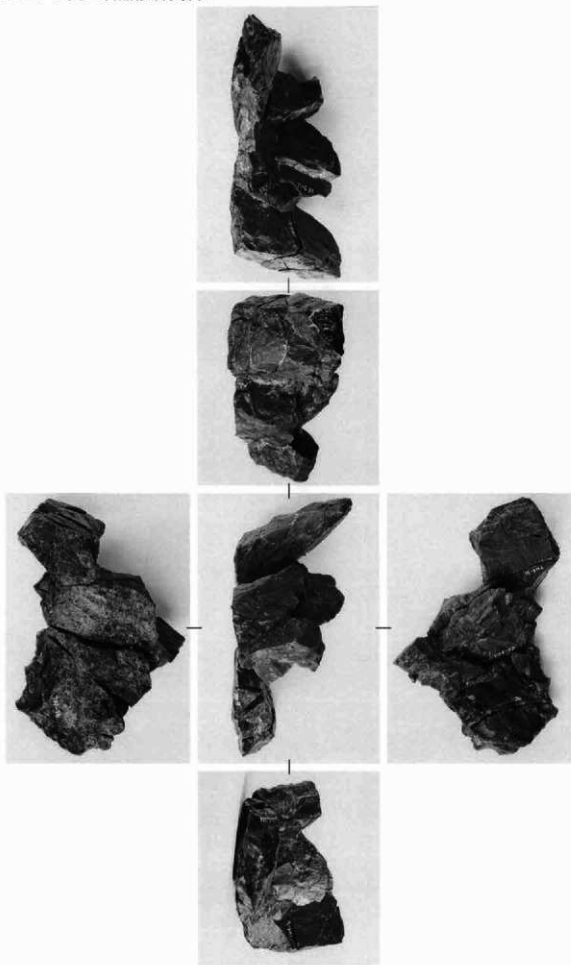


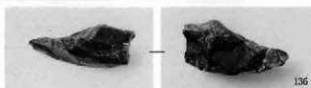
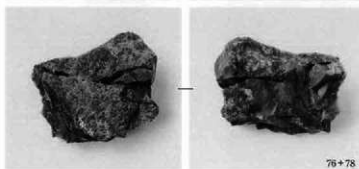
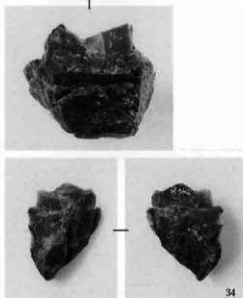
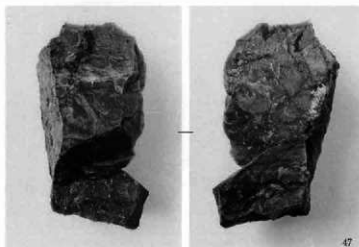
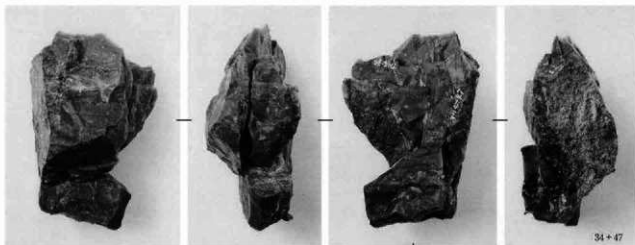
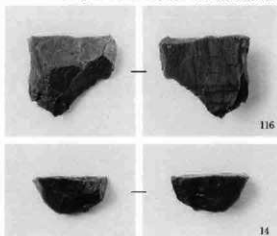
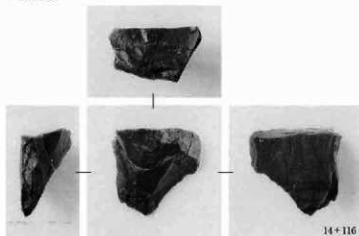
6



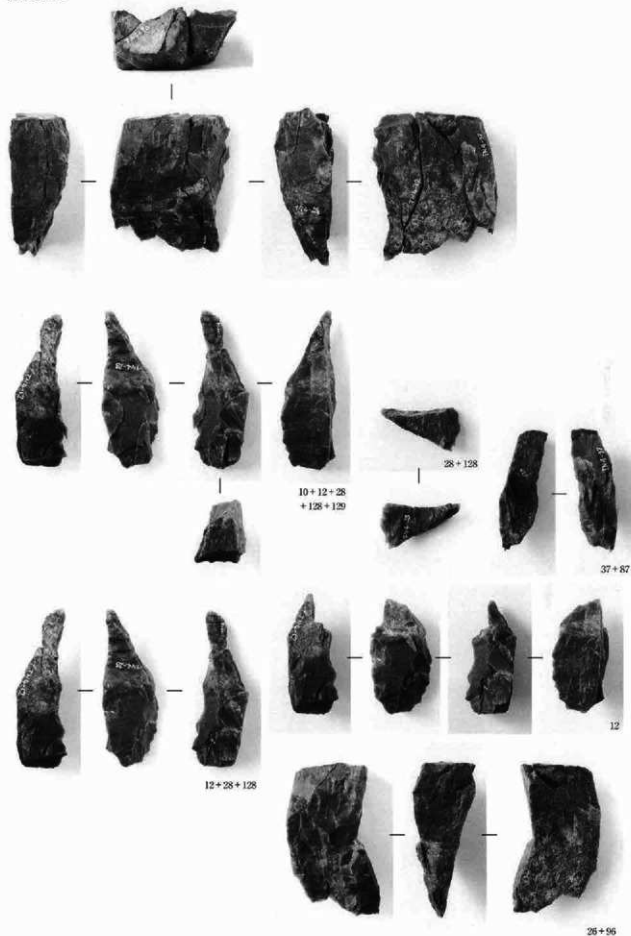
接合資料1







接合資料2



10 + 12 + 28
+ 128 + 129

28 + 128

37 + 87

12

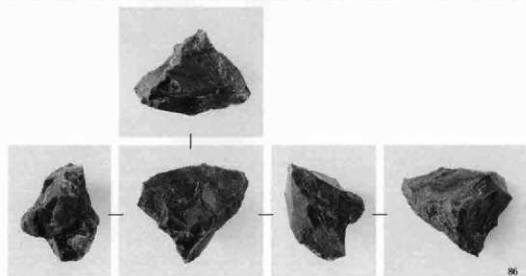
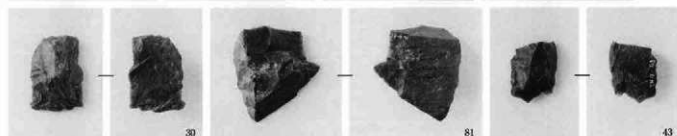
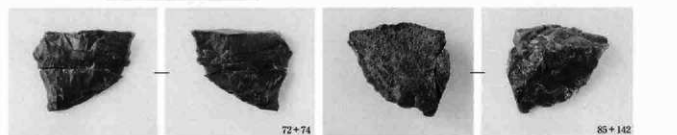
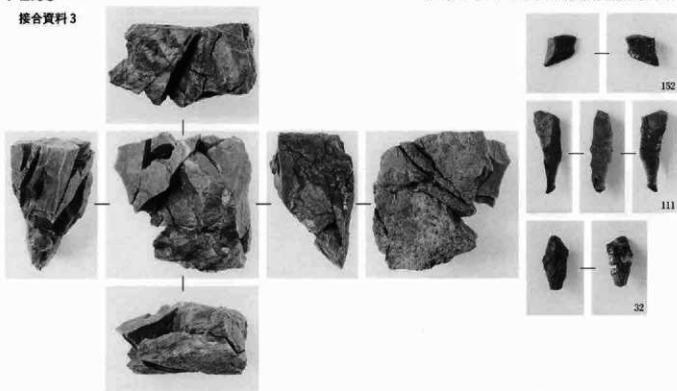
12 + 28 + 128

26 + 96

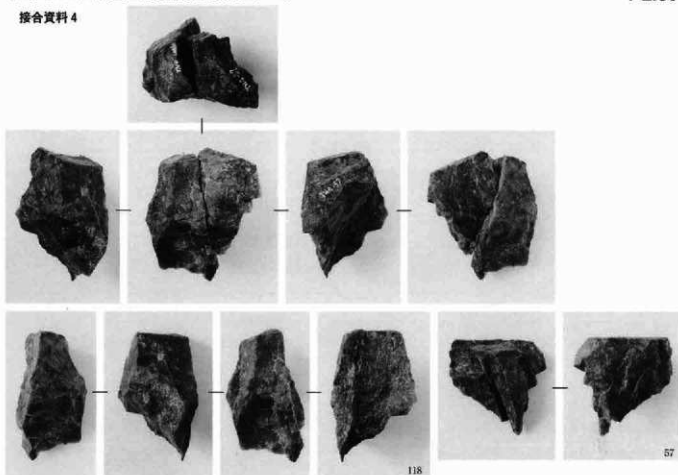
PL.68

接合資料 3

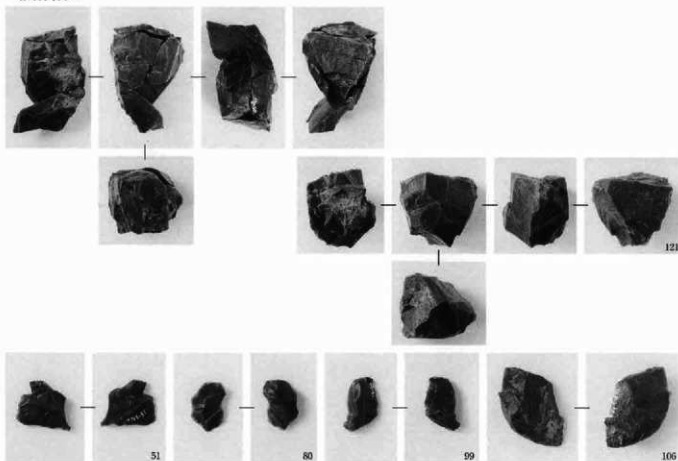
3号ブロック出土石器接合資料 3



接合資料4



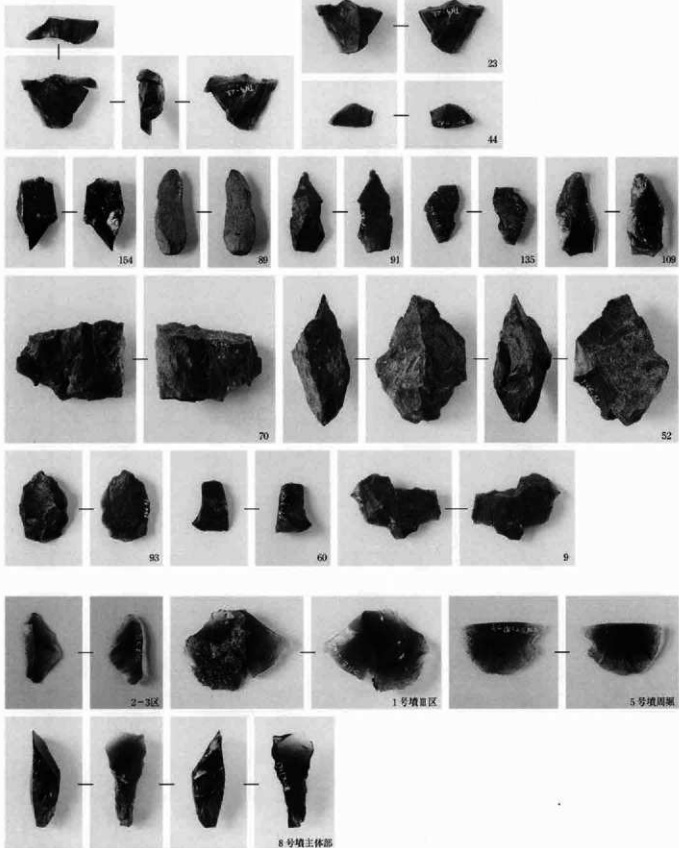
接合資料5



PL.70

3号ブロック出土石器接合資料6、その他

接合資料6





財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第371集

高林西原古墳群

群馬県立がんセンター新病院建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年3月20日印刷

平成18年3月27日発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下笹田784番地の2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／松本印刷工業株式会社